

奇譚クラブ

1960年 3月号

名 人 異 聞
賢作シナリオ

私は死にたくない
阿修羅姫君

佐治麻造
小田桐 爽



3
月号

昭和三十一年四月二十日印刷
昭和三十一年四月二十日発行
(第十四卷 第三号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年三月号

3

奇譚クラブ

昭和三十一年四月二十日印刷
昭和三十一年四月二十日発行
(第十四卷 第三号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の小額のものをお利用下さい。宛先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚振替用紙は当社作成のもの品切となりましたので御諒承願います。

略号「S特第三」 定価三百五十円

……四馬孝画集（力作二十四点）……

拷美ム深女持倭哀水股防蛇
容チ夜の体久れ責裂水倉
問体ち逆裁戦吊なめの服幽
台操始り判法力倉実恐閉

美 白 浣 山 愛 森 猿 鼻 苦 箱 口 烙
畜 い 腸 小 人 の 轡 責 悶 詰 一 印
訓 実 室 の 中 と 煙 の 舌 美 ソ の X
練 験 の 女 危 の 草 地 責 ク の
師 物 体 聞 機 晒 責 獄 吊 り 人 責 字 架

…狂い咲く稀花特選 (フオト百四十八葉)

佳肴一尾
 狂花の戯れ（浜本）
 タイルの冷感
 厚遇の座席
 共通の戦き（絹川）
 華鼻受難
 流れ落ちる美線
 友愛の表現（愛川）
 哀美抽出
 応接間の稀態
 （絹川）
 （三木）
 （田原）
 （絹川）
 （大塚）
 （絹川）
 （絹川）
 （春日）
 （花坂）
 （愛川）
 脱し得ぬ拘束
 苦痛への階段
 押込みの艶肢
 レインコート
 ひとばしら
 泥まみれの青春
 白蝶の不安
 美貌の憤悶
 スポットライト
 （絹川）
 （絹川）
 （絹川）
 （愛川）
 （大塚）
 （絹川）
 （大塚）
 （田原）
 （絹川）
 （絹川）

……傑作サド読物集……

塔婆十郎・作
サド小説
『地獄の無法地帯』

▽▽拷問倉庫
吊り責め地獄

▽▽肉体の太鼓
地獄谷の悲鳴

覆面子白頭巾·作 参考写真多數

『緊縛フオトと緊縛フオト夜話』

▽全盛期前期の緊縛フオト口絵

▽▽ 緊縛モデルの素顔
全盛期の緊縛ブオト口絵

▽ 緊縛フオトと緊縛モデル

限定版特別号の第二弾！

『緊縛写真と緊縛画集』

特価 五百円
略号 「緊縛」

四馬孝緊縛画集（二十五枚）

女体の耐久テスト
素晴しき会食
オシメカバーと赤ん坊
白いいけにえ
アクロバットの訓練
女学生の嫉妬
女体は美しき玩具
人間燭台の実験
物置小屋の怪
生埋めの私刑
奴隷という責め
水責めにあう美女
回転する女体

女の掟
三醜女の逆恨み
遠慮はいらねえぜ
女体の荷物
トランク詰の裸女
吊し責めの美女
浴場の悦虐
鞭の御馳走
淫虐な美容師
狂気の復讐
ヤキを入れてやる
電気責テスト

素晴らしき写真集（八十四葉）

序曲「手吊」のポーズ
第二楽章逆手吊と足吊
緊縛感の
クローズアップ

さあどうでもして
陳列された女体
忘れぬ豊満美

拘束女体の経過
股間縛り競艶
麗しき系列
狂った果実
晒し者なんだワ
腰巻の乱舞曲
女の飲び八態

黒蛇地獄
女のふんどし
女のサポーター
吊り人形の哀歎
断然これは凄いゾ
女囚第十四号罷り通る

臨時増刊
限定版
悦特
No. 2
定価 三百円

「悦虚小説と緊縛写真」特集号・第二集

四馬孝緊縛面集

柱背負い
深夜の水浴
喰込む縄
あんよは上手

捕われ人
椅子縛り
水道責め
笞打ちの果

悶悅姿態特選集

逢瀬のポーズ……絹川	しずかなる受縄……花坂
はかなき悶え……田中	美囚第十四号……絹川
羞姿晒陽……愛川	悦び一刻……浜本・三木
綾なす白縄……絹川	乱れさく哀花……絹川
柔肌の喘ぎ……平野	荒縄と美貌……絹川
未知の驚き……岩井	悦虐狂奏曲……大塚
造形美術……花坂	艶肌の拘束……絹川
ロープ・ブラジャー	

……往年の好読物集

妓の影	泉辰之助
凌辱の幻想と期待	古川裕子
僕の記録	黒井珍平
くすぐられるよろこび	山本百合
キヤメラ愛好会	岡田咲子
被虐の愛情	若林啓子
責苦	竹谷十三
アブノーマル・ファンタジー	岡田咲子
変の字問答	浮家鷹三
マダム紅鶴	野村恵美子
哀艶責め場絵嘶	岩広志
蜘蛛と蝶々	飛田良二
由紀子のお仕置	大川由紀子
聖画の誘惑	近見啓



奇譚クラブ

復刊第五十六号
三月

目次

四馬孝傑作画集 木馬責め	四馬 孝・画
特選緊縛写真「いましめ」	愛川悦子嬢
「私は誰でしょう」	?
外国誌紹介「コルセツト」	EXOTIQUEより
緊縛画 峠の雲助	滝 れい子・画
戯画「人類、日本種、雌」	南村俊平・画

名人異聞 阿修羅姫君	小田桐 爽	18
創作 夜は知っている	千草 忠夫	36
考察 腹を切る事(その四)	折伏 下男	44
麻生保氏の生活と意見(十三)	麻生 保	46
渾刑事捜査ノート「雨男」	横村 奏	50
異加苦研究「浣腸現考学」	栗瀬 長	59
連載告白小説「或る倒錯生活」最終回	西村 憲一	62

創作 白い花(白い蟬統篇)	三条 卓史	70
原作シナリオ私は死にたくない	佐治 麻造	80
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	102
創作割腹したファッション・モデル	法谷 四郎	106
蠢く蒼い群れ(上)	近藤 一	110
告白小説 独りぼっちのマゾ?	長岡変一郎	124
女飛行士断腸譜「機上切腹より」	藤山 秀緒	130
女体緊縛写真に関する一小論	朝藤 洋二	132
時代劇映画の回顧「縛られた女優の変遷」	南方 佳男	136
「投稿追記」「優雅」こそ女の魅力	田村 清彦	140
マゾ小説 黄色オラミ誕生(第五部)	真木不二夫	142
連載第三次元小説「影の国」	雪俊 遙	150
愛好者の記録	とよま・かつひ	158
猿轡放談(その二)	浮家 鷹三	160
読者通信		164

限定版特別号 第一弾

「緊縛フォトアラベスク」

略号(あらべすく) 特価五百円(送共)

△収載内容V二十六項目 写真七十七葉

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 鏡……………愛川悦子 | 14 奔放な肢体大塚啓子 |
| 2 銘花二輪…花坂道子 | 15 鏡台と腰巻花坂道子 |
| 3 鉄 鎖…大塚啓子 | 16 腰巻と鏡台花坂道子 |
| 4 諦 観…大塚啓子 | 17 奇妙な休憩絹川文代 |
| 5 庭園にて…絹川文代 | 18 田代悠子表情集(二) |
| 6 謎の微笑…田中芳代 | 19 脱がされた高手小手 |
| 7 田代悠子表情集(一) | 20 亀甲縛り…愛川悦子 |
| 8 誇る脚線美田代悠子 | 21 吊責折檻…村井知可子 |
| 9 この足どうかしら? | 22 立木縛り…村井知可子 |
| 10 裏と表と…愛川悦子 | 23 豊 醇…愛川悦子 |
| 11 落陽の丘…愛川悦子 | 24 乱れ髪三景大塚啓子 |
| 12 ポリウムの花園 | 25 椅子と絨緞愛川悦子 |
| 13 緊縛感の綾大塚啓子 | 26 姐上の美鯉絹川文代 |

(限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行宛お申込み願います。)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。

臨時増刊号

略号「S特第二」

「サド特集号 第二集」

定価三百五十円(送共)

【麗美巻頭図絵、四馬孝画集】

- | | |
|----------|----------|
| ☆密 質 倉 庫 | ☆地下室の苦行 |
| ☆悪魔のような女 | ☆苦 悶 |
| 「春美の受難記」 | ☆吊 し 責 め |
| シリーズ 四点 | ☆乳 房 責 め |
| ☆新品第一号 | ☆人間フープ |
| ☆嫉 妬 の 鬼 | ☆檻 禁 |
| ☆奴 隷 船 | ☆アクロの訓練 |
| ☆妙 な 吊 責 | ☆捕われた商品 |
| ☆雨中の引廻し | ☆犬 の 訓 練 |
| ☆奈落のリハール | ☆女 体 晩 馬 |
| ☆鼻責めテスト | ☆夜 な が し |
| ☆黒目鏡の女 | |

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

- | | |
|-----------|-----------|
| 絹布と絹肌(田中) | 仇姿黄八丈(絹川) |
| 飾り人形(大塚) | 縄さばき(浜本) |
| 台上的賛(絹川) | 挑発の笑(絹川) |
| 若妻の秘美(花坂) | 被 海 襲(花坂) |
| 白い若鮎(田中) | 深 海 魚(田中) |
| 麗 囚(絹川) | 哀れな賓客(絹川) |
| 三面 鏡(愛川) | 豊 胸(愛川) |

【興趣尽きぬS的読物】書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)
緊縛フォトと緊縛モデル (白頭巾)
南村俊平画八猪大人の御乱行、強制女体浣腸器V

『悦虐小説と緊縛写真』特集号

定価 三百円(送共) 略号「悦特」

この素晴らしい小説集とグラビヤ写真、緊縛絵画で皆様のお心を温めて下さい。売切れては大変未見の方は、すぐお申込を!

△悦虐小説傑作集V S的作品のエッセンス

- | | |
|-------------|---------------|
| 雌 獣 の 手 記 | 呪 虐 の 旅 役 者 |
| 妻 は 縛 ら ず | 悦 虐 の 旅 役 者 |
| 夕 の 朝 顔 | 長 期 刑 |
| 続・囚 主 | 私 の 思 い 出 |
| 私 の 主 題 | 片 耳 伝 奇 |
| 色 奴 隷 の 手 記 | 縛 ら れ た 妻 以 前 |
| 女 奴 隷 の 手 記 | 燐 地 獄 絵 行 脚 |
| 受 難 記 | 鉄 格子 の 中 に |
| 怪 奇 曼 陀 羅 教 | |

△グラビヤ緊縛写真V百十四葉の傑作

- | | |
|-----------|---------|
| 妖 精 (ニンフ) | 首 縄 |
| 三ツ葉葵の横顔 | シ ュ ミ ー |
| 誘 拐 | 放 心 |
| 羅 間 | 成 敗 |
| 木 洩 れ | 三 処 責 め |
| 夢 洩 れ | 黒 タ イ |
| 競 花 路 | 観 念 |

△四馬孝画責画集 口絵V

- | | |
|-------------|-------------|
| 白 魚 の 悶 え | 宙 に 踊 る |
| 苦 悶 の 前 奏 | ア ク ロ バ ッ ト |
| 鉄 鎖 の き し み | 濡 れ る 朱 唇 |
| 籠 の 白 鳥 | 土 蔵 の 花 |

木馬責め

本誌の小説なんかで「木馬責」の場面は、もう何回となく出てきていますね。そういったイメージにからませて、この木馬責の苦悶に喘ぐ乙女の姿を見て頂くと興味深いと思うのですが……。



特選緊縛写真

いましめ

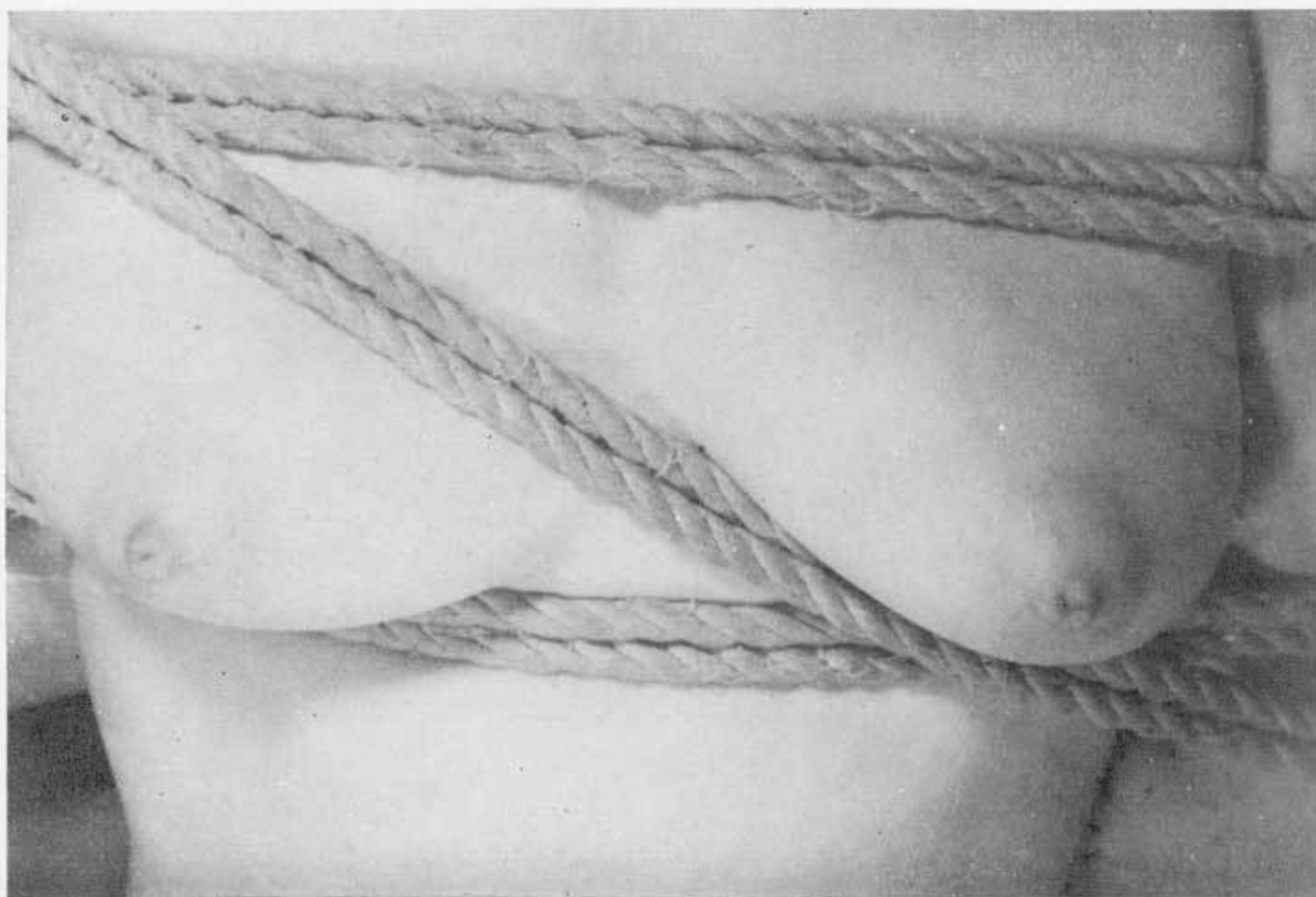


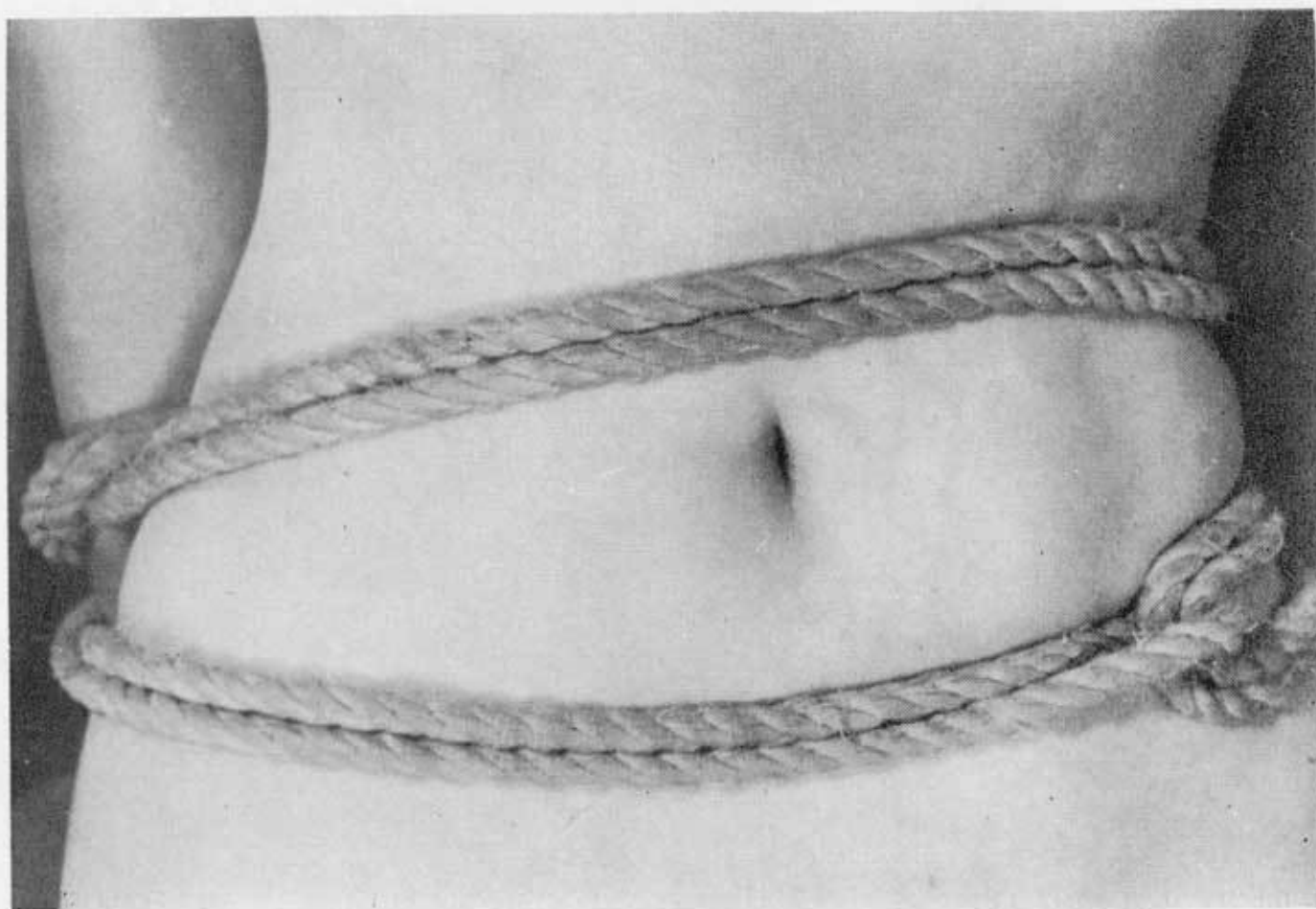
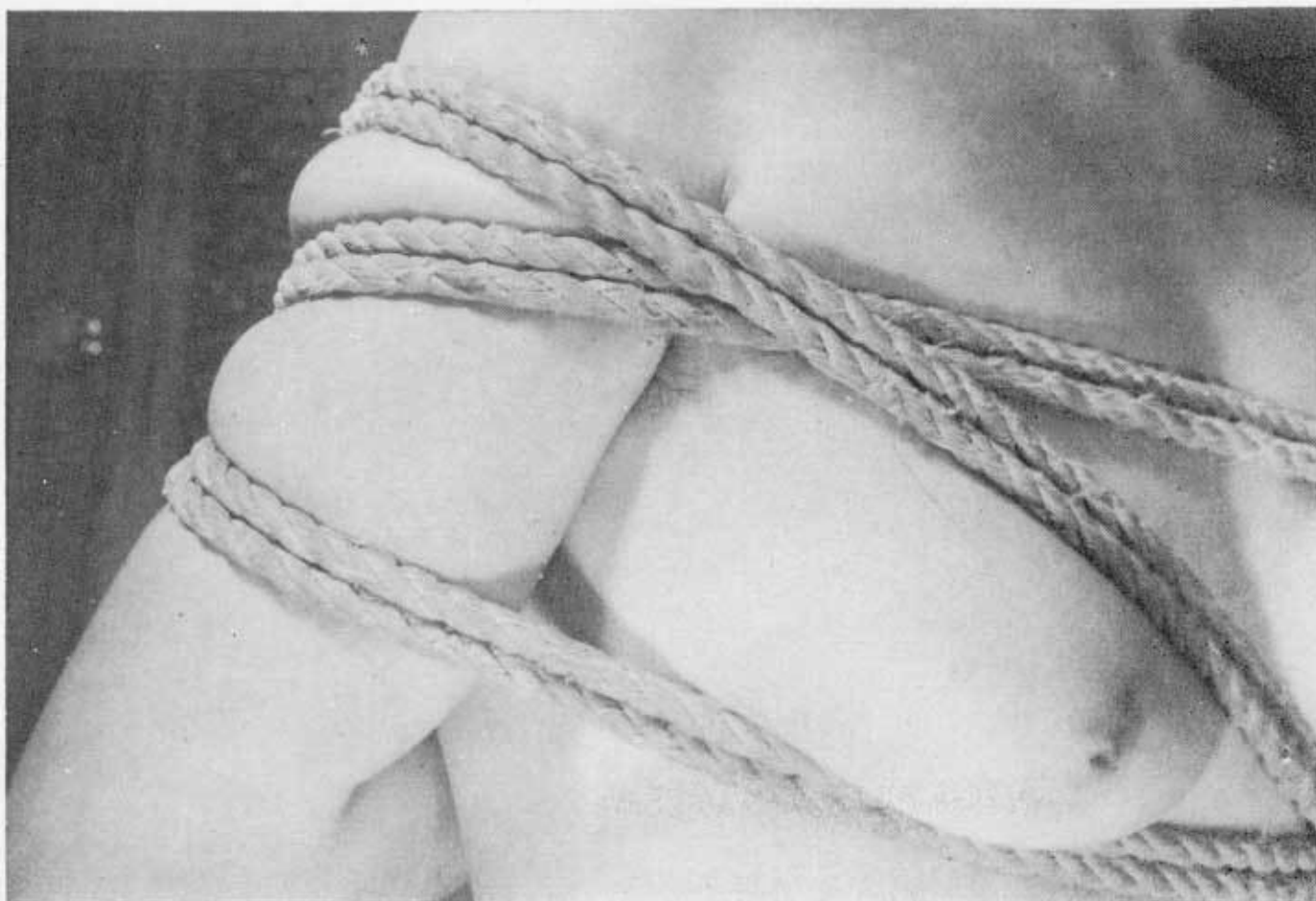


モデル…愛川悦子嬢

私は誰でしょう？

豊醇な乳房に掛った縄目





モデル嬢は？

(現在特集号の口絵グラビヤで活躍中の人です。
果して誰でしょうか。)



コルセット

「おおお、苦しいワ、小さすぎんじやない、あゝゝ」

EXOTIQUE. No. 4 より

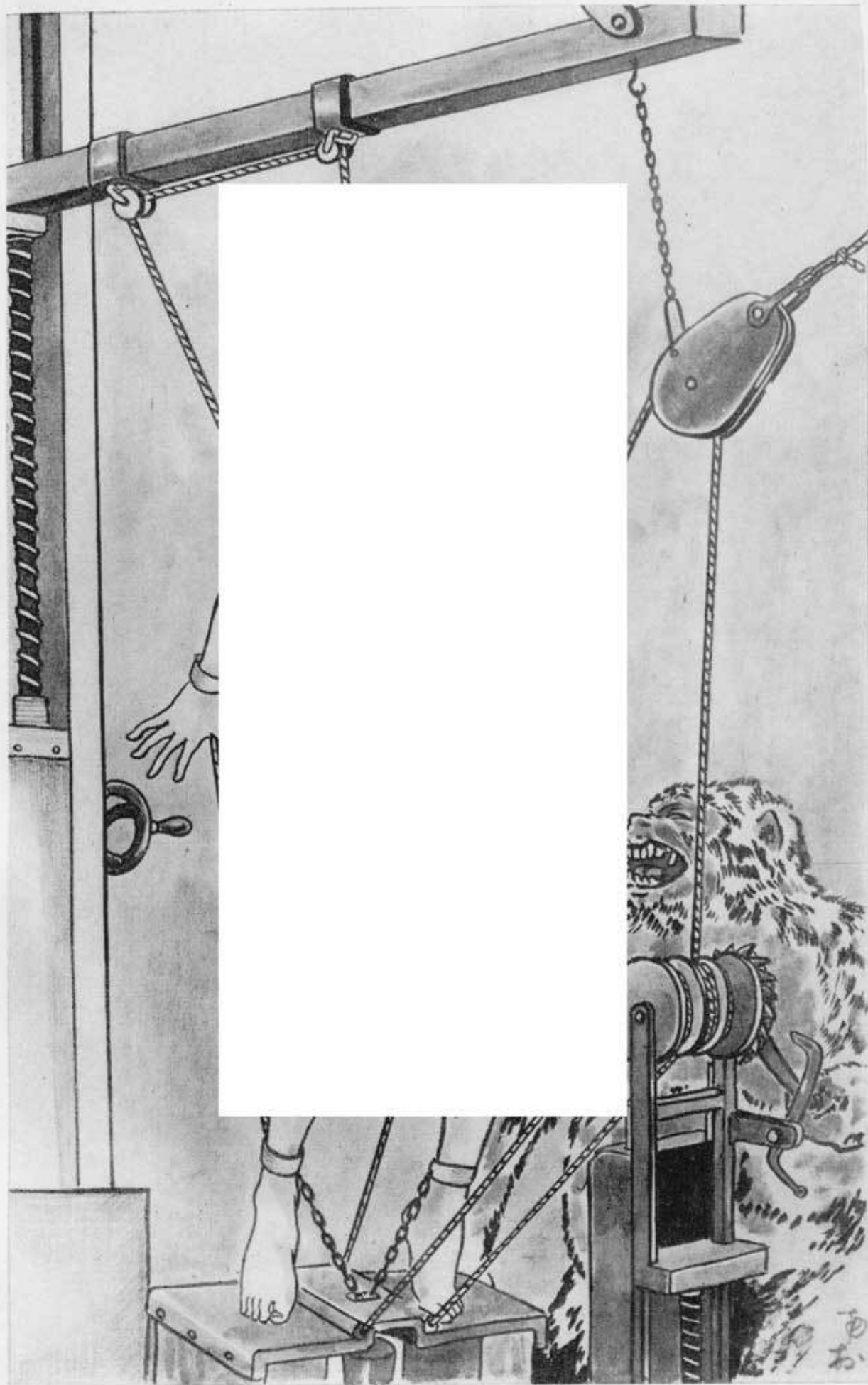
峠の雲助

「おい兄哥、こんだァなあ、てゑしたお宝だぜ、どう踏んだつてゑ、
十両とは下るめゑ」



(俊平戯画) 人類、日本種・雌

今度捕えてきたのは大分珍しい動物でネ、相当以前に絶滅した筈なんだが、人類とって、その中でも大変物真似の上手な日本種だ。雌だから、うまく殖せば動物園へ高く売れるぜ。うん今ね、一寸芸を仕込んでいるところなんだがね。



南村俊平・画

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1960年 3月 号

(第十四卷 第四号 通刊第百三十六号)



阿^あ 修^{しゅ} 羅^ら 姫^{ひめ} 君^{きみ}

小 田 桐 爽

○目吉と万八

泉目吉——と云っても、知らない人は、「物語の主人公にしては妙な名前を付けたものだ」と思うことだろう。

左様、机童之介とか、姿三四郎、眠狂四郎のような、凄味やスマートさには欠ける名前である。だが、作者は敢えてこの名前を用いる。何故ならば、泉目吉は実在の人物だからだ。

彼は文政から天保へかけての頃、江戸で非常な人気を博した人形師であった。

目吉がどういう人物だったか、その一端を「わすれのこり」という当時の書物から書き抜いてみる。

泉目吉、本所回向院前に住居して人形師なり。此の者、幽霊生首等をつくるに妙を得たり。天保の初め、造るところの物を両国にて見せたり。其の品には、土佐衛門、首縊り、獄門女の首を、其の髪にて木の枝に結び付け、血のしたたりさま、又、亡者を桶に収めたるに、蓋の破れて半ばあらはれたる、又、人を木に結びつけ、数ヶ所に疵を付け、咽喉のあたりに刀を突立てるまま、惣身血に染みて眼を閉ぢず、齒を切りたる形は、見る者をして、夏日も、寒からしむ。婦人子供は半ば見ずして逃出るもの多し。されどもこはいもの見たがる人情にて、却って大あたりせし。此の類ひの見せもの外にも多く出来たり。云々。

目吉の住居は、両国橋と回向院にはさまれた辺りの、本所尾上町にあった。

明治三十七年に、現在の両国橋が架る前の両国橋、つまり江戸期の両国橋だが、それは現在の位置よりやや下流に架けられ、橋身の延長線が丁度、回向院の正門に突き当るようになっていた。

橋を渡って右側の、大川沿いの河岸地を尾上河岸と称し、この辺りを東両国という。

東両国の目吉——と云えば知らぬ者はない。彼は江戸でも異色な名物男だった。

色浅黒く男らしい引き締った顔立ちは、役者の誰彼に似ていないのと、両国一帯の娘達や女房連の噂に、いつも、のぼった。まだ三十には間があるが、一体、いつになったら嫁を迎えるのだろうと、女達をヤキモキさせる。

その頃「目吉さんに黒髪を捧げて尼寺へ入る」と宣言して、親達を驚倒させる娘達が二、三に、とどまらなかった。というから始末がよくない。

つまり「目吉に嫌われた」と自分勝手に早合点をした、そそかしい娘が、世を憐れんで尼寺入りを志願するのだが、せめて自分の黒髪を、目吉の造る人形に役立てたい、と願う恐るべきファン氣質の表われなのである。

だが、当の目吉は一向に知らぬ顔である。

「生きている女にやあ、あまり面白えのは、いねえものだな」などと放言して、弟子の万八を呆れさせる。

「勿体ねえことを云いなさるねえ」

と残念がる万八は、巾着切の足を洗って、押しかけ弟子となった

男で、女には、すこぶる弱い方だ。弱いとは、この場合、自制能力に乏しい、という意味だ。酒には弱い、が女にも弱いと云っている野郎である。

余り美点の持ち合わせはないが、前歴相応に指先が器用だし、根は善良なので、目吉も近頃は何となく弟子の代りをさせている。

通り名を「千三つの万八」という。千三つも万八も、ともに嘘吐きの代名詞だが、万八のは、巾着切時代の腕の確かさを誇称したニックネームで「俺が狙ったからにやあ、千に三つも外れはねえ」というところからきている。

目吉の家からは目と鼻の先、松坂町二丁目の長屋から通ってくるのだが、仕事が佳境に入った時は、もとより徹夜も辞せぬ心意気がある。

松坂町は吉良上野介の屋敷が有った所だが、宝永年間に町人の街となり、二丁目の辺りを俗に「上野長屋」と呼ぶ。その上野長屋の一隅に上野稲荷というのが有って、万八の寝ぐらは、その稲荷の隣りに有る。

今日も万八は、独り者の気易さで、万年床から抜け出すと、碌すっぽ顔も洗わずに表へ飛び出した。

稲荷へ何となく手を合わせてから、顔を上げた序でに空を見上げると、それはもう、すっかり秋の碧さで、底がしれない程に澄み切っている。

「何となく、怖えもんだな……」

ふと呟やいた独り言を、後ろから冷やかした女が有った。

「万八さんにも怖いものが有るのかねえ」

振り返ると、少ししゃくれた顔に不思議な愛嬌と色気を漂わせた

年増で、不知火お絹という、二つ名前の女巾着切りだった。

「何でえ、お絹じゃねえか。久しぶりだなあ。おめえは達者でいたのか」

「与三郎みたいな挨拶だねえ。ところで、今、何が怖いと云ったのさ？」

「だっておめえ、考えてもみねえ。若しもだ、若しも天地が引っくり返えったら、俺あ、あの空へ向って何処までも吸い込まれて行く訳だあな。そう考えると怖え気がしたんだ。空怖ろしい、ってのは、ここから出た言葉じゃねえのかな？」

「詰らないことを考えたもんだねえ。泉目吉の一番弟子で、毎日、怖ろしい人形と睨めっこをしているお前さんが、事も有ろうに秋空を怖がるなんて、馬鹿々々しいじやないか」

「何を云いやがる。手前のようなあばずれに俺のこの淋しい気持が判ってたまるけえ！」
云い捨てて、急ぎ足に去ろうとする万八の後を追いながら、お絹



は唇に手を当てて、笑いをこらえる。
「やいやい！ 何処までくっついてくる気だ。でえいち、何がおか

しい！」

「おかしくはないけどさ。秋は人恋しいというから、無理もないよね」

「おきやがれ！」

「ああ、お待ちな。あたしや用が有って、朝早くから、お前さんの起き出すのを待っていたんじやないか」

「用が有るのに、何故、外でなんか待っていやがったんだ？」

「うっかり家の中へ入って、いきなり下手投げなんかをかけられたら困ると思ってね」

「馬鹿野郎！ 俺は角力取りじやねえ。人聞きの悪いことを云うなあ、よしにしてくれ」

「冗談はともかく、あたしや、目吉さんに用が有るんだよ。一緒に連れて行っておくれな」

「駄目だ。俺の師匠は巾着切りなんぞに用はねえ」

「何をお云いだい、お前だって巾着切りじやないか」

「べら棒め。俺あ立派に足を洗った、今じや堅気の人形造りだ。下らねえことを吐かすとお役人を呼ぶぞ！ 足元の明るいうちに、とっとと消えてなくなりやがれ！」

千三つの万八、以前、この女から痛烈なひじ鉄を喰わされた記憶があるので、素っ気ないこと夥しい。

○い な ず ま 縄

「そいつはならねえ。きっぱりとお断わり申します。あっしの人形が気に入ったのなら、両国まで見に来ておくんないさ」

「そこをまげて何とか……後生です。人助けの為なんです。お代は

幾らでもお払いしますよ。金に糸目は付けない御方なんですから」

「口幅ったいことを云うようだが、目吉は金に不自由の有る男じやござんせん。好きな仕事だけをして結構気儘な暮らしをしておりやす。人助けの為、とか云いなすったが、氣持よく事情を打明けて下さるものなら、古人形の一つや二つ、場合によっちゃあ只でも、のしを付けて差上げましょう。だが、金は積むが訳は話せねえでは、素直に人助けとも受け取れねえふしが有ります」

「でもございましょうが、深い事情と云うからには、打明けにくい訳が有って……」

「まあ、出来ねえ相談だ。折角だがお引取り下せえ」

取り付く島もない。目吉はお絹の申し出をにべもなく拒絶した。

男女二体の人形を、古い作の中からでもいいから選ばせて欲しい——というのがお絹の要件で、依頼者は、さる大身の武家だというのだ。

「それ見ねえ。だから云わねえこっちゃねえ。いってえ、お絹。おめえは、いつから人形の仲買人になったんでえ？」

「馬鹿におしでないよ。そんなケチな真似を誰がするもんか！ 広い世間に目吉さんしか頼るお人はないと思えばこそ、来たんじやないか。万八さんも、昔のよしみで頼んでおくれな」

「おいらに、そんな義理あなかった筈だぜ」

「いけ好かないねえ、まだあの事を根に持っているのかい」

「まあ二人とも待ちねえ。お絹さんとやら、この目吉の造る人形には魂というものがござんすぜ。魂を持つものを、訳も判らず金で売り買い出来るものかどうか、考えてもみなせえ。俺あ今日は忙がしんだ。帰って貰おうか」

とどめを刺すような口調で目吉は云い、煙管を手にとった。

だが、お絹は小首をかしげて、

「人形に魂が有るからなんてのは、断わりの口上にはなりやしませんよ」

少々中っ腹とは云え、どうもお里が知れるような、やけな言葉を口にした。

「お前さんも話の判らねえ女だね。まあ、この万八の昔の仲間じゃあ、そんなものかも知れねえが……」

云いかけて、目吉は何やら思い付いたらしく、たもとを探って、捕縄のような束になった縄を取り出した。その一端を掴んでスルスルと引き延ばす。

「いやですよ、岡っ引みたいに縄なんか出して。それで、あたしを縛ろうとおっしゃるんですか？」

「とんでもねえ。縛った女は、それ、あすここに居る」

云うが早いか、目吉は部屋の一隅へ視線を投げて、座った儘、手にした縄を鞭のように振った。

縄の飛んだ所に大きな木箱が置かれてある。その箱の一部を縄が叩いた衝撃で、箱の正面の蓋が観音開らきにガタンとあいた。

「あッ！」

振り返ったお絹は、箱の中を一目見て、思わず驚愕の声を洩らした。

凄いような美貌の若い女が正座しており、伏せていた臉を上げて、怨めしそうにお絹を睨んだのである。然も、その女はほっそりとしたからだを、細引で後手にキリキリと縛り上げられている。

黒髪が頬に乱れ、唇の端から真紅の血が一筋、流れ落ちた蒼白い

顔は、妖艶とも凄艶とも、何とも云いようのない無残美で、見る者の眼を惹き付けたまま離さない。

「……目吉さん、この人は誰です？」

「名をお菊と云ってね、殿様の皿が欠けたばかりに、非道な責め折檻を受け、拳句の果てに命を取られる哀れな女さ」

「それじゃ、まるっきり番町皿屋敷と同じじゃありませんか」

「その通りだよ。お絹さん、泉流、稲妻縄の秘法を見物なさるかい」

目吉は再び縄を鞭のように巧みに使った。

生きもののように縄は走って、縛られた女の胸の辺りをピシリとたたく。

すると女は、無抵抗な奴隷のように、静かに立ち上ったのである。

「お菊、お客人のお帰りだ。お送り申しな」

目吉の手が素早く動き、又しても稲妻縄が女の身を責める。

女は抗う力を全くひしがれたもののように、目吉の打撃に応えて、箱から進み出し、すり足のような歩き方で音も立てずにお絹へ近寄った。

ピシリ！ ピシリ！

非常な調教師のそれのように、縦横に縄鞭が鳴り、女はお絹の背後に接近した。

○からくり人形

「変なお芝居はよして下さいよ。気味が悪いっしたら、ありやあしな……」

見上げたお絹の表情に戦慄が走り、脅えた肩がすくむ。

「キヤー」

見得も外聞もないお絹の悲鳴に、目吉は思わず、ニヤリと快心の笑を浮かべた。

お絹の白い首筋へ、冷たい血が数滴、したたり落ちたのである。横っ飛びに、お絹は夢中で女から逃げ離れた。

「血、血が出てるじやありませんか！ この人は目吉さんのお内儀さんですか？」

「何を云いなさる。これは、ぜんまい仕掛けの人形だ」

「こ、これが人形？」

「そうとも。嘘だと思うなら触ってみねえ」

人形は静かに正座した後にガックリと首を垂れ、そのまま動かなくなつた。

背中へ捻じ上げられて、むごたらしく一つに括り合わされた両手の白魚のような十指が、今にも宙を擲んで苦悶を始めるか、と思える程の精巧さだが、流石に指にまでは細工が施されていないと見えて、成程、それは微動もしないのである。

人形だと云われてよく見れば、確かに人形でしかないが、生命の有る人間と思つて見る者には、まさに生きた若い娘——それ以外の何ものとも思えまい。

お絹は奇跡を目撃したように瞳を凝らす。

万八も、見事な出来栄えに感嘆し、言葉もなく見とれていた——。間もなく、お絹は帰って行った。

事情を打ち明けて良いかどうかを、もう一度訊いてみて、改めて出直してくる、というのである。

「ねえ師匠……」

「何だ、万八」

お菊人形を箱へ戻してから、万八は残念そうに云うのだった。

「師匠も冷たいねえ。あの人形は昨晚、仕上げをしたんでござんしように？」

「そうだよ」

「どうして、あつしにそれを云つて下さらねえんですよ。及ばずながら千三つの万八、出来る手助けなら何でもやったものを……」

「まだお前には、からくりの秘密は見せられねえよ。万が一、悪用でもされたら泉目吉の名が廃たる。まあ、悪く思わねえでくれ」

「いえ、なに。別に不服に思つてゐる訳じゃねえんで。どうも信用がねえんだな……人間、万事につけて信用つてもものが大切でござんすね」

「全くだなあ」

「チエッ！……時に親分」

「親分はよしねえ。巾着切りの親分になつたような気がしてならねえ」

「へい、済いません。ついその、長年の口癖でしてね。ねえ師匠」

「何だよ」

「人形に魂が入るつてのは本当の事でござんすか？」

「本当だとも。以前、俺がまだ、その事を弁まげなかつた時分にな、若衆人形を売ったことが有る。買手は日本橋のさる大店の箱入娘だと思ひねえ……」

「へえ。それで？」

「その娘は人形を大事にして、夜毎に抱いて寝る程だったというが、とうとう人形の種を宿したのだ」

万八は愕然として、息を呑んだ。

「そ、そんな事がござんすかねえ」

「俺も初めは信じられねえ。とんだ箱入娘で手前の火遊びでふくれた腹を、俺の人形のせいにしやがる気か、と怒鳴り込んだものだ」
「有りそうなことで……」

「行ってみると、娘は縛られたまま土蔵の中へ閉じ込められているってえ騒ぎだ。俺も折檻に立会ったが、どう見ても娘の様子は、人形の他に男が有るとは思えねえのだ」

この怪異を現代風に解釈するならば、一種の想像妊娠だろうという理屈も付く。だが、目吉の時代には、紛れもない怪談であって、これに類する事柄は、世上に数多かった。

夜の楽屋に師直と判官の人形、よもすがら争ひたることあり。うしみつ頃楽屋に入れば必ず怪異を見るといふこと、さもあるべきにや。首は切りてタナに目を開き、腕はちぎれて血綿のくれないにそみ、怒れるあれば笑うあり、もとこれ人の霊を写せし所なればなり（下略）

というのは文楽人形の怪を書いたものだが、古書にそういう記述を見る事は少くない。また愛玩用の人形に関しては「今昔妖談集」という書物に、こうある。

いつの頃よりか、京大阪の在番の歴々（武士である）もて遊びとすることあり。大阪竹田山本の類の細工人の工夫にて、女の人形を人程にこしらへ（中略）ぜんまいからくりにて、手足を引しめ自由に動くこと生ける人の如し（下略）

だから、目吉ほどの名人が人形に魂の宿る事を信じ、みだりに売渡して不祥事を招いたりせぬよう、と心掛けるのは、至極、当然の

事と云わねばならない。

「判りましたよ師匠。あっしも、早えとこ、そういう凄え人形を造れるようになりてえもので。ところで、今日の仕事は？」

「今日は仕事は休みだ。と云っても遊びじゃねえ。日本橋の晒し場に女の晒し者が有るそうだから、そいつを見に行く。お前は、どうする？」

「おっと聞くだけ野暮の置いてけ堀は殺生。行きますよ、行きます。序でに何処かで飯を喰って」

「も一つ序でに熱燗で一杯ひっかけりや申し分がねえ、ってんだらう」

「左様左様」

目吉は笑いながら立ち上った。

○晒 し 場

獄門首や晒し者は「出世前の人間は見るものじゃない」と云われているが、見るなと云われれば余計見たがるのが人の常。まして場所とは日本一の繁昌を誇る日本橋南の広場だ。

老若男女、夥しい数の弥次馬が群がって、その場を動かうともしない。

間口五間、奥行三尺の菰葺きの晒し小屋。昨日からその中に、二組の晒し者が縛られて、生き恥を与えられていた。

一組は心中を仕損じた男女で、女は吉原の遊女、男はその客の若い大工だった。

捨札に書かれている人別罪状を見ると、男の方が年下だった。女は廊の借金で縛られ、男はまだ一本立ちになれない徒弟の身。何年



たったら晴れて夫婦になれるか見当もつかぬ運命を悲観して、入水心中を図ったのである。

だが、死に切れないうちに人に見咎められて無理矢理に救出された。

八代將軍吉宗のお声掛けで大岡越前守が心中禁止令を発した享保以来、心中は御禁制を破る大罪である。一人だけ生き残った場合は死罪、男女ともに仕損じた場合は三日間、生き晒しの後、男女別々に非人の手下とされるのが定めであった。

女は美貌であった。血の氣のない顔を精一杯にそ向けて、唇を噛んでいる。

獄衣の衿元が大きくは、だけて露わとなった肩から胸へかけての肌は、雪を欺むくばかりに白い。乱れた漆黒の髪が風に翻られて細い衿足を撫でるのも哀れな風情だ。

後手に定法の晒縄が犂々と掛けられ、杭に繋がれた身は少しの動きも許されない。

ホロリ——と光る雫が、女の頬を伝わって落ちた。

「可哀そうに、好い女でござんすね。実が有るから心中するんだ。それを、どうしてこうまで酷たらしい扱いをしなきゃならねえんですい？」

両国界隈きっての女に弱い男、千三つの万八は掌で鼻の辺りをこすり上げ、目吉に囁やいた。

目吉は答えない。悲痛な思いの眼には違いなかったが、押し黙ったまま、克明な観察を続けているのである。

心中者の隣りには鋸挽きの刑にかけられた女が、苦痛に呻吟していた。

捨札の罪状を読む迄もなく、この極刑は主殺し以上の重罪に適用される刑罰である。

この方は仇っぽい顔立ちの、妾をしていた女で、旦那を殺害の上、金品を奪って犯行をくまます為に放火をした強^{した}か者だった。

三尺四方、深さ二尺五寸の晒箱の中に縛られたまま入れられ、首枷を掛けられ、その箱が土中に埋められてある。

女は定法通りに、左右の首筋に浅い切疵を付けられて、その血を塗った竹鋸が傍に置かれてある。

「一日引廻し、両の肩に刀目を入れ、竹鋸に血を付け、側に置く、二日晒し、挽き申すべき者有る時は挽かせ候事」というのが「御定書百箇条」に規定されているこの刑の方法だが、寛永年間に見物人の手によって挽き殺された切支丹の例が島原に有った他は、実際に挽く者が流石に現われないので、今では形式だけの附加刑として、晒しの意味で適用されている。

晒しが終わった後は、磔刑で命を絶たれるのである。

目吉の視線が、この女の方へ移ったのを知って、万八が又、しゃべり始めた。

「こっちの方は、どうも飛んでもねえ悪い女だが、それにしても非道^{ひだう}えお仕置きしやござんせんか。こういうもなあ見世物人形だけで沢山でござんすね。そ、そうでござんしょう？」

目吉は聞こえたのか聞こえないのか、依然として、粘り付くような観察を続けているのだ。

その時、人垣から独り前へ進み出て、見物人の立入りを防ぐ柵となっている横に渡された青竹をまたいで、ツカツカと小屋へ近寄った者が有る。

見れば、まだ前髪立ちの若侍であり、まるで絵から抜け出たような、それこそ浮世ばなれのした、と云いたい程の秀麗な美男であった。

若侍は見張りの非人に近付いた。

「卒爾ながらチト相尋ねたい。この罪の者の首は、誰が挽こうと構わぬのか？」

澄み切った、涼やかな美声だが、云う事は穏やかでない。

びっくりしたのは小屋に詰めていた非人達である。鋸挽きのお仕置者が出るのさえ珍らしいのに、しかも女を若い侍が挽こうと云い出したのだから前代未聞である。

「そ、そりやまあ、そういう定めにはやあなっておりますがねえ」

「左様か。ならば拙者が挽いてくれよう」

姿形に似合わしからぬ傍若無人さで、若侍は早くも竹鋸を手にした。

「まあ、待って下せえ。いま旦那衆を呼んで来ますでよう」

ともかく非人は阻止しようとする。

町奉行組、年寄同心二名と若同心四名が警護の任に当るのが定法だったが、習慣としては彼等は最寄りの自身番所に詰めていて、時折、見廻りに来るだけなのである。不意の申し出なので非人の一存では取計らい切れないのも無理はない。

「いや、その配慮は無用じや。東照様以来の天下の法を行なうに、何の仮借が要ろう。こりや、女。覚悟するがよい」

冷やかに宣告して、花のように華麗な若侍は足元の女を見下ろした。

「な、なにをするんだい。畜生！ 鬼！ 誰か助けておくれ！ あ

たしや挽き殺されるのは嫌だよ……ほ、本当に、挽く気なのかい。
あッ！ ヒーッ！

女は不自由な首を振って逃れようとしたが、若侍は容赦なく、その首筋へ竹鋸の目を立てた。

わあーッ！ と見物人が、どよめく。
鬼気迫る女の悲鳴が、進った。

○白鬼阿修羅

「許せねえ化物だ。あの二本差しは白い鬼だぜ。万八、見ていろ」
目吉が、やっと口をきいた。と同時に行動が起こされた。

彼が取出した物は、例の稲妻縄である。

大きく弧を描き、その先端が風を切って若侍の背を烈しく打った。

「おのれ！ 何者！」

若侍は鋸を握んだまま立ち上り、キッと振り返る。すかさず第二の縄鞭が、その白い頬へ、小気味のよい音を立てて飛んだ。

「あッ！」

若侍は頬をおさえ、顔をそむけた。

目吉手練の稲妻縄は、相手に襲撃者の位置を悟られぬ程に冴えている。

若侍は頬をおさえたまま、からくも立ち直って見物人達を睨んだ。

「やい、白鬼め！ 手前のような化物をのさばらしておいぢやあ、

江戸っ子の名折れだ。とっと尻尾を巻いて失せやがれ！」

すこぶる良い気分の万八の罵声を皮切りに次々と、男からも女からも悪口雑言が投げかけられた。

鋸挽きの女囚は、やっと生気を取戻したが、既にその首筋は生々

しい鮮血で彩られている。

不思議なのは若侍の態度であった。

彼は渦のような罵倒の中で、不意にニコリと笑ったのである。
檜舞台で役者が見せるそれにも似た、花のような笑いであった。

だがそれは、挑戦の笑いだったかも知れぬ。

彼は血にまみれた竹鋸を持ち直すと、今度は心中者の方へ近寄ったのだ。

いきなり、鋸の腹で女の頬を強打した。縛られた女は身動きも出
来ず、只、悲鳴を上げる。

「数知れぬ男をたらし込んだ、いたずら者め！ 思い知るがよい！」
峻烈な打擲が続けられた。

目吉は瞬間、啞然として立ちすくんだ。こいつ、得体が知れない、
と思ったのである。

目吉が再び縄を使う決心をした時、小屋の中では、非人が二人、
制止にかかった。

「おのれ！ 下司の分際で、武士の腰の物に手をかけおったな！」

云うが早い！ 横なぎに白刃が一閃して二人の非人が地へ倒れた。
返す刃で、晒し者の女の髪を、バツサリと元結の辺りから切った。

どこ迄も殺伐な美少年である。だが、腕は凄く立つ。

非人二人は悲鳴を上げながら、地を這って逃げて行く。

「き、気違いだ。誰か、取押えてくれ！」

こうなると、やはり目吉の出番である。目吉は青竹の柵を飛び越
えて名乗りを上げた。

「おい、気違い！ 俺が相手だ。おとなしく尻尾を巻いて退散す
るか、それとも、その根性にやあ惜しいような二枚目面を、叩き潰

してくれようか？」

若侍は、縄鞭の痕がくっきりと赤く走った白い頬を、神経的にけいれんさせて、低い美声で云った。

「おのれ、武士に向って無礼の数々、手は見せぬぞ！」

「茶番はよしねえ。手前が武士だと？ こいつは笑わせやがる。どうした、さあ、来やがれ」

目吉の不思議な言葉に、若侍は俄かに動揺をみせた。

「やっちまえ、やっちまえ！」
「とんでもねえ情知らずの畜生だ。す巻きにして大川へ叩っ込め！」

再び乱れ飛ぶ罵声を浴びて、若侍は又もや奇妙な笑いをみせた。まるで、その場の状況を愉しむような眼の色だった。

不意に、白刃が舞う。飛び退る目吉。だが、目吉のたもとが刃を受けて裂けていた。危うく手傷を負うところである。

「ちえっ、しゃれた真似をしやがる」

目吉の縄鞭が飛んだ。刀身



で払われる。再び飛ぶと、今度は見事に、若侍の細い首へ蛇のような強靱さで巻き付いた。

「どうだ、参ったか？ 下手にあがくと手前の首が縊れるぞ」
捕物の要領で、目吉は縄を緊張させる。だが、うかつに相手を引き寄せる事は出来ない。

手元へ飛込まれば、自分が斬られる形勢なのだ。

その時、警護の同心が、やと到着した。

「ええ、静まれ！ 何故の狼籍だ。静まれ！」

若侍が縄を切ったのは、その時である。

目吉は予期していたように、自分の手に残った縄をたぐり寄せた。

「ともかく、御同道願おう。仔細あらば番所にて承わる」

同心が油断なく進み出た。

「無用！」

叫ぶと同時に、一撃が同心に加えられた。

とっさに十手で受け止めたが、同心は圧倒されて、片膝を地についた。

「うぬ、刃向うか！」

別の同心が背後から打ってかかる。

飛鳥のようにそれを躲わした若侍は、悠然と首の縄を解いて、再び身構える。

バラバラ！と小石が投げ付けられた。

同心に助勢をする弥次馬が、一斉に砂利を擲んで飛ばしたのである。

捕手も駆け付け、奇妙な美少年は漸く窮地に立った。

だが、彼は阿修羅のように立ち向って、血路を開いた。青竹を飛び越えて人垣に肉迫する。

白昼の日本橋は既に黒山のような人だかりだが、その一角が「ワァー」と崩れた。

「御用だ！ 神妙にしろ！」

六尺棒が飛ぶ。小石が唸る。

この騒ぎの中へ、突然、馬を乗り入れた若い武士が有った。人の波が一そう混乱して、捕手の追跡にとっては不利となった。

馬は若侍へ接近した。

「綾ではないか？ 何をしておる！」

「あ、兄上！」

綾と呼ばれた若者の顔には、喜色よりも羞恥の方が強く走った。

「たわけ！」



叱ってはみたが、すぐに手をさし伸べて、

「ともかく」

と、若者を馬上へ乗せた。

ピシリ！ 烈しく鞭をくねると、これは余程の名馬に違いない。行手に立ちふさがった捕手達の頭上を、天馬のように、見事、飛び越えたのである。

その儘、馬は萬町、青物町

の街中を疾駆して海賊橋の方向へ姿を消した。

「綾、とか云ったようだが、綾太郎とでも云うんでしょうかね。それとも、綾之進、綾之助……」

万八が、半ば茫然として呟やいた。

「そんな名前^{なまえ}じゃあるめえよ」

目吉は何事が思案を続ける様子だ。

「目吉さん、いつから岡っ引になりなすったのさ？ 随分と派手な捕物でしたねえ」

声をかけて近付いた女が有る。不知火お絹であった。

「あっ、おめえもここに来ていたのか？」

万八が素つ頓狂な声を上げた。

○髪切り若衆

日本橋の白昼の珍事は、すぐさま瓦版に刷られて江戸中に噂が拡

目吉は「今迄の例から考えると、どうも日本橋周辺が臭いようだ」と事もなげに云った。

素知らぬ顔をして、いつの間にか、そんな事まで見当をつけていたのかと、万八は舌を巻いた。或る夜、馬喰町三丁目の関東郡代屋敷横、初音の馬場の暗がり、柳橋の菊次という綺麗な芸者が襲われた。

女の悲鳴を残して風のように去って行く若衆姿を発見した目吉と万八、「畜生め！」と果敢な追跡をしたのだが、吉川町を過ぎて西両国の広小路まで追い詰めた途端に、掻き消すようにその姿が消えてしまった。

附近は寝静って人っ子一人通らない。

只、元柳橋の方角から、大身の武家のものと思える駕籠が一丁、静かに進んで来るのを目撃したのみである。橋を渡れば武家屋敷の立ち並ぶ一劃で、安藤対馬守、秋元但馬守、酒井雅楽頭、水野出羽守、牧野河内守、等々の下屋敷が有る土地柄だから、夜更けに駕籠が通ったとて格別の不思議もない訳だが、目吉は何故か鋭くその定紋を注視した。

丸に三つ葉の紋は、常陸国笠間の領主で八万五千石の大名、牧野河内守のそれである。

「どうも、あの駕籠の中が臭えような気がしますね」
見送って、万八が見出し気取りの呟きを洩らした。

「万八」

「へい、親分」

「牧野様の上屋敷が何処だか、お前、知らねえかい？」

「知ってまさあ。何でも茅場町の方で……あ、そうだ。親分、鎧の

渡しの辺りですよ」

「何だ？それじゃあ、海賊橋にも近えな」

「左様でござんす。橋際から渡し場へかけての大きな屋敷で……」

「そうかい、成程ね」

目吉は、スタスタと両国橋へ向って歩き出した。

「あれ、もう御帰城ですかい」

「そうよ。明日から忙がしくなるぞ。お前エも手伝ってくれ」

「おっと、合点、承知の助。何だかよくは判らねえが、おん大将のお言葉なら、例え火の中、水の中、地獄の釜の底までも。と来やしたね」

何やら成算有りげな目吉の様子に、万八は独りで騒々しい雑音をまき散らしながらついて行く。

○おとり人形

それから数日の間、二人は東両国の仕事場に籠ったまま新らしい、からくり人形の仕上げを急いでいた。

それが出来上った日の夜、二人は箱におさめた人形を大八車に積んで家を出た。

行先は海賊橋の先、牧野の屋敷の近くの路上であつた。

暗がりに人形を据えて、少し離れた所に二人は身をひそめる。目吉は稲妻縄を握りしめ、いつでも人形を操作できる体勢で、辛抱強く相手の出現を待った。

その人形は、世にも美しい女の姿で、目吉快心の出来栄であったが、二日目、三日目、四日目——と経っても動くことがなかった。だが、五日目の夜更けである。

その日は船宿から屋形船を仕立てて、川伝いに人形を運び、牧野の屋敷の通用門の近くに陣取った。

四つ時、亥の刻を廻った頃。通用門が軋んだ音を立てた。中から現われた者は、果然、前髪立ちの絵に描いたような若衆である。

目吉の縄鞭が、音を殺して人形の一部分を叩く。人形は生ある者のように静かにすり足の前進を始めた。それが若侍の目に入る。

彼は、ためらいも見せずに、からくり人形を追った。

「待たれい」

声をかけて追い抜き、その前に立ちふさがった。そして、身構える。

殺気が辺りを圧する――。

が、俄かに男は緊張を解いた様子で、こんなことを云ったのである。

「美しい。その顔は、恋をしている顔。そなた、男を慕っているな。だが、そうはさせぬぞ。黒髪を切って、恋の出来ぬ姿にしてやるのだ！ 先ず、着物を脱いで貰おうか……」

ズイと男は近寄り、いきなり帯へ手を掛けた。その瞬間である。

目吉の稲妻縄が、夜気を震わせて宙を飛び、人形の肩の辺りを叩いた。

鈍い金属音が起って、人形が両手を振り上げた。

ハッとして、眼を瞪る男は、次の瞬間、驕奢な胴体をガッチリと掴まれていたのである。

「あっ！」

愕然として身をもがいたが、人形の腕は曲者にしがみつく形で組み合わされた儘、微動もしない。

「綾姫、あっしを覚えていなさるか？」

悠然、目吉は相手に近付いた。

月光を浴びた目吉の容貌は、目的を達した男の満足感が溢れて、実に颯爽たる美男ぶり。

「あ、お前は！」

「晒し場で立廻りをやらかした相手さ」

「おのれ！ 泉目吉、計ったな！」

「どうしたい？ 人でも呼びなさるお心算か。そいつは恥の上塗りというものだ」

「親分、さあ、この野郎をどうします？ 番所へ突き出しますかい？」

万八、全然、御機嫌である。

「俺は縛り屋じゃねえ。でえいち、この御仁は野郎じゃねえよ。やんどとなきお姫様だあ……おっと危ねえ！」

不自由な姿勢ながらも捨身の一撃を試みた綾姫の鋭い刃を、素早く躲わした目吉は、相手の右手首を縄鞭で、ピシリ！ 烈しく叩いた。

「うっ！」

激痛に思わず刀を離す。

「万八、物騒な人切り庖丁は、おめえがお預り申しな」

「ええ、殺せ！ 殺すがよい！」

生地のまま、それは若い女の声だった。

「成程、こいつは女でござんすね！」

「わらわを騙る気か！ 一思いに殺してたも」

「おほっ、殺してたも、と来やしたぜ。どうしますい？」



姫様に訊きてえ事が有るのだ。両国までお連れ申すのよ」

「よし来た！」

綾姫は渾身の力をふり絞って抵抗したが、所詮は囚われ人の身。遂に手首足首を括り合わされて、箱の中へ閉じ込められたのである――。

箱崎橋、永久橋、と二つの橋を過ぎると大川へ出る。大橋をくぐれば、その先は両国橋である。

その間、目吉は万八に絵解きをして聞かせた。

「つまり、このお姫様はなあ、恋に破れて鬼となつたのだらうよ。おい、綾姫さん。それに相違なからう？」

ドンドンドン！ と拳で箱の蓋を叩く目吉だ。

「へ？ そりやどういう事？」

「家臣の中に好いたらしい若侍が居た、と、こう思ひねえ」

「思いましたよ、親……師匠」

「ところが、そのさむれえが、いつの間にか腰元か何かと不義密通とくる。不義はお家の法度だ。二人は取り押えられて成敗を受ける破目になる。そこでお姫様が男の命乞いをする。ところが、男は女と一緒に死にてえ、とか何とか定まり文句を並べらあな」

「へえ？ 並べますかねえ」

「人形ごと箱の中へ詰めちまいな。遠慮は要らねえ。俺あ、そのお我儘姫だ。可愛さ余って憎さが百倍。意趣ばらしに二人を責め抜い

た果てに首を刎ねた……かどうかな？ まあ、そんな見当で、大した違いは有るめえよ」

「恋の恨みと食い物の恨みは恐ろしいねえ」

「ところが、男が死んでも我儘勝気の姫君は胸の痛手を忘れることが出来ねえとよ。元々綺麗な顔に似合わず荒っぽい事の好きな姫だから、一度他人を痛めつけると、その手応えが面白くてならねえ。日本橋の晒し場で暴れた時から、こいつは女だと、俺にはすぐ判ったが、考えてみりやあ、女だてらに修羅道を堕ちて行く、可哀そうな身の上さね。……綾姫さん、返事がねえのは俺の目利きに間違いがねえことだと思っていいいかね？」

箱の中は静かである。

「し、しゅらどう……ってのは何ですい？」

「仏法の方の言葉で六界の一つ。その王を阿修羅と云ってな、血を見るのが何より好きだという物騒な神様だそうさ。善玉の方の神を梵天帝釈といい、阿修羅の神は、いつもその帝釈様と喧嘩をしている……」

「天竺にやあ、詰らねえ神様がいたもんですね」

「お前のようなガラッ八には詰らねえだろうが、このお姫さんにとっちやあ大変な事だ。落着いている時は後悔するに違えねえ。身が細る程に羞じもした事だろう。だがな、一旦、心棒が狂った車は、もうマトモにやあ走れねえものだ……」

いつしか、箱の中から、忍びかねたような嗚咽が洩れ始めていた。「おや？ 泣いていなさるのか。まあ、泣きてえ時にやあ思い切り泣きなせえ。ところで万八。不知火お絹の姐御は牧野の殿様に、何かつながりの有る女らしいぜ」

「あの阿魔が？」

「そうだよ。俺の人形を買ってお姫様の血を静めようとも思ったのだろう。あの屋敷にやあ、姫君用の座敷牢なんか有りそうだぜ」

○畸人狼狽

家の中へ木箱を運び入れ、蓋を開くと、綾姫はグッタリとうなだれて、痛々しい程に、それは打ちひしがれた女の姿であった。

「自分が縛られたのは初めてだろう？ 勘弁して下さいえよ」

目吉は手首の縄を解いた。

自由になった手で、綾姫は自分の足首を解くのだった。

男世帯の乱雑さで、畳の上に鑿が転っているのに気付いた綾姫は、素早くそれへ手を伸ばし、我が咽喉へ突き立てようとした。

「まだ眼が醒めねえか！」

目吉の手刀が刃物を叩き落した。

彼は陰わしい顔で綾姫を睨み、衿がみを掴んで、目もくらむような強烈な平手打ちを加えたのである。

「自害をさせようと思って連れて来たのじゃねえ。愚かな心根が哀れだから……」

「憐みは受けませぬ」

「ふざけるねえ！」

再び頬が鳴る。そして無抵抗な、からだを力まかせに引き倒し、膝の下に組み敷くと、例の縄を取り出して、両手首を背後で一つに組み合わせ、縛り始めたものである。

犂々と縄を掛けられながら、綾姫の黒い瞳は茫沓として涙に濡れてゆく。

「やい女！ もう姫だなどとは云わせねえぞ。その性根を、俺が叩き直す迄は、ここから帰すこたあならねえ！」

泉目吉——まことに畸人の面目躍如たるものが有った。

何処の世界に、八万五千石の大名の娘を、これほど手荒く扱う町人が居るものか。だが、女も異様であり奇妙そのものだった。静かに頷いて、こう云ったのである。

「わらわも、帰りませぬ。存分にして下さい。御当家の召使いとしてでも、末長く置いて下されば、綾は倅です」

「じよ、冗談じゃねえ！ そんな小笠原流の召使いが有るものか」

「縄目の恥まで受けた以上は、帰る訳には参りませぬ。この上は、どんな境涯にも甘んじます。目吉殿、わらわを……妻とする気は有

りませぬか？ 綾は十八です」

輝くばかりの美しさで、ふりあおぐ女の表情の不思議さ。

不敵にも冗談を口にして目吉をからかったものか？ それとも真剣か？ 深窓に育った娘の真意は、いずれとも、流石の目吉にも計りかねるものが有った。

千三つの万八、何を思ったか、そっと起ち上り、帰り仕度を始めたものである。

「おい、万八。お前エは今夜は仕事有る。帰らずにここで夜を明かしねえ。万八！」

目吉は、おかしい程の狼狽をみせて云ったのであった——。

第一話 完

新人モデル大名刺判緊縛写真集

ヌード初縛り

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子

略号(みい)

敷布の白さよりも白いヌードが縄目にもだえて……。

観念の座

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子

略号(みほ)

縄と縛の祭壇に上ったいけにえは観念の眼を閉じていた……。

ヌード初縛り

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 田原美佐子

略号(みろ)

初々しい裸身が縄で自由を奪われて描く美しい女体構図……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 絹川 文代

略号(みへ)

白磁の肌にヒシヒシと喰い込む妖しい縄の魅力……。

全裸股間縛

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 岩井 知子

略号(みは)

稚き柔肌にまといつく縄目は痛々しいまでに苛烈だった。

開股縛くらべ

大名刺五枚一組 三〇〇円

新人モデル 絹川 文代

略号(みと)

黒い紐は白い肌に奇妙なコントラストをかもし出した。

全裸後手くらべ

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 平野 笑子

略号(みに)

艶やかな色香に満ちた餅肌も縄にくびられて哀れな表情……。

椅子開股縛

大名刺三枚一組 二〇〇円

新人モデル 絹川 文代

略号(みち)

身動きも出来ない後手しぼりと剥がれたズロースとは……。

創作

夜は知っている

千草忠夫

戸を開けると、山崎小夜子がうなだれているのを見て、俊介はギョツとした。

自分で呼んでおきながら、驚くとは変な話だが、その日の午後、今夜、僕が宿直で研究室に居るから、八時頃来ないか。話があるから——と彼女に言った時、自分でも彼女がやって来る事を本当に期待していたわけではなかった。来たらよし、来なかったら、それまでと軽い気持ちでいたのだ。

話があるというのは嘘ではなかったが、夜の八時にしなければならない性質のものではなかった。誰もいない夜の工場の一室に美し

い女助手と一対一で向き合う事は若い男にとって、アバンチュールのときめきを覚えさせるに十分ではないか。

今も俊介の胸は高鳴っていた。あやふやに泳がせて来た心を、一つの行動にふみ切らねばならない時が来たわけだ。

「やあ、よく来たね。入りました」

実験室は冷え／＼と裸電球の光の下に静まっていた。俊介は宿直の夜は好きな実験に過す事が多かった。時には他人の宿直まで、買って出る事もある。その為、年寄りの技士からは有難がられた。守衛も慣れているので、

めったにここまで見廻りに来ることもない。「お家の人は何ともおっしやらなかった？」「ええ」

小夜子は大きな瞳を、ちらとあげて俊介の視線に出会うと、ドギマギしながら伏眼になった。

沈黙。ポタリ、ポタリ……と水道の水が、どこかで、したたっている。

沈黙。K化工社員、研究室勤務山崎小夜子、二十二才。組合委員。女子テニス部々長。性温順にして明朗。末っ子のせいか少し甘ったれることあり。家庭裕福。社の身上調査に



はこう記載されている。

俊介が、もし調査担当者であれば、最後につけ加えるだろう……
「美貌、長身、牝鹿を思わせる。男性の相手として最適」と。

沈黙。独身、二十五才。ハンサム、長身。大学時代はサッカーをやっていた。成績は、どうだったのかな？ 女助手達は皆、彼に愛がれている。あたしは？ フゝゝゝゝ。でも何で夜になってから、あたしを呼んだのかな。ケシカラン。でもちよっとしたスリル。
「あの一、何か御用だったんでしうか」
「君は僕に呼ばれる理由を持ってるだろう」
「え？」

「研究部の禁を破って、やっていることがあるだろう」

「べ、ベツに、なにも……」

「もう一度、いうぞ。他人の耳に入ったら、顔を赤らめなきやならないような事をしていやしないか？ あったら言ってしまいなさい。僕は皆、知っているんだから」

「御存知だったら、あたしから言わなくていい……」

ちらつと茶目ッ氣をのぞかせる。

「バカッ」

パシッ……小夜子の頬が鳴った。

俊介は別に怒っているわけではなかった。とにかく、最初がカンジンだ。小夜子は頬をおさえたまま大きく眼を見開いて、どうにも信じられないといったおもちである。

若い技士は気楽である。大した責任をまかされるわけでもなく、それに女助手からは慕われる。小夜子は今まで不当にブタれたことがない。何だか冗談でたわむれあっているみたい。

「それでも、しゃべらないのか。強情な奴」
強情な奴といわれたら急に悲しくなった。
あたし強情でなんかないわ。ひどい、ひどい……

「泣いたって今夜は、しゃべるまでゆるさないからね」

「でも、でも何をしゃべったらいのか……」

「よし、そんなら思い出さしてやろうか。」

僕を甘く見そこなっちゃいけないよ。やる時はやるんだから」

（その通り。おい、俊介。思う通りに事が運んだじゃないか。やれ、やれ）

強いて威厳を取りつくっている自分が、こっけいだ。さっさと洗いざらい、ぶちまけて片をつけるか。

「こっちへ来給え」

俊介は白衣をひるがえして立ち上る。小夜子が、しおくと（内心は好奇心でドキドキしながら）後に従う。

地下室へ通ずる上げ戸を開く。危険な劇薬などを保存しておくために作ってある。狭い室の割合に明るい電灯がつけてあるのも、取扱いの危険を考えての事だ。

小夜子は身ぶるいした。はじめて緊張した気持になって頬が引きつった。

ここなら何をされても外に洩れない。心臓の鼓動で耳が遠くなる。

「両手を前に出して」

おず／＼と差し出された手を掴んで手拭で

縛る。

ああ……

恐怖とあきらめが入りまじって、変に甘い気分になり、眼をつむった。それでも口ではイヤ、イヤ……とつぶやいた。

その手を滑車で上に吊り上げられる。つま先立ちになった。両わきが引きつって痛い。

「かんにんしてえ、あッ……」

「ダメ、ダメ。ちっとも反省した声じゃない」

「何を、何をなさるんですッ」

しわがれた声になってしまふ。

「少し反省してもらうのさ」

俊介も思わず冗談めかしてしまふ。事実、楽しくなりはじめていた。小夜子の明るさのせいだろうか。

ピシヤリ。

「イターイ」

小夜子のスカートの裾がゆれる。

「こんなことで悲鳴をあげる奴があるか、まだ真剣な気持になっていないぞ」

俊介は革バンドを手にして、踏みしめる足に力をこめた。

ピシッ

「ウーッ」

カッと真赤なものが胸を突き上げて来る。

クラクラッとする感覚は未知のものではなかった。小夜子は相手が俊介であることを忘れかかっていた。

ピシッ

「ヒー」

あのことをこの人は知っているんじゃないかしら——とつさに、そんな思いが浮んだ。それで、あたしを——

「アッ」

膝のあたりに鞭が巻きついた。絹のストッキングが裂けた。

「ア——、も、もうかんにんしてっ」

男に責められるという羞恥と、苦痛が入りまじって陶酔が襲って来た小夜子には、はじめての経験だった。こんな強烈な刺激を感じたのも、従って最初のことだ。

「どうだ。少しは、こたえたか」

俊介は白衣の袖で、グイと額の汗を押し拭ぐ。運動とは別のものの汗だ。

「言うか」

うるんだ瞳が、うらめしそうに見て、コックリとうなずく。その姿態に俊介は相手の美女であることをゾクリと実感した。これは——と予想以上の獲物を手にした驚きと喜びだった。

両手を吊った縄を外す。

「上衣を取って、正座。よく心をしずめて告白するんだ」

いわれるままに従うしぐさは、俊介の心により一層の愛情を感じしめるのに充分だった。

むき出しになった白い肩を両手でおおって小夜子は正座し、うなだれた。肩の円みは何処か、なよ／＼とした姿態とチグハグで歯がゆかった。

「両手を後に廻わせ」

「ああッ、お願いです。おとなしくしますから、そんなひどいことはしないで……」

「会社の体面を汚した者は罪人と同じだ。罪人を縛るのに不思議があるもんか。早くするんだ」

両手を我から後にまわして、顔を胸に埋めて、しゃくりあげている姿は、しめ殺してやりたいほど可愛かった。手が震えた。

細引きで胸に二巻き、それに首縄をかけて涙でグショ／＼になった顔を無理矢理、引きおこす。先細の指が空を、まさぐった。

「ああ……」

「お前、縛られてうれしいんじゃないのか。その声はどうだ」

ああ、やっぱり。やっぱり、この人はあたしの秘密を知ってらしたんだわ。

仰向いたままの顔が、耳まで羞恥に染まつた。瞳が、やり場のない切なさを、にじませる。だが洗われた様な晴れしたものが、そこにはあった。

「一部始終を有体に話すんだ」

罪人の様にうづくまる、か細い体の前にドツカと腰を降すと、口までが役人をまねた。小夜子の眼が、ひたと俊介にそそがれた。

「あたし、いじめられるのが好きなんですーそれも……それも……」

「それも何だ」

「いじわるッ。おわりのクセに」
くすぐったいのを、こらえるのも骨が折れる。

「甘えるな。一体何だというんだ」

「それも……好きな人に……」

無理にでも顔を俯向けようとするので、両手がキュッと肩先まで引きあげられ、指先が苦悶をかなでる。

「誰だ、その好きな人というのは。さっさと白状してしまえ。けしからん奴だ」

「……」

「いわないのか？」

「あたしを……あたしをいまこんな……こんなに苦しめている人を……あたしは、あたしは、お、お慕いしています」

「お前をいじめる者は誰でも好きになるってわけだな」

「チ、チガイマッス」

小夜子は身もだえして泣いた。もう見栄も何もなかった。眼から涙をポロ／＼こぼし、よよと泣き入る。可憐だった。これがあの近代的な女らしさと同居しているとは、女の不思議さを今更ながら思わせる。

もう何もかもまかせ切った安心感が、躰全体に異様な色気をにじみ出していた。躰全体が俊介に訴え、甘えかかって来る。

涙は霽れて、陶酔が心を領した。

俊介はクラ／＼する程の喜びをおさえて、なおも詰問する。

「僕の前には、どんな男にいじめられた」

これは嫉妬も交って真剣だ。

「男の人に、こんなことされたのは始めてです。ほんとです。これだけは信じて」

ほぼ分っていたことだった。うなづく。

「じゃ同性にいじめられただけだということだな。相手は誰だ」

「営業の道下さんです」

やっぱり、はずかしい。もぞ／＼肩をゆするしかないのが、切なさを倍加させる。いや、いや……こんな風にいじめられるんなら、いっそのことブッて。かなわぬ事にフツ／＼心をわかせ、苦痛の陶醉に我から身をまかせる小夜子だった。

「何時頃からのことだ」

「この春、職場が入れちがってからです」「入れちがったら、どうしてそんなになる」

（別れば、かえって慕わしい気持になるのが普通じゃありませんか）と言いたかった。もじ／＼する。

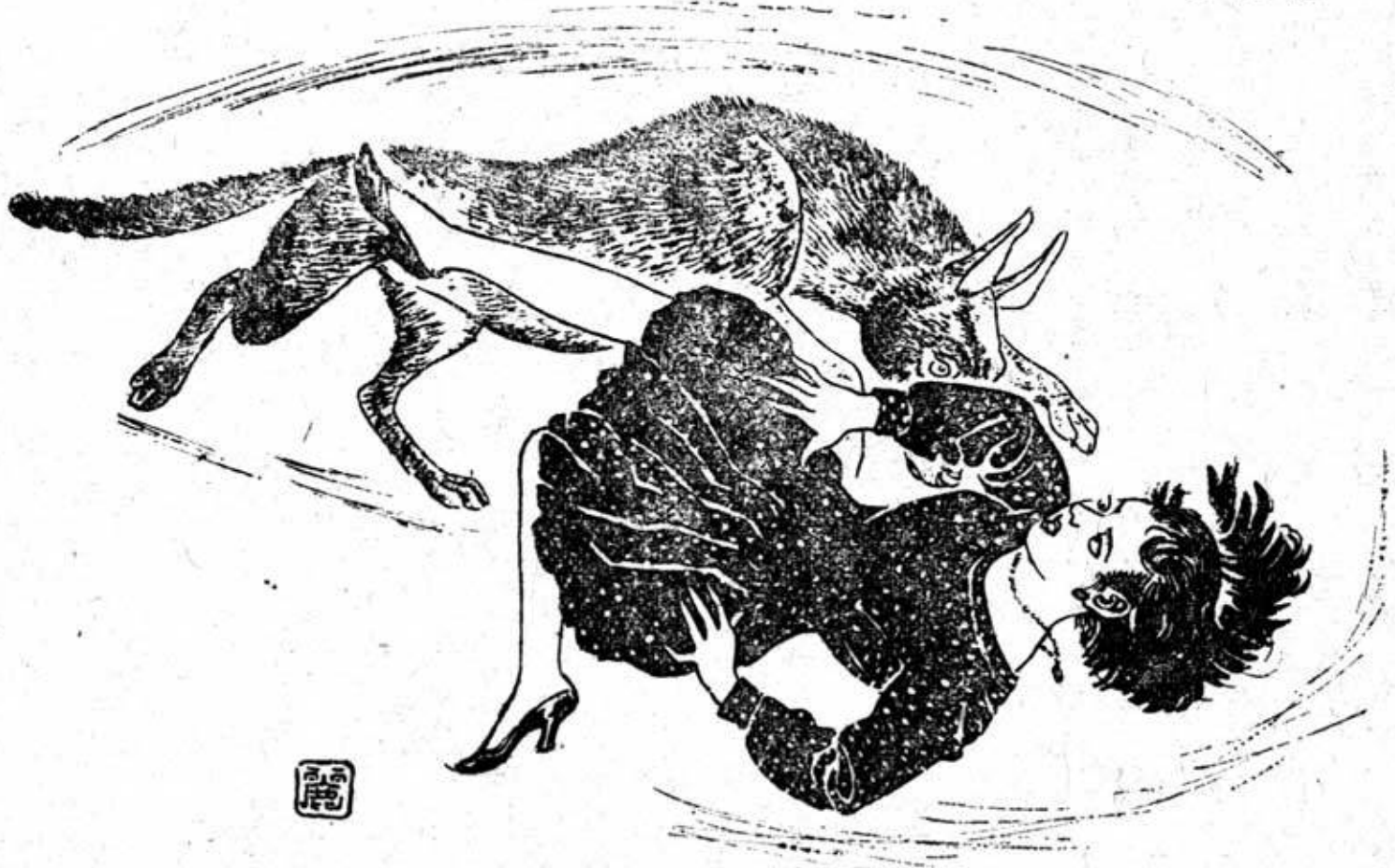
「まあ、いい。はじめはどうだった」

「二人で組合問題を持ち寄っては研究しあったんです。そして……」

小夜子は堰を切ったように、話しはじめた。

道下キミは組合役員の女子の中では抜群の闘士である。男子には彼女に勝るものも二、三、居るが、頭のするどさは他の追従をゆるさないものがある。ちよつと冷たい感じを与えるが、端麗な容姿は女子職員のアイドルの如き存在だった。

二人で組合問題を持ち寄るといった所で



当然、役員になったばかりの方が教わる立場になる。それが劣等感という陰気なものにならなかったのは、ただ、小夜子の人柄のせいであった。陽気な小夜子を、自分を頼ってくれる彼女をキミは愛しいと思ったのだろう。小夜子にいわせれば「キミちゃんたら、あたしを妹のように可愛がってくれるんです。時に女王みたいにあたしをコキ使うこともあるんですけれど」

言いだしたのはキミだった。あまり発展しない小夜子の闘士ぶりに業を煮やしたのか、春の小スト活動が終ると、こんな事を言いだした。

「これからは、組合強化のために遠慮なくバツを加えるわよ。いいこと、小夜ちゃん」最初は二の腕にシッペを五つだったものが、だん／＼小夜子の方にききめがなくなつたので、頬／＼つたをつねったり、指を一本一本、逆にねじったりする様になった。叩くという所まで進んだのは、夏に入ってからのことだったそう。

二人だけの女部屋にどんな光景がその夏展開されたかは想像にかたくない。外聞をはばかりて閉め切った四畳半の部屋にムン／＼と充満する体臭を思つて俊介は戦慄し

た。

スリッパ一枚に剥かれた小夜子が、俯向けになって四肢を机の脚に縛りつけられている。口はシッカリと猿轡がかませられて、うめき声さえ、変にゆがんで洩れる程度。傍に、これまたスリッパ一枚になったキミがギリシャ女神の様に彫りの深い顔を紅潮させて立ちほだかっている。手にしているのは真赤で細身の婦人用革バンド。

鞭打ちが熱して来ると、いつもよりもっともっと激しい鞭が、本当に白膚を真赤に色どるまで鳴り続けた。

こうなると、もう組合役員としての活動が消極的だからという理由は、完全に側へ押しやられて、加虐と被虐の罪深い楽しみに眼覚めた二人の乙女はひたすら、その道を深く探る様になって行ったのだった。

縄のかけ方、猿轡のつけ方、その他、責めに関する研究が、組合のあり方の研究に取って変った。部屋の外でプレーする事は勿論、事情がゆるさなかったが、キミの家の大きなタイル張りの風呂場が、時には新しい喜びをもたらすこともあった。

こんな段階になっても、何らかの責める口実が設けられた。風呂場では、大てい、キミ

の背中を流すやり方が下手だ、という理由の様だったが。時には、あたしと同じ湯ぶねにつかるのが、けしからんという理不尽な理由さえ持ち出されたりした。

ただ一度だけキミの家をフルに使って責められたことがあった。父母が小さな弟を連れて大阪の伯父の葬式に出かけた時のことである。小夜子は、淋しいからというキミの口実で、母のゆるしを得て、キミの家へ泊りに出かけた。

プレーは、小夜子が敵国にとらわれた女間諜であるという想定のもとに行われることが二人の間で定められた。いったいどんな責められ方をするのか、小夜子は一切知らされない。すべてキミの思い通りに事が運ばれることになっていた。

夕方、キミより遅れて退社して来た小夜子は呼鈴を鳴らした。キミの家は周囲をブロックの塀で囲ってあって、訪ねる人は門柱についている呼鈴を鳴らす。それを聞いて家人が門を開けてくれる様になっている。手間はかかるが、郊外の比較的人家のまばらな所としては止むを得ない事なのだろう。

今日に限って誰も出て来ない。約束忘れちゃったのかしら。半ばガツカリして門を押し

て見る。スツと開いた。招じる人もないのに自ら門を開けて入ったということが、すでに秘めごとを胸に抱いた人間に小夜子を仕立てていた。

静かだ、ひぐらしが庭の青桐で鳴いている。あたりを、こそ／＼見廻しながら敷石を歩いてゆく。どこからかワツと飛び出して来るにちがいない。

飛び出したのはキミではなくて、自分の身の丈程もある真黒のシェパードだった。それが毛を逆立てて吠えかかった。

小夜子は悲鳴をあげて後じさった。キミの家へは、しょっちゅう訪ねているし、クロと呼ぶ大きな犬が居る事も話の上で知っていたが、見たのはこれが始めてだ。二人は二階の部屋に閉じこもるばかりだったし、平常は犬を放してはいない。

「キミちゃん、キミちゃん。助けてッ」本音だった。クロは鼻面を地面にすりつけて、上眼使いに唸っている。小夜子はその威圧にふるえ上ってジリ／＼後じさる。飛びかかられたら、いっぺんに押し倒されてしまうだろう。そして……

クロは吠えもせず、飛びかかりもしないで低いうなり（だが、何と腹の底からゆさぶり

たてるようなイヤなうなりだったことだろ
う)をもらしながらジリ／＼と小夜子を追い
つめた。一、二度、小さな庭木を踏み折り、
鉢にぶつかって、ひっくり返りそうになっ
た。その度に冷水を浴びた様に全身に鳥肌が
たった。

ちよっと開けた処に出たな——と思ったと
たん、クロは飛びかかった。アッと声になら
ない叫びをあげて、小夜子は仰向けさまにひ
っくり返った。クロのとがった牙がグッと顔
の上にのしかかって来る。小夜子は気が遠く
なった。

「よし、クロ。おすわり」

胸の重みがスッと遠のいた。小夜子は夢見
る様な瞳で、そこに突っ立っているキミの姿
を見た。ずるそうに笑っている。小夜子は、
安心とくやしさとでワッと泣き出した。

これが、はじまりだった。黒いスラックス
を細っそりとはいたキミは、のっけから間諜
を訊問する秘密警察婦人部長の役割を遂行し
た。他人の邸宅をひそかにうかがうのは何故
か——とありもしない罪状を白状させる為に
仕組まれたキミの芝居の中に小夜子は、まん
まと落ち込んでいたのだ。

身体検査と称してスリッパ一枚に剥かれた

小夜子をキミの白い指がつねりまわす。立木
に後手に縛りつけられ、猿轡をしっかりかま
された小夜子は、その痛さより、ソロリと音
もなく襲いかかる妖虫のような指先に戦慄し
た。声のかわりに涙と汗がしたたり落ちる。
悩乱の中に陶酔が、苦痛の中に歓喜が、始め
はおず／＼と、最後には自棄的な放心をとも
なっておそって来る。

これまでのプレーの範囲を越した責めのし
つようさと、キミの真剣さに戦きながら、小
夜子はいつしか、より強い苦痛を求めてい
た。

小夜子が犯もしない罪状を無理矢理、白
状させられたのは、鞭打ちの後に登場したソ
ロバン責めの為だった。

風呂場を使う薪(径二寸ばかりの丸木を割
ったもの)をとがった部分を上向きにして十
本ばかり地上に並べる(責めはすべて庭で行
われた。キミは縁側に腰を降してそれを見降
している)後手に首縄までかけられた小夜子
が、眼かくしをされてオズ／＼と脛を薪に密
着して座らせられた。縄尻は後の杭に結ばれ
やや胸をそり気味にして、小夜子は見えない
眼を不安げに泳がせている。

はじめは、さほど痛いとは思わなかった。

それでも薪の不ぞろいな高低が部分的に脛を
責めたてて身もだえする。それがかえって角
を脛にめり込ます結果になる。

最初の鞭が膝を打った時は苦痛のあまり膝
をくずして横にころがった。これではいかん
と、キミが小夜子の折れ曲った膝と脛をくく
りつけた時は、もう気が浮いてしまつて、呻
きさえたてられなかった。

鞭が背に胸に鳴るたびに小夜子は縄尻を引
き、しなやかな体をゆすつて、もだえた。脛
の下で薪がギシ／＼きしんだ。ナイロンの下
着が汗にピタリと体にはりついていて、苦
しかった。本当に苦しかった。

「死ぬ時ってあんな気持になるんでしよう
か。体が急に軽くなって、苦痛も、心臓のあ
えぎも、鞭の音もスッと遠のいて、何だか何
もかも、まかせきつた楽しさがおそって来る
んです。ああ、可哀そうなあたし、無意識の
中にコックリをしていたのでしよう。キミち
やんが猿轡と眼かくしを取ってくれました。
眼が引きつってスゴイ顔になってるんです。
後で聞くと、キミちゃん、あたしが死ぬんじ
やないかと本当に驚いたそうです。でもその
時は、ひとり立てそうもないあたしを荒々し
く薪の上から引きずり降すと、あごをグイと

上向きにさして、白状しろっていうんです。夢のようでした。どんなことをしゃべったのか。ああもうカンニンして……手が痛くって……、しびれてしまってた……」

小夜子の頬は紅潮していた。羞恥か、苦痛か。

「道下に責められた時とどうだ」

相変らず意地が悪い。身をもんで恥かしがる小夜子。

真実の苦悶をとまなう芝居の後にはキミは今までとは逆に、小夜子の打身や小さなキズをもみほぐしてやり、甘い言葉で小夜子の心のキズもいやしてくれた。キミとても、ちょっと行きすぎたと思ったのだろう。そして小夜子は、そんなキミに甘えることによって、キミの愛情をたしかめ、さっきの責めを、その一つのあらわれと確認するのだった。

「いじわる、いじわる」

小夜子はキミの胸に顔をうずめて、しゃくりあげていたそう。

次の日を二人は普通の仲良しと交わらぬやり方で過ごした。映画、お茶、そしてウィンドウ・ショッピング。

二人の乙女にとって、責めは飽くまでも遊戯でなくてはならなかったのだ。

俊介は、いたわりながら縄を解いてやった。しなだれかかってくる小夜子の体を俊介は、大切な玉のように受けとめた。すべてが自然だった。

（俺は二人とない半身を得たんだ）

（あたしは、あたしの心は、この人を選んだ。キミちゃん、あなたはこうするかしら）
「さあ、もうおそい。お家の人が心配していらっしやるだろう。悪かったね」

二人の眼があって、同時にニコリと笑った。

た。

「あたし、家の者には、キミちゃんの所へ泊ってくるって言ってるんです」

小夜子はイタズラっぽく首をすくめる。

「こいつッ」

二人は大声で笑いあった。

キミちゃん——彼女が、これからどんな風に二人の間に立ちだかつて来るか。二人の胸には、それがオリの様に残っていた。

（おわり）

臨時増刊号

「青い廃院」

定価 二百円（送共）

「青い廃院」

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター！

「与那国奇談」

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮ぶ与那国は、世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習。

四馬孝画「青い廃院」画廊

- 美貌の人
- 苦悶する美貌
- 踊り責め
- モデル責め
- 美女誘拐
- 屈辱の責め
- 廃院の中
- 救出

▲変ったレッスン（表紙裏）
▲受 本文内容主な項目

青い廃院（弓沢俊二郎）

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手繰りの網
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

与那国奇談（永山久美雄）

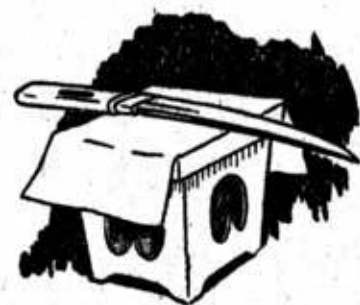
- 女護ヶ島与那国
- 女百人に男一人
- 股裂きになる女
- 股裂きと火焙り
- 人肉の炙り焼
- 孤島の殺人
- 筏流しの刑罰

腹を切る事

考 察

折 伏 下 男

(その四)



これ迄、三回にわたって、死の準備（それは肉体的、精神的の両面共に）としての切腹について考察して来たわけだが、筆者は尚、種々の故実について知りたい点が多々あり、この点、今回、列举させてもらって、読者諸兄の中のそういった点について明るい方々から御教示を願いたいと考えている。

(1) 腹切丸。よく城の一部の、やぐらとして又は部屋として残っているが、これは刑としての切腹時に使用されたものと聞いている。

庭での切腹は問題ないとしても、よく座敷で切腹した話を読んだり聞いたりするたびに考えるのであるが、血によるよごれは如何に始末していたものか。この点から一つの部屋を定めて切腹専用としたものと考えられる。

大体、鬼門の方角に設けられたこの部屋で切腹する本人は、矢張り犯罪者扱いとされたわけ、往古の如き閏刑としての意味は大分減殺されてきている様に考えられる。庭上切腹等については、よく小説なんかに出て来て挿絵等も拝見するのであるが、筆者はまだ腹切丸についての描写にお目にかかった事がないので、その様な文献でもあれば本誌にのせて戴きたいものである。

(2) 殉死切腹。小説「鷲」には殉死の為に切

腹してゆく人々の事が詳しく出て来るが、殆んど菩提寺の境内で腹を切っている。この小説の中の人々が——これ等の人々は、史実でも実際に切腹した——簡単に切腹したと片づけられているが、それ等、個々の人々が如何なる感情をもって、その歳までの生い立ちをそしてその家庭を、家族を、振り払って、夫々思い／＼に自分の腹に刀を刺し、そして切り開いたかという事を考えると、切々たる哀愁の情が湧いて来ると同時に、殉死という死が腹を切る事によって、どれほど美化されたか。又、殉死者が腹を切るという行動の為にどれほど潔く死に飛び込む勇氣を持つ事が出来たか、という点に考え及ばざるを得ない。裏面には遺族の栄達を望んでといった觀察もされる点多々あるが、腹を切る本人が、それほどまでに打算的に刃を我が腹にあてがったとは筆者は考えたくない。名誉の保全、過失の償い、犯罪者、といったような幾分にて、ひけ目のある名目の為に非ずして、順当に、そして名誉ある機会を得て腹を切った。正々堂々と、後顧の憂いもなく落着いて灼熱の烈痛を耐え得る事が出来たと考えたい。

藩によって、又、時代によって異なるだろうが、前記の如く各人、夫々の菩提寺に行つて

という事ではなく、城内で切腹した例もあつたらしく、中には、殿様危篤の時、殉死予定者の中の一名が先腹を切り、残りの者は追腹といった例もある。城内でという場合、どのような部屋がこの殉死の爲の切腹にあてがわれたものか、そして如何なる方法で殉死者の銚衡がなされたものか。更に、この場合の切腹の形式——腹切りの装束、三宝の有無、介錯人の有無、立会人の有無、等々——。こういった資料にお目に掛かりたく考えている。

(3) 遺体の処置 仏国のギロチン刑死人は長い寝棺に胴体を横たえ、首は脚の間に置く事になっていると聞いているが、我が国では切腹した遺体は、どの様に処置されたのだろうか。介錯された首は、当人が腹を切った短刀と共に胴体とは別個に証拠として検証のため引上げられた。場合によっては、それが遺族まで引渡された模様であるが、遺体としての胴体はどうか。傷あとの処置、諸肌脱ぎなら矢張り着衣に腕を通さねばなるまい。腹部をくつろげた屠腹者の場合にも衣紋を正してやらねばなるまい。このような事は、どのような役の人がやったものだろう。

又二人以上の多人数の切腹の場合、同時に腹を切る事はなく、一人ずつ順々に行なわれ

たらしいが、首と短刀の処理は一人の切腹が終る毎になされたものと考えられる。次に腹を切る者も、それを見ているわけである。殊に複数人の切腹では遺体の処理のし方如何によって、この儀式の空気が著しく損われる事は免れまい。

(4) 多人数切腹の時の着座について。四十七士の場合、又、堺事件の場合には一人一人呼び出され、前に進み出て座につき腹を切ったと古書に記されている。切腹は検視の方を向いて行なわれるから、以上から想定すれば、順を待つ者は、背後から切腹の様子を見ている事となる。順を待つ者の側からいうと、今切腹しつつある者、それが数刻後の我が身とこの事で、その切りつつある腹、短刀、手、に注意が集中されるであろう。背後から見守る場合、当人の体の動き、腕の動き、それに矢張り、微かなるうめき、それ等から数刻後の我が身を考えたに違いない。又、次の様な着座もあつたのではなからうか。即ち、検視が正面、諸役人及び参列者が側面、切腹者達は他の一方に着座。呼び出しによって上席の者より一人宛、検視者の前方に出て切腹の座につく。この場合には順を待つものも、数刻後には自分の手で我が身を切り裂く様を目の

前に見る事となる。

(5) 介錯もなく急所も突かない切腹死。

高山彦九郎は九州の地で友人の家に立ち寄り談笑した後、友人が暫し、階下へ下りたが戻つて来た所、彦九郎は既に腹一文字に切りつつある所であつた。彦九郎は「済まぬが死なせてくれ」といいつつ友人の見ている前で右脇迄ゆっくりと刀を動かした。友人は検視の如何によつては類災の事もあるから、その刀をこちらへ渡してほしいといった所、彦九郎は素直に友人へ刀を手渡した。急いで切腹を始めたらしく肌は脱がず、はかまをずらし胸から腹部まで着衣の衿を押し広げた姿であつた。覚悟の上であつたらしく、取り乱した所はない。相当深く切っており、手当の及ぶ様な切腹でない事は、傷が上下に開いている事からみて明らかであつた。友人は直ちに役人と医者への連絡をつけて待ったが、その間彦九郎は東方を伏しおがみ、それから友人に断わつて身を横たえた。医者が来て処置を施したが、もとより手当が目的でない事が明らかであつた。役人が来て質したが、彦九郎は唯、一言「狂氣」というのみ。持物を調べたが別段取り立てた物は何もなかった。覚悟をして処分致しておつたものと考えられる。腹

を切ったのは今の時刻で午後四時頃、その日の夜中に他界した。と事録にある。

先日、講談で「怖妻の棺」というのが放送されたが、その中では実際には切腹しなかったのだが、この話を途中から自己流に変えてみると、おかしげなものが出来た。次の様なものだが、かくもあらんと思える。

友人を或る女の家に案内した事から、友人が病みつきとなって、時々家をあけてはその女の家に通う様になった。所が或る夜、心臓の発作でその友人がその女の家で死んでしまふ。本家には娘一人でそのままでは跡目相続が出来ない。本家に乗り込んで細君に対して

遺体の引取りを頼むが、そんなけがらわしい主人の遺体など必要ないと頑張る。跡目相続をするには、一時遺体を引取り、病氣願いを出し、その間に養子縁組をする事だという事を教えて、始めて遺体の引取りを承諾した。所が女の家へ行った所、驚いた事に本人が生き返っていた。友人の細君には、もう既に全ての事は打ち明けていて、生きて戻るわけにはゆかない。いや遺体としてでも致し方なく、との但し書がついているのだ。あの細君の事だから、事が表面立つと二人共、どんな事になるかわからない。困却して考え込んでみると、友人は「生き返ったのが悪いから

う一度死ぬ」といい、結局、二人共それが最善の道と考える。女は泣くが、男は切腹する事になる。遺体は病死だから介錯は出来ない。腹部だけなら、死後着衣を改めて納棺すればわからない。だから腹を切るだけで死ぬ必要がある。文字通りの切腹死だ。大分、苦しいが仕方ないと本人はいう。女が取りすがって泣く中を、友に見守られながら、本人は愈々前をくつろげる。短刀は刃先一寸程度も出るのが介錯切腹だが、三寸程も残して紙を捲き右手に握る。立派に腹は切ったが、苦しみも激しかった。そして棺に納まり無事、細君の側へ戻った。跡目相続の為に。

麻生保氏の生活と意見

(十三)

麻 生 保

鞭を持つ美女

どうも、のっけに、こんなことから書き出すと、いささか羊頭狗肉の観があるが、最近

思いつくままに二つばかり――。
週刊平凡、十月七日号のグラビヤ。ウィー
クリー・ファッション中、入江美樹さんが、
厚手のウールのスーツを着て、鞭を手にして

いる素晴らしい写真が出ている。鞭は、サーカスで使うような、木の柄に長い革紐をつけたもの――新馬の調教に使うこともある――である。両手で鞭をグツとしなわせ乍ら、彼女の特色である、やや、エキゾチックな鋭い目で、じつとこちらを見据えている入江さんのポーズは、全く、彼女の足下にひざまずきおそれおのき乍ら罰を待っている奴隷を鞭打とうとしているドミナのそれである。しかも、スーツで彼女の脚線美がうかがえるところ、まことに素晴らしい。乗馬ズボン、革長靴で鞭を手にしている女性は無論、麻生の最

も好むところではあるが、その場合の鞭は、明らかに馬を打つためのものである。しかしスーツや又は、豪華なイヴニングドレスなどで鞭を携える女性がいるとしたら、その鞭は馬のためでなく、奴隷のためのものであることは容易に想像し得るから、この方がより純粹にサジスティンとして見える。(乗馬を媒介としないから。)全くこの写真は素晴らしい。見るたびに溜息が出る。ただ残念なのは彼女の背後にニヤケ男が立っていて、大へんに目ざわりである。(ギリシヤ人と見たてるわけにも一寸いかなんでネ)

もう一つは、近頃、新聞や雑誌(例えば、文芸春秋十一月号)に出ているNECテレビの広告である。乗馬ズボンに革長靴をはき、鞭を持った美しい女性が、うまやかに置かれたテレビと共に写っている。珍奇なアイディアで、特に麻生には大へん嬉しい。乗馬ズボンの仕立てが、なか／＼よいので、女性の馬装特有のひざのあたりの線が、サディックになまめかしく、あのひざで、ギューッとしめられたい様な気を起すのは麻生ばかりでもあるまい。なお、鞭は可成り太く長い、大型の乗馬調教用のもので、美しくもエレガントでもないが、ものすごい威力を発揮するから、調

教には、なくてはならぬものである。この鞭の下では、馬の厚い皮も人間の膚と同様で、それ程ひどく打たなくても跡がつき、もし同じところを二、三度、続けて強く打つなら、みずばれから血を滲ませ、肉を裂く事さえあるという。

好ましい先生

週刊新潮十一月二日号のスナップの記事。アメリカのヴァージニア州のある小学校で好ましい先生の投票をさせたところ、二十二才の美しい女教師が圧倒的多数で第一位だった。ある生徒(小学校六年)は、その理由に「宿題を忘れて来た時に先生の怒る顔が『テキだ』といった由。

美しい女教師のランベルシエ嬢から、お尻をぶたれるのが嬉しくて、わざと悪戯をしたジャン・ジャーク・ルーソーは、あまりにも有名であるが、このアメリカ小学生も、美しい先生が、キリッと眉をつり上げて怒った顔をみるのが楽しみで、わざと宿題をやっ来てなかったりするのではないだろうか。時には先生の白魚のような手が、この子の生毛の生えた頬ぺたにピシヤリと鳴る事もあるかも知れない。一体、欧米の幼稚園、小学校では、現

在でも実際には体罰が、しばしば行われ、その点、日本の方が余程、民主的?ではある。又、最近イギリスの教育界では、再び子供への鞭打ちの効用が論じられ、公然と認められる傾向にあるという。仏映画「悪魔のような女」の中で、小学校の女教師が、いたいけな男の子の頬ぺたに平手打を喰わせると、その子がウーンと泣き出すシーンがあったのを記憶しておられる方もあると思う(こういった場面は、麻生の傍観的マゾヒズムが極めて刺戟される)

麻生は、この「ルーソー問題」即ち、「女教師の鞭」及び、それと関連して、母親や伯母、姉などから折檻される男の子の心理状態と、その影響などについて、麻生自身の体験も含めて、いずれゆっくり、エッセイを書きたいと思っているのだが、九雅節夫氏あたりの御教示や御協力も得たい次第である。(同氏の「特異な角度から」は、その後、どうなったのでしょうか)

カテリーナ・スクオルツァ

三輪福松氏著「イタリア美術夜話」(美術出版社発行)に出て来る、ルネッサンス時代の女丈夫。法王シスト四世の甥ジローラモ・

リアリオに嫁したが、夫が暗殺されるや、その一味に徹底的に復讐したという。馬にひらりと跨がり、十数哩の山河を疾走し、自身で陰謀者の首をはね、四つ裂きにし、或は城の窓からつるして切り殺したり、舗道につき落して兵士に殺させたりしたという。又、自分のよからぬ噂をした者を片っぱしから罰し、彼女の城に出入する口の軽い画家、舞踊家、音楽教師たちは、皆きびしく譴責され、当時の有名な年代記作者のゴベリを投獄してしまった。しかし、一面、彼女は非常な美人で（それは今日、残るいくつかのメダルや、肖像画からも察せられる）しかも当代一のギャラントな女性であったというし、幼少の折から才媛で長じては政治に権謀術策を用いるなど一部に伝えられるような単なる「惨虐無暴な女専制主カテリーナ」では、なかった。それどころか、ボカルドや、アリオストなどにいわせれば「イタリア第一の女性」「理想の婦人」であったが、おそらく、この方を信用したい。

なお、ボロニヤの市立美術館に、ありし日の彼女が、その美しくも嬌慢そのもののよくな白い肢体を、ぴったりと包んだ甲冑がある。五百年を経た今日でも、その移り香が匂

うようだという。

天高く馬に乗る

週刊明星十一月二十二日号グラフ。乗馬学校に通う女性たちの事が出ている。ある女性は乗馬について「旦那様を乗りこなすと同様に難しい。でも張り合いがありますわ」と語ったという。この場合の張り合いというのは乗杉夫人のいう「……体のひねり一つでどうにでも動くような馬は、どうも私の性に合いません。反抗気味に暴れるくらいのを、透きとおるようなこの脚で締め、騎座を固め、手綱をしぼり、銀色に輝く拍車で蹴りつけ、細身のよくしなう鞭で脅かす……」（三十二年十一月号）という意味に解すべきだろうと麻生には思われる。そのグラフの第一ページに、一人の若い女性が馬にヒラリと飛乗る瞬間を捕えた写真があるが、宙に浮いた体の凛々しくもなまめかしいこと。脚にぴったりした黒光りのする革長靴、それにつけられた拍車、そして仕立のよい乗馬ズボンに包まれた膝など麻生は思わず歎息をあげた。他に障礙とびの瞬間を写したのもあった。ただし、鞭や拍車の使用が一向に写されていないのは何とも残念。

ところで、藤山秀緒さんは前述のなやましき乗馬ズボンの写真を御覧になっただろうか。多分、麻生の意見に賛成して頂けると思う。

「鏡子の家」三島由紀夫

俳優の収（ボディビル）に凝っている美青年）が、清美というサディステイン（年増の高利貸）とプレイにふける挿話がある。簡潔な記述ながら、流石は若き文豪、三島氏の筆に成るだけに迫力がある。

すばらしいバランス

というキャッチフレーズの「フレンドバンド」の広告に、乗馬女性が登場した。（十一月十七日附の読売新聞、（朝刊）その他にみられる。いままでは、もっぱらオートバイに乗った女性だったが、今回は「巧みな構造と、高貴な品質が奏でる（中略）欧米にもない、我国で初めての最高貴品クレンドのゴールド印が生れました……」とある。高貴という言葉葉を二度も使っているのが、美しい馬上の女性と共に人目をひく。そりや、オートバイより乗馬の方が高貴にきまっている。この処、乗馬女性の美しさというものが認められつつ

あるらしい。

障碍馬術について

映画「小さな無法者」の始めの方に出てくる將軍の愛娘は、まことに幼きドミナである。恐らく十才前後だろうと思われる。目のパツチリした可愛らしい少女。白い乗馬ズボンに拍車のキラリと光る革長靴。それに障碍用の短鞭を持ってサッソウと、うまやにあらわれ、馬丁の少年に、例の「黒い馬」を出せという。「お嬢さま。あの馬はいけません」「いいえ、私が命令するのよ」押問答の末、とうとう、その馬を出させて乗出し、障碍に向わせる。小さい障碍は難なく飛んだものの、大きい障碍をどうしても飛ばない。「お嬢さま、あぶないです。止めて下さい」と馬丁の少年が叫ぶと、少女は凜然として馬上から「これを飛んだらね」と答え、又もや、馬を駆って同じ障碍を試みさせる。結局は、少女は落馬して気絶し、父の將軍が怒って、そんな癖馬は殺せというので、この馬を愛している馬丁の少年が馬と共に出奔するという筋だがそれはさておき、この幼い少女が「あぶないから止めて下さい」といわれて「これを飛んだらね」と答えるのは、全く胸がすくようである。

はないか。

一体障碍馬術の際は、特に馬は騎手に絶対、服従を要求され、障碍を拒んだ馬は、騎手の手にある鞭の痛さを思い知らされるのである。

ピシーリ、ピシーリ、ピシッ、ピシッ、と激しく連続的に打据えられて懲戒され、又もや同じ障碍に向わせられるにきまっている。何度も障碍を拒否すれば人も馬も気が立つてくるから、鞭は、ますます激しく鳴り、その間に拍車もダツ、ダツと働き時には馬腹に血を滲ませるわけである。

残念乍ら映画では（恐らく吹きかえなのだろう）この可愛らしいドミナの鞭や拍車が激しく馬を責めるところまでは映し出されていないが、それは前後の模様から充分に想像されよう。

なお乗杉貴代子さんの「障碍への道」（三年五月号）には、障碍馬術とは高貴にして美しく、ドミナに如何にふさわしいものであるかが、貴重な体験とともに見事に書かれている。

又、昔、オリムピックで障碍馬術で入賞した西男爵は、平素、馬を調教する折に、若し障碍を拒否した時は、鞭を逆さに持って（即ち、柄の方で）馬の両頬と頸すじとを、もの

すごい強さと早さで引っぱたいたという。その様にして、騎手の鞭の威力が、大障碍よりも、もっと恐い事を馬に教えるのである。

映画予告編

「ソロモンとシバの女王」中で、シバの女王に扮するジナ・ロブリジダが、シヨージ・サンダース扮するアドニアを鞭で打つシーンがある由。又、「わたしを抱いて」では乗馬女性が登場するそうである。ただし、この場合は、馬装をしていないから、麻生の趣味ではない。

麻生は、西欧的（？）乗馬服装をして乗馬する女性をしか好まない。ごく僅かな例外はあるものの、西部劇風の馬装も、あまり好まない。

和鞍も好まないから「隠し砦の三悪人」の上原美佐も、乗馬姿そのものには、さまで惹かれなかった。「熱砂の女盗賊」も同様。何の興味も持ち得なかった。ただし、この様に脚線美を剥き出しにのぞかせ乍ら乗馬をする女性を好まれる向き多い事を麻生は知ってはいるが――。



禪刑事捜査ノート

雨男

奏 村 榎
画・審 木 青

市役所勤務、西降競一が死体となって発見されたのは、九月台風が一晩中、荒れ狂ったその翌朝のことだった。

発見者は朝の早い牛乳配達で、場所は某会社の建築工事現場。死体はどうしたわけか六尺襦を締めただけで、やや離れた位置からレインコートは見つかったが、その他の衣類や持物等は、どこからも見つけることができなかった。

検視の結果、死因は頭部強打による脳震盪。その他にも数力所に挫傷や擦過傷等の外傷が認められ、死亡推定時刻は昨夜の十二時から一時までの間ということになった。

検視にかかる前に、風間刑事はフト疑念を抱いて死体の襦をしらべてみた。

「襦に何か疑点でもあるのかい——？」

部長刑事が横から風間の手許を覗き込む。

「エエ、一寸、緩んでいるように思ったものですから」

「ホウ、やっぱり『禪刑事』といわれるだけ

あって目のつけどころが違うナ。で、どうなんだ？緩んでるのか？」

「ええ、大分——」

「もともと緩く締めてあったんじやアないのか」

「そういうことも考えられますがね」

まもなく検視が始まったので、そのことはそれきりになった。

死体の状況から推して他殺説が最も有力であり、一応、物盗りの線で捜査を開始したものの、当初に於て早くも係官達は困難の壁に

突き当たってしまった。生憎くその晩が台風だった為に、足跡等の手懸りは全く得られず、聞込みも全然、駄目という情ない有様なのだ。

怨恨とはいくと、関係者の証言で西降が他人から恨みを受ける人物ではないことが判っただけである。西降は多少、神経質なところはあったが、几帳面で仕事熱心だし、上司の受けもよく同僚間には好かれていた。酒も煙草も適量を嗜む程度だったというから、これでは非のうちどころがないわけだ。

ただ同僚の白都英男が一寸、気になる証言をしている。

「西降さんは先輩ですが、とてもいい人でした。大変に文学好きで、私も同じ趣味があるところから、しぜん話も合うんで、二、三度は下宿へ遊びにいったこともあります。しかし、それほど親密だったわけでもありません。というのは、彼はパチンコなんか見向きもしないほうだったでしょう。私はまた、マニアに近いくらいだもんで、どうしても、そっちのほうの友人と交際うようになっちゃうんです。それから、こんなことは参考になるかどうか判りませんが、西降さんについていまでも不思議に思うことが、一度だけあるん

です」

「ホウ、それは、どんなことですか？」

高梨部長刑事は火を点けたばかりの煙草をもみ消すと、相手の顔を注視した。

「ええ、あれは確か五月頃だったと思います。私は知人の家に不幸があつてお通夜に顔をだし、夜中の二時頃、帰宅したんですが、その帰り道、意外な姿の西降さんに出くわしたんです。あの晩は雨が降っていました。私は近道をしようとして工場裏の空地を抜けていったんですが、するとどうでしょう。揮一本の西降さんがヒョイと現れたじゃありませんか。私は吃驚して『西降さん！どうしたんです？』と声をかけましたが、彼は放心したような表情で私の顔を見ると、そのままスタスタといっせいでしまいました。私は余りのことに、夢か幻を見ているんじゃないかと思つたくらいです。翌日、気になるままに昼休みに彼を人気がないところへ呼んで訊いてみると『おかしいな。自分じゃ全然、憶えがないんだ。しかし、思い当る節がないでもない。俺はね、子供の時分、夜中に寢床を抜けだしてフラフラと家の中を歩き回ったことが何度かあったそうさ。でも、自分じゃ全くそれを憶えていない。夢遊病っていうのかな。それが

また出たのかも知れない……』といつて蒼い顔をしていました。私は気の毒に思いました。が慰めようもなく、そのかわりそのことは誰にも喋りませんでした」

「イヤ、ありがとう。大変、参考になりました」

高梨部長が新しい煙草をとりだすと、横から風間刑事がライターを点けてさしだした。

兇行の当夜、西降は停電中に下宿を出ている。部屋を貸している洋品店の主人は、「役所が心配だからいつて来る」という西降の言葉を別に不審とも思わず、朝まで帰らないのを、そのまま役所に泊ったものと推測して、死んだという報せがくるまでは心配さえしていなかったという。調べてみると西降がその夜、役所にいった事実はないから、いく途中で殺されたか、それとも最初から口実だけでいくつもりはなかったということになる。しかし口実にしろ、いく先をハッキリいつて出かけたのだから、彼のそのときの行動を夢中遊行と断定するのは無理のようさ。西降に夢遊病があつたらしいことを気づかなかつたかという問いに対して、洋品店の家族は誰も知らないと答え、ただ、夕食後、外出して夜遅く帰ることは屢々だったと証言した。

西降は三十四歳まで独身でいた男だが、まだ女友達もないに違いないと、誰からも信じられていた固物だった。そこを見込んだのかどうかは判らないが、課長の下山が半ば強制的に結婚を勧めていた娘があった。下山の姪で葉子という女である。温和い西降が断りきれなかったのだという噂もあるが、とにかくその縁談は来年の春、式を挙げるといふところまで進んでいた。

風間刑事が葉子の家を訪ねたとき外出支度でとびだして来た彼女は、いきなり風間の腕をとると、

「あたし、いま出かけるところなのよ。つきあってくださるでしょ？」

そのかわり質問には何でも答えてあげるわ」

といって、もう自分で決めてしまったように、どんどん歩きだした。

もう街には灯の点く時刻である。

実は昼間一度、訪ねたのだが、葉子は留守で夕方には帰宅するだろうというので出なおして来たのだった。

「風間建太郎。いい名前ね。でも、あたし、昼間あなたが置いてった名刺を見たとき、それほど期待はして

なかったのよ。だって刑事でしょう。どうせ醜男で野暮ったい男だと思ったから。でも意外だったわ。嬉しくなっちゃった。あなた、どうして刑事になんかったの？」

「好きだからです」

風間は怒ったように答えた。

「へエ、判んないナ。でもいいや。フフ、あ

たしネ、認識を改めちゃった。警察にも、あなたみたいな人がいるってこと判ったから」

「質問していいですか？」

「そんなの、向うへ着いてからにしましょう」

「向うって、どこへいくんです？」

「キャバレーよ」

「キャバレー？」

「そう。あなた、踊れるンでしょ」

「そりゃア、踊れンことはないですがね。しかし……」

「あたしとじゃ嫌？」

「そういうわけじゃありませんがねそんな場所じゃ落着いて話はできませんでしょう」

「大丈夫よ。サ早くいきましょう」

風間刑事は不愉快さを隠すことができなかった。全く呆れた娘だ。こ



んなのドライというのかも知れないが、あるいは彼女のほうも西降を愛してはいなかったのかも知れない。第一、彼と葉子とじゃア、どう考えても合う道理がないものナ。

キャバレー「噴水」の卓子に着くと葉子は「あたし、ハイボール。あなたは？」

「僕はコーヒを貰う」

「あら、のまないの？」

「仕事中はね」

「固いのネ。いいわ、じゃ、あたしもコーヒーにしよう」

物馴れた態度でボーイを呼ぶ葉子を横目で見ながら風間が煙草を取り出すと、

「あたしにも、ちょうだい」

「いいわ、ですよ」

「いいわ。何でも」

火を点けてやりながら、風間は何となく苦笑して、

「あなたは、しょっちゅう、こんなところへ来るんですか？」

「ええ、そうよ」

「西降さんとも？」

「彼は駄目。踊りもお酒も全然だから」

「愛していたんですか？」

「彼を？いいえ」

「でも、婚約してたんでしょ」

「ええ」

「じゃ、結婚する意志はあったんですね？」

「そうよ。遊ぶには面白くない男だけど、夫にするには適していたから」

そういうものかと妙に感心して、風間刑事は別の質問に移った。

「ところで、あなたは西降氏について何か気づいていたことはなかったですか？」

「どういう意味？」

「つまり、どこか普通と変わったところがあったとか——」

「あの人にとんでも！ 少しは変わったところでもあってくれたらと思ったくらいよ」

「そうか。如何に西降が生真面目でも、結婚前の相手に夢遊病のことを喋りはしまい。」

「おう、葉ちゃんヨ。おめえ、西降の野郎が死んだと思ったら、もうおかわりをめったのか。仲タイカス兄ンちゃんじゃねえかヨ。」

紹介しな

突然、現れた与太者風の若い男が、凄味の利いた声を出して肩を揺すった。

「そんなンじゃないわよ。この人は——」

「葉子さん。僕ならもういいんですよ。どうぞ、ご自由に」

風間が心得顔でいうと若い男は眼を剥いて「おう、兄さん。ヤに落着きはらってやがるがよ。氣イつけねえと、いまに吠面かくぜ。この女にやア、俺ってもンがついてンだ。よく覚えとけよ」と絡んできた。

「サ、明さん。踊りましょう。わけは踊りながら話すわ。さア、早く——」

風間の身分を知っている葉子は、まずいと思ったか、慌てて男を押すようにしてフロアへ出ていった。

なるほど。葉子のような女には、あんな男が一人や二人はあるものだ。とすると、そういう奴の一人が嫉妬から西降を殺ることだっでありうる。そうだ。葉子の男関係を洗う必要はある。

不意に背中をポンと叩かれて振り返ると、チャコールグレイの背広を着た峰村司が、ニヤニヤして立っていた。

「『禪刑事』もスミにおけないね。可愛い娘じゃアないか。これじゃ俺もウツカリできンよ」

「冗談でしょう。仕事ですよ」

「ハハハ、そうムキになるなよ。一寸擲擲ってみただけさ」

「しかし、驚いたナ。峰村さんが、こんなところに見れるとは……」

「どうして。俺はどんなところにだって現れるぜ」

「それはそうですけど——出ましようか？」

「いいのかい。あの娘——？」

「ええ、もう済みました。歩きながら話しましょう」

「そうだな……」

二

「で、あの女、葉子とかいったな。彼女からは何も得るところがなかったんだね」

一通り事件の概要から捜査の経過を聞くと

峰村は暫く黙っていた後でいった。

「ええ、まア……しかし、葉子の男関係を洗

えば何か出てくるかも知れません」

「ほう、西降は、禪を常用してたのか？」

「え？ ああ、それが一寸、不思議なんです。

遺品の中からは六尺はおろか越中禪も見つからないんですよ。下穿きの類は普通のパンツばかりです。独身ですから下着などは自分で洗濯していたらしいんですが、下宿先の家人は禪の干してあったのは一度も見ることがないといっています」

「さすがに『禪刑事』だ。禪のことはよく調べてあるじゃないか」

「イヤだな。部長と同じようなことをいわんでくださいよ」

「ところで、西田の下宿の部屋は、そのままになっているのか？」

「ええ」

「見たいな」

「部屋をですか？」

「うん。僕は部外者だが君と一緒に入れられるだろう？」

「ええ、かまいませんとも。じゃ、これからすぐにいきますか」

「ああ、頼むよ」

峰村は警察官でも私立探偵でもないが、その推理力は、ときどき小説的に過ぎることはあっても仲々に鋭く、参考というよりは捜査の直接の助けになることも少くなかった。

西降の部屋は、掃除をしないままに大分、埃が積っていたが、彼の性格を物語るように整然と片付いていた。

「なるほど。几帳面な性格だったらしいな」

「ええ。衣類なんかもキチンと整理してあるんです。男としては珍らしいですよネ」

「手紙の類は？」

「全然、ありません。読むとすぐ処分してたんでしょ」

「日記は？」

「ありませんでした。とにかく二、三回、調べたんですが、この部屋から何も手懸りを掴んでいません」

「畳の下は？」

「え？」

「畳の下を調べたかい？」

「いいえ。そこまでは——」

「ホラ、俺の立っているこの畳、端のほうがほんの少し上ってるだろう。怪しいと思わないかね？」

「じゃ、この下に何かあるとでも？」

「かも知れんじゃないか」

畳を上げてみると、果してその下には五、六冊の大学ノートが隠してあった。

「表紙には何も書いてないが、おそらく日記だろう。開けてみたまえ」

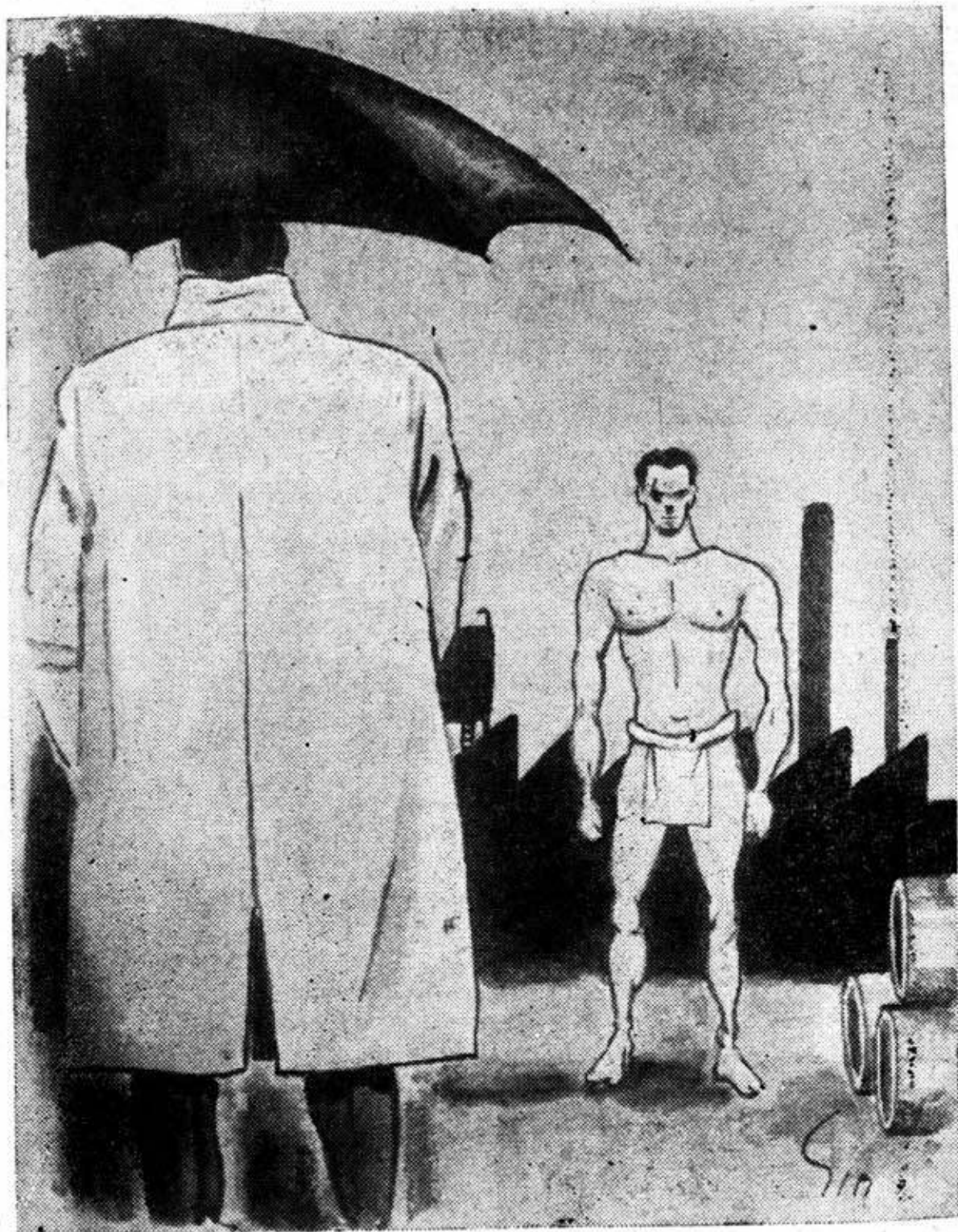
それは確かに日記帳だったが、毎日つける形式のものではなく、日付は、かなり、とびとびで、しかも奇妙なことには雨の日ばかりである。

『×月×日。雨。』

雨は魔物だ。俺はいつからそいつに憑かれ

てしまったのか。雨は恐ろしい。だが、それでいて気の狂いそうになるほど恋しいのだ。今夜も又、俺は自分を抑えることができなかった。何気ない振りで下宿を出ると、××寺の境内へ急いだ。歩く足もどかしく、顔が

カッ、カッと火照っている。人目さえなかったら往来で裸になってしまいたいくらいだ。駆けるように足早やに歩くと、密かに締めつけた六尺褌が快い緊縛感を伝えてくる。や々と寺に着いた。俺は撈り取るようにレインコ



ートを脱ぎ、服もシャツも脱いで褌一本になった。横なぐりの雨に叩かれながら地面の上をのたうち廻ると、俺の病気が俺を狂わせ、陶酔がすべてを忘れさせた（後略）』

『×月×日。曇後雨。

役所で仕事をしながら窓から空を眺めると一面に灰色の雲で覆われている。今夜は降るかも知れないと考えると、胸が騒いで仕事も手につかぬ。同僚も上司も俺がこんな男だとは夢にも知らない。俺はなんて呪われた男なのだろう。退出時刻頃から果して雨が降り出した。今夜は××神社にしよう（後略）』

『×月×日。風雨強し。

（前略）今夜は、まるで嵐だ。俺の奇妙の血はいつもより一層たぎり立ち、眼も口も開けていられない豪雨に翻弄されなが、泥にまみれて思わず絶叫してしまった（中略）雨は、やはり強いほどいい。台風シーズンがいまから待たれる』

日記というよりは手記といったほうがいいそのノートは、どの頁も目付と場所がちがう（尤も同じ場所が何回かでてきはした）だけで殆んど同じようなことが細かい字で克明に記されていた。

「大体、俺の想像した通りだった……」

「また異常性格者ですか。少々ウンザリしますナ」

風間刑事と峰村は顔を見合わせて、思わず溜息をついた。

「これで西降が雨の中で死んでいた理由も判りました。随分、人騒がせな話した。悦しみの度が過ぎて死んだというわけか。工事場の足場からでも落ちて頭を打った。単なる過失死ですナ」

「それも一つの可能性だね」

「というところ」

「つまり、こういう推理も成立つという意味さ。いいかね。もし、西降を殺そうと思っていた奴があったとする。そして偶然に彼の奇癖を知ると、それを利用して過失死に見せようと計画した」

「あ、そういえば西降の禪が、ひどく緩んでいた。抵抗して格闘したためかも知れませんか」

「こいつは面白くなってきた。後は彼に殺意を持っていた人間。そして彼の秘密を知っている人間を探すことだ」

「ええ。西降の交友関係、葉子の男関係を徹底的に洗ってみます」

風間は氣負ったように、いまにも駆けだし

そうにした。

「待ちたまえ。このノートを鑑識へ持っていくんだ。ここンとこに、かなり鮮明な指紋がついている。偶然、手が汚れていて不用意につけたものらしいが、潔癖な彼にしては少しおかしいと思わないかね。あるいは重要な手懸りになるかも知れンよ」

峰村の推測は当たっていて、ノートの指紋は西降のものではなかった。

西降の交友関係は白都を含めて四人。葉子の男関係はキャバレーに現れた杉本を含めて二人。事件が台風の前だった為に、六人共ハッキリしたアリバイはなかった。それで六人の指紋を採取し照合してみると、ノートの指紋は白都英男のものとピタリと一致した。しかし、それだけでは、白都を西降殺害の犯人とするキメ手とはならないのだ。

三

「弱りました。ノートの指紋が白都のものだと判っても、彼を黒だとして押していくのには無理があるんです。それに白都は偶然、西降の奇行を目撃しているんですから、日記を見たことも大して意味は無いんですよ。そのうえ困ったことには、あの日記が出てからは

捜査本部の見解が過失死のほうへ傾いてしまいました。このままいったら、結局そこへ落着いてしまいそうですよ」

風間刑事は何日ぶりかで峰村の書斎に入ると、うかめ表情で椅子に身を埋めずめた。

「——待てよ。白都が雨の中で西田を見たという日ね。日付をハッキリ調べてみたかい」
峰村は、考え深そうに伏せていた眼を上げていう。

「いいえ。五月頃だというだけです」

「じゃア至急、調べてみるんだな」

「はア」

「その他に俺も白都については考えていることがある。一つ積極的に協力しようじゃないか」

「お願いします」

「よし。すぐに写真を撮ろう」

「写真？」

「君がモデルだ。サア、裸になった」

「裸って、裸の写真を撮るんですか？」

「そうさ。俺はカメラの用意をする。その間に服を脱ぐんだ」

風間には、何が何だかサッパリ判らず、余りに唐突で面喰いながらも、いずれ峰村には成算があつたのだと思ひ、いわれるまま

に禪一本になった。

「寒くないかい——？」

「イエ、大丈夫です」

「いいな、いつ見ても君の禪姿は……」

そういつてジロジロ眺められると、風間刑事も、さすがに一すてれて、

「撮るなら早いとこしてくださいよ。ポーズは、どうすればいいんです？」

「ポーズは俺がつける。俺のいう通りにするんだぜ」

「判りました。でも、おてやわらかに願いますよ」

「ハハハハ。心配いらないよ」

それでも手を上げたり足を上げたり、はては四ん這いみたいな恰好までさせられて、風間は、すっかり大汗をかいてしまった。

「やア、どうもご苦労さま。顔は映ってないからな」

「わア、しかし、随分ひでえ写真だな。一体何にするんです？」

「まア見ていたまえ——」

その夜、ジャンバアの襟を立て鳥打を真深にかにかぶった峰村と風間刑事は、パチンコ屋の向いの喫茶店で白都の出て来るのを張っていた。

「ソラ、出て来ました。あの紺の背広の男がそうです。うまい具合に独りですよ」

「よし。じゃ君は、ここで待っていたまえ。すぐに戻って来る」

峰村は、暫く白都を尾行^つて人通りの無いところへ来ると、足を速めて近寄った。

「モシ、旦那……」

「何だ。俺か——？」

「ヘエ、いい写真があるんですね」

「いらぬいよ、どうせ女だろ。興味ないね」

「イエ、旦那、それが男なんですよ」

「男？ ドラ見せてみる」

白都は急に眼を輝かせると一枚だけ見て、すぐに、

「貰うよ。いくらだ？」

「ふたあけですからね、お安くしておきますよ」

受けとった写真を内ポケットへ入れるなりそそくさと立ち去る白都の後姿を見送って、峰村は帽子をあみだに上げてニッコリした。

三度目に取調室へ呼ばれた白都は、いつものように落着きはらっていた。

「度々ご足労をかけてすみません。実は、いまだ少し伺いたいことがありますね」

取調室には高梨部長刑事もいたが、訊問は主として風間刑事によって進められた。

「白都さん。あなたは前に、西降氏が深夜、工場裏の空地で雨の中にいたのを見たといいましたね」

「はア」

「それが何月何日だったか、憶えていますか？」

「さア、五月頃だったとしか……」

「よく思いだしてくださいよ。それは五月十日じゃありませんか？」

「その頃かも知れません。でも、ハッキリとは——」

「しかし、おかしいですね。あなたがそれほど記憶力の悪い方だとは思えませんが、その日はあなたの知人の家に不幸があつてお通夜の帰りだったといった筈ですよ」

「そうです。その通りです」

「だったら、日ぐらいいは憶えていそうなものですね」

「アッ、すみません。つい、ど忘れしていたんです」

「では、五月十一日に間違いありませんね」

「間違いありません」

「とすると、あなたの話は、どうもつじつま

「が合わなくなりますよ」

「ど、どういうわけでしょう」

「あなたはその晩、雨が降ってたといいました。ところが、五月十一日は晴天で雨など降っていないんです」

「じゃア、私の思い違いかも知れません。そういうわれてみると、雨は降ってなかったようです」

「そうになると、あなたの証言は益々ヘンになってきますな」

風間は相手を凝ッと見て、

「いいですか、西降氏に奇癖のあったのは事実ですが、ただし彼の奇行は雨の夜に限られていたんです。したがってあなたは、五月十一日の夜には、西降氏を見ることは絶対にできなかった筈ですよ」

「そ、それは……刑事さん、私が何をしたというんです——」

白都の額にはベツトリと脂汗が浮き、息遣いも荒くなってきた。

「まあまあ、落ち着いて——あなたが西降氏の秘密を知ったのは、現場を目撃したからではなくて、彼の日記を見たからだと訂正すればいいんです。ご覧なさい。このノートの指紋はあなたのものですよ」

「……………」

「白都さん。あなたは、西降氏の奇行を利用して彼を殺害することを思いついた。そしてそのチャンスは台風之夜に訪れたのです。あなたが西降氏の奇行についてワザワザ証言したのは、当局の捜査方針が他殺の線で行っていろのを知って、過失死と早く断定させようとして計った一種のトリックだったんだ。実際我々も西降氏の日記が発見されてからは、一時は過失死と決めそうになったからねえ」

「しかし、僕がどうして西降さんを殺す必要が——僕には動機がないじゃないですか」

「それも僕にいわせるのかね。君。この写真に見覚えがあるだろう。確かパチンコの帰り鳥打帽の男から買った筈だね。君はソドミアだ。西降さんを想う気持は、そりゃ綺麗なものだったろう。それに片思いだけに一層、独占欲は激しかったに違いない。西降さんの婚約が決ったことが、彼にとっても君にとっても不幸だったのだ——」

白都は不意に机に俯伏すと、声をあげて男泣きに泣きだした。

「まあ、よかった。事件も解決して——しかし、西降って男もとんだ災難だったナ」

峰村は自慢のコーヒーを入れながら、意味ありげにニヤニヤした。

「全く恐いですよ。知らない間に好かれていて、ウツカリ婚約したら殺されるんだから——」

「そうだ。誰が西降の二の舞いするか判らないものナ。ところで、君はどうなんだ？」

「え？何が——」

「ソロソロ、婚約するんじゃないのかい」

「まだまだ！ そんなこと考えたこともありませんよ」

「なら、当分は、まず安心だナ」

「イヤですよ。僕が婚約したら誰かに殺されるとでもいうみたいじゃないですか」

「ハッ、ハハハ。ま、要心にしくはないサ」

「峰村さんこそ、気をつけたほうがいいですよ」

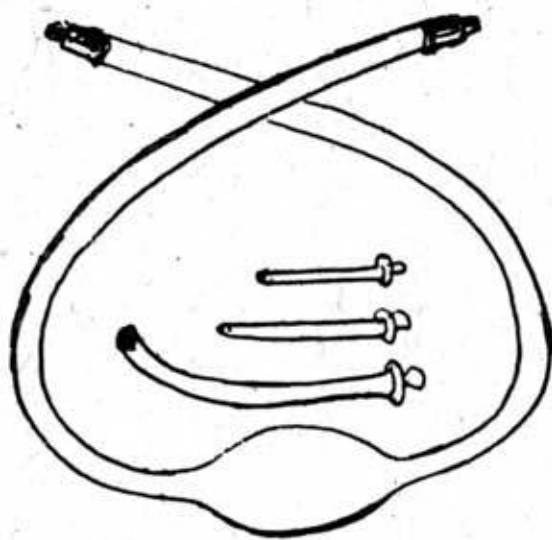
「こいつア、いい。君も仲々いうようになったじゃアないか。ええ？」

二人は声を合わせて哄笑した。

コーヒの甘い香を慕うように、窓のカーテンが微かに揺らいでいる。

(完)

異^い加^が苦^く研究



浣腸 ——— 現考学

栗 瀬 長

四、浣腸の心理的考察

——マゾを中心として——

A 施行者と被施行者

自分独りで浣腸を楽しむ場合は別として、子供の時以来、浣腸された羞恥に顔の赤らむ思いを経験した事も多いであろう。今、浣腸する人と、される人との関係を四つの場合に分けて考察してみたいと思う。

イ、男性が男性に浣腸する場合

例えば、男の医者が男の患者に、或は男同士のプレイとして。この場合は、浣腸される男性も、相手が同性である気安さから、大した羞恥を感じない。一般的に排便を我慢する苦痛が問題にされる程度である。

ロ、女性が女性に浣腸する場合

この場合は、女医、或は看護婦が女性の患

者に浣腸する時、よく病院にて出産の直前、陣痛を妨げない為に行われるのは周知の通りである。又、仲のよい女性同士がプレイする場合も考えられる。同性であることは前頃と同じで、後述する異性間程ではないが、浣腸される女性の羞恥心は相当の所まで高まる。

先ず第一に、男性より羞恥心の強い女性が、たとえ同性とはいえ、強制的に浣腸せられることは何にも増して耐え難いことであろう。

第二に、処置する方の立場は、同性に対して勝利に似たサディズム感を満足させる。それが、自分より美貌であるとか、経済的、或は身分的に上であるとか、年若いかいった場合には、特に浣腸の必要性を力説し、或はわざと処置に時間をかけるとか、必要以上に我慢させる時間を延ばす等して、サディズム感を満喫するであろうし、一方、浣腸される側では、丁度、反比例して羞恥に我が身を震わせることとなるのである。

ハ、女性が男性に浣腸する場合

女医、或は看護婦に浣腸された男性も少なくないと思う。或はプレイとして妻に浣腸してもらおう夫。こうした異性間の場合はどうであろう。

女性の側は、平素、何かと優位に立つ男性に、今こそ勝利の勝鬨をあげる時といっているいい過ぎであろうか。どうしても浣腸しなけ

ればいけないといわれて、しぶしぶ準備する男性。氷の如く冷静に、わざと機械的にしかもこれ見よがしに浣腸器を扱う白衣の女性。平常強がりばかりいいながら、僅が五〇CCグリセリン浣腸に、もう我慢が出来ないとばかり、許しを請うだらしないに、よくぞ女にといった勝利感を味うのではなからうか。

一方、処置される男性は、理論も腕力も、今や、か弱いこの女性の前に一切が無力になったことを、ひしひしと感ずるのである。昔の武士はいうに及ばず、男性は女性の前に弱みを見せることを極度に恥とする。しかるに僅かの薬液で、大の男が苦痛に身をゆがめ、脂汗を流すことは、あまりにも無情の風景ではなからうか。男性が、これ程の羞恥を感ずるのも、この時以外にはないといっても過言ではないと思う。

二、男性が女性に浣腸する場合

医者が女の患者に、夫が妻に、或は権力者が、被支配者にお仕置として等等、あまりにも数多くの場合が想定され、又、この場合ほど処置する男性も処置をうける女性も、複雑なる感情を抱く一幅の絵画が出来上る場合はないのであろう。

考えてもみよ、屠所にひかれる仔羊の如く真白いシートの上に横たわるか弱い女性は既に拒否する力も尽き果てたのか、或いは症状

の前に初めから観念の眼を閉じたのか、はた又、愛情をこめた静かな説得に羞恥を秘めて顔を覆いつつ横たわったのか。せめてもと羞恥を軽減すべく両手で顔を覆っても甲斐なき事である。而も顔を覆うべき両手すら場合によつては緊縛されていたとしたらどうであろう。身も世もないとはこうした状態ではなからうか。

一方、煙草でもくわえながら「さあ、浣腸するぞ」と宣言すれば、その度に、女性は痙攣するように体を固くする。わざと時間をかけながら、ゆっくり浣腸器の用意する男性は手さえ震えるのを感じるのであろう。こうした氣持を味わった経験のある方も少なくないのではなからうか。

さて、グリセリン溶液が、或は大量の石鹼液が施され、男性は呻く女性を見下しながら長時間の我慢を宣言する。無理な男性の注文をも全身の力を振りしぼって我慢に我慢を重ねる。この時には既に羞恥を忘れ、ただ時の経過を、そして側で見守る男性の許しが出るの祈るばかりである。サディズムを満喫する男性も、あまりの苦痛にもだえる女性に、ふと憐憫の情を感じて、起き上ることを許す時、ホッとした安堵感に満たされ、一方、女性に羞恥が苦痛を経て今や喜びに転化され、我が身にこれ程の苦痛を与えた男性を何か崇高な者にさえ感じてくる瞬間でもあろうと思

われる。

B 浣腸の姿勢

浣腸処置という事は前述の如く強烈な羞恥心をとまなうのであるが、これはその時の姿勢によつて、或は軽減され或は倍加されるものである。今、浣腸時の姿勢について少し考察してみたいと思う。

イ、横臥—第一姿勢

最も一般的な施薬姿勢は横臥である。この場合は何ら人為的力を加えることもなく、最も楽な姿勢であり、処置する人、及び浣腸器を直視する事がなく、最も羞恥の少ない姿勢である。従つて、処置する側にとつては最も平凡な姿勢といわなければならず、医療としては必ずこの形であるが、プレイとしては物足りない訳である。

ロ、伏臥—第二姿勢

次に伏臥の場合は、顔をベッドに押し付け得るので、羞恥は多分に軽減される。しかし横臥に比し変形的である事が、やや羞恥を増さしめる。

ハ、仰臥—第三姿勢

即ち仰臥して両足を揃えて上にあげた姿勢である。この場合は両足をあげるのに或程度

の力を必要とし、而も長時間足を真上にあげているのは可成りの努力を必要とするので、場合によっては、紐でベッドの頭の部分の手すりとか、柱とかに固定する方法もある。プレイとしてなら、次の緊縛の項でもふれるが、両足首を縛った紐を、後頭部、或は後頸に廻して、蝦状に縛り上げるのも考えられよう。

何れにせよ、足をあげた姿勢は処置する者の動作が直視され、殊にイルリガートルの場合は、液の減る様子が、はつきりと分るので被処置の実感が強い。

二、浣腸時の緊縛

前項でも一寸ふれたが、お仕置の時は勿論、プレイとして緊縛が、どれほど効果を強める事であろうか。というのは、両手で顔を覆うことによって羞恥が軽減するのを防ぐことと、浣腸後、我慢させる場合、両手が自由だと、どうしても早く起き上ろうとする故である。

次に両足も同様で、やはり起き上るのを防ぐのと、第三仰臥姿勢の通り、長時間、足をあげて置く為である。

体全体も、ベッドに固定しておく事によって、充分、希望時間、我慢させ得るし、緊縛されているという自覚が效力をいや増しにするからである。

最後に猿轡は長時間、我慢させる場合には

哀願を避ける為である。又、施薬される者にあつては、猿轡はそれだけで、感覚的苦痛を感ずるに充分である。

これを要するにプレイとしての場合、緊縛あつて、浣腸の效力はいや増すといつてよいと思う。

五 浣腸の衛生に就て

浣腸につき、あらゆる角度から考察し来つたが、特に衛生に注意することは、マニアとしてのエチケットであり義務でなければならぬ。今、順を送つて一応、衛生のあり方について考えてみたいと思う。

先ず浣腸器であるが、使用前というよりも次回に備えて使用後、滅菌消毒するのが望ましい。消毒は煮沸消毒が最も効果があるが、ポリエチレン製品は往々にして変形するし、ガラスは膨張係数の理により破損し易いのでクレゾール石鹼液か、逆性石鹼によりよく水洗するのがよい。

イルリガートル、エネマシリンジ、スポイト等、ゴム部は、グリセリン、石鹼液、食塩水等が付着していると、早期腐蝕の原因となるから、よく水洗いして、水分もなるべく取って置くのが望ましい。

勿論、浣腸器の破損、特に嘴管の破損は人体に傷を与えるので、充分注意する必要がある。既に前述したが、石鹼液、食塩水の特に濃いもの、温度の五十度以上のものなどは、

炎症を起させる恐れがあるので避けねばならない。又、イルリガートル、エネマシリンジによる大量高圧浣腸では、三、〇〇〇CC以上は普通では避けた方がよい。

六 浣腸の道徳的考察

医療としての浣腸に問題はないが、プレイとしての浣腸は、孤独な悪の楽しみなのであるが一定の節度を保ったプレイであり、そして健全な遊戯でなければならぬと思う。勿論、現在の道徳律を以てしては浣腸が衆目の面前で公然と行われる訳はないのである。しかるが故に、人目をしのんでプレイすることと何等ひけ目を感じる必要はないと思う。

ただ最後に、私は今一度プレイとしての節度を守っているということを、重ねて強調したい。如何なる娯楽であろうとも、過度になつた場合、勉強を、勤務を害うものであることは言を要しない。浣腸プレイも亦同様である。前述した如く、衛生に対する不注意が由々しき大事をひき起す事、便秘症の人は度重なるプレイによって更に便秘の度を強める。浣腸による習慣性等は厳に戒むべきである。健全なる精神は健全なる身体に宿るとまではいわなくても、我々浣腸プレイ愛好者は、あくまでも健全な身体的条件の上に立って、空想の世界を發展せしめつつ、浣腸の苦しみを満喫したいものである。

(完)

連載告白小説

或る倒錯生活

(最終回)

西村 憲 一

(庭の夕陽)

飛び廻る犬達を相手に庭を掃除し朝顔の手入れをして水を打つと、草木の緑は忽ち甦って快く感じられた。家具や廊下の拭き掃除をおえ、風呂に入って汗を流した。手足の先まで凝脂が乗って美しい肌であった。

湯化粧に白粉を刷いて浴衣に寛ぐと、冷蔵庫の中の残り物で夕餉を済ませた。晒を切つて肌襦袢を縫っている時、思いがけず常が帰って来た。今朝出た許りで一、二日は本宅へ帰るものと思いい何の支度もしていないり、えで

あった。

「何もありませんのよ。お電話して下れば宜しかったのに」

着替えを手伝い乍ら、怨じ顔に言えば「好いよ、お茶漬でもかきこんで、彼方へ帰るつもりでいたのだが、面白くないことがあって、お前の所へ帰りたくなつたのさ」

「あら、何かありましたの？」

「なに、会社のことさ。心配しなくて好いよ」

「だって……」

「お風呂へ入るから、ビールでも用意して置

いて呉れ。摘み物は何でも好い」

「はい」

浴衣と肌着を脱衣場へ置き、居間へ酒の仕度をして、鏡の前で化粧を直した。紗の襦袢に透綾の小袖を重ね、白博多の帯を手早く締めると、袖を胸に挟み前掛をして台所へ行った。陽は未だ高く硝子窓を透して陽ざしの明るい調理場であった。便利よく諸器具が置かれ、戸棚は良く整理されて彼女の性質が現れていた。瓦斯に火を点じ鍋をのせた。

湯から上った常は、浴衣を着て居間の扇風器を廻していたが、立って縁に出た。

広い庭は眼に涼しく青葉が気持良かった。

木々の緑を渡る夕風は湯上りの肌を快くなぶ
り泉水が滾々と流れて居るのである。

揚物でもして居るのか、食用油の焼ける匂
いが鼻について食欲をそそるのであった。

彼にとり、この邸に居る時が最も落ち着い
た気分になれ幸福の時間であった。事業から
も家族からも開放されて、世間の一切から我
を忘れる事が出来るのである。賢い、えは、
常の一顰一笑に其の意を覚り、縦の物を横に
もさせず、その癖、出過ぎる様な事は決して
なかった。

温い愛情と伶俐さは、常の、こよなき安息
の場であった。

「お待ち遠さま。何していらっしゃるの？」
振り返った常の眼の前に、あでやかかなり、え
の顔があった。

「天婦羅かい？」

「ええ、お厭？」

食卓には、はものフライとピーマンの天婦
羅が、トマトとレタスに彩られ、チーズと共
に並べられていた。水玉を浮べたビールを抜
いて注ぐ腕に、襦袢の紅が絡んで艶めいた。

「ねえ、教えて……」

「何を？」

「何がありましたの？」

「何もないよ」

「嘘、さっき仰有ったわ、面白くないから此
方へ帰ったって」

「ああ、其の事か。何時か、お前に言った事
があるだろう。中央家具の平松って専務」

「ええ」

彼女は胸を、ときめかせた。

「昼前から擱まってねえ、泣事を聞かされて
弱ってしまった。良く事情を話して断ろうと
したんだが、どうしても放さないんだよ。何
とか考えて呉れと言ってね」
り、えと同じ時に、同じ問題で常も苦勞して
いたのだ。

「まあ、大変でしたわね。だけど其のお方、
他へは仰有る所ございませんの？」

「どこだって今時、そうたやすく出来るもの
じゃないよ。それに又、七月は賞与月だし
ね」

「そうですわね」

「月末までに後金を払わねば、今まで渡した
金が手金流れになるって蒼くなってるね」

「まあ」

すべて今日、知っている事であったが、そ
んな事は顔にも見せなかった。

「銀行の万の手順が狂ったらしいんだ。何と
かしてやりたいけれど、此方にも方法はない
よ。困った事さね」

「お明けになって」

彼女は二本目を抜いた。

「この話は、もうお止し。折角、忘れようと
思ってお前の処へ帰ったんだ」

「済みません」

自分の方が成功した嬉しさに常の心を気付
かずしていた事は彼女は「ハッ」とした。

「御免なさい、お仕事に口を出したりして」

「まあ好いよ。お前も飲んだら」

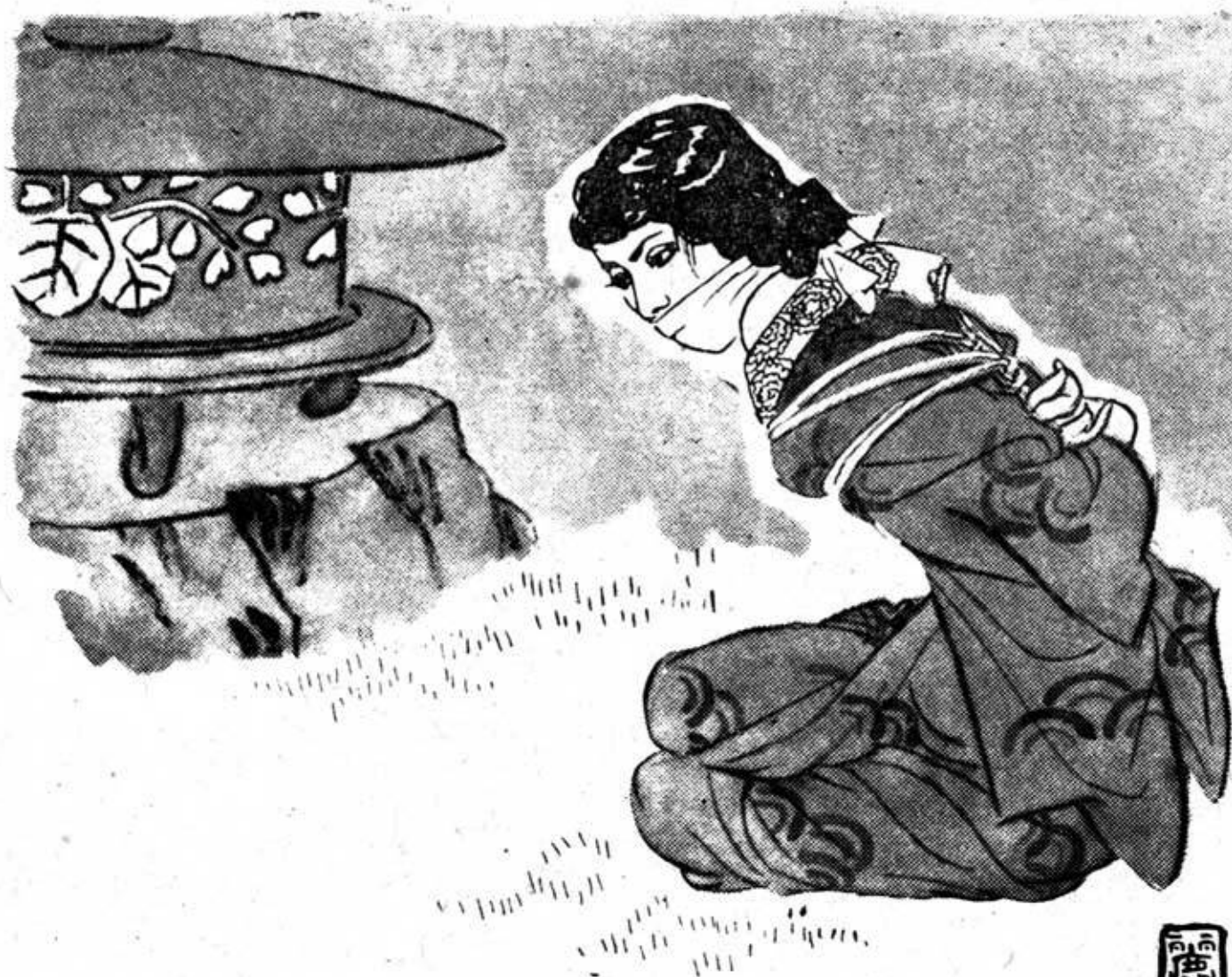
「ええ、少し頂かせて」

常には済まなかったが、その事は自分の手
で今日解決したのである。月曜日になれば、
銀行から報らせがある筈で、平松も喜び常も
吃驚するであろう。自分の事は判らなくても
常さえ飲んで呉れば、それで良いのだ。

コップへ注いで貰い乍ら、ほのぼの何ん
となく嬉しかった。そう思った思いは姿体に現
れて、自分では気付かなかったが敏感な常の
眼には映ったらしい。

「お前こそ、どうしたんだ？」

問われて、えは、ハツとした。気取られて
はならない事である。



「馬鹿に嬉しそうじゃないか？」

「嬉しいわ。二、三日しなければいらっしやらないと思った旦那様が、今日もお帰りになつたのですもの」

「上手な嬉しがらせを言うものじゃない」

「あら、嬉しがらせだなんて、いやよ」

「ようし、嬉しがらせか、嬉しがらせでないか、今に白状させてやるから」

口で笑い乍ら睨みつける常に

「ええ、たと白状させて御覧遊ばせ」

駄一杯に媚を浮かべ嬌然と笑う美しさ。

二本目のビールを空にして立上り廊下を手に洗に向うのであった。彼を待つ間に食卓の汚

れた皿と空の瓶を台所に運んだ。蔑戸を閉めて居間へ帰れば、先に戻って居た常は矢庭に、ええを引寄せた。帯に手を掛けて解き放す透綾の着物を脱がせてしまった。

「あれ」

驚く両手を後に廻し、いつ持っていたのか紐を取って白い手首を縛り合わせた。紗の襦袢の胸へ廻して二巻き、三巻き。

「いや、いや、まだ明るいですもの」

逃れようとする彼女の体を膝で押え後で縛った紐の余りを腋の下を通して胸の紐に掛け再び腋を通して背で引絞ると、胸と二の腕がくびれて痛々しく締った。長襦袢の裾の乱れるのを合わせようとして膝を起せば、尚更ずれて行った。背の結び目を掴んで引きされ、縁から庭へつれ出された。跣足のまま庭を曳かれて庭石の側の芝生に押据えられ、楓の太枝に縄尻を繋がれたのであった。薄物を貫いて芝生が肌をさした。

「いや、かんにんして……」

振り仰ぐ、ええを尻目に座敷へ上り部屋から二枚折りの屏風を持出して一間余り離して立てた。鏡の屏風であった。落ちんとする夕陽に照らされて朱の長襦袢は燃え立つ如く、あたりの緑の中に絢爛と無残な姿を写し出すので

あった。

「かんにんして、恥かしいわ」

鏡から眼をそらし縁に上ろうとする常に縋る様に呼びかけたが、彼は返事もせず中へ入りビールを抜くのである。

「ねえ、お願い。上へあげて」

立上り、家の方へ行こうとすれば、楓に繫いだ縄は其れを許さず、ぴーんと張って肌に締るのである。

哀願するりえを取り合おうともせず、笑い乍ら見下してコップを空けるのであった。

「そちらへ行かせて頂戴。ねえ、許して頂戴」

自分でも縄から逃れようとして身を揉み、手首を動かして見るのであるが、結び目は指に届かず、ゆるもうともしないのだ。

其時、突然、植込みや木の枝がざわめいて風が起り、四辺が薄暗くなった。いつ曇ったのか、空は雲に覆われ、其の雲間を夕陽が金の線となって矢の如く走っていたが、其れも見見る消えて行くのである。彼女は心細くなり

「お庭は許して頂戴、其方へ行かせて。ねえ、恐いわ」

真実に哀願したのである。

「うるさいね」

と言つて立上った彼は、縁を降りて近寄つて来た。上へ揚げて貰えると思つて眼を輝かせるりえの傍に突っ立ち、じっと見下すのであったが、縄を解こうとはしなかった。

白い衿足が美しい曲線を書いて、背に流れた下に重ねて縛り合わせた手首が痛々しかった。眸を空に揚げて「降るかな」と云い乍らりえの後へ廻って行つた。解いて呉れるものと思つて膝を起した時、彼は其の腰を突き飛ばしたのである。

「あれっ！」

前にのめる其の体を、楓に繫いだ縄が引戻したので、後に倒れ、よろめいた。彼は其の軀を抱き止めると、懷から出した丸めたガゼをりえの口に押し込んだ。吃驚して眼を瞪る時、晒木綿で猿轡をして後頭部で、しっかりと結んだのである。

彼の足へ取纏る様に肩を寄せ仰ぎ見乍ら、いやいやをする彼女の眼へ、

「雨が降るかも知れないよ」

と言いつつ肩を抑えて楓の根本へ座らせたのであった。

其のまま縁へ上り、柱に付けたスイッチを入れると、石燈籠の火屋に火が入り、所々に

目立たぬ様に取り付けた照明が一度に点いて暮れかけた庭を照らし出すと共に明るい光を全身に受け猿轡され縄縛りされた悲惨な姿が華やかな色彩となって浮き上つたのである。常は座に返り、ビールを止めて酒を温めた。

引据えられた芝生の上に裾を乱して崩れた儘、観念の眼を閉じたのであるが、肌を噛む縄の呵責は堪え難く声にならぬ呻きを上げ身て悶える様を眺め乍ら盃を運ぶのである。酒が済まねば解いて呉れないのであろう。諦めはしたものの、手首に喰入る縄の痛みは堪え難く、二の腕は焼火箸を当てられる様であった。緩めるか、ずらすかしやうと思つて身を揉み軀をよじつても見たが、緩みも動きもせず指で結び目を捜しても触れもしなかった。

其れどころか一層喰入って、腋の下を通した縄は直接、肌を咬んで堪え得なかったのである。結び目を捜そうと背を鏡に写し顔を巡らせて見れば、括り合わせた手首の下になつて左右、何れの指にも届き得ぬ所にあるのだ。

日は既に暮れて電灯の光は木々の明暗を大きく形造つて居た。

(雨の呵責)

縄の苦痛を逃れんとして様々に身を揉み悶える様子を見下し乍ら、其の哀婉の姿に見惚れる常であった。可愛さと共に、いい知れぬ嗜虐感に全身の血を酔わせ、盃の数を重ねて行った。

「痛いかな」

解く心もなく縁に立って声を掛ければ、返事も出来ず、こっくりと肯いて一杯の哀願を眼に泛べるりえであった。

「嬉しいなんて嘘だろう」

常の一つの技巧であり其の揶揄とは知りつつも、いやいやと首を振るりえの可憐さ。

「いいよ。白状しないのだね」

踵を返す後姿を見送り乍ら、肩を幹にもたせかけて眼を閉じた。風が一しきり樹々の梢を渡り葉を鳴らせて去った。広い庭ながら手入れをして未だ間がなく、生来の虫嫌いな為に平素もよく殺虫剤を使っていた関係で、蚊のいない事がせめてもの倖であった。と云っても、一匹もいないというのではなく、今も二、三匹がしつこく付き纏って苦しめているのである。

払うことも逐うことも出来ず、自由を奪わ

れた身には逃げることも出来なかった。七時は既に過ぎ、ラジオは常盤津の太棹の音を流していたが、其れも止んで八時を報じた。楓の幹にもたれた儘、聞くともしに聞く耳に新内の哀調が響いて外題は皮肉にも『明鳥』であった。

「梅の古木に括りつけー」ということは、今のりえの姿であった。おかやの打擲の答こそ無く降り積む雲こそなかったが、浦里の哀しみは彼女の其の儘を語る如く哀切さは身に泌みるのであった。段々加わる苦痛に、膝を起し楓の根元に座り直したが、呵責より逃れる術はなく、再び背をもたせて眼を閉じた。

思い出した様に襲う疼痛に眉をひそめ息を凝らして堪えるうち長い時間も漸く九時になってニュースが伝えられていた。立上った常はラジオのスイッチを切り縁の葭戸と部屋の戸を閉めたのである。猿轡の下で息をのみ驚いて一しきり身を揉んだが、甲斐もなく閉ざされ葭戸に恨みの眼を上げるだけであった。葭戸とは言え二枚隔てては見ることは出来ず唯、灯の点けられて居ることを知る許りであった。

手は両手首共、痺れかけて時々走る痛さは殊に身に泌みて、肩は抜ける様な疼きを起し

ていた。何時になったら解いて呉れるのか。此のまま寝てしまうのではなからうか。いても立ってもおられぬ様な焦燥に駆られるのであったが、呼ぶことも問うことも逃れる事も出来なかった。

無駄とは知りつつ様々に軀を動かし縄から逃れようとしたが、悶えれば悶えるほど縄は深く喰込んで肌を噛むだけであった。絶望して空を仰げば暗澹として星一つ見えず、温気を含んだ風が生温かく吹いて去るのである。木立の影が黒々と周囲を取り巻いて怪しく、時々夜鳥の音に肌がおびえて栗立った。恐ろしく心細い中に、茶の間の灯りが消されていないことが、せめてもの頼みであったが、常はどうしているのか物音は全くしないのである。苦痛に苛なまれ、恐怖に戦きつつ十時が過ぎた。十一時が鳴っても庭に放置された儘であった。感覚は全く麻痺して手の痛みはなかったが、恐怖は一層増していた。芝生にも膝にも夜露が降りて電燈の光にきらめいているのである。

立てかけられた鏡に写る自分の無惨な姿が悲しくも哀れに傷ましく、そして美しかった。故なく縛られ虐げられ夜の庭に折檻される我姿を見て、悲しくこそ思え、反抗も怒りも

無かった。常を主人と仰ぎ、彼に依って知った被虐の欲びは、心まで女性化して居る、女の女としての哀歎であり、一種の昇華でもあった。

無残絵の如き我姿を美しく思い常の意志に委ねられた此の身の束縛の果に起る哀恋の嵐を想う時、現在の苦痛も忘れて唯、如何にして女らしく其の期待に答えるかを考えるばかりであった。夜の更けるに従い、気温は下り夜露と共に肌は冷えて、大きく抜いた衣紋の背が殊に寒く、痺れた腕は氷の様な感じであった。

常は寝てしまったのか。幾ら思い思ふも、彼の意志が変らぬ限り、縄からも庭からも解放されることはあるまい。半ば諦めて楓の幹にもたれた儘、いつとはなしにまどろんでいた。

一日の疲れと宵からの責苦に苦痛も忘れて居睡るのである。不自然な体位は重心を失った。吃驚して眼醒め横倒れしたことに気付いて起き上ろうとしたが、身を支える手は背に縛られて動かず、とみには起上ることも出来ないのである。膝を引き肩で支えて漸く起きた。露わな脛に夜露を受けても裾を直す可くもなかった。

茶の間の電燈は明るいのであるが、常の気配は感じられないのである。

暫くすると、時計が一時を打った。

「嗚呼」

声にならない悲しみと共に常の意志をはっきりと知ったのである。夜の明けるまで許されないことを。痺を通り越したのか、手と肩に再び激痛を覚えて彼女は身悶えした。

背を鏡に写し、何とかして結び目を握もうとしたが両手共、指は知覚を失って動こうともしない。胸に廻された縄を外そうとして幹にこすり付けたが、其れも無駄であった。腋の下を通る縄が許さないのである。縄尻は頭の上の太枝に結ばれて丈も届かず、一本の縄は完全に其の自由を奪っているのである。



打ちも吊されもしない代りに又、此れ程、残酷な折檻があるであらうか。自由なのは足だけであつたが、其れも僅か楓の下の数歩に過ぎなかつた。立ち上つて裾を合わせて座り幹にもたれて眼を閉じた。肌を咬む縄の責苦に身を任せて。

が、其の中、又も睡気に誘れて、うつうつとする間もなく縄目の痛さに呼び起されるのである。醒めては睡り、睡つては醒めて行つた。幾度目かの居睡りから起されたのは三時過ぎで四時近い頃であつた。其れは彼女として恐怖に身を震わせたのである。宵からの曇り空は遂に雨となつて最も惨酷な彼女への折檻となつた。襟筋を打つ雫に呼び起され、其れが雨と知つて顔色を変えたけれど方法は無く、容赦のない水の筈に打ち裾えられて行つたのであつた。

真暗の闇の空から降る雨を逃れようとして立上り、歩き出しては見たが縄の長さは五尺ほどしかなく、其の範囲を逃げ廻るだけであつた。肩が濡れ、裾が濡れ、衿首から流れる雨足に身を縮めていたが、初めの間は傘がわりの枝や葉も、終には、かえつて大粒の雫を降らすのであつた。

しとどに濡れてまつわり付く裾は、袂と共に

に一層、色さえて無惨にも又、華やかであつた。

観念して膝をつけば、方々にある電燈に照らされて、否も応もなく鏡に写し出され無残な我が姿を見せられるのである。

時計が四時を報じた。

風は止んでいたが雨は益々激しくなつて、いつ止むとも知れない降り様であつた。彼女を縛つた縄は系綱である為に雨を含んでぐんぐん縮み、犇々と肌を締め初めたのである。手首から二の腕の感覚は既に失われていたが締め上げる苦痛は改めて柔肌を責め苛なみ、底知れぬ恐怖を与えるのであつた。

雨足を見ては起ち、苦痛に堪えかねては座り、していたが所詮、其の何れをも逃れ得ず又、堪えかねて、びしよ濡れの芝生に膝をつくのみである。濡れるに任せた其の頬を、襟を、背を、流れる如く伝わつて長襦袢を通し伊達巻を浸し、腰巻迄ずぶ濡れに濡れて行き縄は愈々強く締め鋼鉄の固さを以つて彼女の肌を破るのではないかと思われた。

十余時間の緊縛と夜露とに虐げられた上、又この雨に思う様、叩かれて骨の髄まで冷え切つて、今は齒の根も合わず震え戦くのである。り、えは意識を失うのではないかと思つた。

顔を上げれば傍の鏡の中に、灰白く明け初む暁の庭に縛られて木に繋がれたびしよ濡れの我身の桎梏の姿を見るのである。

悶えに悶えて縄から逃れようとしたのであろう。衿は肩から脱げて白い肌を露わし裾は乱れて太腿を見せていた。惨憺さは此の上も無かつた。蒼白な顔の猿轡へかけて乱れた黒髪が張り着いており、眼は、うるんで悲しくも綺麗であつた。

胸へかけられた三巻きの縛しめは、肌と襦袢に喰い込んで一本しか見えぬ、双の手首には衣紋の下に伊達巻の上で確りと括り合はれて、縄は柔かい手首の肉に喰入つて少しも緩んではいけないのである。縄尻は両端を頭上の枝に結び付けられて我手で解くこと等、夢想も出来ぬことを、今更に朝の雨雲を通した白日の下で見せられ、一夜中の苦勞の無駄であつたことを思い報らされたのであつた。

可哀そうに。我乍ら想つた時、不意に湧然と自虐の歓喜が体の底に走るのを覚え、冷え切つた体内に熱い血潮が突上るのを感じたのである。夜は白々と明け放れた。

小降りになり、薄くなつた雨雲を透して明るくあけた朝の縁の中に花を踏みにじつた様な其の姿は、酷たらしくもあつたが、又いい

知れぬ美しさでもあった。自分の其の姿を見ているうちに一晩中、続いている体の苦しみと、一本の縄に奪われ、しいたげられた自分の意志とが哀れにも、いとほしくなった。——もともと——苦しめ——という気持であった。不自由な軀で立ち上ると身を揺って、はり付いた着衣を離し、裾を合せて座り直した。木の幹に依りかかって眼を閉じて我が心の動きに思いを委ねていると、縁の戸が開き常が下りて来る様子であった。

「御免——可哀そうに」

素晴らしい乍ら雨の中を走り寄る気配に、飛び上る様な嬉しさを感じたのであったが、眼を開こうとはしなかった。けれど風の幹にもたれたまま全身の力が抜けてしまうのを知ったのである。縛めから解放される。雨からも逃れられる。肌の苦痛も治る。と云う歎びと共に一晩中、言語に絶する折檻を加えた彼に拗ねる心と共に、もともと——虐げられたい矛盾とが渦巻いて、平素の素直な彼女に帰ることが出来なかったのであった。

「りえ！」

近寄っても気付かない様子に驚いて肩を掴んで揺るのである。幹にもたれた頭が、がっくりと前に倒れ、髪が崩れて滴と共に落ちる

のを見ると、吃驚して抱き起し急いで縄を解こうとしたが、雨に締った結び目は、びくともしなかった。

「りえ！りえ！りえさん！」

猿轡を押し下げて口からガーゼを取り出して呼ぶのである。

蒼い顔に赤い口紅が印象的であった。

彼女は漸く眼を開いて見せた。

「りえ！、気が付いたか！御免よ、ね、御免よ」

常は慌てて自分の浴衣が濡れるのも構わず彼女の冷え切った体を抱き締めるのだった。

「旦那様、かんにんして……」

細い小さな声であったが、突上げて来る感情に我を忘れていた。何度も縄を解こうとしたが遂に解けないことを知ると、

「一寸待て！庖丁、取って来る」

と言って雨の中を駆け出すのであった。

彼女も一度に押し寄せる疲労と激痛とに、雨に濡れた芝生の上に倒れてしまった。急いで引返した常は庖丁を持って木に結んだ縄を切り離すと、ええを抱き上げて中に連れ込んだ脱衣場の板敷で縛めを取ると、「大丈夫か？りえ！」と言いつつ、伊達巻を解いて行った。「はい……」縄は解かれたが両手共、感覚を失

ってしまったっており、自分の体を支えようとしても萎えてしまった手は其れも出来ず、力が入らないのであった。昨夜の儘の湯であったが、瓦斯栓を全開して浴槽にりえを浸すと、縄の跡を揉んでやるのであった。

「酒が過ぎてね、寝てしまったのだよ。今まで放って置く気じゃなかった。御免よ。痛かっただろうね」

不意に堰を切った様に涙が込み上げて常の肩へ泣き伏したのであった。悲しみの涙ではなく、感情の昂りであったのだ。

「酷いわ、酷いわ」

常の手に全身を委ね乍ら、泣きじやくるのであった。

感覚が蘇り縄目の跡に触られる度に悲鳴を挙げたが、其れも段々治って行った。

「済みません、もう大丈夫です」

「いいよ、ゆっくりしておいで、私も、もう一睡りするから」

雨にも崩れなかった化粧を落し全身を洗い終えて立出でた彼女の肌は、真珠を湛えた如く若さに溢れ元氣を取戻して居た。雨は尚止まず、しとくと降り続いて居た。

(終り)



白い蟬
続篇

三糸卓史

作画



と書いて持って行った。
数日たった或る日の放課後、一郎は藤井先生に呼ばれて教員室に行った。

先生は答案用紙に採点していたペンを擱いて

「鈴木、お前位の成績で中学校へ行かないというのは全く惜しい。色々家の事情もあるだろうが、もう一度帰って両親によく頼んで見なさい」

と言って、眼鏡越しに、じっと彼の眼を見た。優しい先生の小さい目が、何だか眩しいようで、一郎は、そっと眼を伏せた。

「はい、……でも」

「私だって中学校へ行きたい。だが、人力車夫の家へ寄食しているような生活で、どうして中学校などへ行けよう。そう思いつつ彼は、じっと下唇を噛んだ。

「一度お父さんやお母さんに逢って、僕からもよく頼んであげよう……だから、君は今までより以上にうんと勉強をしなければいけないよ」

書き入れなさい」と云った。

一郎は父が人力車夫であり、母も仕立物なでして、とても中学校などへ行ける生活環境でない事を知っていたので、その用紙は父にも母にも見せないで、「進学希望なし」

夏の休みが終って二学期になった或る日、一郎の学級で進学調査があった。

受持の藤井先生は、ガリ版刷りの調査用紙を皆の机の上に配ると

「この進学希望の有無、希望学校名、とある処は、お父さんやお母さんとよく相談して

と云った。隣の席にいた体操の上手な山下先生も・

「おい鈴木、元気を出せよ。少年老い易く学成り難しだ。偉い人はみんな小さい時に苦勞をしているんだぜ」

と励まして呉れた。一郎は

「はい、有難うございます」

と云って帰って来たが、どうしてもその事を母に話す気持になれなかった。

彼が毎期、配達をしている牛乳店の息子、太吉は一郎より成績は良くなかったが、何とかして中学校へ入学しようとして頑張っていた。そして勉強の連れに一郎を誘うので、勢い太吉の家へ泊る事が多くなった。

だが、母は一郎が太吉の家へ泊る事をあまり好まないようであった。

「これから太吉君とこへ行ってもいい？」夕食の弁当を人力車の帳場に在る父の処へ持って行ってから、そう母に言う

「今夜は帰って来るの」

と、心もとなげに訊ねるのであった。

「ううん、地理の勉強が少し遅れてるんで、やっぱり泊らんと出来んかも知れん」

「勉強もいいけど、何とか区切りがついたら帰っておいでよ」

「うん、でも先刻、帳場で、お父さんに今夜は泊る云うといいたけん」

一郎が何気なくそう云うと、母は、ふッと悲しい顔をした。

「そうかえ、それじゃア明日の朝も帰って来ないんだねえ」

と、淋しそうに云って箸を置いて立ち上ると、押入れから洗い晒した浴衣を出して来て「夜が冷えるから、寝る時には、これを着なさいよ」

と云って風呂敷に包んで呉れた。

——いとお母さん、悲しいお母さん。

今夜も又、父に責められるんだろう——

彼は淋しそうな母の顔を見ないようにして家を出た。

○

夜が更けて、太吉の家の人も皆、寝静まったようであった。太吉の母が

「勉強もええけん、いい加減の時間には寝なさいよ」

と、盆に梨を盛ったのを持って来てから、早や一時間以上も経っていた。一郎と太吉が向い合っている机の上の吊ランプに、窓から黄金虫が飛んで来て、パタンとノートの上に落ちた。

「わい、疲れたけん、ちよっと頭を冷やして来る」

一郎がそう云って、教科書を伏せて立ち上ると、太吉も

「川端へでも行って見ようや」

と云って、丈の短かい紺の着物の裾を合わせて裏木戸を出た。

暗い小路の曲り角の街灯に、やもりが一匹斜下に向いてへばりついていた。蒼白い月の光が、小路の片側に、くっきりと屋並の黒い影を投げかけている。

小路を抜けて川端へ出ると、一郎と太吉はどちらからともなく長い堤の中程に腰を下した。少し離れた下手に懸っている板橋が、かすんだ背景の中にくっきりと浮き出して、墨絵のように静まり返っている。

サラ、サラ、と涸れがれの川を瀬切る水の音が、霞んだ夜の空気を透して聞えていた。

「おい、太吉やん。ちよっと見ろや」

一郎が急に太吉の肩を指先で突つついた。橋の向うから、二人の人影が纏れ合うようにして渡って来るのが見えた。

「あの女、酒に酔うとるんやな。ふらふらやが」

太吉は、そう云って一郎を見返った。

「おや、あれは中町の宗吉じゃないか」
「おう、ほんまに。そんなら、こっちは宗吉の姉やんじやなア」

一郎と太吉がそう云っている間に、宗吉とその姉は橋を渡り切った。

女は、よろめく足をふみしめるように橋の袂から川原の方へ降りかけた。

「姉やん、一体どこへ行くんだい？。早う帰ろうな」

宗吉は姉の手を引張るようにして、そう云ったが

「なアに、このまま帰れッて。宗ちゃん、あたいがこのまま家へ帰れますかよッ、てんだね」

と云いながら、強引に宗吉を引摺るようにして一歩々々土手を降りて行った。

「だって、もう遅いんだから」

「なアに、遅いのは毎晩のことさ。浮き川竹の流れの身とは言うけれど、宗ちゃんは、あたしの苦勞が判るかい」

「うん、わかってるよ。わいのために、料理屋で働らいてくれること、よう知っとる。そやけど、あんまり深酒は身体に毒や。ええ加減にしといてなア」

宗吉は、そう云って姉の肩により添うた。

彼は、母と、千代というこの姉との三人暮らしで、千代が料亭「とらや」で仲居として働いている収入と、母が僅かばかりの化粧品や小間物を、農家を廻って行商して来る収入とでささやかな生活を支えていた。

「宗吉は姉やんを迎えに行ったんやなア」と太吉が云うと、一郎は

「あいつ、姉やんが稼いで中学へ入れてやる」と云うていたッけが……」

と、自分の身に引き較べて、大きい吐息をついた。その時

「青柳のウ……かげに、誰やらが……ういッ……」

と突然、間のびのした胴間声が、すぐ頭の上で聞えたので、一郎と太吉は瞬間、そっと身をすくめた。

二人連れの中年男が、互に肩に手を掛け合って、背広の上衣を片手に抱えながら、土手の上を通り過ぎて行った。

川原近くまで降りていた宗吉と姉の千代もその声に驚いたか、すぐ傍の葦簾張りの小屋の蔭へ身をひそめた。その小屋は、この川の砂利を採る人夫が、休憩のために作った堀立小屋である。

端唄の音が、土手の柳の向うに消えてゆく

と、あたりは元の静けさになり、月も一段と光を増したかに照りかえった。
「ねえ宗ちゃん、勤めって辛いもんだよ。これをご覧な」

千代の低い声がして、すっと小屋の蔭から出て来た姿に、太間と一郎は一瞬、眼を見瞠った。彼女は草むらの蔭に、宗吉と友達の二人が居るとも知らず、肩から衣紋を抜いて、大きく胸をはだけていた。月の光に照らされて、白々と浮かび上った彼女の胸に、瀬戸引きの薬罐やかん二つ胸に押しつけられ、横一文字に細紐で締め付けられている。

「今夜のお客は山城屋の旦つくさ。家のおかみさんでも虐めりやいいものを、あたしをこんな格好にして、背の結び目を紙で包んで封印までしているんだよ。そして、『明日の晩はずしてやるから、それまでこのまま締めていろ』ッてさ。まったく、せつなくてやりきれないやね」

千代はそう云うと、両手を伸ばして乱れた銀杏返しの髪を掻き上げた。薬罐の蓋さえ締められていなければ、見事な一幅の浮世絵とも見える風情である。

「姉さん、そのままで明晩までいるつもりかい？」

「仕方がないやね。お金のためだもの……」

ああ、いい風だ。気持がせいせいするよ」

千代は投げるような口調でそう云うと、そのまま、べったりと草の上に腰を下してしまつた。

太吉と一郎は、かえってきまりがわるくて出るにも出られず、草むらの中で藪蚊を叩きながら、いつまでも、じっとしやがみこんでいた。

○

「おい鈴木、お前も中学校へ行けるようになったんだから一生懸命に勉強しろよ」

ある日、一郎は受持の藤井先生に呼ばれてそう知らされた。

「お前のお父さんが頼んで、帳場の徳蔵親方が、お前の学資を貸して呉れる事になったそうだ。どんなに苦勞してでも勉強しておかなければ、これからは、だんだん学歴がものを云う世の中になって来るのだからな」

藤井先生は、そう云って大きく笑ったが、一郎は帳場の徳蔵親方と聞いた途端に、先日の夜の事を思い出した。

——徳蔵親方が、ただ親切で学資を貸して呉れる筈がない——

家へ帰ると、母は相変らず狭い部屋の一隅

で、呉服屋の仕立物をしていた。一郎は、そうした母の顔を見ると、どうしても事情を聞き糺すことができなかった。母は一郎の帰つたのを知ると

「お母さんは明日から三日ばかり用事で留守をするから、不更だろうけれど我慢してお呉れよ」

と、針の手を休めて、そう云った。

「お母さんッ」

——お母さんは、徳蔵親方の所へ行くんだろう——

と、なじりたい心を一生懸命こらえて、母の膝に、すり寄った。

「しっかり、勉強をして、早く立派な人になってお呉れ」

そう云って、じっと一郎を見る母の眼が、心なしかうるんで、何かを訴えるように思われた。



——お母さんが若いからいけないんだ。美しいから却っていけないんだ——
一郎は心の中でそう叫びながら、母の膝をしっかりと掴まえていた。

○
その次の日の夜、一郎は町外れにある徳蔵親方の家の裏手の松の木によじ登って、じつと様子を窺っていた。

——母はきつと、この家に来ているに違いない——

そう思ったからだ。一郎の登っている所からは、板塀越しに徳蔵の家の座敷が半分ほど見える。母屋、台所の方は松の繁みに遮られて見えなかった。この家には電気燈が黙いていて閉め切った障子が明るかった。小一時間も松の樹の上で辛抱している一郎の眼に、その座敷の障子に映る黒い影が見えた。丸髻の女の上半身が大きく揺れて直ぐに消えた。

——ああ、矢ッ張りそうだ——

一郎はそう咳くと、思わず齒ぎしりをした。大粒の涙が、ぼろりと頬を伝わった。

○
「おう徳蔵どん、もう始めてるのか」
そう云いながら入って来たのは山城屋の旦那惣兵衛である。彼は廊下を振り返ると

「おい千代、遠慮せずと、こっちへ入りな」と云った。その声につれて、襖を後手で閉めながら、するりと入って来たのは、宗吉の姉である。

「今夜は面白いものを見せてやる」

という惣兵衛に伴われて、「とらや」から相乗り俥で徳蔵の家へ来たのであった。

「なアに、もう来る頃だろうと思って、床の間に花を飾って待っていたところだ」

徳蔵はそう云って、床の方へ顎をしやくった。

丸柱で違い棚を区切った一間床の、磨き上った桑の床板の上に、一郎の母のお絹が、この家へ来て結ったのであろう、水々しい丸髻に化粧をして、見違えるほど色を増したのが長襦袢一枚の姿で両膝立つてうつむいている。左右の手が見えないのは、後手にがっちり縛られているからである。納戸色をした大輪の乱菊の花が一本、その下茎を胸の縄目に押し込まれて、顔の横で揺れている。

「ほほう、生きた花とは面白い趣じやな」

惣兵衛は、そう云って笑ったが、

「おやッ、こりや、うちの仕立物をしている長吉の処のお絹さんじゃアないか」と驚いた。

「はッはッは。他家の庭の花は美しく思えるのが人情でね」

「ふうん、だが、こりや驚いた。お絹さんがねえ」

と、ひどく感心した様子である。その声にふいと顔を上げたお絹は

「あッ、あなたは山城屋の旦那ッ！」

と呼ぶと、ぱッと顔を真赧にした。

「お千代の相手がお絹さんか。だが、これは一段と面白からう」

そう云うと、お千代に向って

「おい、お前もお絹さんと同じ姿になりな。

なに？此処でいい、他に誰もいやしないんだから。さア、早くしないか」

と急ぎ立てた。お千代は小声で

「旦那、胸のを外して……」

と小声で囁やいたが

「なに、構わん、わしの趣向も徳蔵どんに見て貰わにや」

と云って突っぱねた。

「おッ、薬罐の蓋をねえ。こりやア思い付きだ。きちんと着こなした着物の胸に、こんな細工がしてあろうたア、誰にだって分りっこねえやな」

徳蔵は、すらりと脱いだお千代の胸元を押

しつぷすように締め付けている二つの金物を見て、思わず手を拍った。

惣兵衛は彼女の後ろにまわって紐の結び目を解いた。

「ああ、せつなかったこと」

お千代は仰山にそう云いながら両手で胸をかくす。

「ほい、その手はそこじやア困るんだ」

「旦那、どうするんです」

「ほら、お絹さんと同じようにして、これから二人で相撲を取って貰うんだ。いいかい。

手は使えないがね。わしらが好いと云うまで攻め合うんだよ。勿論、転んだだけでは勝負はつかないよ。それから八百長をやるといけないから、負けた方には重い罰があるんだ。なに、どんな罰かって。それは今は云えないがね。——兎に角、負けた者は今度、顔を合

わせる時に、恥かしくて死ぬ程の思いをせにやならんような罰を考えているんだから、そのつもりで力一杯、頑張るンだぜ」

惣兵衛はお千代とお絹を真向いに立たせてそう云うと、更めて座について徳蔵のさした盃を受けた。そして

「今夜は珍らしい肴だなア」

と顔を見合せて笑った。やがて

「さア、始め」

と云う徳蔵の声に、お千代がお絹の上体に身体ごと打ってかかって行った。勝気なお千代に氣押されて、胸に相手の激しい圧迫を感じながら、じりじりと後退して、お絹は床柱に押しつけられてしまった。千代は小股にかけてお絹の足を払うと、お絹は手もなくその場へはね転んだ。お千代は素早くお絹の上へ馬乗りになろうとしたが、お絹が上体を捻ったのでお千代は着物の裾を翻えして横倒しになった。組んずほぐれつと云うが、手を縛られているので組み合うことが出来ない。したがって足業専門になる。勝気なお千代に比べて、内気なお絹は始終、押され気味でとうとうお千代の足で咽喉を挟まれてしまった。お絹は

「もう、やめて……」

と声を上げた。

「どうした。早よう刎ね返さんかい」

と、徳蔵は面白そうに声援する。お絹が必死に抵抗しようと藻掻く。

「お千代、そら、もう一息だ」

と惣兵衛も負けずに声を掛ける。力み返っているお千代の額に、汗が滲んで後れ毛が、

べっとりとついている。徳蔵は

「少し加勢をしてやるかな」

と云って盃を置くと、やおら立ち上って、違い棚の下の地袋から一本の紐を取り出すとその端をお絹の片方の脚の膝頭に結び付け、お絹の上体に乗るかかっているお千代の頭へ廻して他の端をお絹のもう一方の膝頭に結び留めた。そして

「お絹、脚を伸ばして、うんと踏んばれ」

と、けしかけた。お絹が苦しまぎれに、ぐんと両脚を伸ばすと、お千代は

「あうッ」

と、つまったような声をあげて、仰向けにのけぞった。それと同時に、身体の重心が移って、ぐらりと徳蔵と惣兵衛の坐っている方へ横向きになった。すると今度は惣兵衛が「ははは、じゃア、わしもお千代に少し手助けをしよう」

と云って、別の紐を持って二人の女の背後に廻ると、お絹の頭を挟んでいるお千代の足首を十文字に縛り、更に後手に縛られているお絹の手首に巻きつけて離れないようにしてしまった。そして

「どうです、この恰好は。逆さ重ね二つ巴とでも言うところかな。何しろ昔の絵草紙にも



「ない図柄だなア」
 云いながら、銀煙管の
 雁首で、煙草盆の吐月峯
 をぽんと叩いた。徳蔵も
 「うん、成る程。女相撲
 変じ重ね人形か。これも
 一興だな。ところで惣兵
 衛どんは、珍らしい煙管
 を持っておるようだが、
 ちよっと拝見」
 と云って惣兵衛の手か
 ら斑竹の羅字のついた煙
 管を受けとると、
 「これは銀地に金の葵の
 紋の家簞ですな。徳川様
 のお持物だったらしい由
 緒のある珍品だ」
 と、打返し眺めていた
 が、やがて、その雁首に
 煙草を詰めると、
 「お絹に一服吸わせてや
 ろう」
 と云いながら、マッチ
 を擦って火をつけた。そ
 して、
 「お前さんは煙草をよう吸わないんだが、少
 し稽古をしなよ」
 と云うと、その銀の吸口を可愛い格好し
 たお絹の鼻に挿し込み、小指で片方の鼻の穴
 を塞いだ。お絹は
 「旦那ッ、かんにんして……」
 と、煙を吸うまいと、大きく口を開けて喘
 ぎ／＼言うのを
 「まあさ、ちったアいいじやアないか。なア
 お絹」
 と、女の顔を覗きこむようにして、左手で
 お絹の口にピッタリと蓋をした。
 「うぐわッ」
 途端に、何とも云えない奇声を発してお絹
 は煙にむせんだ。ぐらりと雷を振り、全身を
 震わせて藻掻いた。その衝撃にお千代の頸に
 回っている紐が急に引き緊まって
 「あうッ」
 と彼女も一緒に身悶えた。奇妙な連鎖反応
 である。
 「舐めてやりたいような可愛い鼻だな」
 徳蔵はそう云いながら、もう火の消えた煙
 管を、そろりとお絹の鼻から抜いた。すると
 今度は惣兵衛が
 「それじやア、こちらは温灸と行くか」

と、徳蔵から受けとった煙管で二、三服う
まそうに煙草をふかすと、その熱くなった雁
首を、じりり、とお千代の胸に押し付けた。

「あッっ、熱いッ……ちッ」

とお千代は齒を喰いしぼり、拒みよふのな
い無残な煙管責めに身をよじらせて悶えた。

○

徳蔵と惣兵衛の二人は、今夜の趣向に、す
っかり気をよくしていた。別々の女と一緒に
して責める興味は、今までの一人だけの責め
に満足していたより、数倍変化のあるものと
なつて二人の前に展開した。

早や夜も大分更けていたが、お絹もお千代
も、まだ許してもらえなかった。

「おい、お千代。お前にも一杯飲ませてやろ
う。もっとこっちへ寄りな」

惣兵衛は、そう云うと後手に縛られて坐っ
ているお千代を引き寄せた。彼女の胸に横一
文字に引き締められた綱には、大きな百匁蠟
燭が挿し込まれ、それに火が点けられてい
た。明るい電灯の下で、更に彼女に燭台代り
にされているのである。惣兵衛が、お千代を
仰向きに寝かせると、その蠟燭は斜に傾いて
芯のところに溜っていた数滴の蠟涙が、たら
たらと流れ落ちた。

「あっちち、旦那ッ」

「はっはっは、蠟が落ちたか。あんまり藻掻
いて、その火を消さないでくれよ」

惣兵衛は、片手で湯呑に酒を注ぐと、お千
代の口へ持つて行った。

「お絹、お前さんもどうかい」

と徳蔵もお絹の顔を見て笑った。

お絹は徳蔵のすぐ前の小さい丸卓子の上に
胡坐を組み両手を前で合掌していた。それも
自分からそうした姿勢をしているのではない
ので、拇指と中指と小指とは、左右を合わせ
て細い紐で結び合わされ、また別の紐が両手
首を引き締めて、更にその手首が離れない
よう背を廻つて二巻き横ざまに喰い込んでい
る。足は足で両足裏をぴったり合わせて縛ら
れている。その可愛い足首から、綱は更にお
絹の頸の後を一廻りしてその先端は徳蔵の手
に握られている。徳蔵がその綱を引くと、お
絹の両足首が持ち上ろうとする。その足が宙
に浮くと上体が不安定になつて、転びそうに
なるので、上体を出来るだけ前へ曲げる。
丁度「観音縛りの海老責め」と云う恰好であ
る。そうして置いて二本の煙管が彼女の鼻を
責めるのだ。お絹は哀憐の情を眼に湛え、口
を大きく開けて肩で呼吸をする以外、どうに

もならないのだ。

○

明るい陽光のあたっている障子のむこうで
雀がチツ、チツと鳴いている。

お絹が眼を覚ましたときには、その部屋に
は誰もいなかった。昨夜のままの哀れな姿だ
った。蒲団は絹物で柔らかく、身体がすっぱ
りと埋まるようで快よかったが、頭はまだ昨
夜の疲れが残っているようで重かった。

彼女は海老のように上体をくねらせて、よ
うやく蒲団の上に坐った。悲しい宿命のよう
に、鹿の子の紐が胸に深くくびれ込んでい
る。

可愛い一郎を中学校へ行かせる為とは云
え、こんな奇妙な遊びの道具に使われる自分
が、いとおしかった。

——また、今日も責められるのか——

彼女は蒲団の裾に転がされてある輪投げの
玩具に眼をやった。五色に塗られた五つの輪
と、輪投げの台が、朝の光の中に、ぼつんと
影を落していた。

——昨夜、お千代との女相撲に負けた罰だ
と云つて、皆の見ている前で、両手は縛られ
たまま、齒にかんだ輪を顔を振って投げさせ
られた。何回も何回も。——

思い出すと、童心の子の遊び道具を、女の責めに利用する事を思いついた徳蔵が憎らしかった。

そこへ襖がさらりと開いて、下女のおまきが膳を持って入って来た。お絹は恥かしさで身を震わすようにして眼を閉じた。

「お絹さん、そんな恰好で寝てたんですか。そりや、さぞ窮屈だったでしょうね。さあ、お顔を拭いて上げましょう」

おまきは、そう云うと湿した手拭でお絹の顔を丁寧に拭いた。

「旦那がね、お絹さんにそのままの姿で食事を差上げろ、と云ってね、さっき出て行きましたもんで、不自由だけど、辛抱して下さいな」

おまきは、お絹に済まなさそうに云いながら、器用な手つきでお絹の口へ食物を運んだ。そして

「それから今日は、お昼に今度、南町から新しく来られた郡役所の官員さんをお招きするんだそうで、今、台所では御馳走のお支度で大騒ぎなんですよ」

と話した。

お絹は、おまきの言葉で、徳蔵の真意が読めたような気がした。

——徳蔵は自分の帳場の勢力を拡げるために役人を籠絡する。その手段として役人に馳走をして接待し、わたしを、その宴席に出して奇矯な責めを見せてその歡心を買おうとしている。——

そう考えて来ると、時間の経つのが怖いように思われた。

——ああ、わたしは、徳蔵親方のために滅茶苦茶にされるんだ——

おまきが膳を引いて部屋を出ると、彼女は蒲団の上へ身を伏せて鳴咽した。

間もなく徳蔵が帰って来た。

「お絹さん、朝の光で見ると、お前さんは一きわ綺麗な人だなア」

と感心したように云う。白縮緬の兵児帯に挟んでいた煙草入れを抜き出すと

「今日は、昼に大事なお客さんの接待をして貰わにやならんが、その前に、ちよっと下準備をして置かな」

と云いながら、ほんと煙管筒を抜いて、出した煙管をお絹の口へ横に咥えさせ、黒い水牛の筒を胸を締めている鹿の子の紐の下へ無理矢理に挿し込んだ。そのため彼女の胸のあたりで一層深く瓢箪のようにくびれ、胸のまんなかで金唐草の煙草入れがぶらぶら揺れた。

「そら、声を出すと煙管が落ちるぜ」と言って輪投げの台を取り上げた。

「あッ、それはやめて」

お絹はそれを見ると、急に声を上げた。咥えていた煙管がポトリと蒲団の上に落ちた。

「だまって、声を立てちやアいかんと云うのに……」

「それは、もう」

お絹の額に油汗が浮いた。

「じっとしているんだ。え、じっと……」

徳蔵はお絹の顔を掩うように自分の顔を近づけると、後手に縛られている彼女の手首をぐいと握んだ。

○

座敷では、もうお客が見えたらしく、家の中が急に、ざわつき出した。

「どうだ、支度はもう出来たかい？」

徳蔵が顔を出した小部屋で、お絹は、おまきに髪を直してもらっていた。

「おい、早く支度をせんか」

「親方、その恰好だけは勘忍して下さい」

「何を言っているんだ。それが珍らしい趣向だわな。おい、おまき、手伝ってやりな」

「はい、はい、只今」

と、おまきは、二つ返事をする

「お絹さん、仕様がないう。早く支度をしなさいよ」

そう云って、手早く長い布を取ると、お絹の体をかばうように手を廻した。

「いいか、おまき。わしがあちらで手を拍ったら、座敷に入ってきて来るんだぜ」

徳蔵は、そう云うと、お絹の姿を満足げに見ながら襖を閉めた。

——何と云う恥かしい姿だろう——

お絹は、その鏡に映っている自分の姿が忌わしかった。眼鏡の枠のように輪投げの輪を二つ繋いだのが胸にきっちり嵌められて、その真中から六尺程の白い長い布が、両足の間から後に長く曳いている。別に、だんだらの染分け紐が両手首を後ろで縛り、その紐の端をおまきが持って猿まわしの猿よろしくの態で、お客の前へ出るのである。更に徳蔵の言葉では、その座敷で「樽拾い」や「綱渡り」などの趣向をさせると云っているの、お絹は、死ぬより辛いような仕草を覚悟しなければならなかった。

やがて、ポンポンと徳蔵の手が鳴った。

「さア、お絹さん。一刻の辛抱ですよ」

と、おまきが立つ。お絹は屠所へ引かれる牛のように悄然として足を運んだ。

座敷では床の前に恰幅の良い三十才余りの男が脇息に凭れて盃を手にもしていた。

「こちらの酒も、なかなかいけるじやないか」

男がそう云うと、徳蔵は銚子を傾けながら「何しろ田舎なもので、どうせお口には合いますまいとは思いましたが、せめて、珍らしいものでもお眼にかけようと存じまして」

と云って、今襖を開けて入って来たお絹を振り返って手招いた。

「ほほう、これは珍らしい美形……」

と、男は盃を持った手を膝に置いて眼を上げたが、その途端

「おッ、おまえは、絹ッ」

と叫ぶと、思わず盃を膳の上にカチリと取り落した。

「ああッ、あなたは坊ちやまッ」

お絹も男の声に驚いてそう叫ぶと、いきなり踵を返してこの場から遁れようとした。

「待て、おまえ、どうして此処に……」

男は、慌てて片膝を立てて、お絹が曳ずっている白い布の端を踏まえると、お絹はそれはずみに慥と後手のまま横倒しになった。

「あれッ、藤堂さまはこの女をご存じで……」徳蔵も吃驚したようにお絹と男とを半々に

見較べた。

「みんな、暫らく部屋を出て行って呉れ」

藤堂と呼ばれた男は、そう叫ぶと大きく右手を振って皆を促がした。

徳蔵らが意外の事に、驚いて急いで退くと男はお絹を久留米絣の膝にしっかりと抱き上げて

「絹ッ、おまえは一体、どうしていたのだ。

お前が邸から居なくなってから十四年、どんなにお前の事を案じ続けていたか……」

と苦しげに云いながら、お絹の上体を揺すぶった。

「お許し下さいまし、……坊ちやま。絹は……

……絹は、わるい女でございます……でも、でも……あなたのお子だけは、いいえ、私の一郎だけは、今日まで、ともに育ててまいりました……ああ、坊ちやま……坊ちやま」

お絹は身も世もないさまで、そう訴えながら、滂沱として涙を流していた。

男はそんな様子をいじらしげに眺め、ときどき大きく頷いて絹の訴えに応えていた。

「苦勞をしたんだろうナ」

呟くようないたわりの声に、涙に濡れた瞳が上って、羞しげにまたいた。まだ解かれない縄目も忘れていたのかようだった。

作

贗

私は死にたくない

(シナリオ)

カラー・ワイド・スコープ

佐 治 麻 造

△第一場より第卅場まで 略▽

第卅場までの概略

酒場の女、娼婦、ギャングの情婦等を転々として過した身寄なき女、キャスリン、又の名「金髪のジェニー」は、三十才にして漸く一人の男と結婚することが出来た。共かせぎの細々とした生活乍らも、まっとうな暮しに喜びを感じつつ送った二年の月日。男児も儲けて益々希望に燃えたが、意志薄弱な夫は酒と麻薬に身を持ち崩した或夜、口喧嘩の末、家を飛出して仕舞う。

夫は去り際に、彼女が秘していた前科、偽証罪による六カ月の懲役を持出して口汚なく罵る。打ちひしがれ、明日からの生活費に

も事欠く彼女は、遂に昔の仲間へ援助を乞い、知らず／＼に彼等の強盗に一役買わされる。一味の逮捕。彼女は、夫の母に預けた子供会いたさに、必死に逃亡する。夜半、子供を訪ねる彼女はアパートの入口に張られた網に掛るが、奇蹟的に再び逃れることが出来る。其際、放たれた威嚇の拳銃弾で却って警官の一人が傷つく、

昔の娼婦仲間の援助で、西部から東部へ高飛びした彼女は、矢張り昔馴染の女が経営する娼家に潜伏する。新聞で身に覚えもない未亡人殺しの罪を強盗達から被せられているのを知り、驚愕した彼女は、翌日には自首しようと決意する。しかし、既におそく、翌朝、娼家は包囲され、四名の刑事が踏込んで来る。

第卅一場

場所 娼家の内部

数名の娼婦が、只ならぬ気配に驚いて廊下をうかがう。あわてて出て来た女主人を詰問する刑事。かぶりを振る女に激しい平手打が飛ぶ。

「ねぼけるな！ 白ばけると後で泣くような目にあうぜ」

刑事達は手分けして娼婦達を片っぱしから訊問し、各室を搜索する。

陰険そうな一人の女が刑事に耳打ちする。

二名の刑事が屋根裏部屋へ殺到する。

女主人の絶望的な顔。

場所 屋根裏のキャスリンの部屋。

下の物音にガバと起上った彼女は、素早く小さな窓を覗く。急いで服装を直し終った頃、激しいノック。そして扉が脆くも破られる。拳銃片手に迫る刑事達。彼女の頬に皮肉そうな、うす笑いが走る。

「キャスリンだな？ 手を上げろ」

のろ／＼両手を上げる彼女。刑事の一人が手早く検査する。

「よし。手を出せ」

両手首に嵌まる手錠の冷い音。うなだれて手錠に見入る彼女の悲しげな顔。

場所 娼家の廊下

女主人が部屋着のままの姿で、手錠を嵌められて立っている。向うからキャスリンが同じく手錠姿で肘を取られ乍ら引立てられて来る。

女主人「ねえ。お願いだから着替えさせてよ」

きびしい顔立ちの婦人刑事が入って来て、キャスリンに近づく。

手に金具の光る黒い革バンド。キャスリンの腰に締め付け、後で錠が下ろされる冷い金属音。ついで前に付いて居る錠前の環が手錠の鎖の中央に嵌められる。婦人刑事の手で再び意地悪い迄の服装検査。「じっと立ってられないの？」

屈辱と擦ったさに身をよじるキャスリンの頬に二つ三つ、平手打が飛び、遠くから眺めている娼婦達が嘲笑する低い声と顔。

場所 娼家の入口

数台の警察車が停っている。弥次馬の姿。開け放しの入口の内からキャスリンを先頭に二人の囚われの女が引立てられて出て来る。別々の車に乗せられて車は動き出す。

場所 空港の改札口

西部行の便の出発を告げるアナウンス。

旅客の列の最後に、二人の婦人刑事に護られたキャスリンの手錠腰枷姿が見える。

ジロジロ見ては、うなずき合う二人の太った中年婦人。何だか歩き難くそうにチョコチョコと小股で歩くキャスリンのハイヒールの脚。微かな鎖の音。

場所 飛行機の内

タラップを昇って来るキャスリンを見て眉をしかめるスチュワード。キャスリンは最前部の三人用のシートの窓際に坐らせる。隣に坐った婦人刑事が、邪慳にキャスリンの両膝の上下にそれぞれ黒い革枷を嵌める。一フィート程の鉄鎖が左右の膝を繋いでいる。

膝枷の点検。キャスリンは上体を前に屈めて、やっと屈く指先で眼頭をこする。グッと締められる膝枷の鎖。キャスリン、不自由な

手で身づくろいを直す。うなずき合い何やら囁き合う旅客達。

第卅二場

場所 空港

飛行機から降りて護送車へ向う彼女に対して、浴せられる群衆の嘲けりと驚声。フラッシュが光る。真正面から撮られた彼女の口惜しそうな顔。手錠で締めつけられた両手指が切なげに動く。膝枷のために、不様な恰好で自動車に乗る後姿。

手錠、腰枷姿で、腰の鎖を婦人刑事に取りられて、うなだれて歩く彼女の全身写真を掲載した新聞紙の大写し。

場所 裁判所内部

第一回公判が終った所。

被告席の鉄柵の囲いから出されたキャスリンは、唇をゆがめて両手を揃えて差出す。手錠腰枷が嵌められる金属音。革枷で思い切り締めつけられた腰のくびれの大写し。

傍聴の男A

「太い女だなあ、まだシラを切りやがる」

傍聴の男B

「何て云ったって、アリバイがねえものな」

新聞紙の大写し

「キャスリン否認す。アリバイ立証不能」

「検事鋭く追及。黒は決定的。来週金曜日に次回公判」

場所 裁判所内部

遠景。検事が腕を振り、鋭く論告する姿。

硝子窓越しに被告席でうなだれるキャスリンの姿。手前の方に、傍聴者の好奇の眼。鉄柵を握って何か必死に髪を振り乱して訴える

彼女。失笑する室内の傍聴者の顔。

場所 拘留所婦人檻区画

左右にずっと鉄格子。その鉄格子の向う側に独房の鉄格子が一つずつ並んでいる。独房の鉄格子は皆開けられており、灰色の囚衣を着た女囚達が鉄格子の内側で歩き回ったり話し合ったりしている。ヤケの様な様子で談笑している二名の女囚。二人共、廿二、三才、金髪。囚衣の胸と背に番号。一名の女囚が近づく。両手は後へ回している。

女囚A「昨夜は御苦労さん」

女囚B「未だ外してくれないのかい？」

女囚C「くそっ、こんなことしやがって。殆んど眠れないのよ。それに締まって来るものだから痛くて……。咽喉のどこ掻いてよ」

女囚Cの後姿。後手に手錠を嵌められている。婦人看守達がやって来て、格子の外から、隙間を通して食事を配って歩く。

「九七号。外して上げよう。おとなしくしなきや駄目よ」

鉄格子に背をつける女囚C。ピーンと手錠の外される音。女囚Cは背のびして両手首を撫でる。

「こんな跡がついちやった。アア辛かった……」

鉄格子の間から食事を受取るキャスリンの姿。

婦人看守「朝食が済んだら着替えるのよ。公判は九時半から。多分、今日、宣告があると思うわ。済むのは午後になるわね」

朝食の細長い盆を持つキャスリンの手が震える。遠くでビンタの音と女囚の悲鳴。

場所 裁判所内部

時計は、午後二時五十分を示している。

陪審員が入って来て着席する。何れも少し疲れた様子。婦人看守が被告席のキャスリンの手錠を外す。判事、検事の入室。

陪審員長が立上がる。五十前後の婦人。

「討議の結果、訴追事項、全部に対し有罪と決定しました」

ガックリうなだれるキャスリン。室内、稍々騒然。判事立ち上がり三十分の休憩を宣告。再び室外に去る。電話器を驚嘆み、第一報を入れる男女記者の姿。被告席のキャスリン、じっと瞳を据えて祈る表情。再び手錠腰枷が嵌められている。微かに肩が震え呼吸が大きい。額に髪が乱れ、脂汗が光る。顔面、蒼白。三時二十五分、判検事、入室。外して貰えない戒具に、不審そうに看守を振返るキャスリン。婦人看守は知らぬ顔。被告席の鉄柵の内で、手錠腰枷のまま立ちすくむ彼女をグッと見据える判事。

「被告、キャスリン・テンプルを第一級殺人罪の廉で死刑に処す……」

恐怖に見開かれたキャスリンの両眼。唇があえぐ。思わず動かす両腕。手錠の鳴る音のみがカチャカチャと聞える。

「……被告は、R婦人重罪監獄に送られ、ついでS監獄に送られ、S監獄到着後二十四時間以内に絞首される。神の御赦しが被告の上に在ります様。又、被告は現在から四十八時間以内に州知事閣下に対して特赦を願ひ出ることが出来る……」

ままならぬ両手をもがき乍ら絶叫するキャスリン。

「人を殺した覚えなんかありません！ 絶対に……もう一度よく調べて下さい。あ、あんまりです！ 死刑なんて……」

婦人看守が二人掛りで手早く、そして乱暴に嵌口具を嵌める。キャスリンの後頭部で、グッと締めつけられて掛金が下される。頭を

振り、押え付けられ乍らも必死に身悶えするキャスリン。既に声は出ない。微かに咽喉の奥で呻く音が断続する。

婦人看守A

「おとなしくしなさい。みつともないじゃないの。もうどうもならないんだからね」

婦人看守Bが膝枷を嵌める。両肘をとられてヨロヨロと歩き出すキャスリン。足がガク／＼して必死の形相であたりを見回す。嵌口具から洩れる呻き声。

稍々憐れみの混った傍聴者達の話し声。室外に出るや、フラッシュの雨。

新聞の大字し。

「殺人鬼に絞首刑！」

「キャスリン、宣告に暴れる」

新聞の同じ面の下の方の記事。

「ルーシー懲役八カ月。」

キャスリンを置まった罪に問われたルーシーに対し奇しくも同じ日に懲役八カ月の宣告があった」

場所 R婦人重罪監獄入口

灰色の高いコンクリート塀。正門を囚人護送車が滑り込む。灰色の建物。車から降りるキャスリンの不自由そうな様子。裁判の時とは異ったドレッシーナツーピース。腰枷、手錠姿。膝枷の鎖がチラリと見える。手錠の両手に大きな袋を持ち、よろめいて降り立つ。腰鎖を持った婦人看守が続いて降りて、彼女の背を押す。大きな溜息をついて歩き出すキャスリン。遠くの方で微かに聞える女囚の悲鳴。

第卅三場

場所 R 婦人重罪監獄の廊下

少し開いた頑丈な扉、内部は見えない。洩れる声。
婦人看守「さあ、裸におなり！・脱ぐのよ」



平手打が頬に鳴る音。いろいろな姿勢を命じる冷い声音。
「……………次は四つん這いになって！オヤオヤ反抗する気かい？」
キャスリンの悲鳴。
場所 監獄の事務室

二人の婦人職員が書類を整理している。
少し離れて、キャスリンを護送して来た
婦人看守が二名、コーヒーを啜り乍らタバコを吸っている。テーブルの上に護送の時、使用した戒具が光っている。

婦人職員A「死刑囚は久し振りね」

婦人看守B「死刑囚の護送は本当に気
疲れして……」

婦人職員B「けども、少し可哀想みたい。
あ、エート一〇〇一号ネ。服は私物を
を着るつもりかしら？」

婦人職員A「そうよ。洗濯代は充分、
持ってるわ」

婦人看守に腰鎖を取られたキャスリン
が横切る。手錠がキラリと光る。

中年の課長の机の前に立たされ、婦人
の課長はジロリと見上げる。

「当分の間、ここへ収容するからね。い
っとくけど、ここは重罪監獄だよ。全国
で二つしかない婦人重罪監獄なんだよ。
お前が以前に入ってたことは訳が違う

からね。反則すると懲戒が苦しいわよ。おとなしくしてりゃ、お前はまあ労役はないし割と楽なんだからね。分った？」

堪え切れない様子でキャスリンが身悶えしながら訴える。

「……濡れ衣なんです！ 神に誓って人殺しなんかした覚えはありません……ひ、ひどいですわ……」

「お黙りっ。ここへ来て迄、未だそんなこといつてるの？ 最初だけ赦してやるわ。二度とそんなこと口にする……」

課長は冷酷な眼でキャスリンを睨む。

「……助命嘆願はしてるだろ？ おとなしく待ってる外ないじゃないの？」

目顔で合図。グッと引かれる腰枷の鎖。

場所 死刑囚檻房

檻房の鉄格子。頑丈な錠前。ピン、カラカラピーン……と手錠、腰枷、膝枷の外れる音。衣類の入った袋を手にキャスリンが独房内へ入る。外した戒具を房の外の小箱へ入れる看守。

房内を見回すキャスリン。痛そうに手首を擦る。奥行三米、幅二米、突当りの壁に粗末なベッド。右手の壁に洗面器と水道。左手の小さな戸棚。窓はない。

キャスリンの顔の上を、鉄格子の影が走って、大きな音と共に鉄格子が閉まる。施錠する無情な音。キャスリン、ベッドに崩折れて頭を抱える。

薄暗い中、ベッドに仰臥したキャスリンの表情。仄白く浮んだ無表情な顔。突然、恐怖の感情。大きく見開いた両眼。巡視の靴音が近寄り、そして遠ざかる。

場所 獄庭

午前九時頃。爽やかな秋の陽差し。腰鎖を取られて散歩するキャスリン。しゃがみ込んで芝生を撫でようとする。腰枷に結ばれた手錠の悲しさ、仲々触られない。漸く撚り取った二、三本の草。身体を曲げて香りを懐かしむ哀れな姿。

鉄鎖の鳴る音が、ジャラ／＼と聞える。

左手より数珠繋ぎの女囚達が現われて横切る。距離十五、六米。十名宛二群。数名の婦人看守の腰には拳銃と革鞭が吊ってある。煉瓦色の囚衣。素足。囚衣の首は丸首型、膝の上位迄の上下通しの菜葉服様のもの。女囚達の頭髮は哀れにも皆、短く切られている。黒い革製の腰枷。腰を締めつけたバンドの前後に別の革バンドがついて締め上げている。前手錠。両足首にも鋼鉄の足錠。左右の足首を繋ぐ二呎程の鉄鎖。革枷の中心から更に鎖が垂れ下がり、両足をつないだ鎖の中心を上へ吊っている。首には革製の首環。金具が冷く光る。首環から首環へと伸びる一米半程の鉄鎖。足鎖を上へ吊らない様に、膝を曲げ、うなだれて曳かれて行く女囚達。鉄鎖の音が哀れに響く。囚衣の腕は肘迄もない。頑丈なジッパの線が背筋に一本。胸部と背中とに背番号。

キャスリンの看守「外役なの？ どこ？」

婦人看守の声「町の下水溝掃除よ」

キャスリンの看守「そうお。御苦労様」

場所 獄庭の端

網を張った大きなトラックが停っている。婦人看守に罵しられながら不自由な両手両足を跪いて、必死になってトラックによじ上ろうとする女囚達。一人の女囚が上り損ねて転げ落ちる。鎖を引かれて更にもう一人落ちる。首環を引張られて苦しそうな女囚の顔。手

錠の両手が腰の所で切なげに動く。

婦人看守「何してるのさ。フッフフ乗るのが嫌なら歩いて行くかい？」

バシッと激しいピンクを喰って、口惜しそうに口をゆがめる若い女囚の顔。

女囚A「あ、あんまりだわ。こんなに縛っというて……」

女囚B「そうよ。手錠は仕方ないとして、足まで括らなくてもいいじゃないの」

婦人看守の頬に冷酷な笑いが浮ぶ。

婦人看守A「一九〇号と二四七号だね。お前たち、戒具を忌避するのかい？」

婦人看守B「此奴等、まだ新米なの。一つ……」

矢庭に一九〇号の背中ジッパーが下に押し開かれる。白い背中がむき出し。首の鎖を横へ除けておいて革鞭が一閃。サッと走る赤いみみず膨れ、たまぎる悲鳴。更にクロスしてもう一鞭、女囚の絶叫。

婦人看守「今度はお前だよ」

地面にひれ伏して赦しを乞う二四七号。容赦なく引起され、今度は胸のジッパーが開かれる。こんもりした胸のふくらみ、腰枷一杯迄、胸肌が露出する。歯の根の合わない女囚の表情。腹部に鞭痕が数条、歴然と残っている。

婦人看守「オヤ、お前、鞭の味、知ってるのね。それでもう、キスされない前から脂汗流してる訳ね。しっかりおしよ」

遠景。鞭を振る看守の後姿。女囚の悲鳴。

じっと見ているキャスリンの姿が画面に入る。

婦人看守「どう？ 重罪監獄って、少しばかり、きびしいだろ。あんな風にして終身懲役を受けるより、一思いに死刑になった方が楽だと思わない？」

思い詰めたキャスリンの表情。ゆっくりという。

「……でも……やっぱり死にたくないわ」

場所 キャスリンの独房

昼。房内を歩き回る姿。

夜。ベッドから突然ガバと起き上り、宙を見詰め、ついで両手で顔を掩う。両手首に赤黒い手錠の痕。

朝。婦人看守が二名、房の格子戸を開く。

「さ、朝の御散歩よ。結構な身分ね、ホホホ」

口惜しそうな表情が、キャスリンの顔に走る。手早く嵌められる手錠、腰枷、膝枷。いましめられ乍ら低くつぶやく。

「……一度でいいから自由な身体で散歩したい……」

腰枷に鎖をつけ乍ら看守が嘲ける。

「お気の毒ね。フッフ、けど、ちよっとしたアクセサリーだと思えばいいじゃないの」

場所 女囚檻房区画

小高い監視台を中心に半円状に配置された上下二層の独房群の鉄格子扉。監視台には二名の婦人看守。二名宛、腰と腰を鉄鎖でつながれられた女囚達が追いついて来られる。

肘と膝の上までの囚衣に素足。首には革の首環。腰には黒革の腰枷、何れにも鋼鉄の金具と錠前が光る。腰枷に結ばれた前手錠。膝枷。次々に戒具と連鎖を解かれて独房へ入る。女囚八十五号の大笑。彼女の独房の前。戒具の外される金属音。外された戒具を全部

両手に持って鉄格子を潜る。婦人看守の革靴が腰を強く蹴り、よろめく後姿。格子扉が閉められ施錠の音。幅二米、奥行三米程の独房。右手の壁に沿い、鉄格子に端を接近させて、巾五十糎程の鉄製ベッド。右手の奥の隅に水洗便器。左手の奥に広さ五〇糎四方位、半透明カーテンに囲まれたシャワー場。左手の壁、シャワーの手前に、洗面器の下は物入れ。床、壁、天井すべて淡灰色のコンクリート面。天井に埋込みの円い灯具。窓はない。

鉄格子から一米はなれて三十糎程の円が床面に黒く書いてある。女囚八十五号、その円の上に正坐する。三十才位。かなり美人だが無論、髪は丸刈り。諦めの表情。首に革枷の痕が少し。脚の上において両手首には鋼鉄のいましめの無残なあと。鉄格子を開閉する音が絶え間なく響き、時々激しい平手打の音。女囚の泣声。静かになる。大きなブザーの音。女囚八十五号、物入れから油布を取出し、膝の前においた戒具を取上げ磨き始める。腰枷と結んだままの鋼鉄の手錠。磨き乍ら、女囚の眼に涙が浮ぶ。

場所 キャスリンの檻房

膝の上においた大きな金属製の皿。跪いて木のスプーンで食事するキャスリン。

場所 再び女囚八十五号の檻房

膝枷の鎖を丹念に磨いている。ブザーの音。立上ろうとしてよけて膝を床につく。苦痛のしかめ面。物入れの扉を開く。中に鋼鉄の足枷と鉄鎖。その上へ磨いた戒具を入れ、閉める。

場所 中央監視台

二名の婦人看守。時々双眼鏡で覗く。

場所 女囚八十五号の檻房

ベッドの上に脱ぎ捨てられた囚衣。シャワー場のカーテンを透してボンヤリと女囚の影。カーテンの隙間から、足錠の痕のある素足が見える。突然、シャワーが吹き込んで水が流れ初める。シャワーを浴びる気配。

監視台からの遠望。当番の女囚が婦人看守に監視され、二人宛、連鎖されて各房の小窓から食事を配っている。

場所 中央監視台

看守の一人が床の水道コックを締める。

場所 キャスリンの檻房

寝衣に着替えるキャスリンの後姿。

場所 女囚八十五号の檻房

空の食器を前にうなだれて正坐する女囚。

堪え切れない様に微かに身悶えし、足を少し崩す。途端にスピーカーの声。

「八十五号 反則！ 姿勢！」

ビクッと身震いする女囚。看守の靴音が近付く。鉄格子を開ける音。唇を震わせ、両手を合掌する女囚。

「廊下へ出ておいで！」

よろよろと格子を潜り出る女囚。

「格子に掴まって……膝をついて……」

婦人看守の手が女囚の背のジッパーを、さっと開く。新旧取り混ぜて七、八条の鞭痕がある白い背中。

遠景 鞭を振下ろす看守の後姿。

革鞭が炸裂する音。魂消る悲鳴。看守、向きを替え、こちら向いて又、一撃。女囚の絶叫。

女囚の背中の大寫し。赤い生々しい鞭痕が二条、交叉して、ヒクヒク動いている。まだ絞る様な呻き声。他の一人の看守が瓶を片手に近寄る。鞭痕にタツプリ塗られる褐色の薬液。女囚、身をよじりもだえて呻く。

婦人看守「我慢おしよ。手当して貰えるだけ有難いと思わなきや……」

女囚の横顔。顔にジツトリ浮いた脂汗。強く噛み締めた下唇。ジッパの閉まる音。鞭痕のすれる痛みに再び呻く。鉄格子を握り締めた両手が仲々解けない。再び檻房内へ蹴り込まれる姿。

場所 中央監視台

婦人看守達が交替する。勤務の済んだ着守の大きな背伸び。

場所 看守控室

事務机、テーブル食器戸棚、ソファ等配置。

監視台から二人の看守が帰って来る。片隅に女囚が一人、膝に鉄棒を挟んで直立している。首環、胸枷、膝枷姿。更に両肘がそれぞれ黒い革枷と一呎程の鎖とで腰枷の両側に結ばれている。看守達、ソファアに坐り込み煙草に火をつける。以前から二人の看守が寝そべって雑誌を読んでいる。

「御苦労さん…… どう？」

「姿勢反則、一匹だけ。ア、使役当番囚！ コーヒー……」



隅に立たされていた女囚は膝の鉄棒を床において、食器棚に近付き、コーヒーを入れる。肘枷が不自由そう。コーヒーをテーブルにおき再び元の位置に戻り、鉄棒を自分で膝に挟んで直立する。口惜しそうな顔。

「アレ、どうしたの？」

「いえね、退屈しのぎに、ちよっと、からかってやってるのよ」

「そうお、私、靴磨かせたいんだけど……」

「アラ、どうぞ、どうぞ……」

女囚、跪いてハイヒールを受取る。靴底に口づけを命じられ、肩を震わせ乍ら靴底を唇に当てる。婦人看守達の嘲笑。

場所 女囚檻房区画

ブザーの音。看守達が次々と格子の間から手を入れて女囚の囚衣に付いた三カ所のジッパに鍵を掛けて回わる。首の前後、そして背。狭いベッドに仰臥した一人の女囚。二十七、八才。一五九号囚。切なげに身悶えする。囚衣の大腿部は細く締まっている。囚衣の胸を大きく盛上げているバストのふくらみ。鉄格子の外、女囚の頭上にいつの間にか婦人看守が立って冷笑を含んで眺めている。

「一五九号！ 何してるの？」

女囚、ハッとして両腕を体側に沿わせる。

「……就寝時は両腕を体の横におくのが規則だよ。守らないと承知しないよ。」

女囚、世にも口惜し気な顔付。

「あーああ、服にまで鍵を掛けられるなんて……。くそっ、手さえ入ったら……。」

婦人看守、キツとした顔をする。

「何よ！ そのいい方は。よし、手を伸ばして外へお出し！」

女囚、口をゆがめて、ヤケ気味に両手を頭上へ伸ばし、鉄棒を二本挟んで格子の外へ両手首を出す。看守、附近の物入れから何か持って来る。厚い木製の手枷。不気味な音がして二個の凹みが女囚の両手首を噛み、ネジが締められる。

第三十四場

場所 獄庭

キャスリン、腰鎖を曳かれて朝の戸外運動より帰る所。入口で立止ってジッと空を仰ぐ。

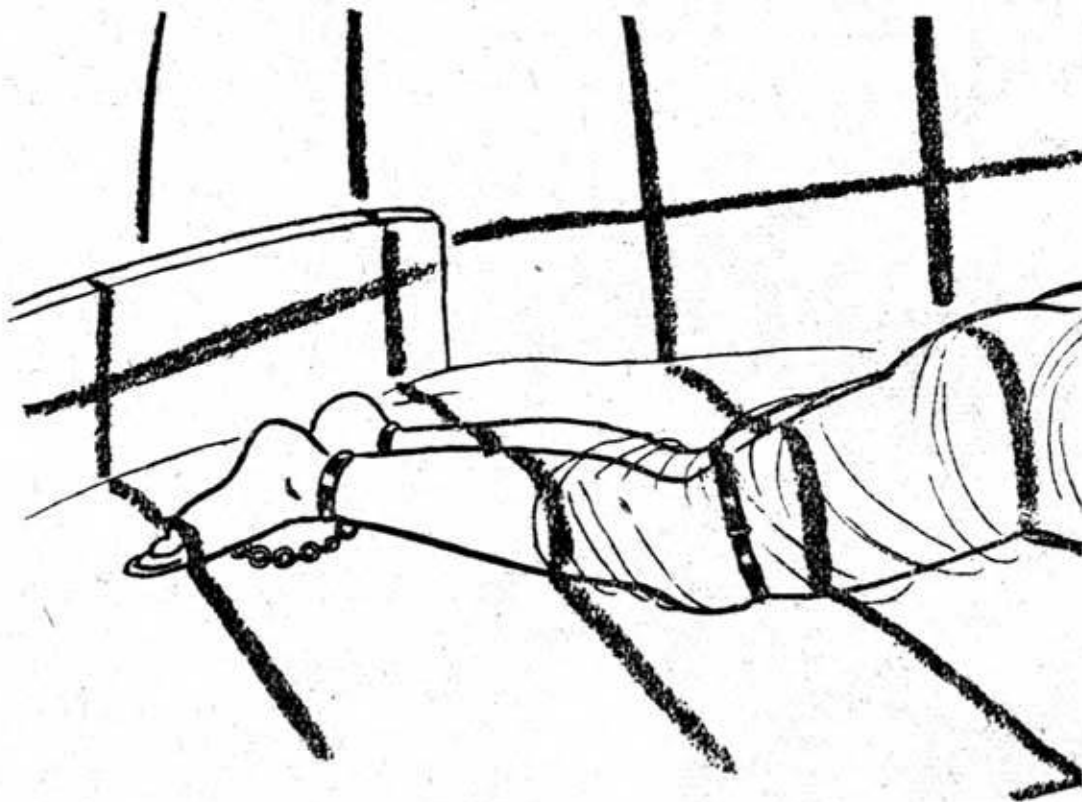
場所 監獄の正門

高級車が滑らかに止る。降り立つ四人の婦人。二人は太り気味の中年配。二人は若奥様風。地味に作ってはあがるが、何れも金のかかった服装。制服の幹部職員達の出迎え。

場所 事務室につらなる応接室の扉の所。

婦人看守や職員達に案内されて、四人の婦人が扉を出て廊下を歩く。

若い婦人A「私、監獄の中へ入るの、初めてなのよ。」



中年婦人B「アアそう。私は普通の婦人監獄なら何回となく見てるわ。けど重罪監獄は二回目よ。ここは初めて」

婦人職員C「普通の監獄と、こことじゃ雲泥の相違ですわ。兎も角、ここは箸にも棒にも掛らない女ばかりですよ」

婦人看守D「あなた方、免囚保護協会でも、この刑余者にはお困りだと思えますわ。例外もありますけど……」

若い婦人E「先刻、お聞きしたと思うんですけど……。何年以上でしたっけ？」

婦人職員C「一応、原則的には十年以上です。それ以下でも、受刑振りの悪いものなんか移送されて来ますし、前科三犯以上ある者も、此所で一度ヤキを入れることになってますの」

場所 前の場に引続く廊下

二人の女囚が首と首を革枷と鉄鎖で一メートル半程につながれ、大きな雑巾で床を拭き磨いている。黒い革の腰枷膝枷。這いずる度に膝の鎖が床に鳴る。手錠は嵌めてないが両肘に肘枷。額に汗を浮べて不自由な体で這い回る。免囚保護協会の婦人連の一行のハイヒールの足が映る。横眼で見上げる女囚の表情。

若い婦人A「……ま、可哀想な恰好……」

中年婦人F「普通の監獄じゃ、腰回りだけの腰枷と腰鎖だけなのよ。こんな労役の時は。ここじゃ、これが普通なのよ」

婦人職員C「此の位にしておきませんとねえ…。骨身にこたえな
いらしいんですの」

婦人看守、脚を挙げて女囚の頭を蹴る。

「拭き残しがあるじゃないか！ それ、そこにも、あそこも…お舐
め！」

身を震わせ乍ら床を舐める哀れな女囚の後姿。

場所 キャスリンの独房

曳き出されたキャスリン、戒具を嵌められる。

両手首に喰い込む鋼鉄の手錠の大字し。

婦人看守「面会だよ。フッフ、誰だろうね」

場所 面会室

鉄格子と金網で二重に隔てられた内と外。

内には七、八米の間隔で鉄格子から一米離れて三本の太い鉄棒が
立っている。曳かれて来たキャスリン、中央の鉄棒に腰枷を繋がれ
る。

「じゃ、待っというで…」

立去る婦人看守。キャスリン身をもたえる。

「ああっ…こんな…このままですか？ せめて、手錠だけでも外し
て貰えませんか？」

場所 応接室（さっきの応接室とは別）

一見して分る新聞記者風の男女が一人宛、ソファにふんぞり返
っている。前のテーブルにコーヒータ碗が二つ。タバコの煙。

婦人記者「…でも、よく許可が取れたわねえ。キャスリンに会う
なんて…特ダネよ」

男の記者「フフン、ハハハ…でも、おそいなあ」

場所 女囚の労役場

多数の女囚、二人宛、首と首をつなぎ合わされ、腰枷と膝枷を黒
く光らせ乍ら切々と労役している。大きな室内。所々に監視の看守
が立つ。協会の四人連れの婦人連、姿を現わす。盗み見する女囚達
の眼の光。婦人達の好奇と蔑すみの眼。片隅に一人の女囚、膝に鉄
棒を挟み、前に伸ばした双手に砂袋を支えて直立している。砂袋か
ら細いステール線が一本、天井の小箱に伸びてピンと張っている。
女囚の額の脂汗。

若い婦人A「この…女囚、一体どうしたんですの？」

婦人看守「いえね。ちよっと油を売った罰を与えているんですの
…。正式の懲戒なんてもものじゃありませんけどね…」

若い婦人B「あの脂汗！ 苦しそうですねえ。看守さん、どの位の時間
こうさせておくんですの？」

婦人看守「サア？ 私、此の女囚の担当じゃないので…。しかし
大抵、三十分間ですよ。今、丁度、十五分位の所です。ホラ、御ら
ん下さい。此の袋が少しでも下がるとワイヤーが引かれてブザーが
鳴る仕掛けですよ。ブザーは三秒毎に断続します。ブザー一回毎に
又、膝の棒を一回落す毎に、革鞭二つですよ」

婦人連、近寄ってジロジロ眺める。女囚の両眼から大きな涙が溢
れ出る。途端に両手が微かに下って間髪を入れず鳴るブザー。女囚
は頭を振って懸命の努力で元に戻す。婦人看守、革鞭を片手に近ず
く。ワナワナと唇をふるわせ恐怖する女囚の顔。無慈悲にサッと開
かれる背中のジッパー。新旧、数条の鞭痕。ヒューツ。ピシツ。忽
ち走る赤いみみず腫れ。ガクガクする女囚の膝。咽喉の奥から絞り
出る悲痛な呻き。見物の婦人達の面上に一瞬、残忍な影が走る。更

に鞭の音。悲鳴。

場所 記者達の応接室

婦人看守、現わる。

「では、面会室へ案内します」

男の記者、あくびする。

「アア、もう待ちくたびれたよ。ここへ連れて来る訳には行かないかい？」

婦人看守、（事務的に）「では主任に相談しまして…」

場所 屋外の労役場

作物畠。二人宛、鉄鎖につながれた女囚達が苦役する様。何やら話し合い、うなずき合う御婦人連の遠景。手前に一人の女囚の大写し。御婦人連を上眼使いに睨み、首環の嵌まった首をうるさそうに振り溜息をつく。

場所 記者達の応接室

キャスリン、入って来る。坐り直す記者達。キャスリン、少し離れて腰鎖を握られたまま立たされる。

婦人記者「キャスリンですね。私達、新聞社の者です。あなたの近況を読者に伝えたいと思って…」

キャスリン（皮肉に）「それは、それは……。ごらんの通りですわ。こうして殺される日を待ってるだけよ。」

男の記者、カメラを構える。

キャスリン、突然、身をもがき、ヒステリックに叫ぶ。

「……何よ！慰さみものにするのも程々にしてよ。写真なんかとらせるもんか」

腰鎖を引張ってカメラに近ずかんとする。

忽ち激しい平手打の雨。手錠を腰の所でガチャガチャ鳴らせて暴れるキャスリン。フラッシュの光。

「凄い写真が撮れたぞ、シメシメ」

キャスリン、次第に落着を取戻し、冷く言う。

「…寄ってたかって無実の罪を着せやがって…。あんた達、こんな格好の私の写真撮ってさ、賞与の一つにでもありつけるって訳ね。くそっ、少し緩めてよ、この手錠…。イ、痛い…」

婦人看守、正面に回って往復ビンタを加える。キャスリン、少し涙声。

「……ああ、もう…こんな扱い、辛抱できないわ…早く殺して…：けど本当に、ホントに…人殺しなんかしてないのよ…誓うわ…」
婦人記者「キャスリン、気持よく分るわ。助命嘆願は出してるんでしょ？ 審査中だからネ。希望を捨てないで待ってるのよ」
キャスリン、上体を思い切り屈めて手錠の手で眼をこする。再びフラッシュの光。

婦人記者、タバコを口に咥えさせてやり、火をつけてやる。一口吸い込んだキャスリン、くらくらとした様子。ペッと吐き棄てて身を揉む。

「憐れんでなんか要らないわ…なにさっ。何とでもお書きよ。けど何度も云うけどネ、濡れ衣なんだからネ……」

婦人看守、きびしく云う。

「キャスリン…」

睨み返すキャスリンの眼。

「何さ…又、ビンタかい？ 手錠嵌められた女を摸るなんて恥かしいと思わないの？」

婦人看守、二人で眼でうなずき合う。

場所 懲戒檻房の前の廊下

さっきの四人連れの婦人達と看守、職員等。

鉄扉の上に「重懲戒檻房NO3」の札。

婦人看守「今、丁度特別重屏禁の女囚が一名いますの。確か一週間の期間で、今日が五日目だったと思いますが……」

扉のカードを調べる。

「ええ、やはり、そうですわ。中、ごらんになるでしょ？」

鉄扉が開けられる。二米ほど奥に更に鉄扉。壁のスイッチがひねられる。微かに女囚の呻き声が洩れて来る。

若い婦人A「何だか恐ろしいわ」

奥の扉が開かれようとする所でカット。

場所 戒護課長の机の所

婦人の課長。机の前に立たされたキャスリン。金髪は乱れ頬が少しはれている様子。嵌口具。

課長、冷然と言ひ渡す。

「……ではね、特別重懲禁五日間よ。今日の午後二時から来週の月曜日の午後二時迄。いいね？死刑囚だと思って甘やかしゃ、つけ上ってさ。少しヤキを入れてやるよ」

場所 重懲戒檻房NO2号の内部

二米四方の暗房。天井に小さな電灯が点いていて内部を照らしている。床は三角の鉄棒を格子に組んである。三角のとがった角が上向いている。床の格子の下には空間がある模様。キャスリンの白い背中が現われ膝で歩いて前に進む。黒い革バンドが両肩、両腋にタスキ掛けに交叉し、捻じ上げられた両手にガッキと後手錠。手錠の

短い鎖は革バンドの交点で固定されて居る。白い背に二条、両方のヒップに各一条の赤い鞭の痕。婦人看守の片脚が映ってキャスリンの背を強く蹴り、キャスリン呻いて前に倒れる。身悶えして振向く口惜しそうな顔。婦人看守の嘲笑と共に鉄扉が閉まる。横手の壁のスイッチをひねる看守の片手。キャスリンの悲鳴が微かに洩れる。

場所 レストランの豪華な室内

夕暮。裁判の時の陪審員だった婦人が二名食事して居る。鞠躬如として給仕するウェイター。

婦人A「……そりゃそうと、そら、例のキャスリンね。まだ無実だ無実だっていつてるらしいのよ。」

婦人B「キャスリン？ああ、あの老婆殺しの。へーえ、諦めが悪いじゃないの」

婦人A「それでね、大分痛めつけられてるらしいわ。あ、此のサラダ下げて……」

場所 重懲戒檻房NO2

扉の前。内外二重の扉が二枚共開き、内の扉の前に立った婦人看守の向う側にキャスリンの哀れな食事姿が見え隠れする。房の入口の床に置かれた深皿一枚。後手錠の儘で這いつくばった格好で、じかに皿から何か啜って居る。婦人看守、冷然と皿を取上げ、悲痛な表情のキャスリンの眼前で鉄扉をガチャーンと閉める。

「お題い！手錠を少し弛めて……」

キャスリンの哀願の声は鉄扉に遮ぎられて途切れる。看守、廊下へ出て外の鉄扉を閉める。

「……アア臭かった……」

低く独語して歩み去る。



五号、以上十名は獄外労役！」

場所 八十五号囚の檻房の前

女囚八十五号、自分の番号を聞いてビクツとし、情け無さそうな顔付き。立上って物入れから戒具を取り出し、次々に自分の身に施す。両足首に鋼鉄の足錠、そして前に手錠がブラ下っている革の腰枷、ついで足の鎖の中央と、腰枷の股革の下部とを別の鉄鎖で繋ぐ。嵌めることは出来ても外すことは出来ない鉄の錠がカチリカチリと嵌まって行く。女囚八十五号、大きく溜息を吐き、両手で顔を撫で首筋をこすり、思い切った

場所 女囚八十五号の檻房の前

朝。婦人看守、鉄格子越しに、指の先で檻房の鍵をもてあそび乍ら事務的に点検する。房内に正座した八十五号の哀れな姿。

「放火罪及び傷害致死罪による徴役十八年。八十五号囚。異常ありません」

看守、次の檻房へ移る。

場所 中央監視台

檻房区画の全景。房の前を行き来する婦人看守達。ブザーの音が響く。監視台の看守の一人、マイクに顔を寄せ、リストを見乍ら放送する。

「出房準備！ 二十四号、三十八号、四十一号……七十五号、八十

様子で両手首に手錠を自分で嵌める。最早や、腰枷に固定され、ままならぬ両手を切なげに動かし、うなだれて、じっと立つ。

看守、鍵で鉄格子の潜り戸を開ける。女囚、床の首枷を拾い、身を屈めて房外に出る。隣の房の前には既に首枷まで嵌められた七十五号囚が、連鎖を首につけられてブラ下げた儘で立っている。八十五号の首に嵌められる革枷。七十五号と八十五号の両女囚の首と首が連鎖される。鎖の先端を首枷の錠前に嵌められる時の八十五号囚の悲しそうな顔。激しい平手打が頬に鳴り鎖が宙で揺れる。

場所 キャスリンの檻房の前

四、五名の職員、看守が鉄格子の前で立止まる。何れも、わざとらしい無表情。キャスリンの顔に見る見る恐怖の表情が浮ぶ。

婦人看守「キャスリン！出ておいで……」

重々しい扉の音。硬張った顔のキャスリン、虚勢を見せて房外に出て両手を揃えて差出す。念入りに嵌められる手錠、腰枷、膝枷。キャスリンを囲んで立去る。

場所 ガランとした一室。

キャスリンと牧師の二人だけ。跪いたキャスリン、蒼白な顔。唇がワナワナ震える。低く聞える牧師の祈声。ままならぬ両手を痛々しげに悶えるキャスリン。

場所 R 婦人重罪監獄の門

一台の大型乗用車滑り出る。後部座席に両側を婦人看守に護られてキャスリンが坐っている。助手席に武装警官。見送る数人の職員。肩をすくめ合って事務所の方へ引返す。寒々しい景色。

第三十六場

場所 S 監獄の廊下

一面に冷いコンクリートの壁。数人の靴音が響いて近づく。角を曲って現われるキャスリン、そして両肘を抱く二人の婦人看守。更に二、三人が続く。大きな黒い眼隠し。手錠が冷く光る。割合に確かな足取りで不自由そうに歩く。

更に角を曲る。突当りに独房の鉄格子。

場所 前記の独房

鉄格子の前で戒具が外される。乾いた金属音。R 婦人重罪監獄から護送して来た二名の婦人看守は、外した戒具を持って離れる。

離れ際にキャスリンの耳に囁く。

「皆、お祈りしてるからね。じゃ……」

S 監獄の婦人職員二名が代ってキャスリンの両肘を掴んで房内に

引入れる。更に他の一人が大きな袋を重そうに持って入る。

眼隠しを取ったキャスリンの手から眼隠しを取上げ乍ら婦人職員が冷く云う。

「さ、着替えをするのよ！」

キャスリン、口をゆがめて房内を見回す。約三米に四米程。四方の壁、床、及び鉄格子の内側はすべて黒褐色のゴム張り。天井の中央に錠前の付いた鉄鎖が一本ブラ下り、天井埋込みの電灯、その他には何もない。

「早くお脱ぎしたら」

キャスリンの両頬に三つ四つ、平手打が飛ぶ。

「くそっ、私、どうせ死ぬのよ！ それなのに……何さ！」

突然、手足をもちいて暴れ出すキャスリン。手早く押え付けて両手に手錠を嵌め、天井の鎖に結んで引上げる。顔をしかめて爪先立ちするキャスリン。三人の婦人職員、手早く脱がせ初める。両足を動かすので足錠も嵌められ、大きな錠を使用して見る／＼うちに剝がれて行く。

場所 死刑執行室

前記の独房の極く近くの模様。天井の高い大きな室の稍々中央寄りに恐ろしい絞首台。床から約一呎ほど高い台の真上に絞輪のついたロープが垂れ下り、ロープは鉄柱に支えられた捲揚げ装置の中へと伸びて居る。数名の男子職員が調子を調べている。遠く離れた把手を引くと、ロープは素早く一米程、捲上げられハタと止る。

場所 再びキャスリンの独房

キャスリン、正面を向いて眼を閉じている。腰部に、サポーターの様なものを締められている。右の脚に古い鞭痕。頬を涙が伝う。

婦人職員達、足錠を外し長いゴム引きの猿又様のものを穿かせる。

下端は膝の上まで。腰を締める革バンドは腰枷兼用のもの。膝の上で、左右それと革バンドがギッチリと締められる。膝のバンドは膝枷兼用で、一呎程の鉄鎖で左右つながれる。婦人職員、更に袋から鋼鉄製の戒具を取出す。重々しい金属音。頑丈な重い足枷。足首に嵌める環と直角に、足裏を回る鋼鉄帯がついている。片方だけで一見、十キロはある。更に一呎程の太い鉄鎖が左右の鉄枷を繋ぎ合わせる。手錠を吊った鎖が外され、太い鉄鎖の端が腰枷の後に取付けられ、グイッと締められて腰枷の前に固定される。別の少々細い鎖が下へ伸び、膝をつなぐ鎖の中央を通って、足枷の鎖の中央部を上げ吊る。これで膝を曲げねば歩けない。キャスリン、身を揉んで泣き出す。手錠の嵌まった両手を顔に当てようとするのが、邪慳に引離され、黒い革バンドが十字に両肩から両腕にかけてタスキ掛けにされ尾錠で締め上げられる。手錠の片方が外され、二人掛りで後へ押し上げられ、ガッチリと後手錠、更に手錠の鎖の中央部が革バンドの背の交点の金具に止められ施錠される。キャスリンの長い金髪が手荒らに束ねられ、太いゴム輪で止められる。

「ヤレ、やっとなだんだわ」

「キャスリン！余り騒ぐと、これよ」

キャスリンの眼前に嵌口具が突きつけられる。床にガバと、ひれ伏し身悶えして鳴咽するキャスリン。背中に押し上げられた両手の指が痛々しく動く。身動きする度に冷たい鉄鎖の音。婦人職員達、鉄格子に入念に施錠して立去る。床にひれ伏したキャスリンの震える背中に数条の鞭痕が残っている。

場所 死刑執行室

絞輪の工合を見ている男の後姿。

新聞の大字し

「キャスリンS監獄へ送られる」

「死刑執行は明朝か？」

「州知事、Nへの旅行に出発。特赦、望み薄」

場所 キャスリンの独房の前。

鉄格子の前の椅子に婦人看守が一人坐っている。キャスリン、床に横坐り呆然の体。

場所 S監獄の正門

社旗を立てた新聞社の自動車一台。続いて、又一台。

場所 キャスリンの独房

キャスリン、悲しげに看守に話し掛ける。

「もう、これで……この手錠やなんか……外して貰えませんか？」

婦人看守、少々嘲笑を含んで憐れむ様に

「可哀想だけど、そのまま……行くのよ。規則なんだから辛抱おし。手錠が締まって来ても弛めてはやれないの。暴れちゃ駄目よ」

キャスリン、大きな溜息。

「……どうせ……殺されるといふのに……。こんなに迄しなくとも……くそっ……。ア、痛い……こんな……アア……」

鎖を鳴らせて、やっとなだんだ。歩き出そうとして、足の鎖に躓ずき、よろける。膝を曲げ、腰を真直ぐ立てて漸く立直る。婦人看守の顔に冷笑が浮ぶ。唇を噛みしめて狭い房内をジャラ／＼と歩き回るキャスリン。

鉄格子に顔を寄せ看守に哀願する。

「お願い！ タバコを吸わせて……」

婦人看守、冷然と

「バカお言い！ もう、水の一口だって駄目なんだよ」

キャスリンの顔がゆがみ、大きな涙がホロッとこぼれる。

「…あの…あと、どの位したら…」

婦人看守、顔をしかめて

「ともかく明日の午前十一時迄には…ね」

場所 典獄室

男の職員が入って来て報告する

「絞首台O・Kです」

典獄、うなずき

「…で、どんな按配だい？」

「今の所、おとなしくしてる様ですよ」

「フン、嵌口具、嵌めとかなくてもいいかな。いや、御苦労。食事

しないか？」

壁の時計は午後一時半を示している。

場所 キャスリンの独房

キャスリン、寝て居るが、背中に当る手錠が痛いのか、すぐ顔を

しかめて横向きになり、ついで俯向く。鉄鎖の音。

コーヒを啜り乍ら、鉄格子越しに冷然と眺める婦人看守。

場所 死刑執行室の横手の小部屋

二人の男、白木の棺を運び込んで立去る。

場所 S看獄の建物の入口

金網付きのトラックから数珠繋ぎの男の囚人五名、前手錠を光ら

せ乍ら降立ち、看守の鞭に追われて内部へ消える。壁の大時計は三

時四十分。

場所 キャスリンの独房

キャスリン、床を転げ回って呻き鳴く。

「…はずしやがれたら！ くそっ」

痒いのか、一しきり顎を床にこすり付ける。

「…こんな…まるで獣扱いじゃないの…」

婦人看守、読みさしの雑誌から眼を離し、

「うるさいわね」

キャスリン

「ね、お願い！ ほんの少し、五分間、いえ一分でいいわ。この手

錠、外して。お願い」

婦人看守、相手にせず再び雑誌に読み耽る。

脂汗を額に光らせ、身震いし乍ら低く呻くキャスリンの横顔。

場所 S市の街頭

夕暮、家路に急ぐ車と人の波。夕刊の見出しの大字し。

「キャスリンS監獄に送られる。」

「キャスリンは本日午前、S監獄に押送され、執行室内の独房に繋がれた。伝えられる所によれば、彼女は比較的、従順に押送を受け戒具を装着される際も、大した反抗を示さなかった由である」

場所 キャスリンの独房

婦人看守は交替している。眺める腕時計は午後七時二十分を示している。

壁を背に横坐りのキャスリン。

「…今…今、何時ですの？」

「何時だっていいじゃないの。余計なこと考えないで御祈りでもしてなさいよ」

突然、身悶えして動き回るキャスリン。

鉄鎖を鳴らせて、重い足枷の嵌った両脚で壁を蹴る。鈍い音。ガバと床に突伏し転げ回って鉄格子に顔をすり寄せる。

「ね…お、お願い…。何か一口飲ませて…。ああ…。苦しいわ、堪らないわ…」

「辛抱おし、でないと…嵌口具を嵌めるわよ。死んで行くお前に革鞭なんか当て度くないものね」

場所 事務室

男の職員、一人当直している。壁時計は午後十一時半。卓上の電話が鳴る。ハッと緊張して取上げる受話器。

微かな電話の声。

「Sですね。こちら州知事秘書官です…」

思わず腰が浮き、椅子がガタンと音を立てる。

「……フフフ、冗談々々…。俺だよ。今、連中とカードをやってるんだ。お前も淋しかろうと思ってな…」

「くそっ。冗談にも程があるぜ。で、どうなんだい？ 景気は？」

場所 キャスリンの独房

鉄格子に背を向けて横向に寝ているキャスリン。両手首にギッチ



リと喰い込んだ鋼鉄の環。手首の皮膚が赤く少し腫れ、所々薄く血が滲んでいる。脚を踏張って寝返りを打ち、こちらに向く。汗と涙でクシャ／＼の顔。眼の下には蒼黒い大きな隈。

場所 S 監獄の構内

高い監視塔が、夜明け前の赤い東空に浮んでいる。

場所 懲役囚の監房区画

小高い監視台を中心に放射状に配列された上下二層の独房群。監視台の前の床を何か這っている。近写、両手両足を手錠、足錠で背

中で一緒にされ、逆海老の儘で尺取虫の様に床を腹這っている一人の囚人の姿。頬には革と金具の嵌口具が喰い込んでいる。

肩、胸、腹を使い、膝を宙に泳がせ乍ら、懸命の努力で監視台の前を往復している。

看守の冷い声。

「おい。一一七号。未だ七十回程だぜ。七時迄に済むのかい？ え？ 済まなきや、どんな懲戒が待っているか、知ってるな」

監視台上の置時計は午前五時十分。

場所 キャスリンの独房

キャスリン、跪ずいて鉄格子に顔を当て、哀願している。

「ねえ、お願い！ 死ぬ前に……せめて一口でもいいですから……何か飲ませて。お慈悲よ……」

婦人看守、読んでいる雑誌から眼を離し、片脚を挙げて鉄格子の間のキャスリンの額を蹴る。キャスリン、もろくもバランスを失って後へ倒れる。鎖のふれ合う音。

「うるさいわねえ。何度云っても無駄よ。今度うるさくすると口が利けなくしてやるから……」

婦人看守、近くのコーヒー沸し器からコーヒーを茶碗に注ぎ、音を立てて飲む。口惜し気に見詰めるキャスリンの大きな眼、涙が溢れて来て啜り泣く。肩を震わせ、身悶えし乍ら、横になり背を向ける。黒い革バンドと手錠で背中に固定された両手。指が切なげに動き手首の所々が、すり剥けて血が薄く滲んでいる。

場所 典獄事務室

典獄、電話の受話器を掛けて立ち上がる。壁の時計と腕時計を見較べる。八時三十分。

場所 キャスリンの独房

房内からの撮影。横坐りで、うなだれているキャスリンの後姿。嵌口具の黒い革具が頬を締め付け後頭部に光る金具。背、脇腹、更に肩の辺りに数条の新しい鞭痕。

鉄格子の向うに典獄以下、数人の姿が現われ、こちらの方へ来る。ビクッと身を固くするキャスリン。

婦人看守「あまりうるさいので、先程とうとう嵌口具を嵌めて、革鞭を半ダース程加えました。懲戒課へは電話で報告しておきました」

典獄、軽くうなずき、鉄格子越しに声を掛ける。

「どうだい？ 御機嫌は。ぼつ／＼行こうぜ」

冷い錠の音。重々しく格子扉が開き、二人の看守が入って来て戒具を検査する。嵌口具を一旦、外し、更に入念に嵌め直す。外された僅かの隙に絶叫するキャスリン。

「ちよっと待って！ 私の息子に云ったことが……ア、アウ……ウ……」

容赦なく噛まされる嵌口具。続いて医師が入って来て、心臓の位置に革バンドを利用して聴音器とゴム管を取付ける。覚醒剤の注射。「さ、立て。出るんだ！」

看守の冷い声。キャスリン、必死に立ち上がり、重い足枷のついた足を踏出す。膝をガク／＼させ、鉄鎖を引摺って鉄格子を出る。誰も支えてもやらない。キャスリンの正面。虚ろな眼。房を出た途端に膝をつく。全身がわななき、身を揉む。看守達、意味ありげな眼配せと薄笑い。

両側から肘を搦んで立たせる。一步毎に足裏の鋼鉄帯が床に冷く

鳴り、膝を曲げたキャスリンはアヒルのように腰を振り乍ら歩く。鉄鎖が深くく喰い込んでいる。

第三十七場

場所 死刑執行室

入口に哀れなキャスリンの姿が現われる。

絞首台を見て、よろ／＼とする。看守、両腕を支えて引摺る様に絞首台上へ連れて行き、素早く絞輪の革を首に捲付け軽く締める。キャスリンの前方に典獄以下、立ち並ぶ。聴音器のゴム管が、上方から垂れている管に接続される。キャスリンの後姿。後手錠の両手が必死の動きを示し、絞輪から逃れようとする、はかない努力。ガクリと膝を折った途端、グツと締まる絞輪に、立直って頭を大きく振る。嵌口具の奥から低い微かな呻声。

把手に指をのせ、典獄の合図を待つ看守の赫ら顔。突然、電話のベルが鳴り響く。受話器を持つ典獄の顔に何かホツとした様な表情。「…では一応中止します。はい、わかりました」

絞首台から降ろされたキャスリン、壁際に連れて行かれ、壁の鉄環に太い鎖でついている鋼鉄の首枷を首に嵌められ、放心した様子でうずくまる。

壁の時計は九時二十分。人々にコーヒーが配られる。典獄コーヒーを啜り乍ら低い声で

「十時迄待って、指示なければ…」

鎖で首を壁の鉄環に繋がれ、後手錠、足枷のままで床に突伏して身動き一つしないキャスリン

場所 S監獄の一室

ソファ、椅子、テーブル等。七、八名の男女の新聞記者が談笑

している。

男A「さあ、どうなるかな……」

婦人A「結局駄目だと思うわ」

男B「一つ賭けるか。あと十分間だね」

婦人B「知事閣下も残酷ねえ。一思いに執行しちまえばいいのに」

男A「今、彼女はもう死んでいるのかな？」

婦人職員一人、入室する。

「皆さん。特別に見学が許可されました。執行室へ御案内致します」
てんでに声を上げ、カメラを構って立上がる。

「…あ、カメラはいけません…」

一同、どや／＼と室外に急ぎ去る。

場所 執行室

記者達、ゾロ／＼と入室。大勢の足音にビクリとしたキャスリン顔を床から上げて見る。

キャスリンの姿を見、絞首台を見て、息を呑む婦人記者達。静かに後方に立ち並ぶ。

婦人記者A「可哀想ねえ。どんな気持ちかしら」

婦人記者B「インタビュウし度い？フッフ」

キャスリン、突然、激しく悶える。後手錠から脱しようと思死のものがき。嵌口具から洩れる恐怖の呻き声。冷たい鉄鎖の音。

婦人記者B「ね、ここへ来てから、ずっとあんな風にされた儘ですってさ」

婦人記者A「まあ、そうお。あのもがき方！もう少し楽にさせてやればいいのに」

時計は十時直前。沈黙した黒い電話器。額に深いしわを寄せた典

獄、ソツと合図する。

婦人記者の顔の大笑し。眼鏡が光る。画面の外で激しい鞭の音が二つ三つ。鎖の音。

押しつぶされた悲鳴。婦人記者の顔がピクピク動く。

絞首台上に立たされ、絞輪を首に捲かれたキャスリンの姿。聴音管がユラ／＼揺れている。記者達の額に浮ぶ脂汗。固く閉じたキャスリンの両眼。タスキ掛けの黒革バンドのため、一きわ盛上がった豊かな胸の上部に二条の赤い鞭の痕。時計、十時三分を示す。

医師、両耳に聴音器をさし込み、カードと鉛筆を手にして典獄の方を見る。途端、飛上がる様な電話のベル。キャスリン絞首台上でグラリと倒れかかり看守急いで駆け寄って支える。

記者B「どうやら、俺の勝らしいな」

受話器を握る典獄の頬に微笑が浮ぶ。

「承知しました。左様取計います…」

典獄看守に扉を指さし、両腕を拡げるジェスチュア。新聞記者達に低く告げる。

「詳しくはあとで言います。一応、外へ出て下さい」

ガチャツ、ガチャツ、一步毎に足枷を床に鳴らして、よろ／＼と

室外へ曳かれるキャスリンの後姿を見送る一同。

第三十八場

場所 典獄室

典獄の机の前に、革製のパンツ一枚のキャスリンが立っている。

腰枷、前手錠。シャワーを浴びたらしく金髪が光っている。典獄の声。

「……知事閣下から特赦が下りた。で、死刑を免じ終身懲役に変更

する……」

「あ、では……やっぱり……無実が分ったんではないのですねえ……」典獄の眉がピクリと動き、傍らの看守のビンタが飛ぶ。悲鳴をあげて身をもむキャスリン。腰枷で押えられた手錠がガチ／＼鳴る。

「未だ、そんなことを考えてるのか！ ま、いいよ。R監獄へそう云っとくから。それでと。お前がおとなしく脱がないもんだから着るものがないじゃないか。まあ、陽気もいいし、そうしてR迄連れて行ってやるからな。その革パンツは貸してやる。何か喰わせてやるから、喰ったらすぐ出発だ」

場所 監獄の事務室

壁際に正坐したキャスリン、床におかれた深い木皿に、じかに口をつけてドロ／＼したものを貪り吸っている。職員達のさげすみの視線。

婦人職員A「ホホホ、犬みたい……」

婦人職員B「だって、そんなこと云ったって、手が使えなきや仕方ないじゃないの」

夢中で吸り終えたキャスリン、皿の底を舐めようとし、ハツと身を起す。あたりを見回わし、忽ち両眼に溢れる涙。身もだえし、激しく鳴咽する。

場所 S監獄建物の玄関

カメラを持った記者連中。玄関に一台の乗用車。一人の男の看守と一人の婦人職員に護られたキャスリン、曳かれて出て来る。腰枷前手錠の他に膝枷も嵌められている。記者達に気付いたキャスリン思わず胸を手で隠そうとする。ままならぬ両手の哀れさ。手首にガツキと喰い入る鋼鉄の環と、そして腰枷につながれてグツと引張ら

れている短い鎖の太写し。へたくと、へたり込むキャスリン。看守の叱り声。三つ、四つ、フラッシュの光り。腕を支えて無理に立たされる。一斉にフラッシュが光る。無念の表情、物凄く睨みつけるキャスリンのゆがんだ顔。車に押込められ滑り出す。

記者A「……しかし又、気の強い女だなあ……」

記者B「何故さ？」

記者A「だってさ。奇蹟的に命拾いしたばかりだというのに。見たかい、あの顔付き」

第三十九場

場所 R 婦人重罪監獄の廊下

婦人看守に腰の鎖を取られて曳かれて行くキャスリンの姿。既に完全な女囚。

例のチャック付の囚人服。素足。金髪は無残にも数縷を残して切られている。革の首環。腰枷、前手錠、腰下から鎖で吊られた足の鎖。胸と背と尻の番号は四十号。

遠くで鞭の音と女囚の悲鳴。キャスリンと婦人看守、廊下の角を曲って消える。

場所 キャスリンの独房

鉄格子の潜戸を身を屈めて潜るキャスリン。婦人看守、脚をあげて腰を蹴り飛ばす。足の鎖を鳴らせて倒れ込んだキャスリン、したたか床で肩を打ちつけ呻く。ガチャン、ブーン。施錠の音。口惜しそうなキャスリン。

「ずい分、ひどいことするのね」

「フフフ、これが懲役と云うものよ。ちよっとおいで……」

婦人看守、格子の間から手を入れ、手錠を腰枷から離す。

「当分、房内でもそのままよ……」

「あ、じゃ、……この手錠外して貰えませんか？」

手錠の両手で鉄格子を握って哀願するキャスリン。

「ホホホ、外して欲しい？ ホラ、鍵はこれよ」

キャスリンの眼前で手錠の鍵を見せびらかせる婦人看守。

「じゃ、明日から労役よ。フフフ骨身に応える苦役だよ。ごゆっくり……」

嘲笑を浴せて立去る婦人看守。

キャスリン、己が両手首にガッチリと嵌められた手錠を、じっと

見詰めて呟く。

「……こんなにして……一生涯……」

——終り——

女体

『切腹風景十二態』

(9×13センチ) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

輝美切腹

大手札判(9×13寸) 印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

切腹のプレイ

大手札判(9×13寸) 印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

女性自刃三態

大手札判(9×13寸) 印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13寸) 印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第二百一十一項

米映画「嘆きの天使」

二十世紀フォックス製作
天然色シネマ・スコープ主演 マイ・ブリット、クルト・ユルゲンス
監督 エドワード・ドミトリック

かつて、マルレイネ・デイトリヒが一躍スターの地位を獲得した名作「嘆きの天使」の再映画化。デイトリヒと名優エミル・ヤニングス（故）の代りに、マイ・ブリットとクルト・ユルゲンスが主役を演じている。多くの再映画化の作品が前作よりも劣るという通例を破って、この作は前作より優れている様に思われる。クルト・ユルゲンスがエミル・ヤ

ニングスを凌ぐわけではないのだが、色彩効果とマイ・ブリットという、実生活でも些かサディスティックな噂のある女性が、単にトランスヴェスティスティンであるデイトリヒより適材である為とであろう。音楽は前作と同じものが用いられている（フリドリヒ・ホルンデル作曲の「気儘なロラ」）しかし前作も又、私達に生きている魔女の敘事的な表現の典型として屢々、伝説的な語調を以って語られた。そして多くのマゾヒストが、デイトリヒの主演作「モロッコ」よりも、「間諜X二十七号」や「砂漠の唄」を愛し、ひいてはこの「嘆きの天使」が、極め付きの作品として、もてはやされていた事も事実である。しかし乍ら、戦後この作品は再上映される機会

がなかった。本欄で、この余りにも有名な作品を未だに採り上げなかった理由の大半はここににある。

映画は概要、こうした筋立てで運ばれる。

独乙の或る田舎町の老教授は、担当の高校生が町の場末の酒場の唄い手のロラのストリップ写真を持っている事を発見して叱りつけるが、教授自身がふと興味を覚え、且、又、生徒達がそんないかがわしい所に入出入りすることを監視する為に、ロラの出ている酒場へゆく。学問一本に生きて来た教授はロラに衝動的な感動をうけ、ロラを妻にしようと思う。ロラは妻になったが、教授はそんな女を妻にした事が妨げとなって、職を辞する。各地に其の噂が飛んだ為に、どこへ行っても彼に職を与える学校はない。一生を教員生活に費して来た彼の唯一の職業は教員である。其の途を塞がれたのだから、日一日と生活に窮してしまふ。ロラは再び舞台に立つ様になり、教授はロラの荷物持ちになり下る。それでも彼は一途にロラを愛しており、ロラは彼にとって唯一一つの生活の対象である。其の中に一座の道化が死んでしまふので教授に其の代りを演ずる様に座長から話がある。その初舞台というのが、教授のもと奉職していた町

である。ロラは教授の不幸の原因が自分にあると考え、わざと若い男と舞台の袖で接吻してみせる。怒り心頭に発した教授は発狂してしまい、旧友である校長の好意に抱かれて一座を去る。(但し、この最後の部分については異論があるが、それは後記する。)

私達は、この種の作品に遭遇したときに、必ず引合いに出される我国の作品を知っている。谷崎潤一郎の「痴人の愛」であり「春琴抄」であり、「富美子の足」である。これらの作品と旧作「嘆きの天使」は年代的にも内容的にも可成りの親近さを持っている。けれど、潤一郎の作品の春琴にしても、ナオミにしても、まして富美子にしても、神秘的なまでの魅力というものを持ってはいない。それは、潤一郎が、マゾヒストでなく、フェティシストであったからであろう。マゾヒストは神秘性を重要視する。神秘性のみが、彼の優秀な頭脳、博い智識などを女性に隷属させる為の唯一の合理化の手段であり、彼は必らずといってよいほど人一倍の観念的思考偏重者であり、合理主義者であるからである。そして、マイ・ブリットは広大なスクリーンに、神秘的顔癪を再現する。其処に発散されるものは、エロティックなどという単純なもの

はない。現象的にはフッス・フェティシズム、精神的サディズムが表現されるが、ここにはあらゆる世紀末的な要素が結集された雰囲気背景を持って、にじみ出る様な、汎サディズム、汎マゾヒズム、汎フェティシズムが快感を伴った不潔感と共に描き出される。画家R・シュリヒテル、E・シイレ、G・グロッツが残した画業の大部分を占める憂鬱な、しかし高貴な格調と、怖しい程の圧迫を伴った顔唐が、ここに在る。

ロラは男を破局に導く為にのみ存在する女性である。その魔性は、かつてローラ・モンテスに、ナナに、又、ポムパドウル夫人に、将又、ルクレチア・ボルジアに姿を現わした。又、同時に私達は、同型の女性が存外、身近に存在している事に驚ろかされる事がある。マイ・ブリットは快よいまでにこの種の女を表現する。それは彼女自身が、その様な個性をもっているからかも知れない。鞭に拠る支配よりも更に強力で、更に徹底的な支配は精神によって行われる。この種の支配は、さながら原始土民が決して美しいという概念では考えられない奇怪なトータルポールを作製し、跪拝するのに似ている。この種のサディズムを撒き散らす女性は、彼女自身が与え

た苦痛については直接的に何の関心をも持たないのが通例である。彼女は只管に、自らの安楽と本能的な希求に従って行動するのである。けれども、与えられる側において、その苦痛は甚だ深く、かつ烈しい。そして最も重要なことは、与えられる側は、常にその苦痛に勝る快楽をも享受することである。この快楽が、ひたむきな慕情を募らせ、そして彼自身を深淵に導いてゆく。

若し、この作品が独乙で作られたならば、私達は更に饒舌なサディスティンを得ることが出来たであろう。アメリカ映画は遂に不完全な良識の制約の外に出る事は出来ないのである。この優れた個性、蕩尽される莫大な弗によってさえも。

静かに、深く、サディスティンの理想像を、貴方が心の中に刻もうとするなら、そうして、憧憬的的形成する事が必要であるほどに、性癖に不満を感じているならば、この映画は、たしかに何等かの示唆を貴方に与えるであろうと思われる。しかし、それが単なる暗示にとどまるか、直接的な感動をマイ・ブリットの映像をとおしてうけることが出来るか否かは、貴方の内的な条件によるであろうし、同時に貴方の精神能力による。

復刊 第二百二十二項

西独出版物「二十世紀の前半」より

= "Die Elste Jahre des XX

Jahrhunderts" =

バンダ書店刊 (VERLAG BANDA)

米誌ライフに年鑑があるが、これは体裁がよく似ている。カイゼルの支配、第一次大戦そして、戦後の貧窮と再建、ヒンデンブルグの登場とリープクネヒト等の活動、ヒトラールと、そのナチスの抬頭と支配、やがて来るその没落、再度の敗戦と独乙の分割、西独の繁栄を写真によって説明する二冊一部の書籍。

この何千葉かの写真の中、私達が注目すべきは第一巻の初めになる一九〇〇年代の風俗の中でコルセット、ウエスト・ニッパ及びこれ等の使用によって生じる、いわゆる蜂腰、鳩胸美人と、ナチス繁栄期のユダヤ人圧迫とヒトラール・ユーゲント女子部についての写真、第二巻末に近い戦犯裁判中のイルマ・グレーゼ（ここではこう書いてある IRMA GREESE、）の写真とである。今世紀初頭の風俗については、巷間、周知の事であるから詳述はしないが、この特有の一種の奇形を愛する人々が特に西欧には多いことを指摘せねばならない。コルセット好きと云う人々は、

はっきりと二つの系統に区分される。第一には、女性に着用させてその美しさ、及び、それに伴う苦しみを感じとり、想像する人々。彼等はウエストの細きを以ってよしとする。

ブロードウェイで一時評判であった女優アンナ・ヘルト（又はヘルド）の特有の病的に細いウエストは未だに伝えられ、語られ、讃美されている。私達は、この傾向を可成りの分量で米国や欧洲の特殊出版物の中に発見する。我国に於いても推理小説家の朝山靖一がこの種の系列に属する嗜好を持っているかに聞き、且つ、その種の作品が三、四点指摘されるが、真偽の程は判らない。これらは男性サディズムの複雑、且、緩慢な変型と考えられる。他の系列に属するのは、女装の特長としてのコルセットを好む系統である。これはこれで又、多くの症例がクラフト・エビングを始めとして挙げられてきているが、これはコルセットを男子が蒐集し、自ら装着することを好むもので、締める事によって生ずる苦痛は、そのまま彼自身の女装意識を強める。

この二つの系統は互に交流することなく、且、干渉することなく今日に至っているが、そのいずれの系列に属する人でも、ここに挙

げた写真や図譜は参考となると思われる。猶、一九五八年十二月号の米誌コスモポリタンののはじめの方に、甚だしく細いウエストの女性の写真が掲載されていた事を付記しておく。

第二に、ヒトラール・ユーゲント女子部については、我国には紹介された点が甚だ少いで説明しておきたいと思う。ヒトラールは教育について非常に効果的な施策を布いていた。ヒトラール・ユーゲントは半強制的に青少年を加入せしめた青年団であるが、労働すること認識せしめるために、又、ナチズムを滲透させるための団体行動が強制された。ナチズムが奇妙に抱懐していた変態的嗜好のために些か不思議と思われる事も実行されていたらしい。ここに後日、ユダヤ人圧迫が国策となつた時の彼らに対する処置が理解されるのである。それと共に、強制収容所の所員になつた女性の多くが、ヒトラール・ユーゲントの女子部に属していた者であることも注目されるべきであろう。

本誌十二月号に本項に関連のある記事があり、気付いた点があるので付記しておきたい。六十四頁、藤山秀緒さんの「ベルリン最後の日」についてであるが、フィクションであ

るこの種の作品に余りに酷であるかも知れないと思ひ乍らも、矢張り指摘しておいた方がよいと思うので書いておく次第である。六十五頁、上段四行目のリンダ・ユンケルという女性名について。敘述によると日独混血であるというが「リンダ」は愛称であつて、ウィリアムをボブと呼ぶのと同じものである。従つて、この場合は「ヨランダ」ユンケルでなくてはならぬ。その上、ヨランダは伊太利人特有の名前である。同段の九行、ナチス親衛隊に入つたとあるが、通称SSと呼ばれるこの隊の女子制服（軍服ではない。）は黒のキヤップと黒シングル衿の上衣、黒スカートである。乗馬ズボンは男子のみ。長靴を用いてもズボンは用いないものである。特に六十八頁、上段の如く、ナチス軍（？）の正規の軍装であればズボンは決して用いない。七十三頁、十四行（中段）の婦人騎兵将校も誤り、これは存在しない。それに騎兵、歩兵の兵種の別のあるのは「独乙国防軍」だけで、ナチスにはない。私は藤山さんに特殊の親近感を持っている者であるが、善意から、以後お書きになるものについての御参考までに申し上げます次第である。

猶、女性でSSが乗馬ズボンを穿くのは、

収容所関係の可成り自由のきく地方の場合と、私的に乗馬する時だけであり、黒一色の制服は戦争中に篤色制服をも併用することがあつたのみで、やはりスカートに短靴、又はスカートに長靴というのが正規の婦人制服であつた。

第三のイルマ・グレーゼについては從來、屢々、扱つて来た。稀代の美しいサディスティン。ベルゼン収容所で鞭を揮つて囚人を虐使して観覧するなど、その言動に珍奇なものを感じさせる人物。詳しいことは本欄の旧号「ヒトラーの火葬炉」を参考にせられたい。ここに出ている写真は法廷から退出するところ。昔日の美少女は益々美しく、事情が許せば何度でも繰返したいといわんばかりの表情

である。死刑の判決をうけ、処刑された。惜しむべき女性である。

人名等原綴

○May Britt; Marlene Dietrich; Emil Tanings; Transvestistin; Triedrec'h Hollän der; Lola; Rudolf Schlichter; Egon Schile; Georg Grosz; Lola Montez; Nana; Madame Pompadure; Tucrezia Borgia;
○Kaiser Willhelm II; Hindenburg; Karl Tiebknecht; Adolf Hitler; Irma Greese; Auna Held; Cosmopolitan; Auto-bahn; Tinda Tunker; Tolanda; Bergen-Belsen.

kk叢書発刊予告

- 第一巻 沼 正三 「マゾヒストの手帖」
- 第二巻 松井頼子 「淫火（みだらび）」
- 第三巻 森本愛造 「残酷な女性達」
- 第四巻 土路草一 「潰滅の昨夜」
- 第五巻 春田一郎 「幽囚十カ月」

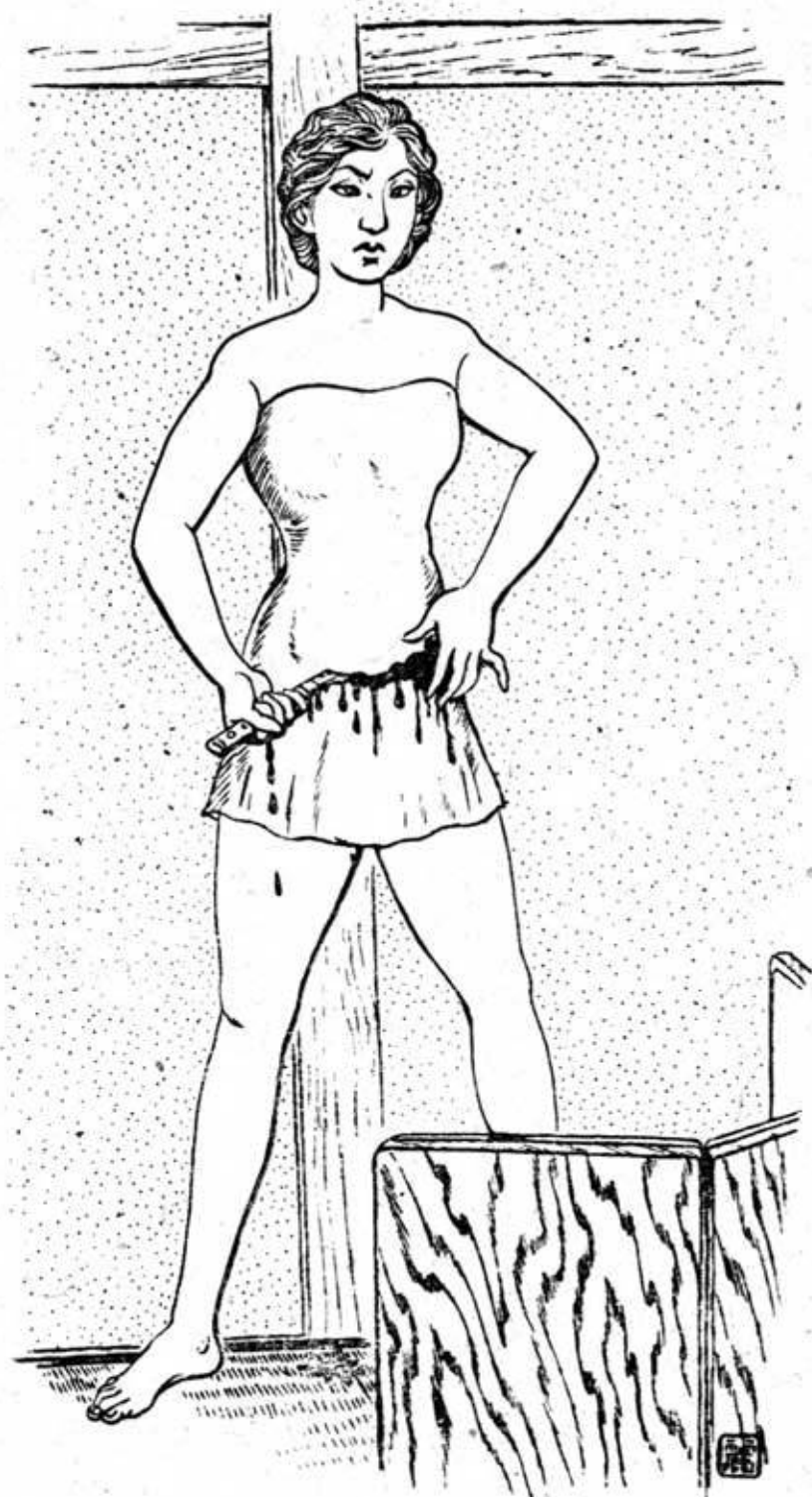
（以下続刊）

KK叢書と題して右の通り本誌に既発表の傑作を単行本化して皆様の机上へ捧げたと思います。各趣向のものを漸次取り揃えたい考えですから、こういったものを発刊してほしいという御希望がありましたらどしどし御申越下さい。尚、定価その他詳細に関しましては、いずれ完成次第誌上に広告いたします。

創

作

割腹したファッション・モデル



遺書を書き終って、和子は静かに顔をあげた。もう泣いてはいない。

立ち上って三面鏡の前に行く。ファニーフェイスと皆に愛された、あどけない顔が、すんなりとした姿態の上で鏡をのぞきこんでいる。

「この私が、もう何分かしたら死んで仕舞うのかしら。血にまみれて……本当だろうか……いいえ、私もお父様の娘、恥をしのんで生きるより、いさぎよくお腹を割いて、見事に……」

八木和子。彼女は数多いファッションモデルの中でも一際、群を抜いた存在だった。ドイツ武官を父に持ち、めぐまれた体格と知性

法 谷 四 郎

的な眸を持つ彼女は、或る雑誌社の強引なく
どきで、二年前、初めてモデルとして人々の
前に立ったのだった。ニューフェース現わる
人々は拍手を送り、以後彼女はモデル界の女
王としてファッション界に君臨してきた。

フランスのクルベが「ジャポニカ」を作り
ニューヨークのサックスが「カズコファニ
ー」を売り出し、そして三カ月前、彼女はア
ジアの女王としてシンガポールにおもむい
た。そして今日から五日後には、マイヤミ・
ビーチで行われる「ミス・コロナ」に斯界代
表として太平洋を渡る筈だった。

所が、彼女がシンガポールから戻ってくる
前に、彼女を中傷する噂が急激に拡った。そ
してそれを追いかける様に週刊誌、赤新聞が
興味本位の暴露記事を書きなぐった。

「八木和子、インドにおける秘密の結婚」「
ハレムの八木和子」「インドの高官に媚をう
る日本娘」等々。あらゆる記事は、シンガポ
ールで八木和子が如何に乱脈な生活を送った
か、宝石と引きかえにインド人に身体を売っ
たという様な最下等のものもあった。

勿論、帰国した和子は身の覚えのない事だ
った。すべては彼女の名声の失墜を狙う同僚
達の、あくどい戦術だった。彼女は泣いて抗

議し、週刊誌には小さく取消しの記事が出
た。しかし、そんなものでは、もうどうにも
ならなかった。和子は噂の渦におぼれ、遂に
「ミス・コロナ」日本代表としての地位を譲
るように協会から勧告されたのだった。そし
て今夜八時、協会の使者が代表として彼女が
持っている王冠を引きとりにくることになっ
ていた。

時計が鳴った。親友のF・Hが贈ってくれ
た鳩時計が七時半を指している。和子はキッ
と眸をあげた。顔色が蒼い。そっと薄く紅を
さす。王冠を引き渡す八時迄に和子は切腹し
て、王冠の女王としての恥をそぐつもりな
のだ。

「恥を受けて生きるより、いさぎよく……」
彼女は鏡台の引出しから短刀をとり出すと
しばらくは胸に抱き、やがて着替えのために
次の部屋に、はいっていった……。

☆ ☆ ☆

七時五十分。八木和子は再び三面鏡の前に
立った。若鹿の様な、しなやかな二十二才の
肢体を包む純白ナイロンの水着姿。

波の様に流れる黒髪の上には、英国王冠を
模して？ 作ったといわれる、金色燦然たる
「女王」の象徴が輝いている。

和子は息をつめて、最後の吾が姿に一瞬見
入った。白い水着の下でふっくらとした胸が
かすかに息づく。

「このお腹を私は切るのだ。一文字に……」
せつないものが喉元を、こみあげた。

「さぞ、痛かろう。しかし私の無念さに比べ
れば……きつと思うままに切って見せる……」

五日後、マイヤミ・ビーチで見せる筈だっ
たこの美体を、誰れにも知られず此処で切り
さく。王冠を受けとりにくる協会、新聞の連
中が、さぞ驚くだろう。そして意地悪の同僚
達も……和子はかすかな微笑みを浮かべると
三面鏡の正面の柱に背をもたせ、右の手に白
布を巻いた短刀を握った。

和子はせめてもの願いに、腹を切る吾れと
吾が様を見つめ乍ら死んで行こうと決心して
いるのだった。それは常に人々から見られて
いるというモデルとしての悲しい性質^{さが}なのか
も知れなかったが、それよりも寧ろ、汚れの
ない娘の身を、吾れと吾が手で切りさき、血
の中で汚して仕舞うことを、しかと吾が目
見とどけておきたかったのであろう。

「八木和子、ここに無念の立腹を切って相果
てる」

口の中で、つぶやく様にいうと、短刀の切

っ先を左の脇腹にあてた。後の柱に、しっかりと背をもたせ、両足を強く踏んばると、大きく息を吸った。息をつめ、両手で短刀の柄を強く握ると、「ウッ」掻き抱く様に、一気に突立てた。

「クッ、ウウッ……」

喰いしばった唇から、思わず洩れる苦痛のうめき……

「ウーむ……」

身体を、そらせる様にしてのび上る和子。純白の水着の下で腹皮の裂ける音が、グググツときこえ、短刀を握る右の手が、かすかに震える。水着が真赤に染まってきた。

「むっむっ、無念。八木、八木和子の死に様は、こっ、この通り、うっ！」

両足を踏みしめると、喰い入った切っ先を七分の深さで、ギリギリと右へ。

「うーっ、なんの、ああっ、あうっ」

鏡の中の八頭身のしなやかな姿態が、今は苦痛にもだえ、その度に水着が裂かれていく。

ファッション・モデル、八木和子の壮烈な立ち腹。たぎる様な苦しみ、鏡の中の和子を襲う。

「これではならじ」二度、三度、深く肩であ

えぐと、突きささる短刀の柄を、もう一度、握りしめる。

その時、けたたましい呼鈴。そしてノックの音。遂に協会からの使者がきたのだ。応待する女中の声が、きこえる。

「早く、早く切り終らなければ」

心中あせる和子。息をつめる。歯をかみ合わせ乍ら一息に右へ――。

「ウーッ。ム、ム、ムッ」

強じんな手答え。うめき乍らも、ぐしっと力にまかせて右脇迄。血がせきを切った様にふきこぼれる。五寸余り裂くと、「ウム」とうめき乍ら短刀を抜きとった。

三面鏡の中の吾が姿。

「とうとう切ったのだ。一文字に……」

和子は一瞬、ほればれと死に行く吾が姿を見守った。白い水着は真赤にそまる。

「ああ、苦しい。く、くるしい。は、早く、とどめを……」

和子は、目の前が暗くなってくるのを感じ足がよろめいた。思わず「ううっ、むっ、はやく」腹の底から、しぼり出す様に、うめくと、ガクツと膝をついた。王冠が外れて床に転がった。

その時、どやどやと入ってきたファッション

ン協会の理事、新聞記者。

「あっ」「これは」驚き騒ぐ人々。見よ、ファッションの女王、八木和子は女の身で自ら一文字に腹を切って血の海の中に突っ伏しているのだ。「医者だ」「救急車だ」

しかし八木和子は、それを押し止める様に顔をあげた。

「み、みなさま。もう、もう。八木和子、かくごの切腹。助かる、助かる様な切り方はしておりません。むむっ、ううむ、恥を、恥をそそいで……」

途切れ、途切れに、うったえる和子。

「お、お願い。恥を、恥をそそいで」

しかし人々は余りの壮絶さに唯、息をのむばかり。

「む、むうっ、なにを、うむ。みなさま、や、やぎ和子、和子の無念は、こ、この通り。恥を、は、はじをそそいで。この通りっ、ううっ……」

「八木君、よく分った。君は今まで通りの美女の女王だ。新聞記者諸君もよく分ってくれると思う。必ず、君の恥はそそいであげる。約束する」和子の耳もとで、しっかりといい切る東田協会長。うなづく一同。

「う、うれしい。この上は……、ううっ」

身をおこし短刀を再び握りしめる和子。そして不図。カメラマンの姿を見ると、最後の力をふりしぼって立ち上ろうとする。「まって。す、すこしまって」「く、くるしいわ。あうっ、だれか」和子が苦痛に身をもむ。その無残さ。もがき乍ら、モデルとしての最後のポーズをとろうとする和子。

「いっそ、いっそ掻き切って……」短刀を持ちかえた和子は、狂った様に振りつづける。

「うわっ。や、やぎ和子。モデルとしては、はらをきって……腹を掻きさばいて……この通り……」

王冠を再び頭に、すくっと立ったファッションの女王……。血に染んだ左の手で傷口を押さえ、右の手は、しなやかに……苦痛にふるえる脚をそろえ、断末魔にあえぐ胸のふくらみ、純白ナイロンの水着が真赤に染まる。そして、黄金色、燦然たる王冠のもと、八木和子は死の苦しみのうち勝ち乍ら、自らの腹を見事に切り裂いた誇に輝き乍ら、かすかに嘗ての日、全国の人々に愛された微笑みを一瞬、うかべる。

キラッと光るフラッシュ。二回、三回、そして、もう一枚、レンズは、腹をきったまま微笑むファッションの女王の腹切りを吸いつくす様にまたたく。

「もう、もう、ゆるして、おねがい。ゆるして、……」切な気に、うめく和子。どきりと床に倒れしなやかな両足が二度、三度と苦痛に宙をける。拾い上げた短刀を胸へ、ふるえる手に切っ先を定め、のしかかる様に……。

「ううーむっ」深く一声……

八木和子、ファッション界の女王、彼女は自らの手で、その美しい身を引きさいて散ったのである。時に、太平洋の彼方、ミスコロナ・コンテストの行われる五日前、午後八時十分であった。

(完)

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号しん1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号しん2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号しん3)

☆全裸縛り

六枚一組 四〇〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号しん5)

五枚一組 三三〇円

☆股間しばり

四枚一組 三〇〇円

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

ES1 ノード緊縛集

モデル

佐賀美智子嬢
三枚一組 二五〇円

ES2 全裸悦嬢集

モデル

須川 令子嬢
四枚一組 三〇〇円

ES3 羞

モデル

佐賀美智子嬢
三枚一組 二五〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル

佐賀美智子嬢
二枚一組 二〇〇円

ES5 脱がされる娘

モデル

須川 令子嬢
五枚一組 三五〇円

ES6 あわや寸前

モデル

佐賀美智子嬢
二枚一組 二〇〇円

ES7 剥れたズロース

モデル

佐賀美智子嬢
五枚一組 三五〇円

ES8 乙女のすべて

モデル

花坂 道子嬢
七枚一組 四五〇円

ES9 女学生の縛り

モデル

須川 令子嬢
二枚一組 二〇〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル

佐賀美智子嬢
六枚一組 四〇〇円

蠢く蒼い群れ

近藤

(上)

この一篇のストーリーが、
真実の記録として映るか、
或いはまた、単なる一個の
フィクションに過ぎないも
のとして読み取られるか、
それはお読みになる方の御
自由である。しかし、この
ストーリーの中のシチュエ
ーションに、私が異常な関
心を寄せ、強い情熱を以て
取組んだことだけは、事実
として附言して置きたい。

明るいグレと濃紺に塗り分けられた車体のバスが、正午を過ぎて少し経つと、検察庁の脇から人目を憚るように動き出す。何気ない風を装いながら南へ向って走る車中には、どんより澱んだ青春の汚濁が、或るものはケバ／＼しく、或るものは、うらぶれた装いに身を包んで、動物的な逞しいエネルギーな匂いをムン／＼発散させていた。

左へカーブ。ぐうっと揺れる。続いてまた左折して、車は公園の片隅に停まる。採光の行届いた建築物は三角形で有名な図書館であり、その裏側の路を挟んで建っている二階建の白い建物、バスの到着先「家庭裁判所」なのである。丁度、昼休みのこととて、近く

み、キャッチボールに汗を流し、車の往来の乏しいことを幸いに、公園内の道路一杯に打興している。

馴れっこなのか、若者達はバスを見ても何の関心も示さぬ風で、僅かに手を休め途をあけるだけで、バスが家庭裁判所の裏門へ乗り込めば再びプレーは再開される。それがこの辺りの若者達のエティケットでもあろうか。

護送バスは二箇所の扉を使う。運転手は相互の安全のために仕切りで保護されているのだ。その背後の室には、両の手首を手錠で留められ、その手錠を順ぐりに繋がれて珠数つなぎの少年達が幾人かの警官の鋭い監視の眼に晒されながら、詰め込まれているのだ。

運ばれた少年達は、バスから所定の一室へ歩かせられる。捕縄に

つながった奇妙な行列がゾロ／＼と進む時、不要な扉や窓は、すべて閉じて、一般の人々は勿論、面会人も、そして裁判所の一般職員ですら、扉の向うへ追いやられてしまう。

少年の中には男女の別がある。女子がいる場合は、必らず先頭に立たされる。それが慣習とあれば、否も応も無い。女の子が列の中途ということは絶対にない。女の子が幾人かいると、その順序は大概、背丈の低い方から繋がれている。一番大柄な、娘？が男の子との境に置かれるのだ。

バスの揺れにつれて、ぶっかり合う位置の男の子は、面映ゆいような、それでいて、ふて／＼しい笑いを硬張った頬に浮かべている。バスを降りる時も、繋って歩く時も、否応なしに一緒なのだ。

ここへ来る者は精神と身体の発達がアンバランスの裡にあって、何か大事なものに欠けていることが外観にも表わされているのだ。

「到着！」

誰へともなく叫ぶ声がする。少年少女の身柄を詰め込む大きな部屋がある、窓には勿論鉄格子がビッシリはめられ、カウンターのようにな一段高い構造の囲いの中から、警官達が注意深く少年達を見下すのだ。細長い腰かけが三列の並び、縄を解かれ、手錠をはずされた少年が警官の方を向いて三人位ずつ腰をかける。警官から見通せる端に便所がある。万一の事故を防ぐためには、便所でさえ見通す必要があるのだが、彼等の心にどう響くだろうか。

事件記録を身柄と照合、確認した上で、記録は裁判所の事件受付へ届けられ、記録される。受理によって事件は裁判所に係属するのだが、それから先はケース・バイ・ケースなのだ、

「ハイ、記録だよ」

「よし来た」

「オッ、今日は多いネ」

事件を送った警察署へは、少年の身柄を受取ったという受領書を出さねばならない。

「共犯のあるヤツから先にしようか」

少年鑑別所、つまり東京の場合は所謂、ネリカンとして恐れられる所へ収容すべきか否かが、割に簡単な査問で決められてしまう。

「傷害致死、四名共犯か。うん？ 女ばかりだぜ、こりやア。住所不定、無職、ミツチンこと高橋路子。十八年と四カ月か」

「どうせ練馬の常連だろ？ 中少（中等少年院）位、出てるんじゃないか？」

「前歴無し。どうだかね、特少もんだらう？」

だが彼女、高橋路子は正真正銘の前歴なしだったのである。

東京市時代には大森区と蒲田区であった地域が、統合された行政区劃として大田区を名乗った時分から、都内でも有数の大人口を擁する区になり、勢い盛り場も新興され、不祥事の続発に取締当局は忙殺され、追いつかない位になっていた。品川、大井、大森、蒲田などかなり乗降の激しい国電の各駅は、近くの地域から繰り出したヤクザ者、愚連隊、チンピラ達が、それ／＼刺戟と獲物を求めて陰險な視線を投げつけ合う場所なのだ。弱肉強食そのものの暗黒の世界がのさばりかえる夜になると、善良な市民ほど、この上ない好餌として狙われる。足を踏んだとか、肩が触れたとかは勿論、ガンを付けたとか、或いはオツにすまして歩いたとかの因縁が、唯、恐喝の口実のためだけに、何の抵抗もなく存在するのだ。建設意欲のか

けらも無く、自制心も乏しい彼らは、何かのキッカケですぐ頭へ来て刃物を光らせ、ヤキを入れ合う。新興の盛り場につきものの激烈な縄張り争いと、それに伴う凄惨なリンチも絶え間が無い。

人口が多いだけに青少年の非行も驚く程の数になる。何よりも彼らは感じ易い、現代の不安がつきまとう処へ、忍び寄る誘惑が強かつ多過ぎるのだ。眼や耳に悪の世界がヒロイックに洛きつけられる。映画やテレビや出版物では、かなりハイクラスのヤクザ者を恰も一般のもののように描写するために、正業も持たず市民の膏血を絞り取るダニ達の遊び暮す姿が、極端に美化されて映るのだ。

高校や大学の入試に四当五落といわれる青少年である。一日五時

間も睡眠を取っては不合格という有様なのだ。そのコースを他人よりも幾らか楽に歩こうと思えば、中学校、小学校、そして幼稚園からさえ、他人より激しい競争に克たねばならず、そしてそのコースを歩み終えても就職という難関にぶつかってしまう。生き得るだけのサラリーにありつくために青春を摺り減らすことが、果して一般の青少年に求めうるだろうか。映画やジャズやパチンコは最早悪いことでは無くなった。麻雀、競輪、競馬、競艇もギャンブルという程の意識さえしなくなったし、カミナリや神風という狂的なス皮ードが、暴力肯定の風潮に連なり、



更にはストリップ劇場の学割を産む社会にも通じているのだ。

この社会の中にあつて、非行少年を責めるのは酷であるかも知れない。だが、この社会のうちには彼らより遙かに劣等な条件に囲まれながら、尚、向上心に燃えている大多数の少年達の健康な存在を想うと、やはり責めらるべきは第一に彼ら自身であるといえよう。

彼らは、独特の嗅覚で自分の仲間を探り出す。破壊的で戦闘的な彼らは、反面、極めて気まぐれで陽気で人なつこい。忍耐力も自立心も薄弱だから、独りでいることに堪らない孤独を感じてグループの傾向を辿り、誘惑に負けて非行の累犯性を示す。意志薄弱の癖に自己顕示性が症状といえる程に烈しい。

高橋路子を取り巻く環境も、この例外では無かった。

フーコこと筑波令子（恐らくふみこと読むのであろう）、トッコこと小川利子、チャコこと泉京子の三人が、やはり不良少女同志、無闇に気が合うのか、いつとはなしに行動を共にするようになって大森や蒲田のネオンを慕い歩くチンピラの仲間入りをしたのは、それほど近い話でもない。

一人では家から持ち出す小遣銭のごまかし位しかできなかったものが、三人の集まりではお互いに他の力をあてにして予想外の大仕事ができる。近所の子供から金品を捲き上げることができた。学校の同級生や下級生を倉庫の蔭に呼びつけて金を都合しろといえ、必らずいいつけた通りになった。騎虎の勢いというか、学校中の目ばしい少女には残らず眼をつけた。

悪名は急速に広まり、腫物にさわるように避けて通る少女達が殖えると共に、一方では彼女達の顔を窺い媚を含んだ笑いを浮かべて近寄る少女達も殖えた。そういったトッポイ娘達は相互扶助というより、自己保身のために三人の不良少女の威を借りに来た奴だったのだ。

カツアゲ（恐喝）の収穫があつて三人は駅前的小粋な喫茶店に集まった。スリルを追って面白半分口にしたハイボールも、今では喧騒なお喋りの潤滑油のようになっていた。

「アタシたち、何か名前つけようヨ。ぐっとイカスやつでサ、睨みの利くのがあつたらいいと思うんだけどナ」

一番お調子乗りのチャ子の提唱で、令子、利子、京子を中心とする集りを筑波会と呼ぶことにした。三人の中では令子が最もしっか

りしていたし、利子と京子は令子を頼りにするだけの恩義を感じていたからである。三人が一緒に遊び歩くようになった頃、利子の親から保護願が出て警察に呼び出されたことがあつた。利子の両親は自分の娘の不良化を二人の不良少女の影響だと主張してやまなかつた時、何故か令子一人が罪をひっかぶってくれたのである。だが結局、学校や近所でのタカリがバレて三人とも家庭裁判所へ呼び出された。中学三年の初夏の事で、初めてのことであり、進学や就職には一番大切な期間であるからというので、京子には何事も無く、令子と利子は親の監督に任せるということで家へ帰された。不処分として記録が残されたのである。

父親から眼の玉のとび出る程にどやされ、警察や裁判所でツボを心得たお説教を喰わされて、流石に恭順を誓う気持になった三人だが、白眼視する周囲への反撥と、トッポイ娘達の尊敬溢れた英雄視に捻じ曲げられ、やっぱり三人が呼び合うようになってしまった。出る釘は打たれる譬でもあるまいが、学校や近所でいっぱしの不良少女として名が出ると、その辺りの不良青少年からは、いいカモと見られていたのである。

不良少女でも秋には感傷に耽る日々がある。只でさえ進学といふ就職という悩み多い季節に、警察の門をくぐったというコンプレックスがあつては、心の拠り所を渴仰するのも無理ではない。精神的な支えを求めている十五才の少女を欺すのは極めて容易だし、派手好みで大人の世間を覗きたがっている娘達を、寄つてたかつて踏み躪るくらい雑作もないことだった。

スケコマシの謙という名の、愚連隊で一寸売れた顔の奴が、令子を道端の草花程の感じで摘取つたのは、令子が中学三年の秋であつ

た。高校入試を控えた令子と謙との間柄が、それきりで終らなかつたのは、幸いであつたかどうか、今に至つてもそれは断じ得ない。女と生まれた以上、誰しも忘れ得ぬ筈の最初の男という存在を超えて、謙は令子の胸の奥に烙きついてしまった。まるで狂気の熱に憑かれてもしたように、令子は謙に夢中になり、謙の愛情を勝ち得た自信も作用したものか、私立の某女子高校のあまり程度の高くない入試に合格することができたのである。

中心の令子に恋人がついたとなると、利子も京子も落着かぬ気持ちに襲われるし、勢い男の眼を惹く装いにチンピラ達の牙は研ぎすまされていった。ダンスホールへ入り浸る程の資金も無い連中が、安い料金の映画を誘いラーメンの一杯も奢つておいて、不良少女の歓心を買おうと努める中に、一寸ばかりポマードを塗りつけ、マンボ・スタイルに身を固めてトリスのハイボールでも飲ませてくれる男がいると、わけも無くグツと来るのが、彼女達に共通の性格でもあった。

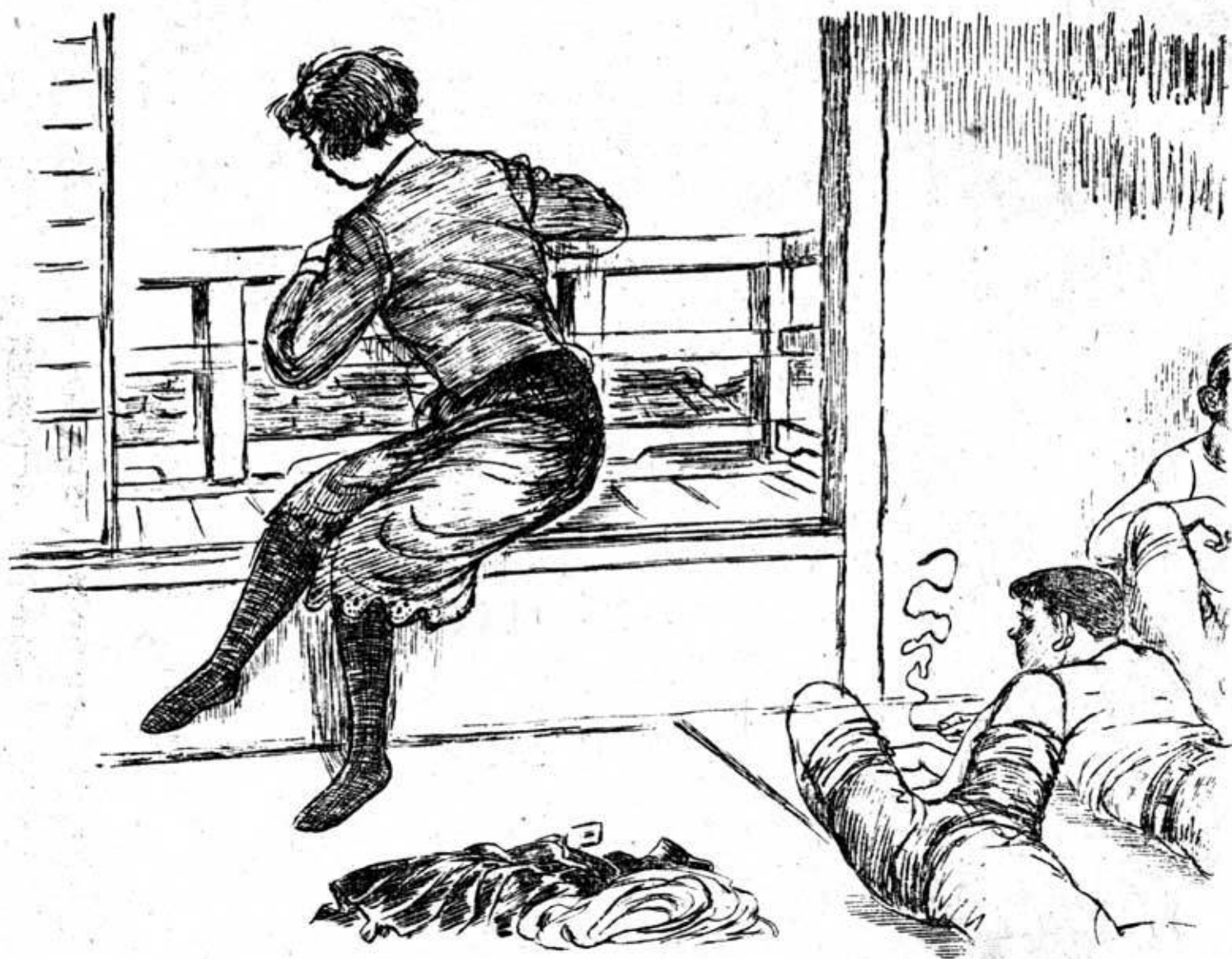
高等学校に籍だけあるという学生チンピラや、中学は辛うじて卒業したが、満足な勤めもできない工員くずれのグループが、溜り場ともいふべき安もののバーに誘つた時の利子と京子は多少の不安を感じはしたものの、それ／＼自分一人じやないと妙な信頼感を抱いて胸を張つてついでに行ったものである。

初めのうち張り通すつもりでいた虚勢も、胸苦しさに全く消え失せてしまい、徒らに男達の嗜虐感をそるばかりになった。面白半分に飲み始めた辛い洋酒が、面白半分に飲まされる苦いカクテルになった。グニャ／＼倒れそうな少女の口を割つて無理に液体を注ぎ込んだ。まるで拷問の図であつた。唇を閉じることすら許されない二

人の少女は、むせて激しく咳込んだ。溢れた酒で露わな胸許が白く濡れて光る。数の上からも非力な少女が、企んだ罠に陥つて、酔いつぶれるのは訳も無かつた。

突然、京子がフラ／＼と立上つた。何かに憑かれたように窓際へ歩を運ぶのを、疲れきつたらしい少年達もグッタリ見送つていた。スタイル自慢で、人一倍外見を気にする見栄っ張りだから、ハイボールが苦く味わえた途端に醜態が怖ろしく迫つて来て、「もう駄目、飲めないヨ」を口走らせた。その口調が真剣過ぎて余りにもしつかりしていたので、少年達にしてみれば利子が彼等を怖れて打つた逃げと思えて、もはや抵抗心など持たせぬほど物倦くなつてゐる利子なのに、無理矢理、注ぎ込む酒で正体を奪つてしまおうとしたのだ。音を上げたのが一番早かつただけに、彼女の許容量は勿論、少年達の中の一歩強い酒好も参つてしまふアルコールが、利子の喉を焼き胃の中でガボ／＼したのだ。瞳がすわり、蒼白な額にジツトリと冷い汗が浮いて出た。徐ろに窓を開き外を眺めたようだった。窓から顔を出し、手摺に寄つて乗出した途端、背が可愛くヒクツと震え、次の瞬間、胃の中の物がつき上げ、吐き出された。京子は利子を、ぼんやり見ていた。そして、モヤ／＼した胸苦しさが吐気だと思ひ当つて、フワ／＼と立上つた。本能的に便所を求め薄暗い隅へ歩きかけると、少年の一人が黙つて手を挙げた。そこに手洗があつた。京子はよろめき込んだ。喉に固まりのようなものがつかえて、苦しくて首を振りながら、京子の醜態を考えたら、その通りになった。

あたしは人の見ている処でなんか吐かなかつたんだ。そう思うと京子は、自分より美しい利子も怖ろしさが薄れるよう



に想えた。それも酔のなせる業なのか。利子は窓際へグッタリ坐りこんでフー／＼喘いでいた。誰かが塩水をコップに入れて来た。窓から、うがいをしながら利子は、また少し吐いた。薬罐に水を汲んで来た奴がいて、利子は長い間、口の中をすすがせられた。京子も同様だった。あるだけのものは出し尽くして、胸の中までをゆすいだ心持になると、体から妙に力が抜けて頼りなかった。

少年達の悪質極まるこの乱痴気騒ぎは、やがて警察が取上げたけれど、たいした問題にはならなかった。やはり被害者の二人の少女が不良少女であったこともあろうし、警察側の立証も困難だったためか。何せ利子と京子が少年達の同伴者であり、虚勢もあって進んでグラスをあけたのを見られているから、いかに利子の父親が躍起になってみても、手が出せない。中に度胸のありそうな奴が動機を訊かれると愛情だと述べる。結婚などは考えないが、然し決して戯れや浮気ではなく、真剣に惚れた結果だと陳述されては反証もないまま、却って利子と京子が厳重な戒告に遭う破目になったのだ。利子に至っては、厳格な父親の前を繕うために自分のふしだらを少年達に責任転嫁したということで、弁解も許されず、警察で怒鳴られたのだ。

この重大な事件を悔むことよりも、サツで怒鳴りつけられたことの方が頭に来て、利子も京子も却ってチンピラ達に接近してしまった。殆んど毎夜のように彼等は溜り場へ集まり、利子達を取り囲んで騒ぎまくる。夜は夜、昼は昼で、令子は謙に寄り添い、利子と京子は大して好きでもないチンピラにつき合った。極めて短かい期間に、三人の娘達は髪型の型も化粧の仕方も歩き方さえも、驚くほど

変化した。それは正に娼婦であった。

謙のものである令子は別格として、利子や京子が、徐々にチンピラ達を征服しグループの女王となりつつあることを、本人さえ意識していない。

「トッコの奴、ちつとばかりイカスお面じゃねえかヨウ」

「奴ら、磨いたらハクイスケになるぜ」

蔭では勝手な熱を吹いて強がるチンピラが、内心では相互に烈しい敵意を燃やし合い、利子と京子を独り占めにしようと、彼女達の歡心を買おうとして露骨な策動に出て来た。

「チャコ、あたし達、誰のスケにもなんの、よそうネ」

利子がそういったのは、或る種の危険を感じたためらしい。少年達の間でいろ／＼な暗斗が繰返されたことを、利子は敏く感じていた。自己顕示の著しく強い少年達が、どんなにひっぱたいても蹴っ飛ばしても、少女を自分だけのものにすることはできなかった。謙が割り込んで来たからである。

謙は令子に命じて、令子の友達を集めさせた。不良少女でも令子は純情だった。女蕩しの謙に真心を捧げ尽して悔いなかった。多少良心に咎めても、恋しい男のために友達を裏切ったのだ。

いきなりバンドが音を立てて飛び交った。白い膚が、ひいやりした空気を感じるような気がして、肩をすくめ胸を手で覆っていると、角ビンの茶褐色の液が注ぎ込まれ、変な味のアルコールが稚い血を浪立たせた。少女達は恐怖し、遂には泣き出した。瞳を見開き、唇をワナ／＼させ、這い廻って逃げる少女を酔った笑いで追いかけるほど彼等は加虐に馴れていた。女を虐めることに殆んど何の感慨も抱かぬまで、チンピラとの差異が大きくなっていったのだ。

愚連隊の気の向く折に、利子や京子は呼出しをかけられる。その使い走りをするチンピラ達は内心穏かではない。自由に振舞う兄貴分達が憎かった。少女達にしても、自分達のいいなりに動いてくれた少年達よりも、自分達を一匹の牝獣としてしか扱ってくれぬ威張屋達を、好きにならねばならぬ理由は全く無いのだ。

割にフリーな利子や京子に比べると、謙の専属という形の令子は却ってみじめだった。充分に飼い馴らされた謙のスケとして、どんな芸当でも、いやとはいえなかった。偶々、戸惑った京子達がしり込みしたりすると、まず手本を示すように命令された。つまり愚連隊にとってはいい馴りものであり、手頃な玩具であった訳である。

少女達は不満のはけ口を酒に求めた。駅前横丁の中程の小じんまりしたトリスバー「M」が彼女達の溜り場だった。カウンターの周りの高い腰かけにお尻を半分程のつけて、彼女達はグラスをチビ／＼なめながら、たあいもない話に夢中になり、やがて自分達が、いかに可哀そうな身の上かを嘆き合って、溜息については暇をつぶすのだ。

世の男共に飲友達ができ易いように、少女達は、「M」で一人の若い女性と友達になった。素晴しく個性的で頼母しい存在だった。ふっくらした頬は血色がよかった。口許はキュッと結ばれ、心もち受け口だった。いつも拗ねているような無口なのが、笑うと何ともいえぬ愛らしさを見せる。右の上に八重歯が一本あって、ニッコリすると白く覗く、瞳は澄んで綺麗だが、眼は細く、切れ長の眼尻に笑うと小じわが浮くあたりは、お姐ちゃんトリオの丸山重子に、そっくりだった。均斉はとれているが、肉附は良く鍛え上げたように締っていた。デラックスな衣服でも見惚れる位な見事さである。

利子が最初に口をきいた。利子がムシャクシャする気晴しに一人でやって来て、止まり木へ腰かけ、「ハイボール」と吐き出すようにいうと、マスターが断った。未成年の利子には酒類を飲ませられない道理である。利子のケンのある顔が一瞬、蒼白く顫えた。

「マスター、私が頼んでも駄目かしら」

屈辱と憤怒で眼を瞋らせている利子の傍らから、ソフトなアルトが飛んだ。

「せっかくムードを愉しみに来たお客様よ。大目に見て上げたらどうかしら。堅いことといわれると、私も追いつけなければいけないのヨ」

苦笑いしたマスターが、利子の前へマンハッタンをグラスを置いた。幾らも年令に違いの無い筈の若い女が、利子からは、ずっと大人に思えた。物静かな微笑と物いいが、頭に来ていた利子を柔らかく包んでくれた。

挨拶を交わし、二、三度、口をきくようになると、忽ち親しみは増した。京子が、すぐになつてしまったし、令子も尊敬を抱いて来た。

淑やかでいながら茶目っ気もあり、音楽なら何でも喜ぶし、少女達のヨワイ知識が、豊かで優雅な物腰の端々に現われている。上品でポリュームがあつてスポーティな処から、少女達は彼女を「ミッチン」と呼んだ。

「ミッチンなんて何だか擦ったいな。でもいいワ。序でに私に名前を拵えて頂戴ヨ」

彼女はミッチンこと高橋路子となつたのである。合作とはいえ、ミッチン自身が選り出したものだから、彼女の本名がこれでないとはいい切れない。

「ミッチンの年令は不詳だった。尋ねても笑って答えない。しかし

会話の端々からは彼女が未成年者であるかの如く想われる。住居は不明だが金は不自由しないらしく、いつも車を拾っては風の様に消えてしまうのだ。だが少女達は余り詮索しなかった。失礼のような気がしたし、それに忙し過ぎて暇も無く、典型的な気まぐれ屋達であつたから。

「あなた達も何か会を作つたら？ 男の子ばかりのさばらしとくことないと思うな。素敵な名前をつけて、ペアッと派手なことやってみない？ それにバラ／＼でいるより、あなた達三人が一緒になつて力を合わせたら、お互いのためにも、いいと思うんだけど、どう？」

筑波会の基礎は、トリスバー「M」のカウンターで作られたのだ。正体不明のチャーミングなミッチンを後援者として、筑波会は悪名を顕わす準備を着々と整えて行つたのである。

「疲れているようネ、フーコ。体をいじめちゃ駄目よ。」

宵のうちからカウンターの隅でグラスを舐めている令子の背中にミッチンが、そっと囁やいた。令子の眼の縁には蒼黒い隈が出てアイシャドウのような蔭を見せていたし、はれぼったい顔に女の匂いが漂っているようだった。

血色の乏しい顔を起こして、まるで怖ろしいものにぶつかったような視線で、ミッチンの瞳をオド／＼見上げた令子の両眼には、フウツと涙が満ちて、螢光燈の光に青白く輝やいた。

「そんなもの一々いいに来ることアねえだろ」

不愉快そうな表情で謙は、吐き捨てるように冷たくいい放った。「金なんか無えヨ。それに、あったってお前にやるこたア無えだろ。お前は俺の女房でもイロでもねえんだからナ。一緒につきあってやっただけの俺んとこへ変な因縁つけに来るのはよしな。只じゃ済さねえぜ！」

令子は捨てられたのだ。だがその想いは、まるで夢のように信じられなかった。確かに謙は初めから令子と結婚しようとか、令子を情婦にしようとか考えなかったかも知れない。

けど、あたしを好きだったことは嘘じゃないんだ。あたしのことグラマーだっていつてくれた。謙ちゃんだって、あたしのこと好きだったんだ！」

未練がましく、令子は自分自身にいいきかせようとしたし、そして祈るような気持で心に絶叫した。

令子に対する謙の扱いぶりを聞いた時、利子も京子も令子に対していい気味だという気持になった。二人がチンピラ・グループのおもちゃにされたのも、元はといえば令子が謙のスケになったからだ。まともな結婚式を挙げて、親兄弟や周囲の人達から羨やまれ飲ばれる生活にはいる夢を捨てなければならなくなったのも、令子のせいだ。

だが京子は勿論、利子にしても執念深く計画を樹てて他人を陥れることなど苦手中の苦手なのだ。今はもう自分達の所へ戻って来た昔ながらの悪友令子に、二人とも、やはり懐しさと友情ともいえる親しみを覚えていた。

令子を、まるで煙草の吸い殻のように捨てて踏み躪った謙に、復讐をしようヨと京子がいい出した。それ応じて利子がいう。



「謙の奴ばかりじゃないヨ。あたし達をいい玩具にしやがったチンピラ達だって、そこから世の中の男という男には、みんな復讐してやるんだ。筑波会みんながやるんだ」

「トッコ、どんなことするの？」

ミッチンが穏やかに水をさしにかかった。ミッチンには、令子に寄せられる同情や義憤を利用して自らの私怨を晴らすとする利子の気持が分らないではない。だが男というものに対する宣戦布告などの大時代なやり方は、少女の思いつきとはいえナンセンスそのものである。肝心の令子がまだ謙の薄情を納得していないのを見抜いていたし、当の利子や京子が男性の要求を毅然としてはねつける女でないのも識っていたからだ。

「トッコ、あたしはネ、あなたなんか凄く良い奥さんになれると思うんだけどナ」

利子の表情が歪み、泣きそうに笑った。

「筑波会っていうのは、あなた達の援け合う集まりだと思ふんだ。だから、他にはないスマートな会にしなきゃ。男と喧嘩するなんて愚の骨頂ヨ。あたしだって、あなた達だってでなきゃしないワ。男性に対抗するためには、第一にギヴァンドティクを徹底させること。第二に恋愛をコソ／＼しないこと。分る？」

ミッチンの言葉に頷きはしたけれど、ヨワイ片カナがとび出しては黙っているほかない少女達だ。

「あなた達は自分をもっと大事にしなきゃいけないワ。青春をフルに楽しむために筑波会を活用するのヨ。だから恋愛は思いきってやる方がいい。真面目にトコトンまで惚れて命がけの恋をすべきだワ。中途半端の恋愛なんか会の面汚しと考えるべきヨ。ドゥ・ユア

・ベストゥ！やりたい事は力一杯やって、そしてみんなで援け合うのヨ」

少女達は余り分りもしないのに、よくわかったような錯覚に陥って陶醉していた。

「自分を大事にするためには与えただけのものは相手から必らず受取ること。自分が相手を愛したら、少くともその分だけは愛されるべきだワ。男への復讐なんて無駄よ。それより与えたものを取返すことヨ。フーコだって謙ちゃんを憎むより、今まで真剣に愛しただけのものを返して貰うように考えるのヨ」

令子も分らないながら大きく頷く。

「でも筑波会は青春を楽しむ集まりだから、それだけのプライドを持たなきゃいけない。プライドを無くしたらリンチにされても仕方ないワ」

少女達は好奇の瞳を輝やかして聴き入る。

「どこにも無いムードはやっぱりエレガントでなきゃ。もうみんな子供っぽいことはやめようヨ。若さは大切だけど大人になることが第一だもの、そこいらのチンピラみたいな幼稚なことはするものじゃない。ひとの真似はよそうヨ。みんな自分／＼でやりたいことをまっしぐらにやるのサ。ゴーイング・マイ・ウェイ！ いい？」

青春のアヴァンチュールと呼ぶには余りにもドギツク且つあからさまな遊戯を求める少女達もいた。欲しいものとなる理性のブレーキが急に弱くなって、人の眼をかすめてしまう少女もいた。お金が無い訳ではなく、といって品物が欲しいでもない、唯、スリルの快感を求めて動く盗癖の少女もいた。弱い者いじめを愉しむ娘、喧嘩早い娘、傷害や恐喝さえ罪と感ぜない娘もいれば、一方ではロッ

カビリー狂の娘やジャズでもハワイアンでも大好きというダンス気
違ひもいる。普段のつまらなそうな顔がスケートやボーリングで輝
く娘もいる。そういった種々雑多な良からぬ少女達が、令子を初め
三人の幹部を慕い、或いはミッチンに憧れ、或いはのびくした雰
囲気に浸ろうとして、筑波会へ集まって来た。

会員は掟に忠実だった。自分の意志を貫け。与えただけのもの
は奪え。男に恋をするなら命がけでやれ。というような掟では誇り
を以て守ることができた。親
の意見も国家の法規も、踏み
躪るためにあるとしか思っ
ていない少女達が、筑波会の掟
は自己の名誉にかけて遵守の
対象にするのだ。

夜の盛り場に群をなして蠢
いている少年少女は挙って自
己顯示が激烈である。もちろ
ん、それは彼らなりの自信に
裏づけられているのだろうが
その自信というものは反面に
根強く潜在する劣等感に起因
するものなのだ。彼らにとっ
てはヨワい事象が余りにも多
過ぎ、彼らが安心して耽溺し
得るのは賭麻雀と、衆を頼ん
だ横行くらしいものかも知れ



ない。

ドライといわれる世代でも、緻密な計算にヨワい彼等には、予想
外なロマンティズムがある。殊に不良少年にとっては、喧嘩に勝
つことも、ア、ク、ド、イ方法で金を手に入れることも、結局はハ、ク、イ、ス
ケを独占したい一途な心の表現だった。それだけに一旦眼ぼしいス
ケを見つけると、少年達は命がけでハリ合うし、眼の色を変えて入
れ上げる。いつ見限られるか分らないという劣等感からの不安がつ

きまとして、彼女等の欲望を満
たすための涙ぐましい努力が続
けられるのだ。

「筑波会のス、ケ、つたら、高くつ
いちゃうんでかなわねえヨ」

そんな文句を口にしながら、
筑波会の少女達に群がり寄るチ
ンピラの表情には、結構に嬉し
がっている風が見えた。

事実、筑波会の少女達はガッ
チリしていた。男の子と一緒な
ら、飲み食いは一切オンブ
た。

だが代償の高過ぎるのも、彼
女が筑波会の一員だという説明
で片づけられた。

「一生のうちで一番好きな人に
ぶっかったら、あなた達どうす

る？ 世の中でたった一人しかいない恋人にめぐり逢えた時、お金が無かったらみじめヨ、そりゃア。それにいやな奴と綺麗に別れるにもお金は大事だワ」

ミツチンの言葉を、みんな成程と思った。川柳にある通り、使っても溜めても、確かに金は面白いものだ。筑波会のスベ公が、一旦金を溜め始めると、すっかり魅了されて競争で預金高を殖やし始めた。何しろ出費の大半は男持ちなのだから、満足感彼女の華美を少しも損じはしなかった。

ミツチンは、
「したいことは堂々とやればいいワ。そして自分のしたことには自分で責任を取ることヨ」といい切った。

筑波会の中心になるべき令子が、自分を弄んで捨てた謙に対して未だに憎からぬ気持を抱いていることを敏感に識っていても、ミツチンは令子を責めはしなかった。却って、そんな女心を肯定する様子さえあった。令子と謙との問題は、令子が謙以上のものを感じ得るまでは、理屈でも理性でも解決し得ないことを知っていたのだろう。

だが尊敬や服従だけでは気のすまない令子だった。



令子を甘く見たものか、謙がちよっかいを出す。それを見知っているチンピラ達は、やはり令子に手を出したがらなかった。チンピラの男の子が、自分より格の上の愚連隊の兄貴分を出し抜こうとするとヤキを入れられるため、たとえ今は捨てられたとしても、謙と令子の日常から推して、令子は謙のスケであり、近寄るにも余程の勇気を必要とした。

自然、令子は敬遠された形で、チンピラ達は利子や京子や、その他の筑波会の少女達を相手に青春を謳歌した。ケンのある美貌と色の白いことを自慢する利子は、よくデイトを申し込まれた。健康色に陽やけた京子は、肉が締って伸びくした肢体と、男好きの目鼻立ちと、気さくな性質で重宝がられた。令子は、だが然し、決して二人に劣りはしない。

チンピラ仲間のヒロシと呼ばれる少年が、或る日の午後、令子の気まぐれに誘われて彼女とつき合ったあと渋い顔をして、

「なア、フーコ。俺、この頃、何だかジインて痛えみてえなんだ」令子も、それは同じだった。

令子は国電に乗って、独りで遠くの病院へ行った。中年の、女の扱いには馴れきったような男の医師が、極めて事務的に診察する。

「あんたは本当に二十一かな？」

令子は何故か年令をも偽っていた。ドキッとして、小さく肯くと医師は見通しのようという。

「病気は手遅れにならんうちに治すものだ。良い薬はいろいろ出来とるが、素人療法はいかんぞ。薬が強過ぎて却って体を壊す。あんたは間違ひなく病気に罹っている。体もそうだが、もっと大事なものが狂っているようだ。本当に頼れる人を見つけて、何事もよく相談して、もっと自分を大切にすることだ。いいかな、無茶をせんで早く治すことだ」

筑波会のメンバーの誰からも、そんな悩みはきかなかった。謙の仲間の勝男というテキ屋の下っ端に、令子はそれとなく当たってみた。

「何だ、フーコ、知らなかったのかヨお前。謙はナ、タチの良くなえ病気で有名なんだぜ」

令子は憤然とした。意を決して謙のドヤを訪れ、治療費を請求した。

「バカッ！」

バシッ！ 謙の拳が令子の頬骨に鳴って、肉付の良い体がフツ飛び、壁にぶち当たって倒れた。

「畜生ッ！ やったな！」

安アパートの戸口から、令子は土足のまま謙の胸許へ飛びかかって行った。

殴られたのか、ぶつかったのか、鼻の奥がキナ臭くなって、ズル／＼流れ出したものが真赤に顔の下半分を汚し、胸から腹までを彩った。襟ぐりの大きいワンピースはビリビリ引裂かれ、背中のファスナーがはずれて、脱げてしまった。

突き倒され、踏み躪られ、白い膚にも血を流しながら、喚き、叫び、悲鳴を上げる。起き上って行つては、武者振りついて、蹴り、引つかき、噛みついた。

「イ、イテテテ……」

謙が悲鳴を上げる。左手で令子の豊かな髪を鷲掴みにし、一絡みしてグイッと曳く。

「イーッ！イーッ！」

鳥のような声で哭きながら、令子は顔をのけ反らす。喉の線がグツと伸び切った。

ガツッ！

「ううッ！」

「うわアッ！」

二人は離れ。呻き、丸く屈んで転げた。謙の右拳が令子の左の眼を殴りつけ、その瞬間令子の齒が謙の左腕の肉を噛み取ってしまったのだ。血汐をダラダラ流しながら、謙は喘いだ。ビッコを引きながら、令子を髪の毛で引摺り廻した。

グエーッ、グエーッ、グエーッ。

両頬がひっぱたかれて倍も脹れ上り、鼻や眼のふくれは赤紫から蒼黒く変色しかけていた。ドロツとした鼻血がべたついて、吊り上った顔はまるで化物だった。謙の左指には長い髪の毛が幾本も絡みついて、汚いもののように振り捨てても容易に落ちない。謙は苛立った。壁のハンガーのズボンから、自慢の太目のバンドを引抜いた。

ビュッ！ ウォッ！

バックルの角で令子の肩の辺りに筋がつき、すぐに赤い血が浸み

出して来た。

ビュッ、ビュッ、ビュッ！

令子はもう動かなかった。だが余りの激痛に意識を失えないことは、一撃毎の呻きで知れる。最早、人間の声ではない。骨に当たったのか、ガツンとバツクルが鳴って、ベルトは謙の手からすっぽり抜けた。謙もすっかり蒼ざめてフラフラとバンドを拾い、今度はバツクルの方を手にして振下した。

ビシッ！ バシッ！ バシッ！

小気味よい音と、小気味よい手応えの中で、謙は疲れ切ってしり餅をついてしまった。

動けなくなった令子の両足首を掴んで、謙は彼女の体をズルズルと部屋の外へ曳き摺り出した。ボロ／＼になったスリッパは、ほこりや泥や油を吸い取って汚れた。仕切りの上を通る時、ゴトン／＼

S 特第四集 『美しき惨虐物語』

略号 (S 特第四) 定価三百五十円

愈々二月中旬堂々発売！

口絵「美しき惨虐物語画集」「四馬孝緊縛集」書下し
責小説十数篇「美しき惨虐物語」グラビヤ頁「美しき惨虐」写真集三十二頁、他の追隨を絶対に許さぬ本誌
独特の臨時増刊号

待望の特集号！ 乞御期待！

と彼女の体が跳ね上った。

洗い場の前まで引摺られて、令子はボロ屑のようになって横たわった。洗面器の水がバシバシと顔にかけられる。水量が少いので、謙はバケツに水を汲み入れる。

サブリ／＼／＼／＼／

バケツに一杯の水を顔の上にあげられて、恐らく呼吸もできなからう。正に水責の図であった。胸にも腹にも、謙は丹念に水を浴びせた。バケツで五、六杯もかけると、一面に水溜りになった。

「ちったア分ったかヨ、フーコ。今度、変な因縁つけに来やがるとこの位じゃ済まねえゾ。忘れんなヨ」

破かれたワンピースと争って脱げた靴が胸の上に抛り出され、水に落ちて濡れた。扉がしまる音がした。

令子は涙も出なかった。

(続)

限定版特別号第三集

“女体緊縛グラフ集” 特価 五百円

予約申込受付中

略号 (グラフ)

現在まで温存していた秘蔵的緊縛フォトの公開、極めて鮮明なグラビヤ印刷による各モデルの魅惑的ポーズを網羅した六十数頁の豪華版！一般書店にては一切販売いたしません。真接発行所宛お申込下さい

発行所 天 星 社

告白小説

独りぼっちのマゾ?

長岡 変 一 郎

のっぴきならない家庭の事情もあって、復刊号を購読する機会の非常に少なかった私でした。それが最近になって、もう我慢が出来なくなり自己の持ち続けているこの奇妙なマゾ的欲求と、同じ傾向の欲求を持つ即ち同好の志が広い世界には、まだまだ、おられるのではなからうか?と思うことから、久方振りで再び拙い告白文を綴ってみました。

さて今更、古い形容詞ながら、かの「女体緊縛姿態に憧れて」や、又反対に自身が受縛しての耐苦等、即ちサド・マゾの境地も一応は、ある年代に於て経験し、又、フエチに狂奔した時代もありましたが、それ等の事は中年を過ぎて妻帯し、初老期に入る頃より次第に影を潜めて、幾分の不完全さはあっても、まずまず「アブ」から「ノーマル」へと、いわば「欣ばしき状態」に立ち帰っていた次第でした。

ところが、ここに一つ、どうしても私には、老いて益々妄想を激しくし、厭世感の起る度に、この奇妙な

マゾ的欲求を満足させる方法によってのみ死にたい……との願望が頼りなのです。即ち、これから告白するそれなのです。

少し余談のようですが、美女が後手に縛られている場面の絵画や映画を観て、異常な感激を覚え、戦前の月刊雑誌の中から、そういった挿絵や絵画を落丁しては蒐集し、独り悦に入ったり、映画館の表に掲示されているスチールに依って、例の場面ありと信じた場合は、仕事も何も放ったらかして、これを観た頃の私——青年時代から中年過ぎまでは、誰しもがそうであるように、世の中に、こういう楽しみを持った者は自分一人の様に思っ、何かしら誇らしい秘密のようにも感じていたものでした。

しかし、その時代にも講談雑誌等から、矢張り私と同じ趣味の人が、あるものであろうことは、かの古本屋の店頭に並べられたものの中に随分、肝腎?の場面の失せているものがあったことよって、ほぼ推察がされぬものでもなかった……ともいえますが。

さて、戦後の今日。殊に本誌が出てからは私如きは、この方面にかけては、後輩というよりも寧ろ先輩に等しく、謹んで先輩諸兄姉の御教示にあずかりたいと思っていますが、

これから私の申し述べます、即ち表題の「独りぼっちのマゾ?」について、読者の中に一人でも同好者がおられるならば、何等かの方法によって、どうか私にお知らせ下さる様、お願いします。勝手なことばかり述べて紙数を費しましたが、それではこれから本筋に入らせて頂きましょう。

× × × × × ×

私の、この「特異なマゾ」(今日までに同好者の名乗りを受けないので、自らそう称えています)に就いては、旧刊誌時代に二度ほど掲載して頂きましたが、アレから又、四、五年を経過致しました。私の現状を告白しましょう。

私は、どうしても「生理め」になりたい!木片、石塊、塵芥等の混らない柔かい土砂の下敷になって、窒息死したい!否、それよりも、もっと切なる願望は、アノ柔かくて粘っこい、まっ白な糊が人間の背丈を没し去る程の容積を湛えている中へ飛び込み、その中で散々、モガき暴れた末に窒息死したい!という事なのです。

私は、もともと生っ粋の大阪人で、戦後、現在の北九州の炭坑地帯に移住したとはいえ今も懐しい大阪の土地やアノ頃の様々な風俗

状況が忘れられません。

その中でも特に私のアブ的欲求に起因する懐旧の念は、何といってもアノ頃に「米糊」の製造卸屋のあった事や、又、一文菓子屋や荒物店等でも、一銭二銭の小売屋のあった事です。私は戦後、その懐しい大阪に行く機会に接する事が出来ませんが、然し、米穀の統制が撤廃されぬ以上、又、現下の様な文化時代では恐らく、もうこの糊屋は復活しないだろうと推察していますが、大阪の読者の方、如何でしょうか……

当地(九州地方)では数年前から、糊は糊でも、アノ頃の様な(お若い方は、映画でやる「中山安兵衛高田の馬場十八番斬」で安さんの住んでいたオンボロ長屋の住人「糊屋の婆々」の扱っていた糊を思い出して下さい)形体のものではなく、瓶に入った不易糊や、又、ビニール袋に入った十円二十円のものばかりで、若しこれによって私の願望を達成せんに、膨大な金額と手数のかかる事を覚悟しなければ、なりませんし、当然、実行は不可能としなければなりません。

実行が不可能という事によって、私の妄想と悩みは益々その度を加え、猛烈な厭世感を伴います。……然し私は、先にも述べた様

に、自己のマゾ的欲求を満足させる事によってのみ死にたいのですから、仲々そう容易には死の機会に巡り合わない訳でもあるのです。いや、もう全く厄介な、我々何の因果で、こんな奇妙な欲望に苦しまねばならぬのかさっぱり判りません。

私は今、苦しむと申しましたが、然しこの生理めになる事を、妄想し追求する時ほど楽しいことは他にありません。「苦即楽」等といえ、何だか余程、悟りを開いた宗教家の様でもあり、変なのですが、それが私には事実なのです。仕方がありません。そこで、こういう気持も矢張り「マゾ」の一種だと、自ら肯定している訳なのですが、同志が他に一人もないとすると、これは、つまるところ「独りぼっちのマゾ」という事になりそうです。何だか独りで力んでいる様で申し訳ありませんが……

糊!大量の糊!膨大な容積の糊が入手出来ないとなると、私の懊悩は自然、その糊に代るべき何物かを探し求めます。

糊に代る柔かい粘着性のもの!それはポマードであり水飴であり、今一つは、炭鉱地帯特有の「微粉泥」があります。

金のかからないもの、手近かなもの。とい

えば、この「微粉泥」が、それに適合します。

然し又、この微粉泥も、人間の背丈を没し去る位の深い容積を湛えている場所といつては、どこにもありません。

この微粉泥の中へ、身を没しようとして失敗した事がありましたので、一寸、書いてみましょう。

それは、まだ私が大阪の土地に居た頃、つまり戦時中の事です。

出征、徴用、そして勤労報国隊が毎日の様に街に村に見かけられた、昭和十六年の晩春から夏にかけての四カ月間。その頃、商人であった私は、報国隊員の一人として、九州大牟田市と熊本荒尾市との県境にある三井四ツ山炭鉱へ行った時のことです。

ここは、かの有明海の下に埋蔵している石炭を採掘していて、炭住と有明海岸とは、つい眼と鼻の間でしたので、作業の余暇にはよく海岸ばたに出てみたものでした。

その頃の有明海は有名な遠浅で、しかも洗炭水が流れ込むので、魚貝類を獲りにこの海へ這入って行くと、決して足下をアノ粘っこい微粉泥に取られたものでした。然し、私にはそれが非常に楽しくて、暇ある毎に、その

黒糊?へ足を突込みに行ったのですが、その中、この海岸ばたの或る箇所に、私の永い間の願望、即ち「生理」の実演の出来そうに思えるのを見つけ、早速やってみたのでした。

時は暑夏の直つ昼間でした。此處は街中を流れている川水と、途中からそれに合流してくる流炭水とが、合致して有明海に注ぐところで、入江のようになっていて、つまり海と川との分岐点でした。——満潮の時、この入江の川底は見えませんが、干潮時になると、一斉に底の泥肌を見せます。しかも有名な遠浅の事とて、一度、潮が引くと、かなり長時間にわたってこの泥肌は、太陽に晒され、炭住の悪童達のよき?遊び場所でした。

洗炭水が沈澱して真っ黒い粘泥のそれに、裸の悪童達がゴロゴロと軀を寝転ばせて遊び全身、真っ黒に塗りたくっている様を目撃した時、私の胸は高鳴りと羨望と嫉妬を入り混えた様に複雑怪奇なものとなり、殊に、その子供達の言動によって、彼等の遊び場所の程近い或る箇処に、恐しく深泥地帯のある事を知った私は、或る日、思い切って、その深泥に向ってつき進みました。

この日……つまり私が「生理」の宿願を達成せんとした時、暑さも暑い七月の真っ昼

間で、しかも正午間もない頃でしたので、いつもの悪童連も今日は一人として姿を見せていないのが、私には又、勿怪の幸でした。

嗚呼!数分の後には私は誰も知らない深泥の底へ埋れてしまい、然かも死体は容易には見付からないのだ。この興奮!この感激!

私は、歩、一步と深泥地帯へ足を運んで行ったのです。右を踏み込み左を抜き、深さは次第に度を増して行った。だが……

どうも読者の皆さん——大層もなく気を持たせるいい方をして下さる、申し訳もありませんが、実は先にも申しました様に、私が微粉泥の中へ身を没しようとして、失敗したのがこの時なのでした。——というのが、炭鉱で働いた事のある方は、御承知でしょうが、坑内で出来る混り気のない微粉泥と違って、坑外を流れて行く洗炭水から沈澱して出来た微粉泥には、当然、土砂が混っているの、案外、粘り気と柔か味に乏しく——つまり私流に申しまして「黒糊」という事が出来ないものでした。——で話を又、元に戻しますが、私は歩、一步、浅い処から深泥の中へと足を運んで行ったのです。

ところが、どうでしょう……この泥の深さが丁度、私の太腿まで達した時、私の軀は、も

うそれ以上の深みへ前進出来なくなつたのです。土砂の混つた微粉泥の沼泥は、私の躰を呑み込む柔か味を持ちませんでした。

私の躰は、まるで木の枝に跨つたような恰好に、泥の上に乗つかつてしまったのでした。

戦後——私はこの微粉泥が至る所に見受けられる、九州の土地に移住して来て、現在こうして暮しているものの、以上の失敗に懲りて、——即ち微粉の泥沼は、私のマゾを或る程度、慰めてくれこそすれ、かの「生理めの願望達成」には、程遠いものと諦めていた次第なのです。

私は最近、或る社発行の大衆雑誌の中に、又々私を惹きつける記事を、発見してしまつて悶えました。

それは、次のようなものでした。一篇の推理探偵小説で、東京都内をバックとしたその

糊
中の
体
を
没
し
た
私



れ

物語のラストに近く、犯人が愈々最後のドタシ場に追い詰められて、築地河岸寄りの神田川の堤防下に立ちます。

「おい、そこへ飛び込んだら、深泥で助から

ました。が、家庭の事情が又しても自由を許してくれません。尤も私の真の願いは、そんな汚濁物の入り混つたドブ泥の中へ飛び込んで窒息死したいのではないのだが、糊、水飴

ないゾ」と刑事の一人が叫びますが、どうにも他に逃げ道のない犯人は、トタンにこの神田川に飛び込みます。「ドボン」と無気味な音がして、様々な汚濁物によって深泥をなしているこの川は、瞬間に男の姿を呑み込んで、アトは蒼く油の浮いた泥水が、何事もなかった様に流れていた……。

以上の一文を読んだ時、私の胸はムズムズとして、何ともいえない気持ちに酔い痴れました。

——東京都内に、そんな嬉しい（私にとって）場所があったのか？私はすぐにも東京のその場所へ行って見たいとさえ思

ポマード、微粉泥等の大量が入手出来ず、又それを行うには、人眼につかぬ場所も必要な事から、事実、神田川がそういう状態ならばそこへ飛び込めば、不満足乍らもこの厄介なマゾヒストがこの世から姿を消す事が出来る訳だ……と、そう考えたのも、あながち無理ではないことでしょう。

事実、東京のその場所へ行く機会に恵まれない私は、友人の誰れかれなしに、東京都の地理に詳しい者と見さえすれば、右の事柄を尋ねたのですが「神田川はあっても、そんな深泥の地帯があるかどうかは知らぬ」というのが、皆一致した答です。だから私は末だに真偽の程を知りません。どうでしょう読者の皆さんの中には、この神田川の近くに住居を持っておられる方もお在りかと存じますが、一つ、この厄介な私の為に、真偽の程をお知らせ下さいませんか。お願いします。

さて又、私の妄想は果しもなく拡がってゆきます。私は或る日の新聞三行広告欄に、次の様な記事を見付け出して、雀躍致しました。

糊製造従業員募集

年令五十歳前後 作業簡単収多大

以上の様な広告に、さてこそ永年待ちに待

った大量の糊に接する時期到来!とばかり、私が応募したのは、いうも愚かな事でした。その時の、私と先方の主人との応待の状況を一寸、御紹介しましょう。

主「よくお出で下さいました。糊製造と出しておきました。御承知の上お出で下さったのでしようネ……」

私「ええ。それはもう、私は糊をいじくる事が三度の飯より好きなんでして……」

主「ああ、そうですか。……それなら安心ですが、実は私の方でやって貰う仕事は、一寸変ってしましてねえ。仕事の内容を説明しましょう。私の方で造る糊の原料は、政府手持ちの外米を買い込んでやるのですが、製法が独特なのです。といっただけでは、お判りにならないでしょうが……米を粉にして或る程度湿気を含ませて、腐敗してから澱粉の粒子が潰れ、つまり粘着力のある本物の糊になるように煮る訳なのですが、あなたにお願いする仕事は、それからなのです。一度煮立った糊が、又ルマ湯位の温度に下った時、今度はそれを大樽——そうです。ねえ、味噌醤油の醸造元で使っている大樽を、ご存じですか?まづアレよりもっと大きく深いでしょうナ……」

その大樽に移し替えるのです。

あなたは、この時、その大樽の中に這入り徐々に注ぎ込まれる糊を、双手で力一杯、かき廻すのです。で、そうしている中にも生温い糊は間断なく注ぎ込まれます。ですから、あなたは大樽の中で糊の為に生理めになり、いや一寸待って下さい。命は大丈夫なのです。あなたの姿が糊の中へ没してしまつて、数秒乃至、数分、あなたが窒息する間ぎわには、予め鉢に巻きつけておいた綱を強く引っ張って合図して貰いさえすれば、他の者があなたの鉢を大樽の中から引き上げます。但しあなたにとって一番苦しい事は、あなたが出来るだけ永くその糊の中に埋もれていて、充分攪拌して下さる事によって当方独得の糊が出来上る訳なのです。——つまり、あなたの身体が、スッポリと糊の中へ没してしまつて、それで窒息するまでの時間が永い程、私の方に有利な訳です……どうです?随分、奇抜な注文でしょうが、あなたに勤まる自信がお在りですか?……」

いや、もう私には願ったり叶ったりで、聞いている間にも胸が嬉しさにムズ痒くなったほです。

私が、この糊製造元で働く様になったのは勿論の事でした。世の中に何が楽しいといつて、私にとっては宿願成就のこの事がさながら天にも昇る思いの悦楽境でした。

来る日も来る日も、私は膨大な容積の糊の中に全身を埋め、仕事に熱中していました。そして、もう可成りこの遊戯?(私にとつてのみ)にも堪能した昨今は、いよいよ最後の窒息死を行うべき時が、近づきつつあるのです。

私は必ず、やって見せます! なアに訳もない事です。——その時が来れば、必ず私は大樽に這入る前に、予めナイフを用意します。ナイフなら手の裡に握っていても、判りませんからネ。……

私の呼吸は次第に苦しくなってきました。綱を引けば、そこで引き上げて貰える、いつもの手筈でしたが、私はもうそれをしないで用意のナイフで綱を断ち切りました。

左様なら、皆さん! 私は宿願叶って、この嬉しい糊の中で窒息死する事が出来ます。

なアに、他の者が綱の切れた事に気付いても、それからの救助作業は極めて困難で、私は完全に「極楽往生」が出来るでしょう……

(完)

麗しき縛しめの乙女たち

聖壇の裸女 略号(けい)

全身をぐるぐる巻きに縛られた裸の美女が、聖なる灯に両手を吊り上げられて瀆罪にみもだえする、麗しくも美しき裸身の乱舞、目も彩な縛り地獄 モデル 絹川文代

カーテンの翳 略号(けろ)

花模様のカートンのかげに見える豊満な色白き肌の緊縛ポーズ。肉づきよき太腿を八の字に押しひろげて椅子に坐らされたうら恥しき羞花一輪。モデル 大塚啓子

艶姿色模様 略号(けは)

艶麗花をあざむく全裸の姿態にきびしくも痛ましく、ひしひしと喰い込む縄目、のけぞって、うっふして、転々反展の苦痛に堪えかねた表情美。モデル 絹川文代

浴場の欲情 略号(けに)

豪華なタイル張の浴槽に沈められた緊縛美人のポーズ。紐は胸から後手、太股から膝まで掛けて湯に濡れていや増しに肌を締めつけてくる。モデル 大塚啓子

いけにえ人形 略号(けほ)

美しき裸身のすべてをさらけ出して哀れないけにえは、悪魔の前に無抵抗の姿を捧げる。悪魔はその柔かき肌を肉を、心のままにむさぼり喰う。モデル 絹川文代

大手札型印画紙焼付

各組三枚一組 二五〇円

のぞき見極楽 略号(けへ)

がらりと開けた襖の向うに展開されている光景は、ああ、またなんというセクシャルなシーンだろう。両足をけり乱し猿ぐつわの下に呻めく美女。モデル 絹川文代

開股悦虐境 略号(けと)

真昼静かなビルに於ける洋間の一室。両手を背後に縛られ、或は頭上に括られたうら若き女性に嫌が応でも無理に構えさせられた鮮鋭なレンズ。モデル 大塚啓子

ダンロの開股 略号(けち)

練瓦造りの暖炉の前に引き据えられたお合羽の乙女。咽喉に首縄、口には猿ぐつわ胸に回わされた黒紐の縛しめ。苦痛にあえぐ新人モデル。モデル 田原美佐子

開股絶対絶命 略号(けり)

あのポリウムのある豊胸をふるわせて縄の悦虐に泣く三態各様の背景場面雰囲気を変えての強烈な開股しぼり。もう身動きはまかりならぬ絶対絶命。モデル 愛川悦子

悲鳴開股 略号(けめ)

首から胸、胸から二の腕、胴、太腿へと更に太腿をぐいと締め上げられては流石の美女も思わず悲鳴をあげて痛さに泣く。モデル 絹川文代

女飛行士断腸譜

機上切腹より

藤山秀緒

菊枝が飛行服を手に入れたので、今度は三十三年十二月号に法谷四郎様がおかきになりました「女体切腹異聞、機上切腹」をテーマにとらせていただき、つたない短歌を作ってみました。

どうぞ法谷様の作品を御参照の上、私共の悶えを御判読下さいますように。

『機上切腹』を選んだわけ

法谷様の作品で、私の一番好きなものがこれです。

理由は、私の大好きな飛行服のヒロインが切腹すること、深傷にのたうち乍ら司令部へ報告して行く描写のすばらしさ。そして、私のために書いて下さったというそのお気持。

法谷様、秀緒は此の作品で、どんなになくさめられたことでしょう。

私は病身で、到底この先長く生きられるとは思えません。残りすくない若い命を秀緒は倒錯美の中で燃やしつくしたいのです。日毎夜毎、秀緒は飛行服や乗馬ズボン姿で、たとえ菊枝から宝塚と云われても、一途に男装の幻を追いつづけます。お願い。秀緒のために書きつづけて下さいませ。

機上切腹

飛行服まといて凜々し女武者

せまき機上にはほえみて立つ

いざ往かんエンジンの音も軽やかに

牧野光子は飛び立ちて行く

男装に身を固めたる勇ましき

しばしまさぐる革の手袋

今日こそは敵を残らず討取りて

我がまごころを国に捧げん

編隊は突如乱れて火をふきぬ

敵の砲火は思いもかけずに

形勢は我に利あらずいつしかに

敵の包囲は十重に二十重に

我が解きし秘密は敵のわななりき

なすすべもなし涙ながらに

この上は自ら敵に突込みて

華と散らんか大和撫子

迷えども光子は恥をしのびけり

我が誤りを報告せんと

追いかくる敵機を避けて雲の上

基地呼ぶ声の哀しいたまし

敵弾を機体を受けてよろめきし

我が乗る翼基地をめざせや

基地よりは怒りの声のとどきけり

身も世もあらぬ女飛行士

いまは早 死する道のみ残りけり

女乍らも申訳とて

マイク以て 我が誤りを詫びつつも
死出の用意に心せかるる

死は易し　されど翼は傷めまじ

我が身の力つづくかぎりは

我は今　死して許しを乞わんとす

女乍らも腹かき切りて

その知らせ　基地に届きて人々は

凜々し乙女の死をばかなしむ

ただひとり操縦桿を握りしめ

がばと開くや雪の肌着を

飛行服　完全武装凜々しくも

女だてらに腹くつろげぬ

これまでとマイクに云いぬ男装の

肩はふるえていとど壮なり

短刀は右手にありて光さえ

ふるえがちなる心根あわれ

左手は、操縦桿を握りしめ

めての刃は逆手なりけり

マイクもて死の成行きをしらせつつ

凜々し乙女はいまぞ逝くなり

男装の肩はのめりて刺し入りし

刃の光り非情にきらめく

うつと云う気合いにも似てその呻き

基地の受信機いみじく捉う

吐く息はマイクに荒しごわごと

飛行服なる衿を立てつつ

これよりは横一文字に切り開かん
呻けどゆるせ女なりせば

ああと云い泳えてううと呻くなり

とだえがちなる報告の声

左手に握りし桿はよろめきて

翼あやふし女飛行士

きりきりと刃は右へふるえつつ

司令を呼びぬ苦痛泳えて

がっぷりと口をひらきし傷あとも

機上なりせば観る人もなし

まだ足らぬ、これでも死ねぬかこれでもか

右へ抉りて呻き激しき

我が位置をマイクに訊ね取直す

操縦桿は血にまみれつつ

一文字、もののみごとに掻き切りて

光子はしばし喘き苦しむ

息をつめ、ぐっとばかりに歯をかみぬ

深傷の苦痛泳えかぬれば

のびあがり身を屈してのその苦悶

狭き座席に嗅よどみて

覚悟せる自刃といえど苦しみは

いとじまさりてしばしのたうつ

飛行服を染めて乙女の血の色は

辺りに散りぬ花の如くに

弱れども最後の力ふりしほり

基地に着かまし我が飛行機は

渾身の最期の力は男装の
乱れなおしてベルト引締む

長靴をふみしめながら引締める

ベルトの金具身をさいなみつ

飛行機は着陸姿勢とりにけり

烈女の操る桿のまにまに

泳ゆれどいまは甲斐なしその呻き

ゆがめる頬の哀し勇まし

只今と、こわばる舌に知らせけり

土に喰入る飛行機あわれ

サイレンをあげて駆寄る基地の人

光子は呼びぬ声をかぎり

のびあがり血染の服をかきあわせ

また取上ぐるあかき刃は

飛行服の胸を抑えて刃凝す

最期の姿妖し美し

左手に厚き服地を揉みあげて

とどめ求むる刃先ふるえて

飛行服の厚き服地も通るべし

ウツとばかりに刃突込む

飛行服の足ふみしめて泳えたり

サイレンの音間近となりぬ

胸もとにずぶと突立つ白刃は

抉りのたうつ両のかいなに

ううううと早せまり来る断末魔

泳えかねつつくずれ行く身は

大空に赤き血汐のころ意気
凜々し乙女は男装にして



(左次郎・画)

女体緊縛写真に

関する一小論

朝 藤 洋 二

休刊以前の緊縛写真と復刊後、特に最近の緊縛写真との間には大きな違いを見出す事ができる。後者のそれは、近年流行のムード音楽的である。縛り、或は、責め本来のものから離れたムードを表現しているとしか見られない。昔、見られた様な「責め」「縛り」の本質を表わした少々荒けずりなものが表われなくなったのは、どうした事か。時には甘

いムード音楽も良いが、粗野で荒っぽいディランドジャズを聞くのもよいし、ムソルグスキーの「禿山の一夜」を聞くのも又、趣が異って面白いものである。では何故に、近頃の緊縛写真がムード音楽的になったのか。

第一に、二、三年来、言われている「もはや戦後ではない」この言葉一つで解決される様な、時代が移り、世相が変り、ムード音楽

を楽しむ時が来た事。以下第二、第三と続かねばならないのだろうが、全ての根本が此処にあると解釈し、細部を挙げれば

イ、モデルの若返り。ロ、読者層の変転、及び要求の異り。ハ、流行の変遷。ニ、時代思想の移変。等が考えられるが、又、本誌の関係者全員にも変らないとも考えられず、変事が仮になかったとしても、それらはどうに

もならない事実であろう。しかし、私は、このまま緊縛写真が時代の波に押し流される事を好まない。それは時代に逆行しろというのではない。それが一つの時代の波にのっているだけで、現代という大きな海原を遊泳してないからである。現代がムード音楽一辺倒であろうか、そうではない。歌舞伎も能も古典バレエも、モダンバレエも日本舞踊もあるではないか。比喻の使用法が間違っているかも知れないが、私は希望する。これからの緊縛写真が奥行きのある広がりをもった大きなものになる事を。前口上はこのくらいにして緊縛写真の細部について私見を二、三、述べたい。

A 写真は忠実な写実主義者である。

これはいうまでもない事であるが、よく頭におかないと不自然な緊縛写真が出来る事が往々にしてある。公表する為には必要以上にポーズに気をくばり、カメラアングルに注意しなければならぬ。又、流行の下着を使用すれば修正に気ずかい、そこに出現する緊縛写真は不自然なものになってしまう。姿勢や縛りに特異なものが要求される時は、下着に気をくばっておけば不自然なポーズも必要なく、どんな角度でも撮る事が可能である。人

間が写真に追いまわされず、人間がカメラを駆使して写真を追いまわすべきだ。メカニズムの発達した今日、人間の陥りやすい落とし穴が、こんな所にもある。

B モデルは縛りの為のモデルである。

緊縛写真に現われる所のモデルは、ヌードモデルでもなければ、エロ写真のモデルなどでは断じてない。「縛り」というモチーフに合致した特殊なモデルである以上、ある程度まではモデルの協力が必要である。時には無理な縛りやポーズもある。しかし協力してもらわねばならない。それは縛りの持つ特殊性だからだ。耐えられないものまでというのではない。その程度は各々に個人差があつて一概にはいえない難かしい問題であろう。

(誌上で読む写真撮影の際の関係者の並々ならぬ配慮には、いつも感謝している)時々感ずる事は、顔の表情である。縛られて艶然と笑みを浮かべたり、無表情、或いは眠いような表情等は時によりけりで、少々考える必要がある。

近頃の緊縛写真がムード音楽的であるのはモデル自身の持つムードがムード音楽的であるのが第一の原因であろう。平常は、そうでなくとも、縛られると、そういうムードが流

れるかもしれないが、変ったムードを持ったモデルも欲しいものである。

C 緊縛は児童の遊戯ではない。

本当にモデルを痛めろというのではない。あくまでもモデルはモデルであつて、個人の入妻や恋人とは違うものだから、そこまでに要求する必要はない。しかし、緊縛写真と銘打つ以上、字句に忠実であつて欲しい。モデルにポーズをとらせる必要上、脚を自由にしておくのは考えものである。縛つてある上半身を隠し下半身だけの写真を見れば、そのままヌード写真であり、エロ写真にもなりかねない。道具を使つての縛りが減つた事も残念である。時折、使用されているが、あまり変つた方法で使われていないようだ。これは家具造作、柱、階段等にもいえる事である。椅子に後向きにかけさせても椅子とモデルの間には何も関係ないような写真を見かけるが、モデルを椅子に縛るなり、その椅子を宙につつてもよいではないか。モデルにはポーズをとらせるよりも少々無理をしても(ここの所は難かしいが)緊縛の名に、ふさわしい写真を要求する。(以前はこれがあつた)ベッドを使用しても、ベッドの上でごろごろして、あちを向いたり、こちを向いたりするより

ベッドの脚に縛るとか、マットをとってスプリングをむき出しにしても変った趣きが出ると思う。(この場合のベッドは上等品でなければだめだが)緊縛写真が、子供の遊びやお座敷ダンスの写真でない事を再確認すべきである。

D 緊縛写真はヌード写真にあらず。

前項と重複する個所も多いと思うが、縛りと、緊縛写真に、ふさわしくないポーズが同居している事である。緊縛写真に、ふさわしくないとは、一般のカメラ雑誌のヌードと、さして変らない事である。首をまげたり、足を折ったりする事がモデルの意識的動作であつては、緊縛写真とはいえない。それらの運動がモデルにとって不本意なポーズ、運動であるが、縛りというものの性質上、どうにもならない。その時にこそ緊縛写真として通用するのではなからうか。上半身の自由、というよりは手、腕の自由を奪つて、下半身を可能な限り動かし、不可能な運動のみ、縛つてその運動を助ける。これでは緊縛写真の名が泣くと思う。後手に縛られ正座しても、壁の前に立たせ、それを前下方から写真に撮つても、そこから緊縛写真としての大きな価値を引き出そうとしてもできない相談である。

彼女が何故、その様な姿勢をとらなければならなかったかを写真は語っていない。セミ緊縛写真では、世の多くのマニア諸氏を完全に魅了する事は不可能かと思う。一瞬、うなずくような写真の多く出る事は、読者諸氏も広く望む所であらう。

E 緊縛写真も芸術写真である。

世の人はアブノーマルで精神異常であるといふかも知れない。世の芸術の大家は芸術を精神異常者の手に渡すなどいうだろう。では芸術とは何か。人間が人間の手によって造り出されたものに対して「うつくしい」「すばらしい」といえるもの、そしてそれが人間性を豊かにする。これが芸術ではないのか。それでも緊縛写真とし、芸術の一環として認められないのか。これを世の中が認めない根本の原因は何か、西欧においてはキリスト教的道義観、中世騎士道的婦人観。日本においては、封建的、儒教的道義観でなくて何である。個人主義、自由主義の為に起つたフランス大革命においてさえ、サド侯爵を此の世から抹殺したではないか。十五年前考えも及ばなかった程、個人主義、自由主義が発達し、アメリカ・ナイズされ世の識者をして眉をひそめさせる日本でも、我々の緊縛写真が芸術と

して認められず、いつまでも日影者でなければならぬのは何故か。西欧においては近年ヌーディズムが一部に認められ(日本ではまだ大きなものを見かけない)ているが、サディズム、マゾヒズムは変態としてあつかわれているではないか。では本誌の読者の中に性犯罪者がいるか。精神異常者は、皆無といつてよいだろう。現行の法規でさえ、ワイセツ罪にとわれた者もおらないと思う。それでも世に出られないのは何故か? 私は敢えて疑問符を投じたままにしておきたい。

F 緊縛画について

写真の事で終止する積りだったが、絵について少々述べたい。写真が忠実主義者だから絵なぞ止め写真一辺倒にしてしまえというのはない。西洋絵画史上において写真の発明は、それまでの写真固執から「印象」「立体」「野獣」「抽象」の種々の画派を呼び、現代絵画に発展したが、緊縛画でもどうかといえは、どうもこれではまずい。緊縛写真がモデルを使つての写真である以上、そこにあらわれる縛りは演出が加味されるのは当然である。そこには、ある限界点があるはずでありその限界以上は緊縛画で補う以外あるまい。おのずと緊縛画の義務が定義づけられると思

う。そうなれば写真でなければ義務を完遂する事は出来ない。それに印刷の事もあろう。近代絵画が色彩を重んじた以上、写真以外の方式をとれば色彩が必要となり高価なものとなってしまう。それから、緊縛画における写実性は最重要なものとして要求されるだろう。しかし緊縛画が絵の一部である以上、多少のデフォルマションは認めねばなるまい。これも又、写実性を第一義するからには調和をとるための、空想のためのデフォルメでなければならぬはずだ。しかし、これは飽くまでも現在の緊縛の地位に対しての事であって将来の事は臆測しかねる。(私個人の夢としては、縛られたモデルを立体的に画いた絵をみる事と、マチスの野獣派から一歩進んだ野獣派的絵を画く事にある)多くの女体緊縛画中に、補助的人物があまりに現実離れしたみにくい顔や表情をしているのは不快な感じを与えられる。ヒロインの顔を、あまりに端麗に画くのも考えものである。しかし、これらは画家の思想の表現であって、私ごときものが、どうこういふべき筋合いのものではなさそうだ。

以上、女体緊縛写真にとって述べたが、現在の緊縛写真すべてにケチをつけたり、不満を

述べたのではない。色々とムードの異った緊縛写真の出現を望むのが本論である。私はムード音楽も好きだが、ショパンのピアノ曲や小学唱歌も大変好きだから。

後記

大きな題をふりかざして飛び出したものの、竜頭蛇尾に終わってしまったようです。緊縛写真の変遷の原因論、芸術については、まだ考えが煮えきらず、くだらないものになりました。又、写真の細部についても「衣裳」

「アクセサリー」「ポーズ」「背景」「照明」等について書きたかったのですが、専門的な事がわからず、下書だけにしました。後日、これらについて考えをまとめて書きたいと思っています。文中、礼を失した箇所もあったかと思ひ、おわびを申し上げます。ここに上げました文章は、私の主観的意見であります。本誌上にて、反証を上げ私の誤りを指摘していただける方のお出になる事を期待しております。

(了)

○浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代 略号(ちせ)

紅白まんだらの扱帯が後手の手首に喰い込んで苦痛にゆがむ文代嬢の美貌。身動きもできない捕われの姿態に襲いかかる三〇CCの硝子製浣腸器。空しい抵抗をあざ笑うエネマシリンジのゴム球。イリガートルの嘴管。浣腸が終って便意の苦痛と戦う表情文代嬢熱演の浣腸責フオート。

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代 略号(ちあ)

浣腸芸術という言葉があるとしたら、浣腸の苦痛に悶える姿態に美しさを発見するという狙いが、それに該当するかも知れない。紐と浣腸器のくもし出す美しきコントラスト。白い肌へ妖しくまといつく黒色のゴム管、若い女性の生理に激しい変動を期待するグリセリン溶液。夢の如き浣腸責アツプ。

時代劇映画の回顧



縛られた女優の変遷

南方佳男

× ×
縛りシーンを観ることは、ここ数年間の僕の趣味である。

今年は夏場に三カ月ばかり旅に出ていたから、観劇回数もよほど少いだろうと、十一月の終りに

計算してみたら、時代映画ばかりで百二本。製作本数の六五％になるだろう。してみると、僕の観劇本数は五百本を、もうとつくに突破

していた勘定である。職業柄、金を払って観ることは極く少いが、よくもまあ暇と根が続いたものだ、我ながらあきれている。

そこで一つ、その数多い観劇経験にものを使わせて「時代映画の回顧」というのをサブタイトルに、ここ数年間の縛りシーンの流れを書いてみよう。縛られた女優の変遷という見出しまでつけて筆を持ったのだが、ハタと手が止ってしまった。何のことはない、自分の記憶喪失のためである。

こんな時の用意に残しておいたはずの映画

同じ様な事を三度書くが年に一度ずつでも三度目だから、少しは纏ったものを書いたかと思っただけやっぱりくだらない。

メモも今夏、旅に出た時に紛失していた。仕方なく手持ちの本誌の旧号を片っ端からめくってみたが、十分に想い出せない。はなはだしいのは確かに観ているはずなのに、縛りの有無すら判らないものもある。

こんな状態で執筆したのだから、どうやら企画倒れ、「三年間の回顧」に規模を縮めてしまった、くだらない理由である。

(一) 東映の巻

ヒロインの女優が若返るということは、個人の感想かも知れないが、楽しいことである。東映の場合、その若返りを汲みとることが出来る。花園ひろみ、山本昭子、中里阿津子、佐久間良子、大川恵子等……今年のスター達は、生きがいい。

三年前、五七年の総決算の折には、長谷川裕見子、千原しのぶ、田代百合子、三笠博子、勝浦千浪らがスターだった。すでに消えた人の名もある。丘さとみが、やっと芽を吹き円山栄子や桜町弘子達の種が播かれた頃であった。長谷川裕見子の「大菩薩峠・第一部」の納屋のシーンや「黄金の伏魔殿」の囚衣姿が強い印象を残している。彼女は今年、五作品も縛られている。千原しのぶの「七つの誓

や「濡れ髪二刀流」も美しかった。

翌、五八年には美人の大川恵子がのして来ている。「神変麝香猫」「快傑黒頭巾」「紅顔無双流」「謎の蛇姫屋敷」等、長打はないがクリンヒットを放っている。長谷川裕見子は「旗本退屈男」「丹下左膳」と凡打、千原しのぶも「千両獅子」程度。円山栄子も「鬼面龍騎隊」ころの生彩を失っているし、丘さとみも疲れた。そこへ「少年三国志」「鳴門飛脚」で可憐派の花園ひろみと「月の輪族の復讐」「旗本退屈男」で桜町弘子が進出、さきの大川恵子と共に縛られた女優三羽鳥の期待を五九年へ持たせてくれたものだった。

さて、五九年は——大川恵子は前年不振、やっと「はやて紋三郎」「喧嘩鷹」で軽打を放った。しかし、この二本、共に平凡な後手縛りで蔵や納屋にとじ込められ、座って救いを待つシーンだったが、名女優？ 長谷川裕見子先輩へ一歩近づく演技の充実がのぞけたのは収穫だった。長谷川裕見子も「新吾十番勝負・第一部」「百万両五十三次」などで、依然、おとろえぬ力をみせてくれている。がしかし魅力は薄らいだ。やはり若さがほしい。その意味で花園ひろみだが「金獅子紋ゆ」ところ、魔境の秘密のアイヌ娘の役は、

可愛らしくもあり、縛られかたも強烈で特に頭髮剃ぎの刑にされかける七条友見子との背中合わせの縛りは佳作だったが、その後「快傑黒頭巾・爆発篇」だけで龍頭蛇尾。その上もう一人の期待の人桜町弘子が「殿さま弥次喜太・捕物道中」以後、病気でスクリーンを遠ざかっていたのも残念でしかたがなかった。ところが、それなりにまた救いもあるもの。およそ縛りとは縁遠いと思っていた現代劇純情派の佐久間良子が「無法街の野郎ども」や初時代劇の「たつまき奉行」で、チャリながら縛られてくれたし、「唄まつり千両旅」では円山栄子が復調の兆を示してくれた。

「ふたり若獅子」の千原しのぶもまだだしっかりしている。でも、この人達では客寄せの比重の軽さ（特に縛りシーンだけでも）はいなめない。美空ひばりが珍らしく「ふり袖ざくら」「孔雀城の花嫁」「江戸っ子判官とふり袖小僧」と三本も縛られたが、この人の縛られ方は真実味がないから駄目だ。「謎の南蛮太鼓」「富嶽秘帖」の山東昭子も体力がないのが弱い。その点で、「美男城」で野生的な娘の姿で縛られた縄を噛みきるような激しい役柄をみせた丘さとみのカンバックは「魔の影法師」で後手に縛られ、心強いもの

をうけた。長谷川裕見子、大川恵子、丘さとし、やはりこの三人が今年も東映の多彩な女優陣の支えだったようだ。ところで、もう一寸、書き加えねばならない。新人、一条由美と中里阿津子の誕生である。前者は新東宝、後者は日活から今年転向して来た人だが、まだまだ大川、丘といった看板どこに比べれば、位が違ふというものの。一条由美は「紅顔の密便」で縛られて引ずり廻され、中里阿津子は「千鳥の印籠」で吊り下げられたり、このところ可愛がられて縛られ女優の片鱗をのぞかせている。多くは望めなくても、今後を楽しみにしたい人達だ。

(二) 大映の巻

縛りのヒロインを持たなかった感じの五七年の大映作品が、この年の暮れ近くから縛りを起用するようになった——というのが記憶に残る印象である。

せいぜい浦路洋子の可細い体に型式的な縄をかけた「弥太郎笠」や「凸凹巖窟王」、「弓五郎天狗」の小野道子、「刃傷未遂」の岡田茉莉子らの後手など気の入らない作品が続いていたところ突如「女狐駕籠」で近藤美恵子を薄モノの巫女姿で縛ってコズキ廻し、

中村玉緒を「天馬小太郎」でハリツケにかけ、て見直させたものだった。以来、近藤美恵子は同社の縛られたスターNO.1にのしあがり翌五八年には「おけさ鴉」では、しごきで後手に「花太郎呪文」では納屋の中で後手折檻「三つ目の鳥人」でも後手「怪猫呪いの壁」ではハリツケ「執念の蛇」では前手縛り猿轡と続き、五九年も「弁天小僧」で青山京子と後手背合わせに縛られている。

中村玉緒も五八年には「遊侠五人男」で後手猿轡、舟の中で失神しているところなんぞ仲々良かったんだが、その後、鳴かず飛ばずが続いて、やっと今年（五九年）カンバック「雪女の足跡」で後手（香川京子と一緒に車に乗せられて失神している）「鬼女系図」で同じく後手「濡れ髪三度笠」で淡路恵子と共に柱つなぎの後手と、よく縛られはじめた。それに、もう一人、「空飛ぶ若武者」「人肌孔雀」「山を飛ぶ狐姫」「血文字船」と五八年には近藤美恵子に次ぐ縛られ回数が多かった三田登喜子も五九年には「女と海賊」で一段と冴えた演技を身につけて、たのもしくなって来た。

五七年には、よく縛られた浦路洋子は五八年にも「怪猫呪いの壁」で立樹縛り「血文字

船」で後手など、五九年も「魔笛若衆」と本数はかせいでいるものの、どうもヒットがない様子。また五八年にパッと咲いた岸正子も「鬼火灯籠」「山を飛ぶ狐姫」「黒雲谷の雷人」きりで消えようとしている。かえって傍役だが、グラマー毛利郁子などの方が五八年には「消えた小判屋敷」五九年には「紅あざみ」などで艶っぽい縛られ方をして面白い。

と、まあ、そこらでねらいは五九年の成果なのだが、今年の大映は荒ごと師、伊藤大輔巨匠の健斗で縛りシーンの醍醐味を満喫させてもらった。「弁天小僧」であり「女と海賊」であり「ジャン有馬の襲撃」である。これら作品の青山京子、近藤美恵子、三田登喜子、京マチ子、弓恵子らは伊藤監督一流の眼がねを通った人達だけに、流石に感嘆させられる演技をみせてくれたが、特に「女と海賊」の三田登喜子が半裸体で簀巻きにされ、マストから吊り下げられたり折檻されたりするスザマジさは忘れられない作品になってしまった。また、まだ一本きりだが「ジャン有馬の……」で柱縛り目かくし姿で銃殺される新人弓恵子にも、今後、期待が持てそう。

もう山本富士子や阿井美千子ら年増どころの魅力が乏しくなりつつある頃でもあり、近

藤、三田、中村の中堅どころが成長して来たことは大変嬉しいが、ただ新人が弓恵子一人きりだったことが心残りではない。

(三) 松竹の巻

女優の進退が驚くほど激しいこの社の作品は、したがって縛られた女優も、しよっちゅう新人ばかり感がある。

ここに五七年のヒロイン達をあげるが、きつと「アア、あの人がいたのか」と懐しく想い出す女優さんばかりだと思う。

「酔いどれ牡丹」の浅茅しのぶの後手、煙管責め、「浪人街」の水原真知子の牛裂の刑寸前、「美女蝙蝠」の草笛光子（現東宝）の後手、「七人の女スリ」の中川姿子の後手、「乱れ白菊」の山鳩くるみの磔、「銀蛇呪文」の紫千代の磔……等である。

五八年はまだしも、五九年に到っては、もうこのうちの唯一人も縛られていないのである。失ったものへの未練かも知れないが、このころの人達は縛られ方が巧かったような気がしてならない。

五八年になって傍系に歌舞伎座プロが出来ている。同プロは縛りシーンに、かなり力こぶを入れたので、一、二のいい作品があっ

た。その中にデビューしたのが福田公子と佐乃美子で、福田はこの年の傑作「江戸群盗伝」の拷問シーンで、われわれを唸らせたが、それっきり消えてしまった。佐乃美子は、この年は「七人若衆誕生」で後手、石籠詰の刑をみせたきりだったが、五九年にも「姫夜叉行状記」で柱縛りのすざまじい拷問姿をみせて健全、さらに今後への期待を濃くした唯一の人である。

「清水の佐太郎」で伊吹友木子が縛られている。この人も影の薄らいだ一人である。「大江戸の鐘」で本縄引廻しの嵯峨三智子は別格として、この年のマスコットだった富士真奈美はNHK・TVの借り物とはいいながら、どうしているだろう。「七人若衆誕生」の後手「大盗小盗」のハリツケ「妻恋道中」のグルグル巻など随分、可愛がられたのに……。グラマー泉京子も「大盗小盗」の本縄引廻しハリツケ以来、縛られていない。

五九年は嵯峨三智子が「大暴れ東海道」で川口京子が「七人若衆売出す」で、もう母親役の市川春代が「高丸菊丸」で縛られた程度で印象的なものといえば前記「姫夜叉行状記」の佐乃美子くらいなものであった。あまりにも、みじみである。松竹、頑張れ！と、は

げましたい。

(四) 新東宝の巻

スター達は次々と転籍しているが、それがかえって演出者達の遠慮を解いて、マニヤ向き映画の本性を発揮しているとみた五九年の同社の作品である。

三年前、五七年の縛られスターは、いまはTVに入ってしまった築紫あけみで「風雲天満動乱」の柱縛り「龍虎の対決」の後手などのほか、その前年にも「美女決斗」の後手吊りなどの傑作をつくっている人。グラマーなのに何か女の哀れさを巧く描く人だった。

そのころ、現在フリーの宇治みさ子が女剣劇をはじめたばかり「謎の紫頭巾」「稲妻奉行」で縛られており、また、いまは東映で一条由美といっている藤木の実が「真田十勇士総進軍」で後手にされている。

だが、この年、深い印象を残しているのは何といっても「天下の鬼夜叉姫」の若杉嘉津子の凄惨な吊り責めと可憐な縛られスター北沢典子の誕生だった。前者のモッコ形吊り責めスタイルは、その後、各社が模倣して、いまでは珍しくもないが当時はスザマジイものであった。その後も「血桜判官」とか「隠密

変化」など責められる年増女の巧さを小憎いまでにみせてくれている。

一方北沢典子が出る映画、出る映画、よく縛られたものだ。「白蠟城の妖鬼」「金比羅利生剣」の後手「危し! 伊達六十二万石」の後手吊り惨殺から、五八年には「サタン城の魔王」の後手、五九年には「姐妃のお百」で再び後手吊り等、いま想い出すものでも数本ある位いだ。

この北沢典子に刺激されてか、同社の若手女優連がよく縛られはじめたのも五七年の暮れ頃からだった。

「花嫁殺人魔」の野々村律子(この人の名も最近、聞かない)は「謎の紫頭巾」でも縛られた仕出し程度の傍役だったが「飛龍鉄仮面」での矢代京子は、最近でも「九十九本目の生娘」で巡査の娘の役で強引な後手吊りに随分痛い目をしている。「緋ぢりめん女大名」の

田原知佐子はTVにかわってしまった。しめ

っぱい眼をした松浦浪路は、そういえばあまり縛られないが、同じころデビューした瀬戸麗子は今夏(五九年)「海女の化物屋敷」で、あまり肉体美でもないのに海女姿で後手に縛られている。この映画では三原葉子がシュミーズ姿でグルグル巻きにされていたが、この三原という人は随分、古い裸スターだ。このごろになって遅い芽をふき「九十九人目の生娘」では後手吊り柱縛りどころか、スチールとはいえ水車へ逆立縛りなどを平気でうけている。この稿が載るころには封切られているはずの「女奴隷船」も一連性の作品で期待が持てる。

「浮世風呂の死美人」の日比野恵子は松竹へ「憲兵と幽霊」の久保菜穂子は東映へ、昨年迄の幹部スターはいなくなったが、ある意味では清浄化されたのかも知れない。

「優雅」こそ

女の魅力

田村清彦

投稿追記

私の拙い告白文を一月号に掲載してくださいましたことを心から光栄に存じます。また美しい挿絵を二つも入れてくださったことは、ほんとうに感謝にたえません。ただ、欲を申しあげますと、一〇一頁の絵の顔は、一二〇頁の絵のB子のような顔に描

かわって美人でありグラマーである小畑絹子が登場した。まだ本格的な縛られ役に会っていないが新作の「水門黄門とあばれ姫」には興味を持っている。

エレガント派だった池内淳子も、このところ「双龍暴れ雲」「復讐秘文字峠」で後手縛りをうけて、本誌にのるようになった。「双龍暴れ雲」では万里昌代も縛られ、しかも太もももあらわな、すごい姿で折檻された。

想えば、この社は東映と同様に、随分入れかえ立ちかえ大勢を縛っている。しかし松竹のように無闇矢鱈というのではなく、時代劇における縛りの必要性を十分に理解しており縛られるスターの大切さを考えているようだ。

(五) 日活、東宝の巻

残念ながら両社の映画は、あまり観ない。しかし観てないながらも、そう離れてはいないと思う。

東宝作品では五七年には「柳生武芸帖」の久我美子、翌五八年には「底抜け忍術合戦」の朝雲照代と環三千代、五九年は「木曾の火祭」の横山道代の後手吊りと「隠し砦の三悪人」の上原美佐と樋口年子……三カ年でこれだけだから何も書けないが、姫君スターの上

いて頂けていたらと思いました。私の文中の直美なる乙女の顔は、一二〇頁の絵のB子に酷似しているからです。私の手許にある洋装・和装、数々の直美の写真を読者の皆さまにお見せしたいくらいですが、そうもまいりません。また、一〇四頁の絵では胸の一番上の縄目より、さらに上の方の高胸に、もう二筋ほど胸縄がかかっていた方が理想的だったと思います。ともあれ、すてきな挿絵をおかきください、まことに有難うございました。私は、この掲載文を直美がその生涯の中の何かの機会に目にとめはしないかと心配ですが、まずまず読む機会はないだろうと、いちおうは安心していきます。直美は文字通り柔くて白くてなめらかな美しい両手を持っています。数日後に私と会ったとき、彼女が「私はなにも悪いことをしていないのに」と言ったこと、および、私が彼女を縛った日から十日間以上ものあいだ、彼女のそのエレガントな両手の手首に、それぞれ一つずつ黒紫色のあざ（内出血）が消えずに残っていたことを付け加えさせて頂きます。女が女らしさを、女の優雅さを、従って、男性側から見ても胸ふるえるばかりの魅力を最も強く匂わせる

姿、それは疑いもなく、胸高帯をしめた上品な振袖姿でありましょう。そして、振袖姿の乙女が両手を後に回されて縛られ、伏目がちにうなだれた楚々たる風情こそは、まことに、この世における美の極致ではありませんまいか。かくて私の好みを一言で表わせば、「優雅さと清純さの中の哀愁美」ということになるでしょうか。この上、貴重な紙面をお借りすることはたいへん恐縮なのですが、右掲載文に植字のミスがありますので、編集部のお許しを得ることができれば、そのうちの主なものだけ、左に訂正をさせて頂きたく存じます。

頁	段	ミスプリント	原文
一〇〇中	学院の徒	学院の徒	学究の徒
一〇〇中	においては自分も一般、普通人と	においては、自分も一般普通人と	においては、自分も一般普通人と
一〇三上	この言葉は	この言葉は	この言葉は
一〇三中	ユンド	ユンド	ユングまたはユンク
一〇三中	浅区六区	浅区六区	浅草六区
一〇五下	経神、尽せ	経神、尽せ	神経、尽くせ
一〇六上	四つの言葉	四つの言葉	四つの言葉

原美佐は今後への楽しみを抱いておきたい。日活は時代劇こそないが、縛りという点では、まんざらでないと思う。ただ、こちらが観ないだけ。それでも「月下の若武者」―五七年―で浅岡ルリコや「肉体の悪夢」―五八年―の筑波久子（但しスチールだけ）のセミ・ヌード縛り「銀座旋風児」の白木マリらの縛りはみせてもらっている。この調子だと稲垣美穂子なども一度位縛られていようように思うんだが記憶の方が……。

女優そのものの寿命が短いのか、それとも名が出ると女優自身が縛られたがらないのかともかく一寸見たところ、この三年間を縛られるスターで通している人は、まことに稀薄である。縛られも演技だと――女優達は自覚してほしい。ベテラン長谷川裕見子、千原しのぶ、若杉嘉津子、中堅どころの丘さとし、大川恵子、近藤美恵子、三田登喜子、中村玉緒、北沢典子、新進の中里阿津子、佐乃美子、上原美佐、弓恵子、花園ひろみ……等それに復起した三原葉子を加えてこれらの人達は我々マニヤには、まことに貴重な人達というほかはない。

（了）

黄色オラミ誕生

第 5 部

真 木 不 二 夫

1

ぼくは両手で頭をかかえ、背をまるめて、貴婦人がたの足蹴になるままだった。

薄い絹の布地を、ただフワリとからだに巻きつけただけの、美しい女性たちの足が、われさきに、ぼく一人を蹴りつけるのだ。

今夜の祝宴の興味は、もうぼくだけに焦点が集っているようだった。

ぼくは、酔った彼女らの足のあいだを、まるでボールのようころがるのだ。

ボールよりも、みじめだった。ボールには感情も意識もない。が、ぼくは、まだ「人間」なのだ。

人間としての誇りも自覚も、この国に捕われてから次第に磨滅して失われているとはいえ、ぼくはまだ百パーセント「オラミ」になったわけではない。

しかし――

いまは、まったく酔いどれ貴婦人がたの玩具だった。ぼくは、この美しい女性たちにとって、そんなにも珍奇な存在なのだろうか。

「ホラ、黄色いオラミ、こっちよ！」

「こっちへおいで、こっちへおいで！」

「ソラ、蹴るわよ！ うごかないで！」

軽く優雅な室内履きをはいた彼女たちの足が、ぼくの背中を、脇腹を、頭を、イヤというほど蹴りつけ、踏みしめる。

ぼくはころがる。そのころがりかたが悪いと、彼女の足が倍の力を追加するので、ぼくは自分から弾みをつけて、ゴロゴロと床の上をころがっていくのだ。

彼女たちは、手を叩いて笑う。足を踏み鳴らしてよろこぶ。

しまいに、ぼくはひどく疲れ、咽喉が乾いてカラカラになった。ぼくの額からは、びっしょりと汗がながれ、心臓が破裂しそうだった。

「ああ、ウーナ、おねがいです。ぼくに水を一杯めぐんでください」

ぼくは耐えきれなくなって、ぼくの主人のウーナに哀願した。

だが、ウーナの返事の前に、貴婦人たちの

高い驕声が、ぼくの顔にぶつけられてきた。
「まあ、黄色いオラミが、水を欲しがっているわ！」

「あきれた！ 一人前ね」

「黄色いオラミに飲ませてやる水なんて、このお部屋にあるかしら？」

これらの言葉が、ほとんど同時に、ぼくにむかって投げつけられたのだ。

ぼくは救いを求める意味で、ぼくの主人のウーナに、チラと眼をあげた。

だが、ウーナの白い顔も、いまはうす赤く酔い、彼女らの遊戯に同化しているようだった。

ぼくは悲しくなった。水が飲みたい！

「あるわよ、お水が！」

一人の貴婦人が、うしろのほうから、一際大きな声でさげんだ。

その貴婦人は、とくに酒を飲みすぎて酔ったらしく、すこし前から一人だけソファに寄りかかって、なかば眼を闭じていたのだ。

「あら、ネリリ、眠っていたのではなかったの？」

「あなたがたの騒ぎが大きくて、とても眠れやしないことよ」

ネリリと呼ばれた女性は、ソファから、ゆ

っくりと腰をあげた。すばらしく巨大な肩幅と胸と、そして腰のふくらみをもつ、美しい容貌の貴婦人だった。

(ネリリ？……はて、ネリリ？……)

ぼくはその名前に、きき覚えのあるような気がした。

そして、その記憶はすぐによみがえった。

ぼくは床に這いつくばったまま、おそろおそろ顔をあげて、もう一度、うわ眼づかいにネリリを見あげた。

(そうだ、まちがいない。やっぱり、あのときの女だ……)

ぼくはひそかにうなずき、新しい不安が、胸に湧きおこるのを感じた。

2

——あれは、ぼくが同僚の坂井特派員とともに、この不気味なメリール国の捕虜となつてから、二カ月ほど過ぎた日のことだった。血の気の多い坂井は、その時はもう、この国の女性に対して軽はずみな失策を犯して、「特殊オラミ種繁殖工場」へ監禁されてしまっていた。

その日、ぼくはその監禁された坂井に面会にいくために、この国の中央広場を通りかか

った。

と——そこでは、この国の男性の一人、つまり一頭のオラミが、鞭打ちの死刑を執行される場所であった。

そのオラミは乗用車オラミだったが、鎖を切って飼主の家から逃走し、逮捕されたものだった。

その哀れな乗用車オラミの飼主が、ネリリだったのだ。

ぼくは、その残忍な公開死刑を、戦慄しながら目撃した。そのとき、同じくその死刑を見物にきていた群衆の会話から、ネリリが自分の飼っているオラミの飼料についてのことを立ち聞いたのである。

ネリリという名前は、そのとき、ぼくの脳裏に強く印象づけられたのだ。

その後にも、ぼくはネリリと逢っている。

ぼくの主人ウーナの友人に、ポリームという女性がいる。(この国の人間は女性にきまっているのだが)

そのポリームが、自分の飼っている八五号のオラミを、誰かに売ってくれと、ウーナに頼みにきたのだ。

そこでウーナが紹介したのが、ネリリだった。

ぼくはウーナとポリームのお供をして、オラミ八五号を売るために、玄関に美しく咲いたバラのアーチのあるネリリの家に行った。そして、売買は成立した。

そのとき、そのオラミ八五号が、ぼくだけに、そっと人間の言葉をしゃべったので、びっくりしたことがあったのだが……。

その日、帰り際に、ポリームがネリリに言った冗談を、ぼくはおぼえている。

「あなたに売ったこのオラミ八五号を、可愛がってやって頂戴ね。ちゃんとした餌も、たまにはやってよ」

ネリリが自分の飼っているオラミに与える飼料については、はじめの噂では、規定の餌を与えるのが惜しいから、ということであった。

しかし、その行為が、単なるケチの心から発しているのではないことを、この国の女性たちはもう知っていたし、ぼくもとうに察知していた。

この国の女性たちは、男性どもの犠牲の上に立って、みんな富有な、高貴の生活を楽しんでいる。オラミに与える餌が惜しいということなど

あり得ない。

ネリリは、いままでよりも、もっとはげしく、もっと徹底して、この国の男性を虐待したかったのだ。侮辱を与えたかったのだ。

そして自分は、優越の満足感を、十分に味わいたかったのだ。

それにちがいない。

だからぼくは、今宵この祝宴に集った貴婦人たちの中から、ネリリの顔を発見した瞬間に、いい知れぬ不安が、急激に胸をよぎった

のだった。

3

そして、その不安と怖れは適中した。

「あるわよ、お水が……」

といって立ちあがったネリリの、美しくも不気味な表情は、まさに、ぼくの予感の適中を現わしているではないか。

お水……

ぼくは、敏感にその正体を察知した。

「いえ、ぼくはもう、あの、けつこうです。水はいりません！ お水はいりません！」

ぼくは、あわててさげんだ。本能的に尻ごみした。

しかし、ぼくがそれを感じて戦慄する以前に、貴婦人たちには、ネリリの言った言葉の意味がわかっていった。

「すてきだわ、ネリリ！」

「おやりなさいよ、ネリリ」

彼女らは、そんな怖いことを、冗談めかして、愉快げに、さも楽しげにネリリにけしかけるのだ。

ぼくは屈辱に、全身が熱くなった



れ

顔が火照った。泣きたくなった。

たしかに、この国の女性たちは、みんな美しい。その白い足もとに膝まずき、つまさきにキスするくらい

のことは、心になんの抵抗もなく、ぼくにもできる。

ボール代りに蹴られてもガマンできる。

この国で、男性が生きていくためには、常識外の忍従が必要なことは、ぼくだって、もう百も承知している。

しかし、それだけは、あまりに酷いというものではないだろうか。

「もう、けっこうです！ほんとにいいりません！咽喉の乾きは、もうとまりました！」

ぼくは、思わずまっすぐに首をのぼして、大声でどなった。その声が、彼女らの耳に、予想外に大きくひびいたのだろうか。貴婦人たちは、一瞬沈黙して、いっせいにぼくの顔を凝視したのだ。

「まあ、大きな声！」

「オラミのくせに、あんなに大きな声をだして！」



「私たちを、ビックリさせたわ！」

「お仕置きよ。ウーナ、あなたがあまやかすから悪いのよ。あなたのムチを貸して頂戴。この失礼なオラミを思い知らせてやるわ！」

彼女たちは、口々にわめいて、ウーナに詰め寄った。

ウーナは唇もとに苦笑をうかべていたが、

仕方がないといった顔で、うなずいた。

貴婦人たちの手に、ムチが渡された。

それは、この国に生えている植物で、ほそい割に、竹に似た弾力と柔軟さをもつムチだった。

おもに、乗車用のオラミに対して使用するムチで、油を塗って艶をだしたりして、それぞれ凝った細工と手入れがしてあり、どの女性の家にも、常に一ダースほど備えてあるのだ。

「さあ、無礼な黄色オラミ、叩いてやるからこっちへおいで！」

そのムチを、ぴゅうッと空鳴りさせて、貴婦人の一人が言った。

十人ほどの女性が、いっせいにムチをかまえて、ぼくをにらみつけたのだ。

輝やくばかりの肌にまとった色とりどりの衣裳にかこまれ、ぼくは百花撩乱の花壇の中に沈没している形だった。

しかし、この花々は、なんと怖ろしいトゲをもっているのだろうか。

「ううう……」

ぼくは、床に這ったまま、犬のようにうな

った。

屈辱と怒りと恐怖と混迷とが一緒になった

本能的なうなり声だった。

ぼくは、この十人の女性を相手にしてたたい、全部をおちのめすことを、ちょっとしたあいだ考えた。

(相手は女だ。たかがオンナじゃないか！)

祖国日本では、オンナという言葉に、まだまだ侮蔑のひびきがある。

だが、ぼくはすぐ我にかえり、現実を見つめてたじろいだ。

このメリール女性たちの、美しく均勢のとれた体格の偉大さ。腕力の強さ。そして、彼女らの背後にそびえる、権力の強大さを。

(とうてい勝てない！へたに反抗すれば、おれは殺される！)

ぼくのうめきは、あきらめに変わった。たとえ屈辱の地獄に眼も鼻も塗りつぶされても、ぼくはやっぱり死がこわかった。生きていたかったのだ。

ぼくは観念した。彼女らに背をむけた。

「それッ、それッ、それッ！……」

たちまち、数本のムチが、雨のようにぼくの頭上に降ってきた。

頭といわず、顔といわず、肩、背、尻。

ピシピシと鳴るムチ音のなかに、ぼくのあげるみじめな悲鳴があった。

この苦痛を耐えしのぼうと覚悟したぼくであつたが、ムチの雨のはげしさに、思わず腰を浮かせて、意気地ない恰好だが、床を這って逃げだしたのである。

「あら、逃げるわよ！逃がしては駄目よ」

彼女らは、歓声をあげ、ムチをふりあげながら、ぼくを追いまわし、部屋の片隅に追いつめる。

ぼくは壁を伝い、ころがりながら逃げまわ

る。

狩人に追われる獣のように。

白い美しい狩人にかこまれた黄色い獣。

「痛い、痛い、おゆるし下さい！おゆるし下さい！」

ぼくはとうとう壁際の一隅に倒れてしまった。ムチの痛みで、全身が火のように熱かった。

4

「ああ、おもしろかったわ！」

「せいせいしたわ。頭をかかえて、泣きながら逃げる恰好なんて、すてきに珍ね」

「ほんとうにこのオラミは愛玩用に適しているわ。この黄色にくらべたら、わがメリール国のオラミなんて、まだまだ不遜なところが

あるわ。教育の改善を考える必要を感じただ、みなさんはいかが？」

「同感よ」

「私も同感」

貴婦人たちは、満足したらしく、ムチをテーブルの上に置いた。

室内の狩猟遊戯に、彼女らもいささか疲れをおぼえたらしく、肩で息をつき、胸に両手をあてて呼吸をしずめていた。

が、彼女たちよりも疲労し、ムチの苦痛にあえいでいるのは、ぼくだった。

ぼくは病気になった犬のように、からだをぐったりと横に寝せ、手足を縮めて、ハアハアとせつない休息をとっていた。

「イシヤマ、大丈夫？」

と、ぼくに声をかけたのはウーナだった。心配そうな表情で、ぼくの顔をのぞきこんでくれたのだ。

「だ、大丈夫です」

ぼくは、うれしくて涙ぐんだ。

ウーナの心配は、単に一頭のプーチ・オラミの損傷を気づかったことだとわかっていても、いまは、ぼくにとってただ一人の味方だった。

だが、ぼくのその一瞬のよろこびも、貴婦

人の一人が、つぎの言葉を発したために、むざんに破れ去った。

「さあ、ネリリ、こんどはあなたの番よ」

さんざんムチで叩かれて、ぼくはそのことを忘れていたのだ。

ウーナを押しつけるようにして、こんどはネリリが、ぼくの顔をのぞきこんだ。

金髪、ほそい眉、青い瞳、高くつめたとがった鼻。赤く光っているネリリの唇が、ウフフ……と、ぼくをみおろして驕慢にほころんだ。

「いいわ。でも、まず、このオラミの手を縛っておいて頂戴。ついでに足もね。からだをうごけないようにしておかないと、うまくいかないの」

「馴れているのね、ネリリ」

と、誰かがひやかした。一同が、どっと笑った。

「うちに飼ってあるオラミは、こんな世話をかけないのだけれどね」

ネリリは、うっかりと言った。

「やっぱり相変らずなのね。あきれたわ、ネ



リリ」

「ネリリのお家のオラミは、手足を縛らなくとも、ちゃんと待っているのね」

貴婦人たちは、さらに声をあげて笑いこぼれた。

数本の紐が準備され、ぼくはたちまち手足

を縛りあげられた。

ぼくはもう疲れ、観念して、まったくの無抵抗だった。

(どうとも勝手にしろ。もうマナイタの上のった鯉だ！)

ヤケ気味だった。

そうなる、心に自棄の余裕ができた。

かぐわしい彼女らの息づかいが、ぼくの顔にふりかかると、ぼくは、むしろウツトリして、されるがままだった。

白くなめらかな腕に力が入り、躍動して、幾本もの紐が、ぼくのからだに巻きついた。

一人は、ぼくを、ぎゅうツと膝でおさえつけて、紐をひきしぼったりした。

やがて、一本の棒のように縛られたぼくの中から、床の上に転がされた。背中になわされた両手首が、ひどく痛かった。

ネリリの顔が、妖しく悪戯っぽい笑顔をうかべて、上からもう一度ぼくを見おろした。

ぼくは、眼をつぶった。

このとき、すでにぼくの心には、恐怖や屈辱よりも、むしろ好奇が強かったことを、白状せねばなるまい。

好奇——そうだ。このときぼくは、その期待に不思議な興味をおぼえ、胸の鼓動は異様に高鳴りはじめたが、けっして不快な気持ちではなかったのだ。

5

ぼくは少年の日、或る夏の夕暮れ、プールで溺れたときのことを思いだした。

頭上には、白っぽく輝やく太陽があった。ぼくの顔は水中に沈んだ。息が出来ず苦しかった。

ぼくは眼をとじ、口をむすんだ。水を呑めば死ぬと思った。

が、水は鼻の穴に浸入してきた。ぼくはむせた。浮き上ろうと必死に跳いた。

プールの横の花壇には、赤い花や青い花や黄色い花が、いっぱい咲き乱れていた。

ぼくは溺れ、意識がうすれ、ぼくを取り巻く、ぼくの父や母や、姉の顔は、白いものむこうにあった。

ぼくの鼻の穴から、水があふれた。ぼくは苦しく、口をあけた。

どの位経ったのか、ぼくは息をふきかえした。呼吸すると、水は咽喉から胃にながれた。周囲に人の気配があった。

けたたましい笑声と歓声が、ぼくの頭上に爆発し、渦を巻いた。

感謝のどよめきが湧き、拍手の音さえ交っていた。ぼくは、うすく眼をあけた。

6

「いかが？」

と、ネリリは貴婦人たち一同を見渡した。

顎をあげて得意げに、自慢の表情だった。

「ふうん……おどろいたわ」

「でも、案外、おもしろい感じね。あのオラミの顔をごらんさない。ほほほ……」

貴婦人たちの半分が、好奇と感謝を顔に現わして言った。また、ガヤガヤと騒音がまきおこった。

そのとき、ウーナが両手を大きくあげて、一同の騒ぎを制した。

「——みなさん、今夜はもう遅いから、このへんで散会したいと思います。みなさんのおかげで、ほんとうに楽しい一夜でしたわ」

ウーナの落ち着いた言葉に、一同のざわめきが低くなった。

「楽しかったのは、この黄色オラミのおかげよ」

ネリリが、ちょっと首を傾けて、魅惑的な微笑で言った。

貴婦人の三、四人に、ふと羨望の色がうかんだ。

「ああ、早く明日になればいいわ」

誰かが、歎息するように大声で言った。

「そうね。朝になったら、私はまっさきに、特殊オラミ繁殖工場へいくの。そして、一度に百頭も孵えるという、黄色オラミの仔ども

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽
復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切▽
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円
復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円

復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円
復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切▽
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切▽
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	三百円

復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第二集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価三百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円

御希望の年月号御指定の上、御申込次第
厳重包装の上急送申し上げます。御送金は
なるべく現金書留か振替を御利用下さるよ
うお願いいたします。

をみるの！」

「生まれたばかりの仔じゃ、つまらないけど、でも先が楽しみですものね」

「明日は、わがメリーランド国における、ちょっとした革命記念日というわけね」

「でも、うまく成功すればいいけど、失敗したら、がっかりだわ」

「大丈夫よ。政府の科学者を信じましょう」

席を立ちながら、口々に語り合う貴夫人たち

の言葉は、床に転ったままのぼくを愕然とさせた。

(そうか!……そうだったのか!……今夜の祝宴は、そのためだったのか!……)

ぼくは、思わず顔をあげた。

(明日、宿命のオラミが、百匹も……百匹も孵えるのか!……)

ぼくは、歯を喰いしばって、うめいた。

苛酷な使役のためにだけ、育てあげられる百匹!……

ぼくは戦慄し、からだをおこそうとして、全身に力をこめた。

だが、駄目だった。

ぼくの手足を縛った紐は、ぼくのハダに、非情な強さで、キリキリと噛みこんでいるのだった。

(未完)

連載

第三次元小説

影の国

雪 俊 遙

第五章

戒具じゆうぐの海老枷

旧校舎の地下室へ入ると、ジメ／＼した、かび臭い匂いが鼻をついた。細い廊下の右側に鉄格子のついた小さな四角の部屋が並んでいる。愛子が一番奥の部屋の、重い錠前をガチャガチャ鳴らせて仕切戸をあけた。ここは学校の懲罰規定に触れた生徒を檻禁しておく部屋である。罰を受ける生徒は家へ帰ることを許されない。授業は椅子に縛りつけられて受け、級長が手錠を預っている。始業のべ

ルと共に外され、終業と共に、先刻まで鉛筆を握っていた手を椅子の後へ廻されて、又、手錠をかけられる。休み時間は、そのままだ。便所へは当番の生徒が附添って行く。一日の授業が終ると、皆は足取りも軽く帰宅の途に就くが、彼女は後手錠をかけられ、首輪の鎖を当番に取りられて、足に繋がれた重い分銅を曳きずりながら、暗い地下室へ曳かれて行くのだ。

彼女等の世話は、そのクラスの当番がやることになっている。だから当番も、放課後すぐ帰るわけに行かないのだ。夕方、六時に夕食をさせ、もう一度、後手錠をかけ、異常のないことを確かめて帰る。翌朝、八時に翌日の当番が来て交替する。そして部屋の掃除を

監督し、食堂から食事を搬ぶ。何クラスの誰が何の咎で今日は懲罰されるということは、昼休みの一時間前の休憩時間の時、各教室に備えてあるマイクで知らされる。

その日の当番の愛子の中へ入ると坂田活子が鉄轡を噛まされた端正な顔に、かすかな微笑を浮べてお辞儀した。行儀の良い娘だ。

食事を飯台の前におくと、もう一度、今度は丁寧に頭を下げた。白い小さな頬に猿ぐつわが喰い入って頬肉が盛上り、頬が二重になった様に見える。これがなければ「どうも有難うございます」

と言葉に出して礼をいっただろう。何回も当番はやったが、こんな素直な生徒は始めてだ。痛々しい猿ぐつわが美しい顔を切ないほど締めつけ、甚だ魅力的だった。はずすのが惜しい位だ。

猿ぐつわの次は戒具。これは後手錠より一段、重罪の生徒につけられる。愛子が前にいた影北高女では、革の胸当の背に革の長手袋が二本ついていて、両手を後手に捻じ上げて入れたものだが、この学校のは、もっと酷い。π^{パイ}字型の大きな鑄物で、π字の上の横棒は罪人の胸から背を締める大きな胴輪になっている。その両端は幅広く尖っていて、二の腕を嵌める孔があいている。孔に腕を通して胸



に胴輪をつけると、肘を曲げて後手の下腕部を、π字の二本の脚に当る鉄板の穴へ入れるのだ。どの穴も、傍の撮^{つまみ}を廻せば、アイリスが動いて直径を小さくしたり大きくしたり出来る様になっている。どんなに体格の良い女でも入れられるし、どんなに痩せた人でも締めつけられる怖るべき拷具だ。腕穴の脇には小さな環がついていて手首を括った細鎖を吊り気味に繋いでいる。上半身はシュミーズ姿なので胸、背、腕に食い込んだ戒具は、いかにも冷たく重そうだ。「酷いお仕置ね。每晚このままで寝ているの、辛いでしょ」

「とっても……。どう向きをかえても、どこかに鉄の枷が食い込むでしょう。まるで拷問ですわ」

「泣かないの」

「毎晩、泣いてます。警検署へ連れていかれた日から、泣かない夜なんて一夜もありませんわ」

活子は寂しそうな顔で笑った。

「私や芳江さんを恨んでるんでしょう」

「アラ、そんなことありませんわ」

「隠さなくてもいいのよ」

「だって川島さんは、どうして私一人だけ、いつまでもこんなお仕置受けているか知らないでしょう」

「ええ、誰かに聞きたいと思っていたのよ」

「私は革新派の人達へのみせしめなんです」

「マア、じゃ、あなた革新派なの」

「ええ。私の父は革新派の中でも容女論者なのです。単純な労働運動や凌虐法改良運動をやっている革新党は伸びない。地下の女権党と手を握って奴隷階級を動員しなければ駄目だ。と主張して、革新党からも除名されて、先月末から地下へ潜ってしまったのです」

「マア。それで警検署でも、学校でも、あなたを今度の事件の主犯にデッチ上げたわけね」

「そうです。この辺は特に保守党の勢力が強いでしょ。当然の反動で、革新党の中には父の同調者が増えているんです。それを牽制するために、保守党の人達が私を水責め竿の先に吊したんです」

活子は薄い下唇をキリッと噛んだ。美しい顔にチラッと勝気そうな表情が浮んだ。

重い戒具をやっと外すと、いつも戒具の喰い込んでいる部分の肌が、痣の様に黒ずんでいる。色白のきれいな肌をした娘なので、その痣は一層、目立って不気味だった。愛子は思わず身震いした。

「学校では、いつまで、あなたをここへ檻禁しておくつもりかしら」

「わかりませんわ」

愛子は、ついでに足枷も外してやろうと思った。胡座を組んだ様に脛と脛を重ね合わせて、太い鉄の輪で留めてある。鍵は戒具や入口の錠の鍵と一緒に束になっている。

活子は不審そうな顔をして、

「戒具と足枷と一緒に外すのは当番として規則違反ですよ」

「構わないわよ。稀には伸びくと手足を伸ばして御飯をお食べなさいナ」

「でも知れると、私ばかりか愛子さんもお仕置されますわ」

「大丈夫。今見てきたけど、外の部屋は皆、空いていますもの。坂田さんの枷が余りむごいんですもの、私、義憤を覚えちゃったわ」

「いい人ですね、愛子さんて」

「そうかしら」

愛子は内心、こうしている所を見つかつて、二人並んで尻打台へ載せられてみたい様な、妙な亢奮を覚えていたので、活子の言葉が一寸、くすぐったかった。

活子が食事している間、愛子は反対側の寝台の頭の所で、窓一つない天井のしみを見ていた。狭い部屋なので部屋の中は寝台と飯台しかない。

湿っぽい房内にはかび臭い匂いがしみついている。こんな所へ只一人で檻禁されている活子が、いじらしかった。腕を廻して、ぐっ

と締付けたら折れてしまいそうな、活子の細い体を、愛子は哀れな気持ちで見ていた。

「ハイ、もう済みましたから我具をつけて下さい」

土間の上にキチンと座って、細い上体を起し、両手を後手に重ねた。

「いいわよ。少しゆっくりお話でもしましょう」

と柳具の跡の黒い手足を伸して仰向けにさせた。ツンと高い鼻を掴み上げてみたい気がする。

「こんな汚いお部屋、いやじゃありません」

「そうね。でも、もう慣れちゃったわ」

「こんなお部屋によく居られるわね、って、私の鼻をつまんで行く人がよく居ますのよ」

「マア。坂田さん、クラス一の立派な鼻の持主だから、皆さん羨しがってるのよ」

「警検署でも始終、鼻をつまんで引きずり廻すのよ」

「随分、酷い目に遇ったんでしょね」

「とっても。でも、ねえ。私、なんだか社会って、どうしてこう、何から何まで、女の人が虐められる様に出来ているのか、解った様な気がしますわ」

「……………」

「女の心の中には、酷い目に遇わされることを喜ぶ気持ちが皆にあるのよ。危険な気持ちですわ。だから一層、女権運動なんていうものが必要かもしれないわ。放任しておくと、女という女が皆、学校や職場で、或は家庭で虐められることの悦びを覚えて、身を滅して行ってしまうのでしょうか。だから女権党のいう様な男女同権、全民平等

の社会にして、厳とした社会制度を打建てなければいけないのかもしれないわ」

活子の説明を聞いていると、女権党にも私刑や拷問があることも正当化出来るようで、愛子は感心してしまった。女性虐待がいかに野蛮であるかを説いていた母の理想と、それでも被虐の中に悦楽を感じていた体の感覚とが、矛盾なく結びつきそうだった。

「でも、女である以上、なるべく大勢の人から虐められたいという気持ちもあるでしょう」

「そうね。でも、それをそのまま社会制度に投影させてしまっただけじゃないわ。だって、それでは女の身体が保たないでしょう。そういう気持ちを抑えて、男女が二人だけで虐めっこを愉しみながら、末長く生きてこそ、始めて豊かな人生を全うしたことになるでしょう」

活子は確信ありげに断乎とした態度で断言した。愛子はその時、チラと水責め竿の先から吊されていた活子の姿を思い出した。何故そんなものが浮んで来たのか一寸解らなかったが、その時の羨望と嫉妬の錯綜した感情と同じものを、今の言葉にも感じた故らしい。この人には好きな人がいるのだわ。私にはそれが居ないから、この人の言葉が充分理解出来ないのかもしれないわ。それから愛子は、芳江のことを思い出した。芳江が男だしたら活子の言葉も解る様な気がした。そうすると、芳江お嬢様は私にとって何になるのかしら……………」

主家に帰ると、芳江の部屋へ行って、世間話の様に、愛子は活子の言った事を話してみた。

「そうねえ……………」

芳江は、暫く考える様に口ごもって、目ばかりくるく動かし

いたが、

「でも、それじゃあ、本当に悪い人なら奴隷にしたって、拷問したって、どんなに残酷な公開死刑にしたっていいんだと、いうことになりはしないかしら。愛情も大切だけれど、それより人間の尊厳というか、そういうものの方が、もっと大切でしょう。そこに焦点を合わせて考えないと、現状を肯定することになっていけないと思うわ」

「じゃあ、お嬢様は級長さんですから、よく懲罰で級の人を叩かされるでしょう。ああいう時、どうお考えになっていらっしゃるのですの」

「厭よ、私。厭で厭で仕様がないわ。一鞭毎に、その人の人格を傷つけていることが、はっきり感じられるんですもの。ああいうことをしなければならぬ自分が、とても悲しいわ。それは私だって人間ですもの。長く叩いていると段々慣れて来るわよ。だから余計厭なの。自己嫌悪で胸が一杯になり、どこか遠くへ行って誰とも逢わないで、一人で暮らしたいと思うわ」

愛子は息を詰めて、芳江の可愛い顔を見めていた。その心の奥行の深さは、とても私や坂田さんの及ぶ所ではなさそうだと、すっかり感心してしまった。

その時、地獄の底から洩れて来る様な恐ろしい唸り声が、庭の方から聞えた。芳江は暗い顔になった。

「ああ、又、始った。朝から女権党の人達が、郷土防衛隊に捕ってうちへ連れて来られているのよ。父が防衛隊の名誉総裁で兄が隊長でしょう。家が広くて、一寸ぐらい責めても外へ聞えなくていいから、ここを秘密の訊問所にして欲しいって言うんですって。防衛隊

の人達は、この頃、女権党が革新派に滲透して武装蜂起を狙っているから、もう警検署に任せておけないっていうの。この辺の保守党の人達と来たら労働運動と女権運動の区別もつかないんですもの、革新党が過激になるのも無理ないわ。父や兄は、それほど極端じゃないんですけど、かつがれ易い家柄に生れて、いつも保守派の人達から、かつがれているから駄目なのよ。私もそうですけど、人に逆らえない家系ですから」

眉間に小さな皺を寄せて自嘲気味に笑った。

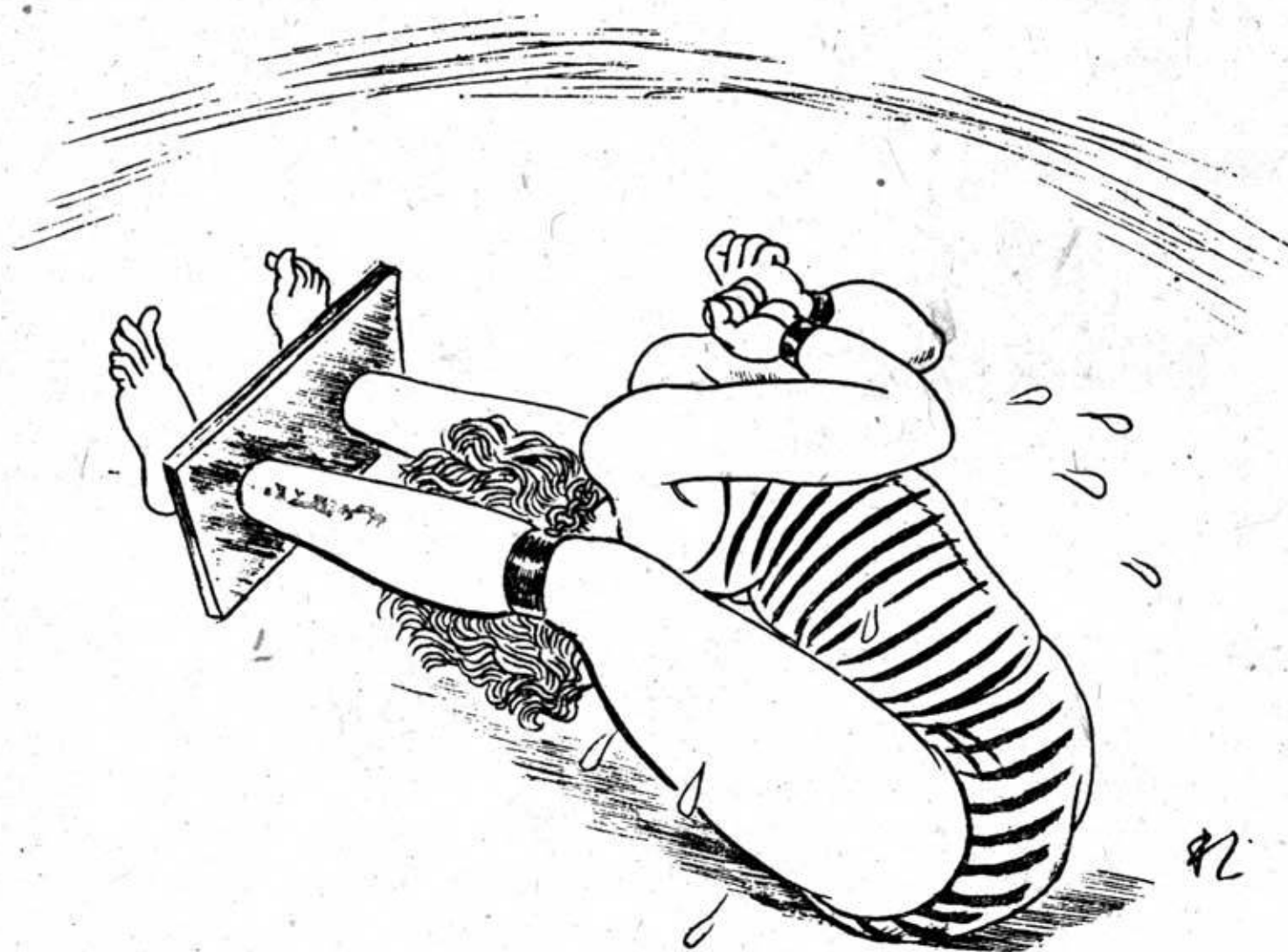
もう一声、怖ろしい唸り声がした。はっきり女の声と解る。愛子は何だか聞いた様な声だと思った。

学校から帰ると、愛子は裏庭の監房の方へ行った。監視の番人から、活子が秘かに学校当局より、郷土防衛隊の手へ引渡されたらしいと聞いたので、様子を見に来たのである。

裏庭にはかなり大きな瓢箪池があって、池の向うに農奴小屋が立っていた。愛子が子供の頃、遊びに来た時には、そこに逞しい身体の男女の農奴が住んでいて、殆んど裸に近い体に太い革帯を掛けられて、牛のように逞しい尻にピシ／＼鞭をあてられながら、農耕鋤や農耕鋤を曳いて、田や畠で働かされていた。

しかし抜目ない民治は、農場を次々に纏めて大工場の敷地に貸し今では近辺随一の工場地主になって、農奴小屋は住む人もない廃屋になっている。

池の手前に、一米四方ほどの大きさの中に、鉄格子の監房がズラリと並んでいる。檻の中には、防衛隊の手で捕えられた女権党や革新党の若い男女が、一人づつ押込められていた。



れ

皆、手足に鉄環を嵌められ、四つ這いの姿で、鉄環に通した鎖を床の鉄棒に繋がれている。所々にまだ空いた監房もあるが、中には訊問を受ける為に引出され監房を空にしている者もある様だ。

拷問されて戻って来たばかりの者は、四つん這いになっている力もなく、胸や腹に鉄棒を喰い込ませて、べったりとつ伏している。

恐怖と陰惨な思い。奇妙な快感と好失心が、愛子の胸に交々去来する。監視の番人も芳江の特別扱いを知っているのか、何もいわなかった。

一つ、一つ、檻の中を片端から覗いて行く。

影北署で、母の浅間しい姿を見た時に頭を掠めた言葉が思い出された。

この世では、一番高邁な理想を持つ人が、一番惨めな姿にさせられるのだわ……と。

愛子は、ぬく／＼と美しいローブを纏って、ピアノを弾いている筈の芳江の事も考えた。

一番安全な位置にいて、頭の中だけで高尚なことを考えている芳江は卑怯だと思う。本当に人間の尊厳を傷つける拷問制度を憎むなら、この人達のように、檻房の中に入れられて、苦しむべきだわ。

そこまで考えて、愛子は足を停めた。

活子が居たのだ。彼女の方は、とくに母屋の方から近付いてくるのを認めていたのだろう。愛子にみつかるとするかの様に、髪の毛が地面につくほど深く首を垂れていた。しかし斜め前に差伸べた細い腕と、丸くなった背中、白い肌に、鮮やかに黒い戎具の痣が何よりも彼女の身体を一目で判別させるのだ。

こんな姿を見られたくなかったに決っているわ。今は、まだ彼女の体は、白くすべく美しいが、半日も経たない内に、哀れな姿になっているに違いない。

愛子は後悔で胸が痛んだ。黙って立去ろうとした。その時、何か灼けつく様な視線が、大分前から自分に注がれていることに気付いて顔を上げた。

「アッ、三田さん」

活子の隣りの監房には学芸委員長の三田^{なか}央子が入れられていた。男の様に肩幅の広いガッシリした体。肉の厚い肩の間から中性的な、いかつい顔が愛子を見上げていた。目が憎悪でギラギラ光っている。遅ましい背中、赤い鞭跡が何本も盛上っている。脇腹には異様な傷跡が、大輪の紅花の様に腫れ上っている。

芳江の部屋で聞いた恐ろしい唸り声は、この央子のものだ、愛子は急に理解した。

この男の様に体格の良い央子が色々な責具で拷問されている姿を想像すると、何か異様な復讐心が愛子の胸を躍らせる。

この目が、いつか四つん這いになって油虫を食べさせられていた私の哀れな姿を気持良さそうに見下していたのだわ。そう思うと、今更の様に憎しみが、たぎり立った。

「私の姿を見て嘲けりに来たのね。フフン、お生憎様。私はあんと違って、どんな拷問にだって負けやしないよ」

「そう。それじゃ、その時ゆっくり見物するわ」

と言捨てて、愛子は、さっさとそこを離れた。あんな女が女権党なら、芳江お嬢様の方がずっと立派だわ。

監視の男に、央子を曳出す時、教えてくれる様に頼むと、

「三田という女はどれですか」

男は素朴な口調で聞き返した。

央子がいれられている監房の前へ行って、

「コレよ」

と指さすと、

「ああ、この女ですか。一番ふとっているから、すぐ解りますよ。アハハハ」

男はそういって、よく覚えようとする様に、央子の背中を六尺棒で力一杯、突飛ばした。央子は「ウッ」

と呻いて前に倒れ、顔をたたか前の格子にぶっつけた。

愛子は男の六尺棒を借りて央子のふとった体を力一杯、小突き廻した。いい気持であった。

央子は翌日の夕食後、又、曳出された。

番人の男の知らせで、愛子が庭伝いに行ってみると、植込みの横に和子とマコが立って拷問を見物していた。和子はいつも見物しているのもう顔を真赤にして常軌を失っている。

芳江に知れたら叱られると思ったが、沓脱石の前に立たされている、三田央子のアトラスの様に遅ましい身体を見ると、足が地に吸付けられてしまった。

筋肉質の緊った彫の深い体は、肩幅が広く腕が太くて男の様だ。

しかし肌の白さ、なめらかさ、筋肉の隆起の独特のなめらかさは、やはり女である。このまま、奴隷市場のせり売り台の上に立たせてみたいと愛子は思った。

「わしや、この年になって、大勢の人に捕った姿を見られても平気

な顔をしている女は始めて見たわい」

そんなことをいっている老人が居る。央子なら、そんな気の強さも持っているのだろうと愛子は思った。

「学拡連と手を握った新町の労組の名を全部いえ」

明が、虚勢でもなさそうに怒鳴っている。実際、こんなポリウームのある体を見れば、どんな男だって責めたくて仕様がなくなるだろう。

央子は嘲笑さえ浮べて、黙って突っ立っていた。

「この女に海老柳を嵌めてやれ」

「オウ」

恐ろしい返事をして、屈強の男が二人、左右から進み出た。

央子は足を拡げて座らせられた。

膝と膝とを挟みつける膝柳を先ず嵌められた。

それから大きな鉄板の柳が搬び出されて来た。

両端に小さな穴、真中に大きな穴があいている。

央子は上半身を前に倒され、足首の間に首を入れて、鉄柳の三つの穴で留めてしまうのだ。

無論、そんな無理な姿勢がとれる筈はない。首を引張ったり、背中や腰を蹴とばして乱暴に央子の上体を折曲げた。骨太で肉の厚い身体が、時々ミシ／＼と異様な音を立てる。

「ウアーッ。ウアーッ」

央子は歯を喰い縛って獣の咆哮に似た呻き声を立てた。ほつれ毛を額に垂した凄愴な顔が、時々首を捻じってこちらを向いた。

「ウ、ウ、ウ、ウアーッ」

咆哮が、呻き声とも泣き声ともつかぬものに代ると、央子の身体

を手荒く踏付けていた人影が、さっと離れた。五尺六寸で十八貫あるといていた央子の身体が真二つに折られ、首と両足を鉄板に挟まれて、つつ伏していた。豊かな背中が波打つと、筋肉が波の様に盛上って白く光る。苦痛の為に、広い背中の皮膚一面にじっとり脂汗が滲んで、それが夕方の赤い西陽に、キラ／＼と反射して光るのだ。

「お前が連絡したのは、どことどの労組だ」

「知らない。知らないッ」

「自分のやったことを知らない筈があるものか」

央子は顔を真赤にして呻き続けている。一時間も経つと、全身が真赤に染まって、身体中の毛穴という毛穴から冷汗が流れ出して来た。本当にそれは流れ出るという形容が一番ピッタリするほど烈しいものだった。唸り声さえもう元気を失って細くなっている。棒で叩かれても悲鳴を上げる氣力がないのか、せいぜいと咽喉を哀れに鳴らすだけだった。

それでも、

「白状するか」

と責められると、力なくかぶりを振った。

そんな状態が更に二時間近く続いた。責めて耐え得る人間の体力というものは随分、強いものだ、と、愛子は内心、驚いていた。

真紅に紅潮して、朱色の汗が流れて来るかと思う程だった央子の全身に、次第に青味が加わって、紫色になった。

そして紫色の体が暗蒼色に変わり、最後に蒼白色を呈して来た。こうなったら死の一步手前だというので、央子は、やっと許され、海老柳を外されて仰向けに寝かされた。

虫の息の央子は担架で搬ばれて行った。異様な責めに愛子の胸は波立っていた。

革新党のクーデターが勃発したのは、翌日の夜であった。時ならぬ真夜中の叫声に驚いて飛起きた愛子は、すぐ二、三人の男に縛り

上げられてしまった。愛子が笞を当てられながら廊下を歩かされてみると、向うから芳江が曳立てられて来た。芳江も可愛い水色のネグリジェの上から、胸縄を掛けられて後手に縛られていた。裏庭の監房の方から半裸の捕虜達が次次に救い出されて来た。

〔この項終り〕



愛^マ好^ニ者^アの記^ノ録^ト

—花園にさまようの記—

とやま・かづひこ

(122)
足

かづひこのよく行く会社の社長室は、社長の好みで、近代的ビルの中にありながらタタミを使った和室造り。その日も所用で呼ばれ

たかづひこは、コタツで暖をとりながら社長と要談を交していた。

そこへ社長秘書の二木嬢が割りこんで来たのだ。この秘書嬢、社長が目に入れても痛くないという程可愛がるメイで、仲々の美人。二十二才とかの娘さんだが、客が顔なじみの

かづひこだという気易さからか、勢いよくコタツに足をつき入れた。

とたんにかづひこは、眉をしかめねばならなかった。

コタツに入っていたかづひこの左手が、どうしたハズミか彼女の足の裏に押されて、ヤ

グラの脚に強く踏み押しつけられた格好になったからだ。痛かった。しかし、かづひはとっさに、その痛さを覚えてさりげなく要談を進めた。

彼女は、自分が踏んだことを知ってか知らずか、多分、知っていたらうとは思うのだが、かづひが反応を示さないままに平然としていた。

美しい女性に踏んで貰えた感激に、社を辞してからにもかづひは酔っていた。

十二月九日。銀座Aビル内での、得難い体験の一駒だった。

(123) 宝 物

十二月四日付の毎夕新聞に、平井利市氏の「日本のフランス小咄」というのが載っている。

戦前のことで、さる宮様が松茸狩りをされた際、捨てられた御使用済みの紙をひろった警備員が大切に桐箱に納めて家宝にするというハナシ。

うやうやしく押し戴く画まで添えられているが、罪のないハナシと知りながら、かづひは奇態にひかれるから妙だ。

(124) に お い

ちょっと古いが十月二十日の朝日新聞のS歯磨広告はケツサクだった。

色刷りの広告にはバラの香料が入れてあるそう。「ハナを近づけてニオイを嗅いでごらんさい」と書いてある。広告中にスラックス姿の若い女性が微笑している。

かづひは、書かれてある通りハナを近づけてみた。

するとどうだ。ニオイは女性の写真のヒップの辺りから感じられるのだ。ケツサクとはこのこと。

広告スポンサーの意図が果してそこにあったのかどうかは知らないが、こんなところにもかづひの胸をトキメカすムードが感じられる。そこから拡がる想像に、かづひは結構楽しく酔えるのだ。

(125) ヌード・スタジオ

週刊誌「土曜漫画」——ナンバー不明——に「流行語辞典、デッサン専門のカメラマン大阪ヌード・スタジオ分布図」なる一文が載っていた。

——モデルがポーズをとった途端、客の一人が近づいてそのヒップに、飛燕のような素早さでキッスした。——という眉唾もののハナシなのだが、かづひは、その真偽のほどは、などという理屈は抜きにして、ただこの一文から出発して、夢の中に遊びたいと努力してしまう。

タワイないと、ノーマルな人はわらうだろう。だが、これが、見果てぬ夢を追うマゾの宿命と、かづひが、かづひを慰めている。

(126) 千 姫

以前にも、昔の渡し人足のことを書いた覚えがあるが、日本観光新聞を読んでいて又もや、ゾクツとさせられた。

岩崎栄氏の「徳川女系図」(一一五回)で千姫が六人の人足に担わせた輦台の上に、茶道具まで並べて平然と川を渡る状景の描写があったからだ。

昔、貴人は川を渡るに人間の肩を使いながら、何等日常と変わりなく振舞ったらしい。すばらしい風習だと思う。うらやましい。かづひも今が昔となし得るならば、喜んで渡し人足を志願するものを。



猿 轡 放 談

さる ぐつわ ほう だん

(その 二)

浮 家 鷹 三

前回に引続き、猿轡に就いての私見アレコレを、述べさせて頂きましょう。

前回にも一寸申し述べましたが、人間の口に猿轡を嵌めて、その効力を有らしめん為には、必然的に手の自由から先に奪わねばなりませんので、だから当然「猿轡と五体（主として手）の緊縛」とは、切っても切れない関

係にあるという事が出来る訳で……そこで私のこの「猿轡放談」でも、猿轡独自に止めた気は山々あっても、どうしても五体の緊縛という、お添物がつき易いので、この事に就きましては、予め読者に御諒解を願っておく次第です。

どうも、この道の好き者というものは、仕

方のないもので、同好者にしかわかって貰えない、秘かな楽しみを持つものでして、例えば大衆小説を読んでいる場合にしましても左様です。

成るだけ、美しい女が惨らしく扱われ（無論、縛り上げられたり猿轡を嵌められたりした上で）る場面や、描写の念入りなのに行き

当ると、トタンにもう鳩尾の辺りが、こうムズムズと……つまり嬉しくなってきました。

ところで、小説や物語の中で、女を惨らしく縛り上げたり、猿轡を嵌ませたりする場面の現われるのは、それは決った様に、現代版では探偵ものか、時代ものなら何々捕物帳という風になっています。

それから今一つは、伝奇物でしょう。かの伝奇物を書かせては、当代その右に出る者のないと言われる、角田喜久雄氏の作品には、仲々この「女を虐める場面」描写が濃厚で、充分サジストを喜ばせてくれます。

然し又、もともと人間の軀を縛り上げて自由を奪い、責め拷問——つまり惨虐を行うとしても、その形態がそうそう千差万別されるものではないのですから、いくら綿密な描写を計画しても、矢張り結果は或る程度の範囲又は型の中に嵌ってしまう様です。

それが「猿轡を噛ませる」又は「嵌める」「嵌せる」という場面独自の描写となりますと、これはもう全く範囲が狭いのが当然で、どの作者の健筆を以てしても、先ず先ず大差がありません。——それは勿論、猿轡の嵌め方そのものに、さして変型がないからでしょう。

では、理屈ばかり述べていないで、この辺で一つ「女に猿轡を嵌める場面の描写」に就いて、往年の大衆文学の中から二、三の型を拾ってから、話をその挿絵の上に進め、更に「映画の上に現われた猿轡の場面」に及ぼして行きましょう。

× × × × × ×

先ず真ッ先に思い出すのは、何と云ってもかの大谷崎（潤一郎）の名作『少年』の中に現われてくる一場面です。

この小説のテーマーは、未だ一人前に成人していない、少年少女三人のサド・マゾの心理を描写したもので、大した色気も無い筈なのに、それが仲々どうしてどうして……一読忽ち妖しい雰囲気巻き込まれずに居れないのですから、さすがです。

彼等三人の少年少女のうち、二人は男で一人が女ですが、彼等の親達は社交界に多忙らしく、その大邸宅の中では親達の干渉なしに三人が自由奔放に遊び呆けます。

「オイ仙吉、こいつの帯を解いて猿轡を嵌めておやり」と信一が言いますと

「へい、合点です」と仙吉は、今、信一が狐が人間の女に化けて旅人をタブラカシタ想定の下に、縛り上げた信一の姉の帯を解いて、

シットリと油に湿った髷の下から両頬へかけて二タ回り、グイと力に任せて絞り上げたから堪らない。帯は忽ち彼女のフクヨカな頬の肉にグイグイと喰い入って、つい今し方まで仙吉に対して散々サド的行為に出ていた姿とは、似て似つかぬ哀れな形相を呈します。

この場合の猿轡の嵌め方が、一般？の場合と大いに変っているとは思いませんか？。

だって、そうでしょう。——普通一般、猿轡に用いる布切れと言え、殆んどが手拭（この小説の時代には、未だタオルは無かった筈で、だから尚更、そうなる）か、さなくば、それと大差ない大きさの布切れを用いるのが通例となっているのに、ここでは帯を猿轡に用いており、殊には頬を二タ回りにも縛っています。こんな描写が他にあるでしょうか？。恐らくないと思うのは、或は筆者自身が「井の中の蛙」式偏狭なのかも知れませんが……。

何れにしましても、この谷崎文学の「少年に出てくる猿轡遂行の描写は、非常に珍らしいもので、殊に被猿轡者が、少女とは云え、シットリと油に湿った髷の下から……」というあたり、且つ、アノ時代の女性の早婚等を考え合せて、もう乳臭さから抜け切った色

気を漂わせていますし、そのフクヨカな頬に喰い入る帯地（この場合の帯は、厚板のそれではなく俗にいう「三尺帯」の事です）の事等を想像すると、この道の好き者にとってはもう堪らない魅惑でしょう。

「フクヨカな頬に喰い入る猿轡」という文章から、私は戦前の時代映画の中に、この表現にピッタリと当てはまる場面と、その役を演じた女優さんのあった事を覚えています。

それは、市川右太衛門の映画が松竹系で上映されていた昭和十年前後（正確な年月は忘れました）の頃の正月映画で、「富士に立つ退屈男」というのがありました。

この映画のラストシーンに近く、由井正雪の一味にラチされて監禁されている役を勤めたのが、当時の女優で後に本郷秀雄と夫婦になったとかの噂の「光川京子」です。

彼女の顔立が、丸の部に類していて豊頬であつた事は、人も知る事実ですが、この人が後手に縛られた上、その豊頬に喰い入る程厳しく嵌められた猿轡の状景は、こよなく観物でした。——この人のもので同じく豊頬に喰い入る猿轡の状景を、観せてくれたものが今一つあります。

それは、同じ頃の松竹映画で、長谷川伸原

作の映画化「平五郎兄弟」中の一カットでした。——この場合も矢張り、後手の緊縛猿轡で、攫って行った悪者達の家の階下の隅っこに、押込められていて、パッと写った画面で激しく身悶えします。

どうも話に身が入って、映画の場面は、もっと後にする筈を、思わず飛び入りさせてしまつて恐縮です。文学上での描写を後、二、三御披露したいのでした。

余り古臭いものばかりを引用するのも、気が引けますので（事実、筆者は古臭い事の好きな、謂ゆる懐古派ですが）ここで一つ、現在、時代物大衆文学の雄、山手樹一郎の近作「青空剣法」の中で、倉屋の女将が女賊お紋一味に捕えられて、金代の囚にされている場面の描写を御紹介しますと、次の様です。

「あっ」闇に馴れた目は、八畳ほどの座敷の真ん中に腰の物一つの素裸にされてうしろ手に縛られ、手拭で猿ぐっわをされて、あらわな胸を前かがみにかばいながら石の様に坐っている無残な女の姿を見た。鬚の根ががっくりとこわれ落ちているのも痛ましい。（原文通り）

以上によってお判りの様に、氏の描写は猿轡をされてとなつており、これなれば被猿轡

の形態は読者の想像任せで——即ち口を割つて噛まされている、とでも又、例の口を割らずに鼻口をモロに縛るテの型とでも、どちらにでも向く訳で、これなら余り毒氣（むごたらしさ）がありませんが、そのかわりK誌党のわれわれには一寸物足りない感じがしないでもありません。——もっとも、氏のいわゆる山手文学たるものは、当代人も知る健全娯楽調なので、この人の作品から我れらが満足を求めるのはチト無理でしょう。

こうなると矢張り古臭いものを引用させて頂くのが、筆者自身、無難な様で——そこで甚だ手前ミソ乍ら又しても懐古的なものを二三、御紹介させて頂きますが——。

昭和初年から三年位までの頃に発行された小型本に、大仏次郎作「鞍馬天狗余燼」と題名を打ったものがありました。これは、かの大衆文学全集の続巻で、その中に女に猿轡を噛ませる場面の描写に、一寸、又、変ったのがありました。

それは女を攫つて来た浪人者が、古寺（或は古家であつたか）に同居する悪友に留守を頼んで外出しようとしませんが、アトの事が気がかりで既に気絶している女に猿轡を噛ませます。この時の猿轡の噛ませ方は、女の顔を自

分の膝の上に仰向けに乗せて、指で女の唇をコジ開けるので、見ている悪友が「悪人だナ貴様は」と云います。ただそれだけの事です、が、気絶して抵抗力を失っている女の唇に、顔を自由に扱ってそれを行う様が、これも先に述べた谷崎氏の「少年」の場合とは又、異った魅惑です。（筆者は本稿を綴るにあたり慌てて原本を捜したのですが、何れも戦前のものなので急には見つからず、止むなく記憶を辿って書きましたので、山手氏のものを除いては原文通りとは申せませんが、意味に於

ては決して間違っていない積りです）さてもう一つ、これも古いもので恐縮ですが、大衆文学全集が出た頃の講談社の雑誌キング連載ものに、土師清二作の「血ろくろ伝奇」というのがありました。この小説のラストに近く、救いを求める女に悪人達が、さばさせじと猿轡を噛ますのですか、この場合の描写では女の唇を割るのに、その両頬を指で強く挟んでこれを行っています。

（本稿中に引用させて頂いた、作家並びに俳優諸氏への失礼をお詫びします。）

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判（9×6.5寸）印画紙焼付

各組一枚一組（全部送料共）

Y 7	逆十字後手縛	（愛川悦子）
Y 6	麗しの緊縛裸像	（愛川悦子）
Y 5	浴室股間縛り	（大塚啓子）
Y 4	見事な飾り物	（大塚啓子）
Y 3	観念した胡坐	（大塚啓子）
Y 2	乱れ黒髪裸像	（大塚啓子）
Y 1	全裸荷造縛しぱり	（大塚啓子）
一組一枚		八〇円
五組五枚		三〇〇円
十組十枚		五五〇円
二十組二十枚		一〇〇〇円
三十組三十枚		一四〇〇円
四十組四十枚		一七五〇円
五十組五十枚		二〇〇〇円

Y 8	裸身の捕われ人	（愛川悦子）
Y 9	逆エビ後手足吊り	（愛川悦子）
Y 10	全裸ねやの縛り	（田中芳代）
Y 11	なまめかしき緊縛	（花坂道子）
Y 12	全裸フトンむし	（大塚啓子）
Y 13	蒲団裏裸またぎ	（大塚啓子）
Y 14	初々しき裸全身像	（岩井知子）
Y 15	ヌード股間しぱり	（絹川文代）
Y 16	全裸脚掌股間縛	（絹川文代）
Y 17	セーラー後手吊り	（川辺砂登子）
Y 18	庭園ヌード縛り	（絹川文代）
Y 19	全裸全身裸自慢	（愛川悦子）
Y 20	豊満双丘くらべ	（愛川悦子）
Y 21	追いつめられた裸女	（愛川悦子）
Y 22	遅ましきヒツプ	（愛川悦子）

Y 23	大の字晒し	（絹川文代）
Y 24	縛り正面正坐	（絹川文代）
Y 25	胸のポリウム自慢	（愛川悦子）
Y 26	麗人受難の巻	（益田房子）
Y 27	もつこれで許して	（益田房子）
Y 28	むしられたスロース	（花坂道子）
Y 29	全裸縛りの全身	（平野笑子）
Y 30	鎮座する縛り女神	（平野笑子）
Y 31	囚女後手柱縛り	（大塚啓子）
Y 32	全裸強烈股間縛	（絹川文代）
Y 33	ベツト縛りのポーズ	（絹川文代）
Y 34	開股一番一直線	（絹川文代）
Y 35	縛り腰巻色模様	（絹川文代）
Y 36	亀田股間縛正面	（絹川文代）
Y 37	全裸椅子またぎ	（田原美佐子）
Y 38	妖艶闊のしぱり	（絹川文代）
Y 39	椅子またぎ裸後手	（田原美佐子）
Y 40	強烈第手首縛縮	（田原美佐子）
Y 41	ハタ力縛り人形	（絹川文代）

Y 42	濃艶ハタ力縛り	（絹川文代）
Y 43	あられもなき開股	（大塚啓子）
Y 44	全裸変形股間正面	（大塚啓子）
Y 45	後手立木吊り	（村井知可子）
Y 46	全裸後手壁ハリツケ	（愛川悦子）
Y 47	全裸寝台裏恥責め	（花坂道子）
Y 48	振袖令嬢後手責め	（花坂道子）
Y 49	長襦袢後手しぱり	（花坂道子）
Y 50	ワンピース縛り	（花坂道子）
Y 51	手吊り裸身の乱舞	（絹川文代）
Y 52	柱縛り観念の図	（絹川文代）
Y 53	不行儀姿態の美	（絹川文代）
Y 54	カメラに晒す全裸	（大塚啓子）
Y 55	緊縛女体の開陳	（絹川文代）
Y 56	膨隆突出した臀部	（絹川文代）
Y 57	前手錠全裸像	（大塚啓子）
Y 58	股間縛開股の絵	（絹川文代）
Y 59	聖壇のさらし者	（絹川文代）
Y 60	エビ責めの表情	（絹川文代）



○ S 特第三集を手にして、その妖奇あふる編集ぶりと充実した内容に、全く全面的に感伏いたしました。日本広しといえども、只今これだけのものを作り上げることの出来るのは御誌をおいて他にないでしょう。昨年の夏に第一号を手にして以来、サド特集号はこれで三回目ですが、悦特号を間に挟んで一号一号と内容が充実してきて大変うれしく思います。殊に巻頭のグラビヤ写真は目に見えて斬新さを加えてきているのには、編集陣の並々ならぬ御努力の賜と拝察されて今後の進展が期待されます。私はこの特集号が出されるとグラビヤ写真を真先にひらき、これを見るのを一番の楽しみにして

おります。サド特集号第一集で活躍されている田中芳代嬢、花坂道子嬢、愛川悦子嬢、大塚啓子嬢のまことに素晴らしい見事な肉体の持ち主に加えてサド特集第二集からは美貌の絹川文代嬢が初登場、以来同嬢が主軸となって、いろいろの各人各様の持味を持った新人が助演、S 特第三集に至っては断然絹川嬢の独り舞台といった感じで、誌面狭しとばかり縦横無尽に活躍しているといった恰好です。その間、新しいモデルさんも、益田房子、平野笑子、岩井知子、浜本喜美、三木敬子、田原美佐子の諸嬢が春の花のように咲き乱れ、まるで夢の天国へでも誘い込まれたように愉快です。どうか今後共、違の期待に副った S オンリーの編

集を御願ひ致します。(静岡 益原一用)

○ 新年号の鷹取仙吉氏の「ミス奴隷宣言」の案には賛成しますが(同氏にあえて反対する者ではないのですが)実現は不可能ではないのです。編集者の意見を聞きたいものです。当局の検閲もあることだし、もしも又廃刊にでもなれば大変ですからね。編集者に小言いわれるかな?それよりも一度私が前に提案致しました一年間に一番よく出来た小説を一般から募集したらよいのではありませんか。新年号に投票紙を挿入しては。一

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他に付いてお返事いたします。

(返信料同封下さい)

の作者に分けたら!それから小説に、鞭で拷問されている場面が比較的多いように見受けられますが新年号の藤川力行氏の「お仕置を求める乙女」の様な我々家庭にて遊戯的に出来るような小説をたく

さん連載してほしいと思います。(八尾の一愛読者)

○ 十二月号の口絵で絹川さんのしばられ写真特に赤いネルのお腰を巻いている姿、とてもひきつけられました。これからも、たまにはあんなものを写して下さい。お願いします。次に光沢登志子さんのこと、誌上にて拝見しました。貴女様の様な若い女性に、私の様な和服フェチの好みは話が合いますでしょうか。家内も私の好みをよく知っていて、理解していてくれますので、私は思うままに、自分の好みのお腰をつけ和服を着て女の気持を味っています。貴女に赤いネルのお腰を締め、締めてみたい………というお気持ちがあれば、とてもうれしく思うのですが。はじめから余り申し上げると失礼ですので、これくらいにしておきます。もしも私の夢にえがいている若い女性(大人しく内向性でやぼったいお腰を肌につけてみたい)でいられたら文通を希望します。好みがいまません時には、けっこうです。どうかよろしく、失礼のほど、お許し下さい。(兵庫福村

時依)

○ 新年号誌上の呼び物、撮影会に出演した館典子というニューフェイス、カメラフェイスは大変美しい女である。今後巻頭の口絵写真に暫く載せてほしい。どうやら好きになれそうなモデルである。映画の縛りシーンの予告報告が最近目立って少くなってきたようだ。常連の資料提供者の一層の奮起を望みたい。(東京 小山内生)

○ 初めてお便りします。当方二十才になる大学生のマゾヒストです。貴誌は既発行の物は残らず眼を通しております。旧刊の春日ルミ女王の神姿(ムチを片手に仁王立に君臨されている写真)を切りとり毎夜拝しては「主のないさびしさ」をかこっています。黄色オラミが再登場、夢かと喜んでいます。この調子でヤプーの方も登場させる様にしてほしいものです。「家畜人ヤプー」こそ、汎マゾヒスト渾身の的ですね。ヤプーを解せないマゾヒストのもぐりといってもいいでしょう。どうも近頃はマゾヒストが冷遇されている様で不満というより飢えていた状態です。以前は同好者のパンフレット

(新聞MSクラブ?)が貴誌より発行されていましたが、そのような計画はないでしょうか?、又同好クラブの紹介等をもっともつとやっていたければ貴誌も、以前にも増して親近感を覚える事でしょう。特にマゾヒストの同好者の集いが全然紹介されていないのは残念です。皆川様、乗杉様、鷹野様……といったサジスチンが登場されないのも、その理由の一つでしょうが、ぜひ以前のような盛況をとり戻したいものです。当方自身、ようやくマゾヒストたる自我にめざめ、女神に命を捧げる決心がつき、同好の女性に奉仕したい気持ちで一杯です。当方は色白中肉の方ですが多少胴が長いので乗馬には最適です。(「京都のヤプー」より)

○ 山川さんへ。縄と足にとりつかれた業病とも思つて悲しみなやみ、と又反対に一生「縛りと脛」にいつもいつも新しい希望をかけた楽しい人生でもあります。そしてエロトグラフオマニから一段と昇華した全く無作意の実行シーン垣間覗きたい意欲は一日も忘れてません。貴殿のレポートもお洩し下さい。先日(十月二十日)

京都の舞妓の——この妓のこと、いろいろお話ししたいのです。こうして出て三カ月位の一六〇センチのグラマーで十六才の近代舞妓、同封のポートレートは如何? 尙、浅草金龍館時代、鈴木泉三郎の「火あぶり」をやった時、たしか明石潮一座とありますが、あの時の女優が誰か御存じでしたら? 知らせ下さい。(これは編集氏にも問う)又、京極の花月劇場で辻野良一座が、「ああ通州!」で通州事件を上演のとき、うしろ手を客席に見せて、ころがされていた若い女優の名も?、書いていた枚挙にいとまがないが、先ず乞御教示を。ともかく、縛りと足、(完全生娘の)のことをくわしくお知らせしたいです。そして、おそおそ乍ら私の「ボクの責め方」をお持ちでしたら、それをサイドリダーとして、くわしく御報告したいですが。(大阪 宝塚二三夫)

○ 貴社益々御繁栄の段およろこび申し上げます。降って小生は貴誌の愛読者であり現在、衣料品洋裁方面の職業に従事しております。独身者にて性心理方面には非常に興味を有しておる者であります。扱て小生は性心理上よりみまして特

にフェチシズムの傾向が強く職業柄、此処数年間現在に至るまで、殊の外「女性肌着愛好症」に取りつかれ、その飛躍した自己の欲求は、つとめて仕事の面に昇華せんものと努力いたしております。そして此処数年、フェチシズムに關係のある写真、絵画、文献等の各種資料の蒐集を且つ広く内外に同好者を求めて文通交換など致してまいりましたが、小生の特に興味を有する女性肌着フェチ分野には同好者が僅少で(探し求めるのは極めて困難)従つて資料蒐集の方も思うように出来ず、何時も徒らに欲求不満に思っている次第です。幸いにも貴誌をしばしば愛読しているうちに、まれには小生同様のフェチストの投稿者たちのいるのを知り心強く思っている次第です。(東京 下着愛好生)

○ 菅良太様に喜びとお伺いを申し上げます。御作猖狂紅を拝見致しました。すぐにも筆をとりたいたいと思いましたが、十一月号の読者通信を見ましたが、十一月号の読者通信を拝見し思ひきつて筆を手にしました。数年前の本誌上に「無惨絵マニヤ」との題で投書された河内某なるお方がありましたが、その

文中に氏の空想として記されてありました筋書が、御作「猖紅匪」とほとんど同じでした。当時私は若しこうした空想が氏の創作となり誌上に発表されましたら、どんなに嬉しかろうと期待に期待を重ねていました。それはうたかたのようににはかない望みのように思われていました。一年二年と私には忘れることなくいつも頭にありました。此の度、はからずも御作「猖紅匪」を拝見しまして数年来の希望といえます。夢といえます。か、無上の喜びとなつて実現いたしました。貴下がかつての河内氏であられても又全然別の御方でありまして、私の喜びには変わりありませんが、それでも一度お尋ねしなければ喜びがおさまらぬ様な気が致しまして筆を手に致しました。河内氏の空想と御作との違いを強いて申しますなら、河内氏のH大尉はあらゆる水火の拷問に耐え、最後に青龍刀で切断され無惨な最期を遂げるとありましたが、口髭は必須条件とありました。が、胸毛の方が定かでありました。のところでした。此の度更に「童貞中尉」「立石様橡起」とすでに編集部へ送付されてある御様子ですが、その一篇でも、欲を申せば双

方共に拝見致したく待ちわびています。編集部にも、いろいろ御都合もありましようから、自分の欲望ばかり満してほしいと勝手ばかりも望みませず、今後幾久しく一年に編でも五年に編でも結構です。御作に接したく本誌の読者として引続き愛読してまいります。(四日市 江木清)

貴誌二月号の読者通信にて久しぶりに春日ルミ様の文を拝し、たまらなく筆をとった次第です。云うまでもなく、私は春日ルミ様の崇拜者で常々その写真をマスコットに以前の華やかかなりしマゾの開花をしのんでいます。ルミ様も御健康で居られるとの事、一層ボリウムを増されたとの事で陰ながら心より飲んでいます。私はKK誌は七年前、その特長ある性格がしだいにはつきりしてきた頃より一号も欠かさず読んでいますが、未だ一度も実践経験のないという、いわゆるテール・マゾヒストです。従って貴誌のみが唯一無二の糧であり、その中のマゾヒストへの君臨者たる春日ルミ様こそ永遠の崇拜者であるわけです。貴誌におけるマゾー即日本に於けるマゾは春日ルミ様によって始まり、ル

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

ミ様によって終るだろうと考えています。私のマゾの開花成長も全てルミ様によって導かれたと深く感謝の念を表する次第です。さて「黄色オラミ」もいよいよ円熟期に入ってきたようで、まことに心強い限りです。この上、欲をいえば、沼正三氏の「ヤブー」再登場をお願いしたいという所です。沼氏もお忙しいところでしょうが是非私達マゾファンのために一奮発お願いします。それからシリーズ物として沼氏の「手帖」を予定されている様ですが、「家畜人ヤブー」の方もお願いします。更に旧号のマゾストーリーや詩歌等々もお願いできれば申分ありません。この場合、絵を多く又充分選択して載せて欲しいものです。今迄の貴誌にはマゾヒストを充分満足させるマゾ画家が不足している様に思います。今迄で圧巻と心から感じ入ったのはルミ様の正面立姿の鞭をふり上げてゐる写真だけです。勝手な事ばかり書いて申訳ありませんが、いずれにしても貴誌の発展を心より祈っている事に変わりありません。春日ルミ様、京都の一角より、貴女様の御健康を心よりお祈り申し上げます。(京都一マゾ大学生)

○ 私は男性切腹に興味を持つファンです。最近男性切腹の記事が全くありませんが残念です。秀次と不破万作の壮烈なる切腹場面等掲載して頂ければと思います。南海の孤島で迎えた終戦の夜、肉体美あふれる青年将校は敵の手に落ちるよりは潔く割腹する決意をし、日頃彼を慕っていた従兵も共に腹を切る。「少尉殿、自分もお供させて戴きます。」「よし、十分に切れ、俺が介錯してやるぞ」上半身裸になった従兵は用意の九寸五分に布をまき左で十分下腹をさらけだし、大きく息を吸い込みグサツと脇腹に突立てる。「ウーム」ジリジリと下腹が切り開かれてゆく。一気に右脇まで一文字腹、少尉も軍刀をブツツリと下腹に突立てグサツと切り裂いてゆく。日頃鍛えた身体は容易に絶息せず、更に鳩落に刃をさし手をそえてヘソの下へと十文字腹。いずれも渾一本の姿で壮烈な主従の割腹、から紅の海にうつふす二人の若者。南海の太陽は何事もなかった様にサンサンとふりそそぐ。切腹は中々介錯なしでは定まった位置で腹を切り絶息することはむづかしいが、戦国小説、時代小説等

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

に出てくる切腹場面などイカしますね。映画「ジャン有馬の襲撃」の山村聰の切腹作法は見事であつた。切腹マニヤ、同性愛マニアの人達、是非、誌上にてお呼びかけ下さい。(男性切腹マニヤ生)

○ 絹川文代様、初めて通信を書きますが僕は絹川さん、貴女の大ファンです。はからずも書店で奇クを手にして、その口絵で貴女を発見したときの喜び、一目見て、すっかり惚れこんでしまいました。それからというものは、毎月本誌を手にしたとき、すぐ貴女の緊縛

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭

機(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13㎝)です。

お申込は 天星社代理部へ

写真が出てゐるか一番先に見ます。そして貴女の写真が出ていないときは興味が半減してしまいます。緊縛写真のモデルの中で絹川さん、貴女が一番です。美しく均整のとれた肢体の持主、表情の豊かな貴女の顔が僕にほほえみかけているようです。貴女の写真はいつも手離したことはありません。いや、いつも肌身につけています。なんといいっても、あのふさふさとした長髪、輝くように澄んだ眼、すんなりと伸びた脚、その脚その脚線美には全く魅せられます。丸々と豊かな乳房、僕を圧倒

する迫力には閉口さえます。貴女は沢山の緊縛写真を撮っておられますが、縄目は痛くありませんか。緊縛写真を見ると、ほんとうに痛々しくて眼にしみてきます。僕は貴女の緊縛写真を少しずつですが集めておきます。中でも全裸の緊縛写真はとて素敵です。今年も去年に負けず十分活躍して下さい。そして新しい緊縛写真を多数発表して下さい。僕の大好きな絹川文代さん、ほんとうにがんばって下さい。陰ながら御活躍を祈っています。貴女のようなモデルは普通のありふれたファッション・モデルやヌード・モデルと違い貴重な存在です。さようななら（埼玉大森遠夫）

読者通信欄をお借りして、皆様にお願ひしなければならぬ事が出来ました——私の住所を、どのようにして調べられたものか、此の半年間に、私宛のお手紙が、実に二百五十通以上参つておりま

新作『血紅使用切腹フォト』分譲

モデル 絹川文代嬢

第一集 五枚一組 八百円

略号（によ1）

第二集 五枚一組 八百円

略号（によ2）

（大中判印画紙焼付）

す。お一人で十通以上の方も四人いらつしやいます。本名でお出しになる方も居られますが、中には私の姓に、〇〇方、藤山秀緒様、とお書きになる方もおり、郵便屋さんに大きな声で、お宅に藤山秀緒さんと云う人は居られますか、等と云われるので、大弱りです。私が、馬装して街を歩く、と云うことを、度々書いたために、マニヤの方々が興味を持たれ、馬場や銀座の歸りに尾行して住所をつきとめ、それでお手紙を下さっているように思えます。例をあげれば作品への批評の他に、貴方の乗馬ズボン姿は……と云うような書き方や、いま、出来あいのトレンチコートで、フードのついた型はないから、何日の銀座を、乗馬靴にトレンチコートで雨に打たれて歩いていた女性に貴方とすぐわかった。後を追ったが、貴方は車に乗ってしまった……等という断定型の文章が多いことです。たとえ住所を知られても、真面目な御批

女体『浣腸風景十二態』

モデル 大塚啓子嬢 略号（ちふ）

（9×13cm） 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

女体浣腸連続フォト

略号（ちよ）

（9×13センチ）印画紙焼付 十二枚一組 九百円
モデル 愛川悦子嬢

評やお教えだけならよいのですが中には、貴方の乗馬ズボン姿がたまらない。何日何時にお会いしたとか、訪問の一方的な通告、それに、貴方の乗馬ズボンに抱かれて、のたうち廻りたい、とか、写真でもよいからという御注文、愛情のしるし、と云う気味のわるい紙片、相当教養の高い女性の方と思われる字で、生々しい愛の告白など、絵や、写真まで入れると、全く驚くほどの多様さ。気味がわるいと思つても、一一〇番を廻すことの出来ない倒錯者としての秀緒の不安は一通りではないのです。いままで、そつとして置いたのは、かえつて、それらの方々に秀緒というものを告白することになると思つたからでしたけれど、いまでは、御近所の目も煩わしく中には「小説もお書になるんですってね。何にのつていますの？」

等と、きかれる事もあり、三日に一度、きまつてお手紙を下さる方此の間あんなに云つたのに、なぜ会つてくれないのか、とお怒りになる方など、マニヤぶりも熱がこもり、怖しくなつて参りました。ドアが外から汚れていることもあります。此のままでは、私は馬へも行かれず、馬装して街を歩くことも怖しくて出来なくなります。この欄は、それらの方々も、きつと御覧になることと思つて、決心して筆をとりました。どうぞ、残りすくない私の病む生命をすりへらさないで下さい。私は、奇クによつて生れました。どこまでも本誌を通しておつきあいし、文通も本誌を通してのものでありたいと存じます。男性に失望した私は、どのような熱烈なラブレターを下さつても、心を動かすつもりはございません。腸をむしばまれて行

く私は、女体切腹の、特異な心理をテーマに、力のつづくかぎり、筆を執りつづけるつもりですが、私の名が本誌から永遠に消える直前には、私の乗馬ズボン姿の写真を、発表をさせていただくつもりでおります。皆様、どうぞ私を、そつとしておいて下さい。そしてこれからも本誌を御愛読下さって、本誌の中の秀緒を可愛がって下さいませ。一月号を通じての近藤一様の、はげましのお言葉に、涙するにつけ、直接の御連絡は、とく／＼おゆるし下さいませように、尙、会ったときに写真を呉れと、五千円同封されました「紺背広、週刊女性を左手に新宿西口小田急改札口」の方、御返金致します故御住所を御しらせ下さいませ。私は近く移転致しますのでお早く。では、マニヤの皆様、本当に、よろしくお願い致します。

(秀緒)

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

花坂道子緊縛フォト集 大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

(東京 三上仰)

明けましておめでとうございませ。KK誌にとつて、そして編集部の皆さん、執筆者、投稿者諸兄諸姉、愛読者各位に今年はいい年でありますように。原忠正様。お呼びかけ有難うございました。二月号の「芸術時評(アマゾンについて)」は、麻生にとつてもっとも興味深いものです。今後これを連載される由、大いに楽しみ、かつ期待いたします。KK叢書発行の由。早く沼氏の「手帖」が出ますように。又、森本愛造氏の「残酷なる女性たち」も是非単行本にして頂きたいと思ひます。ヘーゲマンや、カムなどの画も入るといいと思ひますが。千草氏の「雌雄」のさしえが大変によかったです。特に乗馬服姿の美奈が倫也を鞭打っているところは素晴らしくこれ程の絵は今迄あまり見ません

でした。美奈は本当に凛々しく、美しく描けています。こういう絵が時に口絵をかざるようになると思います。又、この「雌雄」という作品は、種々のコンプレックスに関して、いろいろと考えさせられるところ多く、(特に倫也と淑子の関係)興味深いものでした。(東京 麻生保)

本日入手いたしました二月号の読者通信の所に私のつたない文章が載っているのを見て、非常なおどろきと恥しきを感じましたのと共に、矢も盾もたまらなくなり、お恥しいながら再び筆をとらせて頂きました。毎号毎号本誌に楽しませて頂いておられますKK誌ではございますが、流腸趣味の私としましては、最近では少し物足りのう存じます。もちろん一般に公開されておられますKK誌といたしましては、越える事の出来ないある限

度はあるのではございましょうが私は前のお便りでも、お書きしましたように、浣腸責にはたまらない魅力を感じておりますので、浣腸責に限って考えてみた場合かもしれないが……、それで一つお願いがあるのでございしますが、聞いていただけますかしら。貴社のお力で東京とか、大阪でプレイの実演会を月に一度ぐらい（もちろん会費制でいいと思います）開いて頂けないでしょうか。そうして、読者の方々も、ムチ打ちグループとか、浣腸グループとかに色々に分けて、そのグループの人々と文通をしたり、時にはプレイをしたり、パンフレットを作ったりしたらいかげんでしょう。今の雑誌にはあまりに多くのものが雑居しすぎているのじゃないかしら。ですから、こうした小グループ的

な活動を活発にしたら、いいんじゃないでしょうか。それで私は浣腸責のファンでございしますので、それについて書いてみますと、絹川さんには本当にお気の毒ですけど、全裸になっていただいてイルリガートルで本当に液を注入していただけないでしょうか。又、プレイが実現出来ましたら本当に素晴らしいこととございましょう。皆様の前に引き出された私は洋服を自分の手でワンピース、シユミーズと脱がされ、手は後手錠をはめられ、もうこうなったらプレイの前とは異って恥しくって本当に氣を失う程でございましょう。そして私は二時間程前にあらかじめ呑み込んでおいた小さな石を体外に出すまで責められるのでございします。まず胃の洗滌でございす。私は仰向けにベッドに寝かさ

れ、手足は丈夫な革バンドでしっかりと大の字型に固定されるのです。こんな恰好でいる私の横では胃洗滌の用意がなされ、遂に洗滌が開始されます。胃に一杯水を入れて、それを吐き出させるのです。水を吐き出す度に私の胸やお腹は波を打つ事でしょう。これを何度もくり返します。しかし、石は相当前に呑み込んでおりますので、もちろん出てきません。それで口から石を出すことはあきらめて、今度は肛門から出る様にと責められます。私の傍では、大嫌いなヒマシ油が一合近くも用意されます。私がそれを呑むことを強要されます。私がいやがってこばみますと罰としてお灸を乳房の上にすえられる事になります。仕方なく私は涙を出してヒマシ油は呑みますから、どうぞお灸だけは許して下さいと哀願しますが、もう手遅れです。お灸のあとでヒマシ油を呑まなければならなくなったのです。三人の人々が私を動かさないように押さえつけて、乳房の上にもぐさ

【G】組 緊縛フオート		
判紙焼付	一枚一組	一五〇円
中画焼付	五枚一組	六〇〇円
大印	十枚十組	一〇〇〇円
G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

ですから、その苦しさつらさは、どんなでございましょう。(もつとも、こうした責めはイメージとしては良いのですが、実際にはさ

甲斐仁参案

「涙のダイヤモンド」 略号 (なみ)

大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○胃の洗滌 ○ヒマシ油責

甲斐仁参案 『涙のダイヤモンド』 略号 (かん)

大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○伸し責 ○苦悶のコルセット ○浣腸責

れたのさえ、堪えられない程の苦しきでしたのに、今度は大きいのを最も敏感な乳房の上にされるの

はブックラとふくれ、その圧力が私を苦しめます。ここで私は柱を抱くような恰好で縛られ、十五分間の我慢を命じられます。一口に十五分と口では言いますが、本当に大変なこととて言いますが、一分もたない中から、石鹼水とヒマシ油が一緒になって私を強く責めつけます。私は必死になってこの苦しみからののがれようとしては、のがれることが出来る筈もございませぬ……。こんな会を得るのは無理でございまして、せめて、どなたかこれに似たプレイを私にして下さる方はいらっしゃらないでしょうか。もちろん実際には、いろいろ／＼つらい事もあるでございまして、一度お受けすると決心しましたら、責めの前の様な範囲（お灸はのぞいていただきたいのですが……）に限って下さるなら、きつと我慢いたします。（上原由紀子）

絹川文代緊縛姿態集

○全裸緊縛集 略号（きぬ）

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号（きこ）

三枚一組 二五〇円

大手札型印画紙焼付型

○全裸高手小手略号（きた）

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号（きり）

三枚一組 二五〇円

○編集の皆様へ、失われてゆく若さに悲哀を感じながら、又新しい年を迎えるやるせなさ——冷血漢をもつて自任する小生すら、この経年の非情さには頭を下げざるを得ないようです。さて一九六〇年の新年号確かに受取りました。もう数えきれない位経験しているくせに、活字に変わった自分の文字の綴りを読み直す自己満足感にはたまらない喜びなんです。小生の切れの悪いダラダラ文章「轢殺屍体」がボツにならぬばかりか歯切れよく締ったものに筆を加えていただいて載せていただいた事は本当に有難いと思っております。ところでそのお志に甘えて厚顔止まるを知らず、はなはだ申わけございませぬが、筆者として注文を一つ二つばかり……。『轢殺屍体』の内容の各処に削除の個所がございましたが、これは確かに小生のオ

ーバーでございましたから、御指導感謝致します。ただ最終尾の一行「ノーモア惨殺を念じながらも……。」とありますのは、どうも合点がゆきかねます。といいますのは、サブ見出しに「冷血」の二行をうたった意味合いが失われるからでございます。思い出ではあります。これは小生の実際の体験なのでございます。現在の小生には、もう当時のような非情な心は持ち合わせていないかも知れませんが、小生はそれなり冷たかつた当時の心を拙いながらも、そのままに書きたく、わざと「魅せられたように解剖台にとりついてたのでした。」で打切っていたつもりだったのですが……。それから挿絵について二カ所ばかり。あの頃の自分を思い出してほほ笑ましくなった絵でした。こんなことを書いて淹れい子先生に叱られ、そんな枝葉末節のことなんですけど、いくら田舎街の新聞記者だつて事件屋が下駄履きで現場に出かけることはございませぬ。いかに遊びほうけていても、それ位の心がまえは習慣的に身につけております。これは肝腎な事と思ひます。62頁二段目終りから4行目63頁上段5行目迄の間。「一

見傷らしいものない伏臥姿勢ながら右足の五本の指だけが、そつくりなくなっているのに……」の点です。この無気味な筈の右足先を拾って、これに愛著をおぼえたところに自己の異常性格を見出す発端があったと力を入れたつもりだったのですけど。勝手なことを申してすみません。どうも一言居士的な性格が抜けないものですから。この「冷血記者のメモから」は最初、短篇ながらもシリーズ式に続けるつもりでしたが、どうも一気に十枚も書くとは息切れがするんでボツボツ書かせてもらいたくないと思ひます。すでに第二話「変死に魅せられた一家」は相当筆が進んでいのですが、どうも題名が気に入らなくなつて。でも、そのうち何とか仕上げます。新モデル館典子さん、ソフトな感じで期待出来そうな人です。では、これにて。（南方生）

○私は旧刊時代より貴誌の愛読者ですが、特異性を持ち続ける編集に毎号ただただ驚嘆しております。加えて告白的読物も大変面白く同好の士、意外の多きに驚き且つ喜んでゐる次第です。私は本年二十八才の青年ですが、以前貿易

写真

碟

(ハリツケ)

三態

略号(はり)

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子

事業の職にありました関係上、金髪の異国婦人と親しくなり一時同棲したことがあります。その間徹底的マゾヒストに仕立てられた経験があります。それが原因で、現在には病魔に冒され、故郷で静養する身になりました。そんなわけで無聊の余り、その頃のことを忘れられず別紙コピーのような体験談を書いてみようかと存じます。一読の上、誌上にて御返事頂ければ誠に幸甚です。悪筆乱文にて恐縮ですが、先は右御願ひまで。(横浜 原左内) 八編集部よりV御送付願ひします。

私は貴誌を復刊以前より愛読しておるもので貴誌のアイデアを全部とってよい程スクラップしております。又、私が撮影したものも数多くあります。ただ私達が撮影する時はモデルが少くその入手に困難でありますので、特定のモデルが見つければ、その一人を何時までも撮影することになります。そんなわけで、貴誌で活躍さ

れるモデルのような美しい方の出席いただいて、大阪府奈良県の同好の友と集いあつて研究撮影したいと存じますが、貴誌を通じて御面倒を見ていただけないでしょうか。又、私はパンティの蒐集も行っておりますので、それについて同好の友もお便り下さい。自分一人で楽しんでいただけでなく、友が相寄つてみんな一緒にたつて楽しみたいと存じます。同封の数葉の写真は私がモデルを使って撮った緊縛フォトです。辻村先生の御批判でもいただけたら有難いと思います。(奈良 淳生)

「嵐を慕う蝶」と題した悦特第三集入手いたしました。もう今では休刊以前の傑作が、このように立派な形で読むことが出来るのは、ほんとうに有難いことです。古本屋の店頭で以前の雑誌を探したところもありましたが、手垢だらけのすりきたれた古本が意外な値段をよんでおりますばかりか、あわてて買

うとグラビヤ頁が切り去られたものがあつたりして失望したりしたことがありました。豊富な口絵の責絵とグラビヤの緊縛写真が目を楽しませてくれます。口絵は切り抜いてスクラップブックに貼つてたのしんでいます。裏表がありますから、どうしても二冊入用になります。しかし、これだけの絵や写真を他で集めるとなると、何万円もかけても果し得ないだろうと思うと、それぐらいの失費は安いものです。青と黒の沈んだ色彩の表紙も、いかにも異色雑誌らしく好ましく思われました。私の特に好んだ口絵は、絵では「古池の怪」と「キング・サイズ」です。後者の人物の顔は、私のカンではどうやらモデルの絹川文代さんに似せてあるようです。グラビヤでは、「岩に咲く珍花」の岩の上には坐った絹川さんの縛られ姿は逸品です。顔の表情、猿ぐつわの息づまる苦しさ。上半身にかかった縄目のきびしさ、膝小僧のはちきれそうな緊張、岩の上に正坐させられて、さぞ苦しかっただろうと想像されます。右頁の三枚は、後手のきびしい縛り方と股間しぼりの見事さです。只、絹川さんの手の表情にいささか演

出オーバー気味のところがあつて私はいやです。やはり、自然にだらりとしておった方がよいのではないでしようか。絹川嬢は美貌ばかりでなく姿態も美しく、それに、全体にどこを見ても清潔感があふれたカンジで、全く得難いよいモデルさんです。次に「お仕置前奏曲」の大塚啓子さんのものも縛り手を配して乳房もつぶれよとばかり締めつけた縄は、お仕置のむごたらしさをよくあらわしております。左頁上段の真中の大塚さん責められている表情はよろしくその左側の髪を顔にまでまきつけたのは晴雨調で私はきらいです。折角の長髪はきれいにたらずか、お下げにでもした方が美しいのとは違ひますか。一月号で館さんの姿を初めて見ましたが、この特集号の「麗艶」でレインコート姿を見せています。このモデルさんもうゆるモデルずれのしていない清潔な感じの素晴らしい人です。投げ出した足の指の美しさ。これから活躍を期待し、一度着物姿の縛りも見せてほしいものです。(山口 毛利生)

○ 僕が初めて本誌を古本屋の店先で見つけた時、正直なところ、大

R組 百花撰 大手札判 (印画紙 9×13 浬)

各組一枚一組（全部送料共）

大手札判（印画紙9×13）

して期待していなかった。一、二枚ばらばらとグラビヤ頁を眺めいっただけで元の位置へかえしたものであった。しかし、数日後、僕の胸の中で一つのしこりが残っているのだった。その原因は本誌のグラビヤで見た女の下着姿にあった事を僕の心は認識しないではない

られなかった。買ってみなければ
 と思い立つと、もう僕のフエチシ
 スト根性はじつとしていられなか
 った。僕は十分後、本誌を手にし
 ていた。自分の部屋のカギをシヤ
 ツトした。そして小きざみにふる
 えている右の手指を意識しながら
 そのグラビヤ頁を開いていった。

効果のある雑誌だと思った。質的にエッセンスのある雑誌だと思った。(大阪 早野勇作)

東京、九仁子様、二月号を拝見して貴女のことを知りました。私は三〇才会社員です。平凡なお見合の末、二年前に結婚しましたが

まだ子供は居りません。妻はどこが面白いのが、本誌を熱心に毎月愛読するくせに、私の趣味を理解して呉れません。私も近頃ではあきらめて「夫婦で意気投合したら末はどうなることか」と自分で自分に言い聞かせて、敢えて求めようとは思わなくなりました。いや

R	R	R	R	R	R	R	R
9	8	7	6	5	4	3	2 1
股間しはり	鏡に映つた後手	後手足しはり	後手猿ぐつわ	海老責しはり	高小手猿ぐつわ	床間の飾り物	柔肌に強烈な荒縄
(須川令子)	(伊吹真佐子)	(村田那美子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(花坂道子)	(佐賀美智子)	(須川令子)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R 10	R 11	R 12	R 13	R 14	R 15	R 16	R 17	R 18	R 19	R 20	R 21	R 22	R 23	R 24	R 25	R 26	R 27	R 28	R 29	R 30	R 31	R 32
鎖しばり晒責	股間しばり正面	女学生制服しばり	尻立後手しばり	開股しばり	猿ぐつわの魅力	トイレでの縛り	立木野外しばり	緊縛横臥	足揚梯子ゼメ	いたふり	帆立しばり	強烈な梯子ゼメ	梯子責め	逆さ本吊りゼメ	後手吊りゼメ	股間しばり後手	逆エビ責め	高手小手しばり	変型足手しばり	松樹後手しばり	くさりゼメ	薄羅の後手緊縛
(萩千恵子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(萩千恵子)	(川辺砂登子)	(伊吹真佐子)	(須川令子)	(村田那美子)	(厚狭春江)	(伊吹真佐子)	(春日ルミと伊吹)	(萩千恵子)	(伊吹真佐子)	(佐賀美智子)	(伊吹真佐子)	〃	(中塚文子)	(伊吹真佐子)	(加賀利江子)	(萩千恵子)	(村田那美子)	(伊吹真佐子)	

股間タテしほり	首繩股間しほり	手足逆吊り	和服の後手しほり	仰向全裸悦唐責	後手首繩シメ	乳房下しほり	肉体美への折檻	お灸ゼメ	後手猿ぐつわ	松樹縛り晒責	コルセツト縛り	股間しほり	手と足と緊縛	後手しほり	御開帳	くさりゼメ	折檻の魅力	全裸の股間しほり	逆立の折檻	開股椅子ゼメ正面	振袖の緊縛	腰元の吊り責	ヌードしほり	本縄しほり	股間しほり	落花狼藉閣の緊縛	樹間のハリツケ	帆立舟のゼメ
(中富蔭子)	(坂口利子)	(伊吹真佐子)	(藤田節子)	(川端多奈子)	(加賀利江子)	(村田那美子)	(伊吹真佐子)	(春日、伊吹二嬢)	(蔭千恵子)	(村田那美子)	(中塚文子)	(蔭千恵子)	(加賀利江子)	(蔭千恵子)	(川端多奈子)	(須川令子)	(愛川悦子)	(大塚啓子)	(花坂道子)	(村井知可子)	(愛川悦子)	(田中芳代)	(益田房子)	(川辺砂登子)	(益田房子)			

[illegible]

妻に流腸したことは、これまで何度もあります。また縛りつけてお尻を平手でビシャ／＼やったこともあります。そんなとき、好きとも嫌いとも意思表示はもちろんのこと、全然反応を示さないのサッパリ面白くありません。九仁子様、私は女性に肉体的苦痛を与えて、虐めることより、精神的に辱しめることに、最大の喜びと最高の愛情を感じます。その点、流腸こそ、その目的に最も適した責道具だと、考えて居ります。貴女のような若い方に流腸器を用いて思う存分流腸して見たいと思います。貴女の通信を読んで見ますとマゾであることと、責められてみたいことが書いてありますが、その責めとは決して流腸の辱しめだけのものではありません。文中に書かれてないので判つきしたことは勿論判りませんが、それ以外のものでも（例えば美容体操がいのお仕置なら）お受けする気はお有りの事と充分に感じられます。それで三つのお仕置をお願いするには、トー・シューズ（パレートをなさらないとしても）かコルセット（ウエスト・ニーパーでもよい）を持参しなければなりません。トー・シューズの場合は両手を

吊られて三十分トーで立たされます。コルセット（紐式）ならば、自然のときより十センチ締められて椅子に括りつけられます（三十分）。又、五／＼十キロの物体が有ればその重みを利用して、身体の後方にそらせるか、両足を前後又は左右に拡げることによって見たいと思います。もちろん三十分では殆んど効果はないことでしょう。とてもアクロバット・ダンサーのように出来ないことは判っていますが、いくら何でも柔軟になれると思います。そのようなものを用いないとすれば、逆さエビ（肩に枕をあてて頭を低くし、胸部と高手を縛ると苦しいから縛らないで小手だけを縛る）を行います。もう一つの方法は既に誌上に書かれてますが、スプリング・コート又はレイン・コート一枚だけで、下に何も着ず附近の映画館に行くことです。何とも言えないスリル満点……誰にも判らない自己満足をなさることでしょう。貴女の責めについての希望は全然判り兼ねますが、現実に実行するとなると、大体そんな所になるのじやないですか？。もつとアレコレ有るんでしたら、誌上にでもかまいません、これに答えて下さい。本当

女体「責」写真厳選集

大手札型印画紙焼付
各三枚一組二五〇円

いずれも口絵に掲載不可能なる力作中より厳選した素晴らしい粒選りの緊縛感に満ち溢れた極鮮明なる印画紙焼付の責写真集です。

危機一発 (絹川文代) △略号「きき」▽

後手猿轡の無防備な身体に襲いくる悪魔の手によつて手荒に引きはがれようとするパンティ……。

女体開陳 (絹川文代) △略号「かい」▽ 三枚一組

美貌の絹川さんがきびしい縄目に足の指をくの字に曲げての喘ぎよう。なんとという美しい惨劇だろうか……。

哀花悶々 (絹川文代) △略号「あい」▽ 三枚一組

白く輝く女肌をぎりぎりタテに縛りあげて悶えに悶えぬく哀れにも艶な姿を見せてくれたが……。

雁字搦目 (絹川文代) △略号「から」▽ 三枚一組

首、胸、腹、腰、股とガンジガラメに肌に喰い込めとばかり、無茶苦茶に縄をかけられ、猿ぐつわに呻めく……。

寝室俯瞰 (愛川悦子) △略号「ふか」▽ 三枚一組

愛川さんのポリウムの肉体が縄目にくびれて盛りあがりベッドの上に転々とするところを天井から覗くと……。

柔肌地獄 (大塚啓子) △略号「やわ」▽ 三枚一組

押せば凹こみ放せば弾きかえす張りのある全裸の柔肌を余すところなく露呈して縛に屈伏するという乙女……。

は貴女と、これらのプレイをして楽しんでみたいと思つてます。出来ればお互に住所も本名も判らないままプレイをして別れることにしたいと思つてます。教養ある紳士として個人の秘密は絶対に厳守しますからこの点は安心して下さい。(東京杉並区 原川美津夫)

○ 新年おめでとうございます。相変らず本年も豊富で興味ある読物を期待しております。二月号は珍らしく男性派向の記事が二篇もあり、どちらも充実したもので満足致しました。一つは小森小次郎氏の「拷問に耐える」で私の好みにぴたりとした読物でした。

拷問に次ぐ拷問でいささかドギツイ感じでしたが、あの種のもものはストーリーよりも描写が肝腎なので最近では見られない迫力のあるものでした。被虐者が日本男子で加虐者がソ連軍人や朝鮮人であるという事も責の設定の仕方として効果的です。責プレイや日本人同志のものは、どうしても妥協的で効果が上りません。「俺は」という体験談らしい書き方も実感がありません。ソ連兵の正規の拷問を受けた後、夜になると崔という朝鮮人が二、三のロシア兵と苛めにく

るあたり、ぞく／＼する程好きです。ただどんな責に逢ったのか明瞭に記されていないのは、カットのためか書き改められたためか残念です。もうすこし凌辱の描写があったらと思ひました。

それから挿画が若干イメージを破られた憾があります。第二図の吊責など逞しさはよいとしてももう少しハンサムに書けないものでしょうか、やはり被虐体は逞しさの次に魅力ある容貌の持主でなくては いけません。それから本文には痺と書きながら半股引のような無恰好なパンツであるのは、おおよそ興醒めです。あれはどうしても越中か六尺かとにかく痺でなければ いけません。そんな欠点はありませんが、とにかく最近での読みごたえのあるものであのような記事を載せて下さった事に感謝しています。植村奏氏の「麻薬と痺」はストーリーはいつもの刑事物でややマンネリズムという感じですが、挿画が大変よく、殊に痺に縄をかけた「痺吊り責」は見事でした。あれなど男子独特の責め方でもっと早く出るべきでした。四馬孝氏が毎月変った責画を發表していましたが、いつもきまって女性であるのが残念です。たまには若い逞し

い男性の責られる図を拝見したいものです。女性緊縛の写真を何頁もならべないで一枚でよいから男性の緊縛写真をのせて下さい。それをたのしみに誌を買いもとめる人がかなり多いことを御承知下さい。三月号も是非二月号のような調子でお願い致します。(R・R)

○ 「嵐を慕う蝶」特選集の見事なことは心からの欣びを感じます。充実の一途を辿る出来栄えのうちに各モデルの特色を活かした佳良な作品が続き殊に喜ばしい点は、先頃私が不満とした緊い首縄の厳しさが相当に解決されたということ(絹川)から、「囚肌」(愛川)「お仕置前奏曲」(大塚)「限られた自由」(田代)「麗艶」(館)というように一通り喉にかかった首縄の競艶を見せてくれました。絹川嬢は流石に重宝がられています。彼女の被縛姿態には、演技以外の貫録とでも言えそうなトップモデルのムードが漂っています。もともとデビュ当初から瞳の美しさは大きな特色でしたが、近來とみに磨きがかかった妖艶さが、豊かさを増してきた肉付にマツチ

して洋装和装のどちらにも優れた作品を見せてくれます。「まといつく長蛇」はS特三号の「脱し得ぬ拘束」に似ていますが、彼女の柔軟で情感溢れる美体を十分に活用した作品です。猿轡は彼女の場合同も勿論必要ですし、その効果は十分立証されたでしょう。「岩に咲く珍花」の水着姿も抱きしめたい程愛らしいものです。ギリギリしめつける縄目にくびれた姿態、ヒップを縦に割って喰い入る股間縛りは気の毒な位完全で第二ページの岩に正坐して猿轡姿は実に美しいものです。「柱掛人形」の長襦袢はイキなもの、前の二つを若妻とビジネスガールに見立てればこれは、粋筋の二号でもいうべきでしょう。そして次の「隔世の障子」は黒タイツとロングヘアーで女学生という処。絹川嬢の変遷がそして美貌の演技が楽しめますね。「含羞」は余り感心した作品ではなく、上、下の二葉と違つて中の一葉だけが妙に生きています。「囚肌」の愛川嬢スポット集は、殊に豊胸に焦点が集つて佳い構成であり、彼女の柔らかなみが十分に發揮されています。「お仕置前奏曲」の大塚嬢は安心して見られます。豊かな髪の毛での覆面も面白

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆賞 金☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

いアイデアであり、何にしても彼女のムクムク肥えた肉体が敵しすぎるような縛しめでも平然と受止める辺り心憎い程見事です。唯もう少し洗練された美しさを身につけて来てもいいのではないでしょう。うか。「ニンフ就縛」の絹川嬢の姿態はそれ程良くありません。縄目が、もう少し何とかならなかつたでしょうか。彼女の背面は余りにも女らしく可憐さは最早乏しいのです。パンティにたるみがあるのははいけません。彼女はやはりマスクと脚線的美を活かして責めるべきでしょう。田代嬢の「限ら

れた自由」は、なかなかの佳作です。すっきり見直す程成長しましたね。肉附も申分ないし身のこなしが実に女らしくなっています。瞳も綺麗だし、胸許もヒップも清潔な豊かさが、やはり美人だと思います。今後の活躍が期待されます。大塚嬢の「架責」は傑作でした。この処、すっきり拷問づいてる彼女の梯子責は見事です。それにコリコリした感じだった彼女が肩から胸く腕にかけて丸味と柔らかみをつたえ、表情にも身のこなしにも、かなり洗練されて来たことがあらわれています。

左ページ左下の一葉など、これだけの美しさと豊満な肉体と、そして幾ら痛いことでも耐えられる我慢強さがあれば、彼女の近い将来の幸福は思いのままという感じがします。「麗艶」は私にとって胸の痛む思いでした。レイシコート、高手小手の首繩、固い猿轡。被縛ポーズの佳さにモデル嬢の人間としての誠実さがにじみ出ているようです。「乱れる訪問着」の花坂嬢は得意の和服姿ですが、帯の上まで高々と捻じ上げた後手は珍しく、さぞ苦痛も激しかったと思います。これで膝のくずれないのも当然で、悶え呻く彼女の不謹慎を責められるでしょうか。総じて云えることはKKのフォトが単なる真似事でなく、縛しめも責めもありアルで、厳しいものという事です。そこにKKの生命があり、愛読者とのつながりも強く、またモデル嬢に対する親近感も生れてくるわけですが、とにかく今回の悦特第三号はKKの特色を遺憾なく發揮した作品として歓迎できるものです。(近藤一)

○ 春日ルミ女主人様、KK誌二月号で久方ぶりにお声に接して嬉しく存じました。私は二十八才に

なる独身の公務員ですが、KK誌は旧刊時代から愛読しており、こゝに女主人様には、いつも強いあこがれを感じてまいりました。ポリウムのある体を乗馬ズボンと編上長靴につつま右手に鞭を持った女主人様の英姿を撮ったあの写真は、いつも肌身離さず持つておられます。二月号では、はからずもお声に接し、潜越とは存じました。嬉しさのあまり自分の気持を制することができず筆をとった次第です。私の十八貫、五尺七寸の身体は女主人様のどんな苛酷な折檻にも耐えることが出来ます。また私の精神は御主人様の与えてくれるどんな恥辱にも、どんな要求にも応じられる奉仕の念で満ちています。先日、私は奈良の馬具商に特に依頼して新しい革鞭をあつらえました。女主人様への服従と奉仕のシンボルとして女主人様の足下に捧げたいと存じます。貴女様を慕っている、このような奴隷に、いくらからでも関心と興味をお持ちでしたら、もう一度誌上でお言葉を賜りますよう。

(大阪旭区 谷)

○ 八編集部よりV文通の幹施や同好者の紹介等といった事は、一切行っておりません。